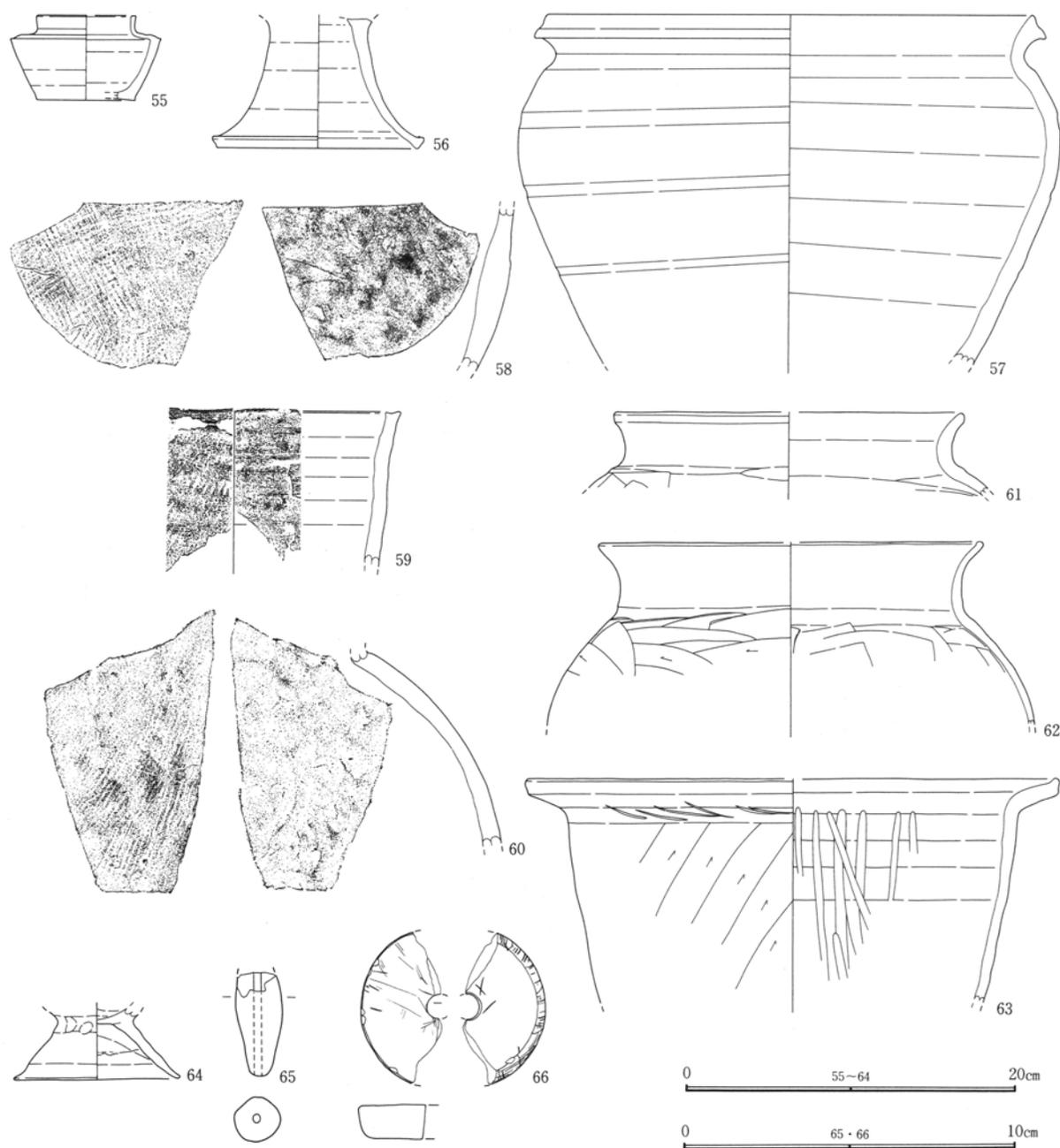


第三章 検出された遺構と遺物



第267図 121号住居跡出土遺物（3）

第5節 奈良・平安時代の住居跡

第236表 121号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第265図 図版	1 96	口：14.4 高：4.3 底：—	約1/2 覆土	①細 黒色粒・片岩粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口径広く、口縁～体部内彎気味に一体化する。底径も広く丸底を呈す。口縁部横撫で、体部横位指撫で、底部も撫でを施す。底部には粘土紐巻き上げ状の螺旋が看守される。内面は放射状暗文。
第265図 図版	2 96	口：(12.8) 高：4.2 底：7.5	約1/2 覆土・床直	①細 黒色粒・片岩粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。底部は不安定な平底。口縁部横撫で、体部横位指撫で。底部撫で。底部に粘土紐巻き上げ状の螺旋が見られる。内面放射状暗文を施す。
第265図 図版	3 96	口：13.1 高：3.8 底：—	約2/3 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部肥厚し僅かに内彎する。体部中位に緩やかな丸みを帯びる。底部は丸底。口縁部横撫で。体部弱い撫で。底部篋削り。内面に放射状暗文を施す。口縁～体部器厚やや厚手。
第265図 図版	4 96	口：(14.1) 高：4.2 底：8.2	約1/4 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明黄褐色 ④土師器	口縁部緩やかに外反し体部丸みを帯びる。底部はやや不安定な平底。口縁部横撫で、体部弱い撫でで指頭痕残る。腰部篋削り後撫で。底部篋削り。器厚やや厚手。
第265図 図版	5 96	口：(12.6) 高：3.3 底：8.2	破片 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部緩やかに外反し体部僅かな丸みを帯びる。底部は不安定な平底。口縁部横撫で体部横位篋削り後撫でを加える。底部篋削り。器厚は薄手。
第265図 図版	6 96	口：(12.0) 高：— 底：—	約1/3 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁～体部内彎気味に一体化する。底部は丸底を呈す。口縁部横撫で、体部弱い撫で。底部篋削り。器厚薄手。
第265図 図版	7 96	口：(16.0) 高：— 底：—	約1/4 床直	①細 黒色粒・片岩粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口径広く口唇部尖る。口縁部僅かに内彎し体部緩やかに丸みを帯びる。体部器高やや大きい。ほぼ一体化した器形。口縁部横撫で、体部上半弱い撫で、下半篋削り後撫でを加える。
第265図 図版	8 96	口：(12.4) 高：(4.1) 底：(6.8)	約1/4 床直上	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁～体部ほぼ直線状に一体化して開く。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転篋削り。
第265図 図版	9 96	口：12.2 高：3.3 底：8.1	完形 覆土	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部ほぼ直線状に一体化して開く。器高やや浅く底径広い。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転篋削り後撫でを加える。
第265図 図版	10 96	口：13.0 高：3.7 底：7.7	約4/5 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部肥厚。口縁部僅かな内彎を帯び体部と一体化して開く。腰部の彎曲顕著。底径広い。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転篋削り後撫でを加える。
第265図 図版	11 96	口：(14.0) 高：(3.8) 底：(8.0)	約1/4 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部ほぼ直線状に一体化して開く。腰部に丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転篋削り。篋削りは腰部にまで及ぶ。外面に火禿痕。
第265図 図版	12 96	口：12.0 高：4.2 底：6.3	約3/4 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁～体部緩やかな彎曲を以て直線状に開く。腰部に僅かな丸み。内面見込み部は明瞭。底部は上げ底を呈す。右回転轆轤整形。底部回転篋削り。
第265図 図版	13 96	口：13.0 高：4.0 底：7.0	約1/2 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③暗オリーブ 灰色 ④須恵器	口縁部極僅かに内彎し体部外反気味に開く。腰部の屈曲顕著。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転篋削り。
第265図 図版	14 96	口：13.0 高：4.2 底：7.5	ほぼ完形 床直上	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部直線状にほぼ一体化して開く。腰部は若干屈曲する。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転篋削り。

第三章 検出された遺構と遺物

図 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第265図 15 坏 図版 96	口： - 高： - 底： 8.2	約1/3 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	腰部若干屈曲する。底径やや広く若干上げ底を呈す。内面見込み部はやや不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転篋削り。
第265図 16 坏 図版 96	口：(16.0) 高：(5.7) 底：(8.0)	約1/4 覆土	①細 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	大型品。口縁～体部上半外反気味に一体化する。下半は丸みを帯びる。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転篋削り。
第265図 17 坏 図版 96	口：(12.4) 高： 4.8 底：(7.0)	約1/4 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁・底部やや小径。口縁～体部直線状に一体化する。開きは弱い。腰部は外反気味。底部は若干上げ底。右回転轆轤整形。底部回転篋削り。篋削りは腰部にまで及ぶ。
第265図 18 坏 図版 96	口：(13.2) 高： 4.1 底： 7.0	約1/2 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部極僅かに肥厚し体部上半緩やかな外反を呈す。下半は丸みを帯びる。底部は若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後周縁回転篋削りを加える。
第265図 19 坏 図版 97	口：(12.8) 高： 3.7 底： 7.0	約1/2 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部緩やかな内彎をもって一体化し開く。腰部の彎曲も顕著で底部極僅かに突出する。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後周縁及び腰部に回転篋削りを加える。
第265図 20 坏 図版 97	口： 12.2 高： 4.0 底： 7.1	約3/4 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部直線状に開く。腰部は緩やかに彎曲する。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後周縁及び腰部に回転篋削りを加える。
第265図 21 坏 図版 97	口：(13.2) 高： 3.9 底： 7.8	約1/2 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯び開く。下半は若干外反気味。底部は上げ底を呈す。内面見込み部はやや不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後周縁及び体部下半にまで回転篋削りが及ぶ。
第265図 22 坏 図版 97	口： 13.0 高： 4.0 底： 7.4	完形 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部極僅かに外傾するも体部と一体化して開く。底部は若干上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後周縁回転篋削りを加える。
第265図 23 坏 図版 97	口：(14.8) 高：(3.8) 底：(7.0)	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁～体部緩やかな内彎を以て一体化して開く。内面見込み部はやや明瞭。底部は若干上げ底を呈す。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後周縁回転篋削りを加える。
第266図 24 坏 図版 97	口： 11.8 高： 3.3 底： 7.9	完形 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁～体部緩やかな彎曲を帯び一体化し開く。底部は若干上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。左回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第266図 25 坏 図版 97	口： 12.1 高： 4.0 底： 6.8	ほぼ完形 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部緩やかな内彎を以て一体化する。底部は若干上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第266図 26 坏 図版 97	口： 12.2 高： 3.8 底： 6.4	約3/4 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部ほぼ直線状に一体化して開く。下半に丸みを帯びる。底部は極僅かに上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第266図 27 坏 図版 97	口：(12.4) 高：(3.5) 底：(7.2)	約1/3 覆土	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁～体部緩やかな内彎を以て一体化する。下半は僅かに外反気味。底部は上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第266図 28 坏 図版 97	口：(11.6) 高：(3.8) 底：(6.0)	約1/4 P <sub>3</sub> 内	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部緩やかな内彎を以て一体化する。底部は若干上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第266図 29 坏 図版 97	口：(13.6) 高：(3.6) 底：(7.8)	約2/5 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③褐灰色 ④須恵器	口径・底径広い。口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。腰部の丸み顕著。内面見込み部はやや不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第266図 30 坏 図版 97	口：(12.6) 高：(4.6) 底：(7.0)	約1/4 覆土	①細 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③淡黄色 ④須恵器	口縁～体部上半直線状に一体化し開く。下半は丸みを帯び腰部に外反を持たせ底部突出する壙型の坏。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部器厚薄手。
第266図 31 坏 図版 97	口：(13.0) 高：(4.4) 底：(7.6)	約1/4 覆土	①細 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③淡黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器面摩滅。
第266図 32 壙 図版 97	口：(11.3) 高：(4.5) 底：(7.8)	約2/5 床直	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部小径。口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。高台は強く開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。整った器形。
第266図 33 壙 図版 97	口：10.8 高：5.5 底：6.6	約2/3 覆土	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部小径。口縁～体部緩やかな丸みを帯び一体化する。高台はやや長く強く開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第266図 34 壙 図版 97	口：(11.8) 高：5.2 底：7.4	約1/2 床直	①細 砂粒 ②還元焰 ③オリーブ灰色 ④須恵器 刻書土器	口縁部小径。口縁～体部緩やかな丸みを帯び一体化する。高台は強く開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時の撫では底面に及び中位に焼成前線刻「×」を刻む。
第266図 35 壙 図版 97	口：11.4 高：5.3 底：6.6	ほぼ完形 床直上	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部小径。口縁～体部緩やかな丸みを帯び一体化する。高台は強く開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第266図 36 壙 図版 97	口：(17.4) 高：— 底：—	約1/5 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大型品。口縁～体部直線状に一体化し開く。腰部に丸みを持たせ、高台は開き気味に付される。高台は剥落。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第266図 37 盤 図版 97	口：— 高：— 底：(13.8)	約1/4 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下半は直立気味に開き、腰部強く屈曲する。高台は長く彎曲気味に開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。
第266図 38 壙 図版 97	口：— 高：— 底：10.1	底部 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	底径広い。高台は外反気味に開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第266図 39 盤 図版 97	口：20.5 高：— 底：—	約3/4 覆土	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部著しく歪む。口縁部外傾し体部直線状に強く開く。高台は腰部上位に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第266図 40 蓋 図版 97	口：14.7 高：2.8 摘：3.4	約3/4 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	環状摘を付す。天井部～体部丸みを帯び、かえり部は外傾する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付。貼付時撫で
第266図 41 蓋 図版 97	口：13.1 高：2.7 摘：3.5	一部欠損 床直上	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	環状摘を付す。天井部～体部丸みを帯び、かえり部は短く外傾する。右回転轆轤整形。天井部手持ち篋削り後摘貼付。貼付時撫で。
第266図 42 蓋 図版 97	口：13.8 高：2.7 摘：3.5	完形 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	環状摘を付す。天井部～体部丸みを帯びる。かえり部は外傾する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付。貼付時撫で。体部轆轤目強い。
第266図 43 蓋 図版 97	口：13.6 高：2.7 摘：3.8	約1/2 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部低く環状摘を付す。体部僅かな丸みを帯び、かえり部は直立する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付。貼付時撫で。
第266図 44 蓋 図版 97	口：14.0 高：2.6 摘：3.4	完形 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部低く環状摘を付す。体部僅かに外反し、かえり部は外傾する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付。貼付時撫で。

第三章 検出された遺構と遺物

図 器 種	番号	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第266図 図版	45 蓋 97	口：14.1 高：2.9 摘：3.2	約2/3 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	環状摘を付す。天井部～体部丸みを帯びる。かえり部は外傾する。右回 転轆轤整形。天井部回転斲削り後摘貼付。貼付時撫で。体部轆轤目強く 器厚薄手。
第266図 図版	46 蓋 97	口：13.8 高：— 摘：—	摘欠損 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	摘剥落。天井部～体部丸みを帯びる。かえり部は内傾する。右回転轆轤 整形。天井部回転斲削り後摘貼付。貼付時撫で。
第266図 図版	47 蓋 97	口：(14.2) 高：— 摘：—	約2/5 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦面を築き体部直線状に開く。かえり部は外傾する。右回転轆轤 整形。天井部回転斲削り。
第266図 図版	48 蓋 97	口：(20.5) 高：4.5 摘：4.1	約1/3 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大型品。環状摘を付す。天井部平坦面を築き体部直線状に開く。かえり 部は内傾気味に直立する。右回転轆轤整形。天井部回転斲削り後摘貼付。 大型品ながら整った器形。
第266図 図版	49 蓋 98	口：(19.9) 高：— 摘：—	約1/3 覆土	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大型品。摘剥落。天井部平坦面を築き体部直線状に開く。かえり部は短 く内傾する。右回転轆轤整形。天井部回転斲削り後摘貼付。
第266図 図版	50 蓋 98	口：18.2 高：— 摘：—	約1/2 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大型品。天井部平坦面を築き体部外反気味に開く。かえり部は若干外傾 する。右回転轆轤整形。天井部～体部上半回転斲削り。天井部器厚厚手。
第266図 図版	51 蓋 98	口：10.0 高：3.5 摘：2.8	約1/2 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	壺蓋か。環状摘を付す。天井部平坦で突出し、かえり部は長く直立する。 右回転轆轤整形。摘貼付。
第266図 図版	52 蓋 98	口：— 高：— 摘：4.0	約3/4 床直上	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦面を築き環状摘を付す。体部は直線状に開く。右回転轆轤整 形。天井部回転斲削り後摘貼付。貼付時撫で。
第266図 図版	53 蓋 98	口：— 高：— 摘：(5.3)	約1/3 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③淡黄色 ④須恵器	環状摘を付す。天井部～体部丸みを帯びる。右回転轆轤整形。天井部回 転斲削り後摘貼付。貼付時撫で。
第266図 図版	54 蓋 98	口：(17.0) 高：— 摘：—	破片 覆土	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口径広い。体部丸みを帯び開く。裾部～かえり部一体化し外傾する。右 回転轆轤整形。
第267図 図版	55 短頸壺 98	口：(5.9) 高：(5.1) 底：(6.0)	約1/3 覆土下位	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	小型品。口縁部僅かに外傾し頸部屈曲を経て肩部強く張る。体部は緩や かに開く。右回転轆轤整形。底部切り離し技法不詳。
第267図 図版	56 高盤 98	口：— 高：— 底：(12.0)	脚部約3/5 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	外反気味に開く脚部。端部は内傾し接地面は尖る。右回転轆轤整形。
第267図 図版	57 甕 98	口：(29.0) 高：— 底：—	口縁部～ 体部約1/4 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部内傾し頸部は外反する。体部上半に膨らみを設ける。右回転轆轤 整形。体部外面の凹線状轆轤目顕著。
第267図 図版	58 甕 98	口：— 高：— 底：—	体部破片 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕体部。外面平行叩き目を密に施す。内面は環状当て目。
第267図 図版	59 鉢 98	口：(20.0) 高：— 底：—	口縁部破片 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	大甕体部。直立する口縁部。外面平行叩き目を密に施す。内面は横撫で。

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第267図 60 甕 図版 98	口： - 高： - 底： -	肩部破片 竈内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	強く内彎する肩部。外面平行叩き目。内面環状当て目。
第267図 61 甕 図版 98	口：(20.7) 高： - 底： -	口縁部破片 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部外反し頸部緩やかな彎曲を呈す。肩部の張りは強い。口縁部横撫で強く肩部で稜状となす。体部上半は横位・斜位窺削り。体部内面は横位窺撫で。
第267図 62 甕 図版 98	口：(22.6) 高： - 底： -	口縁部破片 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部やや長く外反し頸部緩やかな彎曲を呈す。肩部の張りは強く体部上半に膨らみを設ける。口縁部横撫で後体部上半横位斜位窺削り。体部内面横位窺撫で。
第267図 63 甕 図版 98	口：(31.7) 高： - 底： -	口縁部破片 床下	①粗 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部強く外反し体部は直線状に緩やかに開く。口縁部横撫で後体部斜位窺削り。窺当て目頸部に明瞭に残る。体部内面横位窺撫で後縦位指撫で。
第267図 64 台付甕 図版 98	口： - 高： - 底： 9.8	底部～脚部 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	台付き甕脚部。体部は丸みを帯び、脚部は比較的強く開く。接合部の屈曲は顕著。裾部は緩やかに彎曲を呈す。体部窺削り。脚部横位窺撫で。脚部内面輪積み痕明瞭。
第267図 65 土鍾 図版 98	長：(3.1) 幅： 1.4	約2/3 床直上	①粗 砂礫・片岩粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土製品 5.33g	小型で中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態。外面は平滑な撫でを呈す。孔は極めて小径。
第267図 66 紡錘車 図版 98	長：(4.6) 幅： 1.1 -	約1/3 覆土	蛇紋岩 17.28g	石製。円形の平面形で中位に孔を穿つ。断面形は台形状を呈すがやや扁平。表裏面とも滑沢面を持ち、僅かな擦痕も看守される。側面も滑沢で剝離痕が見られる。

122号住居跡

調査区中央北のC区台地鞍部に位置する。C～D区住居群の南東部にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。

周辺は住居跡が密集し、重複住居が群在するが、本住居跡は単独の検出となった。近接する住居跡としては、北側に35号住・45号住が、東側には111号住・113号～116号住が重複して近接する。また、南側約8mには121号住が見られる。その他の近接遺構としては、西側に2号掘立柱建物が接しており、遺構密度の高い地点となっている。

平面形は、東壁南半の形状が乱れる、やや横長の不整長方形を呈す。東壁は長く設定されており、そのため、全体の整いを失うが、その他の壁は僅かな彎曲を持つがほぼ直線状をなし、各隅の相対応も良好である。

深さは、約50cmを測る。北壁と東壁の遺存がやや悪く立ち上がりも緩やかである。反面、南壁と西壁

は良好な立ち上がりで、掘り込みもしっかりしていた。遺存状態は概ね良好といえよう。

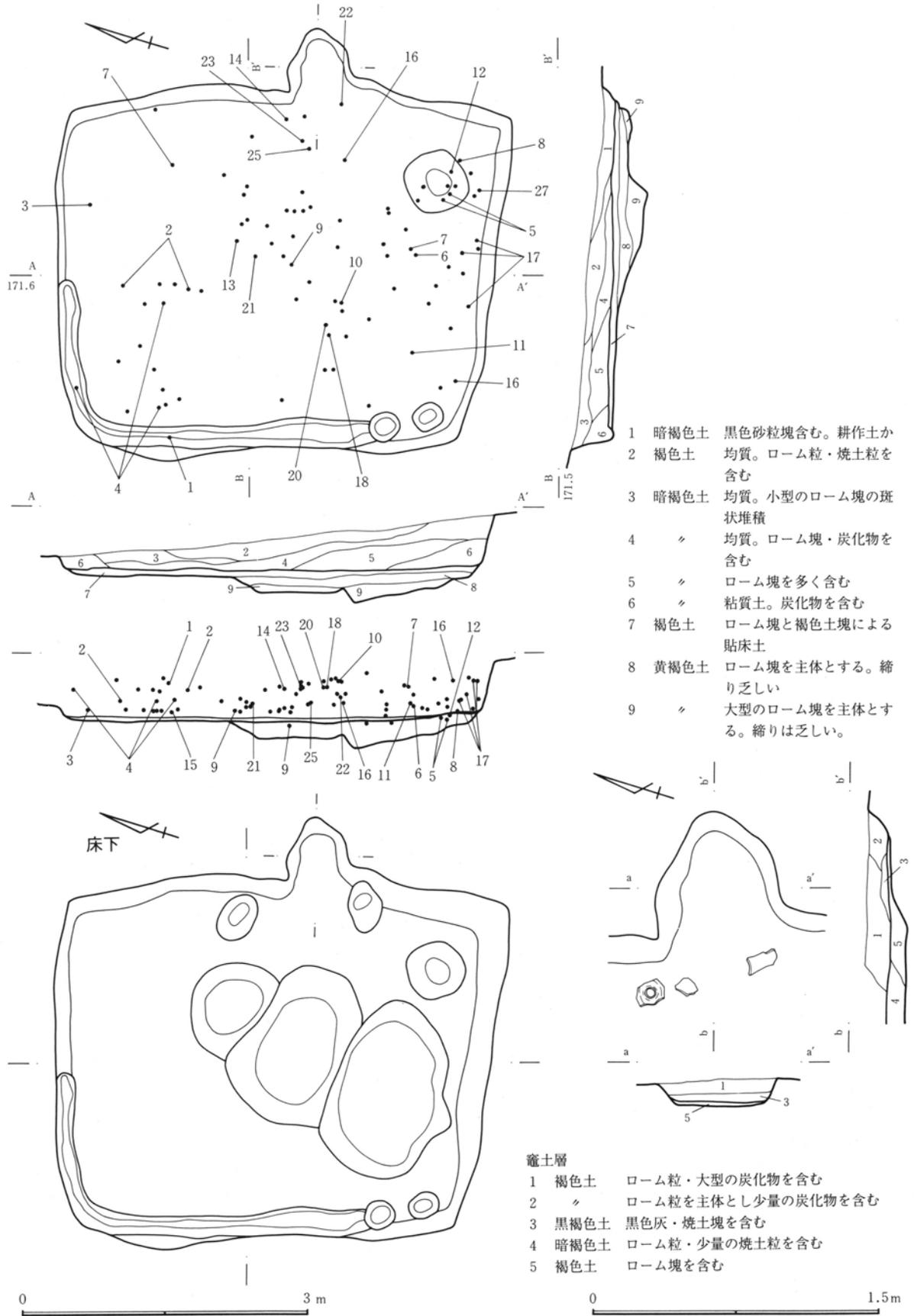
床面は、僅かな凹凸が見られるがほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム塊と褐色土塊の混合土による貼床が全面になされる。硬化面は、床面中央～竈周辺部及び南壁～西壁にかけて広い範囲で確認された。特に竈周辺は顕著な硬化床である。

壁周溝は、西壁～北壁西半にかけて検出された。西壁南端には及ばず、小ピットで止まる。浅く立ち上がりの緩やかな掘り込みである。

柱穴は、西壁の壁周溝の止まる小ピットと南西隅の小ピットに可能性が強い。いずれも30cm程度の深さである。床下調査で得られた竈北側の小ピットは除外した。

貯蔵穴としては、南東隅の壁際より若干の距離において不整円形の土坑を検出した。深さ約40cmを測り、掘り込みはしっかりしていた。暗褐色土の埋土を観察している。

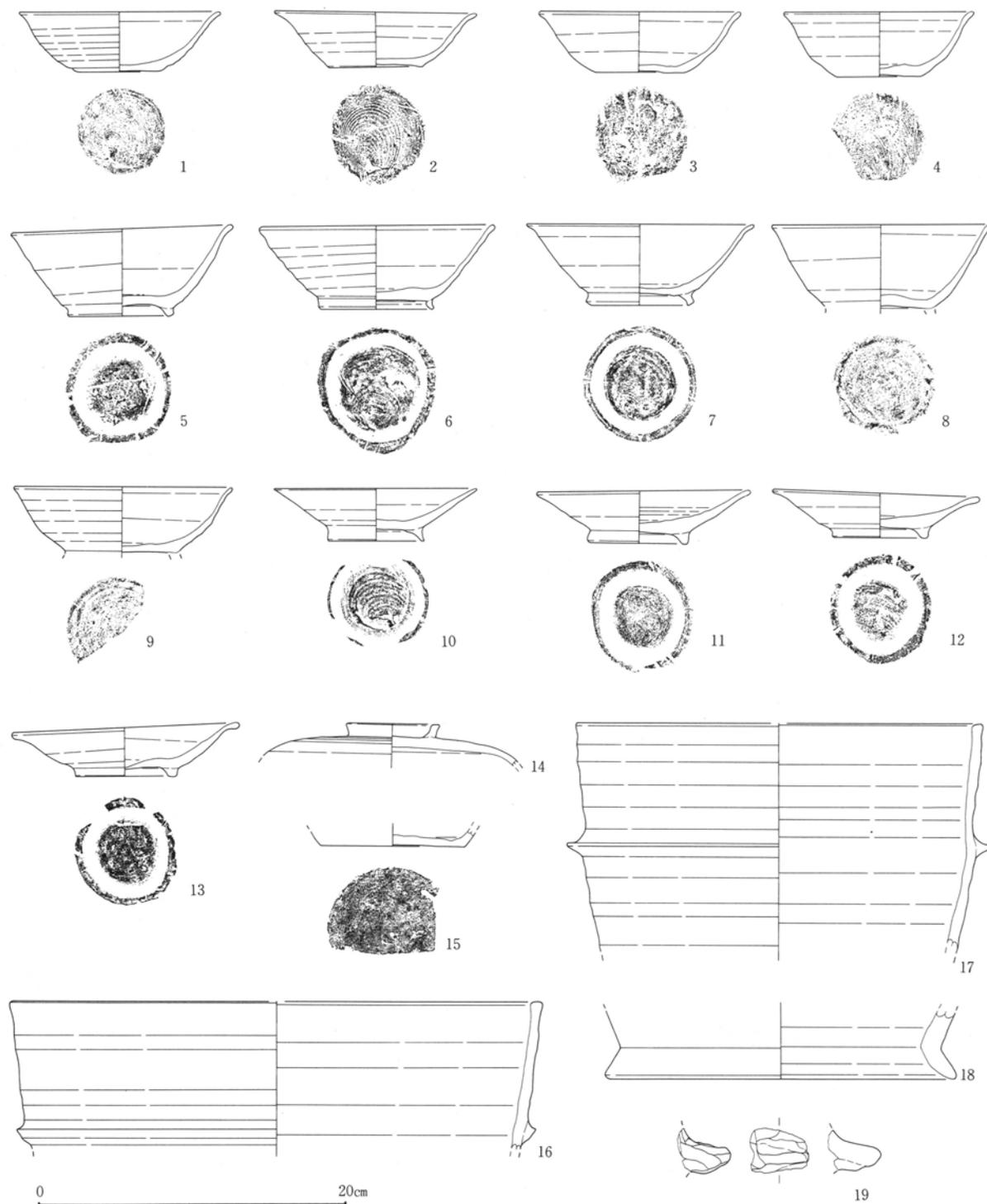
第三章 検出された遺構と遺物



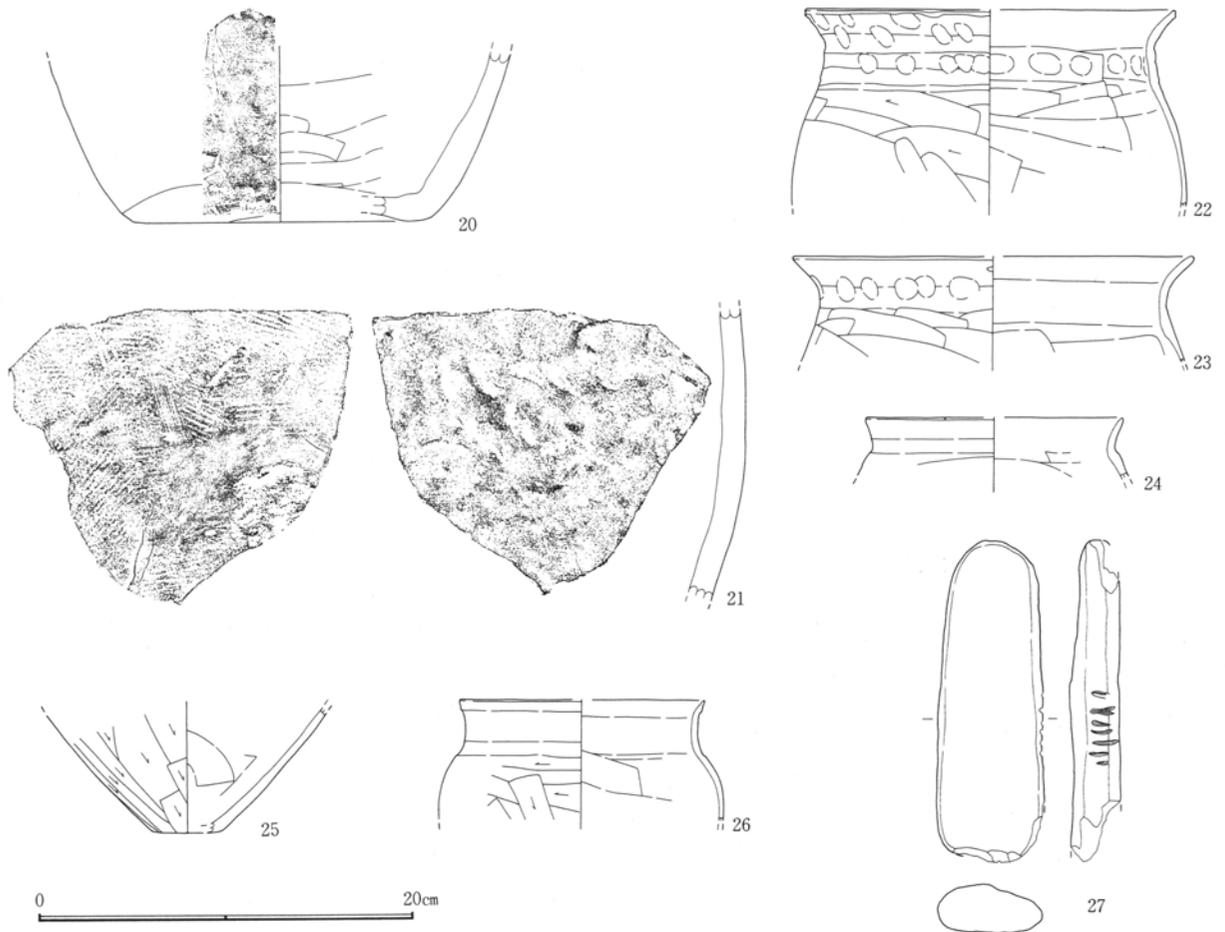
第268図 122号住居跡

第237表 122号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cwx-30・31	不整長方形	470×388×48	N75°E	N71°E	貯蔵穴・壁周溝 床下土坑	坏5 碗5 皿4 蓋1 甌3 把手 1 甕7 石1	



第269図 122号住居跡出土遺物(1)



第270図 122号住居跡出土遺物(2)

竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。馬蹄状の燃焼部～煙道部を壁外に突出し、燃焼部は広くほぼ平坦面を保つ。煙道の立ち上がりは比較的強い。袖は、壁の彎曲を利用しており、北側が若干張り出す。また、南側袖使用面下には、不整形の小ピットが確認されており、袖石等の除去痕跡と捉えた。当地点に袖石を設けると北袖との張り出しが一致し、左右の対称が整う形態となる。

その他の構築材・補強材は明瞭ではないが、竈土層に厚く堆積する焼土塊は、天井材等の構築材崩落土と思われる。

床下遺構は、中央～南側にかけて大型の不整楕円形状の土坑を重複状態で検出した。3基の土坑が連なるが、同時存在ではなく、微差ながらも新旧が想定される。3基とも床下土坑として位置付けたい。ローム塊を主体とした埋土である。

また、竈北側にも不整形のピットを検出したが、浅く柱穴としても特定できない。性格は不明である。

遺物は、比較的多く出土した。覆土上層より満遍無く出土し、平面的にも特定の集中を見ない。床直の出土が少なく、あるいは初期埋没における流入とも捉えられる。

ただ、出土土器の器種組成は、須恵器坏・埴種、甗、土師器甕等日常什器の組成を示す。完形土器も混在しており、流入とは捉え難い。住居跡廃絶時のほぼ同時期に近い廃棄と考えた。

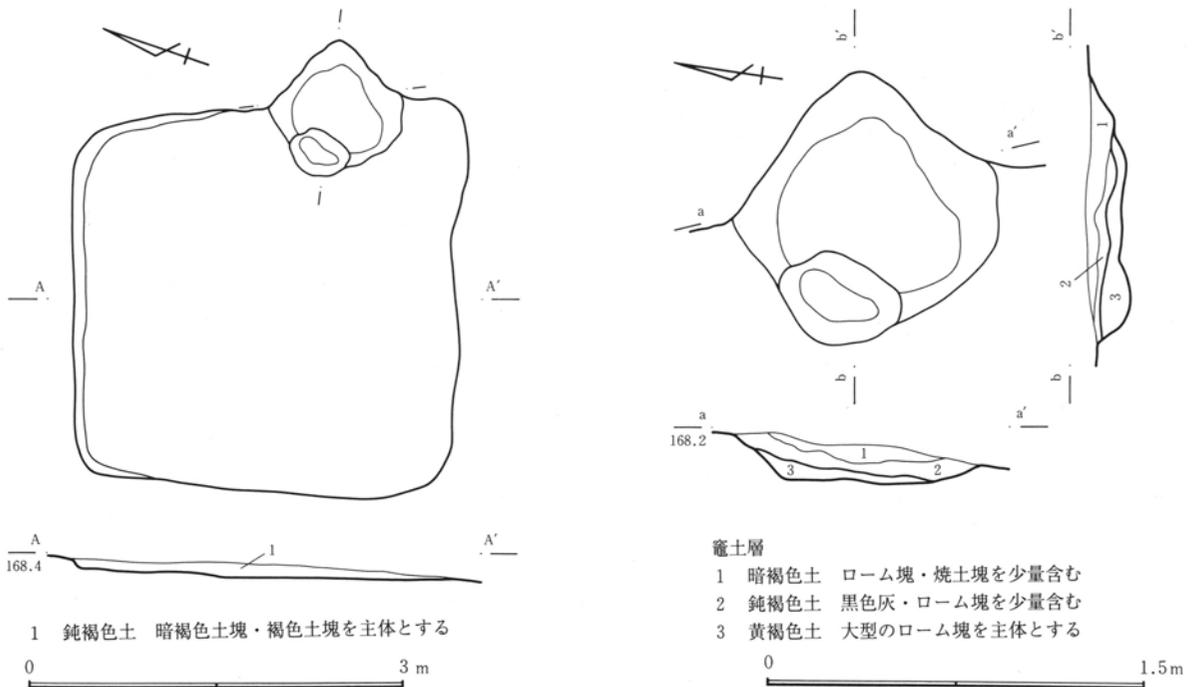
第5節 奈良・平安時代の住居跡

第238表 122号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第296図 1 坏 図版 98	口： 12.8 高： 3.9 底： 5.2	完形	①粗砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し、体部緩やかな丸みを帯びる。体部は僅かに突出する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第296図 2 坏 図版 98	口： 12.9 高： 3.5 底： 6.0	ほぼ完形	①粗砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し、体部緩やかな丸みを帯びる。底部はやや上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第296図 3 坏 図版 98	口： 12.8 高： 3.9 底： 5.7	完形	①粗砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し、体部丸みを帯び、下半に顕著。底部若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第296図 4 坏 図版 98	口： (11.8) 高： 4.2 底： 5.2	約1/2	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部緩やかな丸みを帯びる。底部は若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第296図 5 壺 図版 98	口： 14.1 高： 5.6 底： 6.4	完形	①粗砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口縁部外反し、体部僅かに丸みを帯び下半に顕著。高台は短く開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第296図 6 壺 図版 98	口： (14.8) 高： 5.4 底： 7.0	約3/5	①細砂粒・白色粒 ②還元焰 ③黒褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部直線状に開く。腰部の丸みが顕著。高台は短く直立する。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部器厚薄手。
第296図 7 壺 図版 99	口： (14.6) 高： 5.2 底： 6.2	約2/3	①細砂粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口縁部強く外反し、体部直線状に開く。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部器厚薄手。
第296図 8 壺 図版 99	口： 13.9 高： - 底： -	約1/2	①粗砂礫・片岩粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部緩やかに外反し、体部僅かに丸みを帯びる。高台は剥落。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸きり後高台貼付。貼付時周縁撫で。口縁部器厚薄手。
第296図 9 壺 図版 99	口： (13.8) 高： 4.2 底： 7.2	約1/4	①細砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口径広く体部やや扁平。口縁部緩やかに外反し、体部中位に丸みを持たせる。高台は剥落。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第296図 10 皿 図版 99	口： (13.0) 高： 3.4 底： 6.1	約1/2	①細砂粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口唇部尖り体部と一体化して強く開く。高台は直立気味に僅かに開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。器面摩滅。
第296図 11 皿 図版 99	口： 13.6 高： 3.4 底： 6.0	ほぼ完形	①細白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部丸みを帯びる。口縁～体部一体化し開く。高台は開き気味に付される。内面見込み部は不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部～底部器厚やや厚手
第296図 12 皿 図版 99	口： 12.8 高： 2.9 底： 5.8	完形	①粗砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	口唇部肥厚し強く外反する。体部下半に丸みを持たせ、高台は短く直立する。内面見込み部は不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。底部器厚薄手。
第296図 13 皿 図版 99	口： 14.3 高： 3.1 底： 6.4	約3/4	①粗砂礫・片岩 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部肥厚し強く外反する。体部中位に丸みを持たせ、高台は短く直立気味に付される。内面見込み部緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第296図 14 蓋 図版 99	口： - 高： - 摘： 5.8	約1/2	①粗砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部緩やかな彎曲を呈す。環状摘を付す。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後高台貼付。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

図 器 番 号 種	法 量 ( ) 推 定 値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 ( 形 態 ・ 手 法 等 )
第296図 15 坏 図版 99	口： - 高： - 底： (9.1)	底部破片	①細砂粒 ②還元焰③緑灰色 ④須恵器	比較的底径広い。底部は極僅かに上げ底。右回転轆轤整形。底部切り離し技法不明。底面外縁は回転斲削りを施す。
第296図 16 甌 図版	口： (34.0) 高： - 底： -	口縁部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄褐色 ④須恵器	口縁部長く直線状に外傾する。鑿は短く水平に付される。体部も口縁の延長上に直線状に開く。轆轤整形後鑿貼付。貼付時撫でを加える。
第296図 17 甌 図版 99	口： (26.0) 高： - 底： -	口縁部～ 体部約1/4	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③暗灰黄色 ④須恵器	口縁部長く直線状に外傾する。鑿は短く水平に付され、16に比して整いを見せる。体部は緩やかな丸みを帯びて開く。轆轤整形後鑿貼付。貼付時撫でを加える。
第296図 18 甌 図版 99	口： - 高： - 底： (22.0)	底部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③褐灰色 ④須恵器	底部は短く開く。体部は屈曲部を経て直線状に開く。轆轤整形か。外面撫でを加える。
第296図 19 甌 図版 99	口： - 高： - 底： -	把手	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	甕・甌形土器の肩部～体部に付される把手。小型で橋状ではない。剥落痕跡からは水平に付された例と思われる。全面撫でが施される。
第296図 20 甕 図版 99	口： - 高： - 底： (15.8)	底部破片	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下半は緩やかな彎曲を帯びて開く。腰部～底部も丸みを持つ。体部対面横位撫でを入念に施す。内面は横位斲削で。器厚やや厚手。
第296図 21 甕 図版 99	口： - 高： - 底： -	体部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③褐灰色 ④須恵器	やや軟質の大甕体部破片。外面平行叩き目が密接に施される。内面は環状当て目が残る。
第296図 22 甕 図版 99	口： (19.5) 高： - 底： -	口縁部破片	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口縁部上位外傾し下位はやや内傾する。「コ」字状口縁甕。口縁部横撫で上位と下位で強く凹線状となす。指頭痕も加わる。体部上半は斜位斲削り、下半は縦位斲削で。内面は斜位斲削でが施される。
第296図 23 甕 図版 99	口： (21.3) 高： - 底： -	口縁部 約1/2	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部上位外傾し下位は内彎気味に直立する。「コ」字状口縁甕。口縁部横撫で下位で強い。上位は指頭痕が連続する。体部上半は斜位斲削り、内面は横位斲削でが施される。
第296図 24 甕 図版 99	口： (13.6) 高： - 底： -	口縁部破片	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口縁部は外傾し、頸部は強く彎曲するが「コ」字状口縁甕と判断した。口縁部横撫で強く肩部で稜状となす。体部外面は横位斲削り、内面横位斲削で。
第296図 25 甕 図版 99	口： - 高： - 底： (3.7)	底部破片	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	底径は狭く、体部下半は直線状に強く開く。外面縦位斲削り、内面不定方向の斲削で。底面も斲削りが施される。
第296図 26 甕 図版 99	口： (12.8) 高： - 底： -	口縁部破片	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口唇部直立し、口縁部彎曲を帯びて直立する。「コ」字状口縁甕の範疇か。肩部は張り体部中位に膨らみを持たせる。口縁部横撫で、体部上半横位斲削り、中位に縦位斲削り。内面は横位斲削で。
第296図 27 石 図版 99	長： (17.1) 高： (5.8) 厚： 2.7	一部欠損	黒色片岩 403.93 g	菰網石と思われる。表裏面には使用痕が見られないが、上下端部に歯こぼれ状の剝離痕、及び側縁に数条の刻みが看取される。



第271図 123号住居跡

第239表 123号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cno-35・36	不整正方形	315×313×11	N73°E	N83°E			

### 123号住居跡

調査区南東部の北東側と南側への急斜面地形に占地する。C区n o-35・36グリッドに位置する。

周辺の東側への勾配は強いが、東側の谷地形に至ると比較的緩やかな傾斜となる。本住居跡の基盤も暗褐色ローム質土である。

周辺の遺構は、地形に反して比較的多く、東側には117号住と118号住が重複して、南西には124号住が近接する。また、北西には1号掘立柱建物跡と5号溝が見られる。

平面形は、軸長3.1m前後の不整正方形を呈す。やや小型の平面規模である。

深さは、約10cmを測ったが、南側壁は谷地形による傾斜により、殆どを逸失しており、北側壁の計測値である。非常に浅く、遺存状態も極めて不良である。壁の立ち上がりも弱く、そのため平面規模の把

握には困難を伴う。

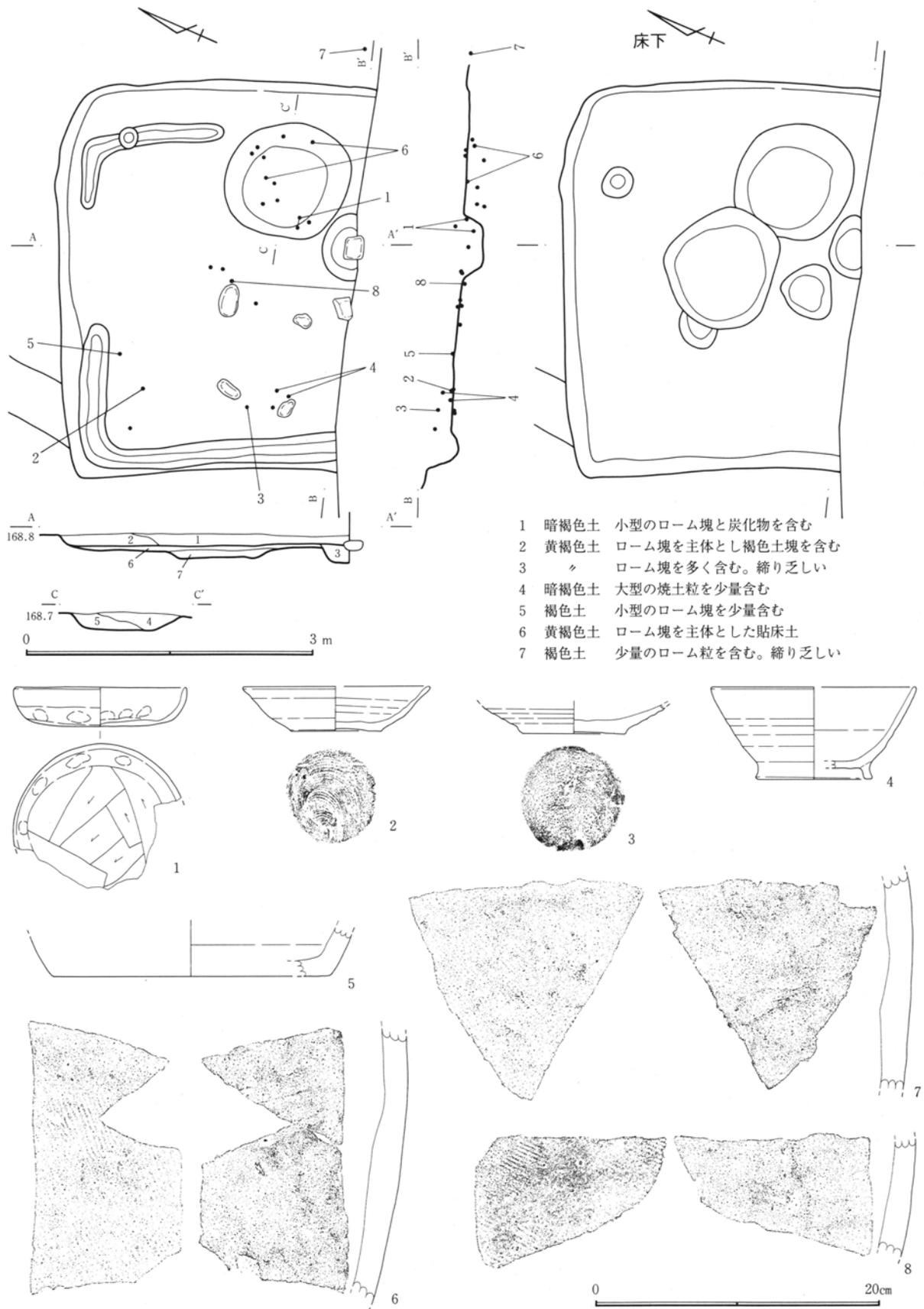
床面は暗褐色土を基盤とする地床である。南側への谷へ緩やかに傾斜しており、硬化面等も把握できなかった。

柱穴・貯蔵穴は検出されていない。

竈は東壁南寄りに設けられる。浅く遺存状態も不良で、使用面下の調査となった。燃烧部～煙道部を壁外に突出し、燃烧部に掘り込みを有す。袖等の構築材は検出されず、焼土塊の散布を見るのみである。焚口部で検出された不整形の小ピットを当初抜取り穴と考えたが、位置的にも問題があり、確定できない。

遺物は土師器小破片を数点得たが、図示に至らなかった。

第三章 検出された遺構と遺物



第272図 124号住居跡・出土遺物

第240表 124号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cno-37・38	—	400×—×13	N67°E	—	貯蔵穴・壁周溝	坏3 壺1 甕4	

第241表 124号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
第272図 坏 図版 99	口:(11.8) 高: 2.7 底: 10.0	約2/5 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口唇部僅かに内彎し、体部は扁平で丸みを帯び、底部は平底。口縁部横撫で、体部弱い撫で指頭痕残る。底部鋭削り。内底面凹凸顕著。器厚薄手。
第272図 坏 図版 99	口:(12.8) 高: 3.1 底: 6.2	約3/1 床直	①細 石英・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部～体部強く開く。体部中位は緩やかに丸みを帯びる。内面見込み部は緩やか。底部若干上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第272図 坏 図版 99	口: — 高: — 底: 7.2	約2/3 覆土	①細 石英・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	体部下半強く開く。上半に僅かな丸みが見られる。底部は若干突出する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。回転糸切り後無調整。
第272図 壺 図版 99	口:(14.4) 高:(6.4) 底:(7.3)	約1/4 床直	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部～体部緩やかに内彎し一体化する。腰部に僅かな丸みを帯びる。高台は開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第272図 甕 図版 99	口: — 高: — 底:(19.2)	底部破片 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	緩やかに開く底部形態。平底を呈す。回転轆轤調整。器厚厚手。
第272図 甕 図版 99	口: — 高: — 底: —	体部破片 床直	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③黄灰色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩きを密に施す。内面円環状で目僅かに残る。
第272図 甕 図版 99	口: — 高: — 底: —	体部破片 住居外	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③黄灰色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩きを密に施す。内面縦位撫で、円環状で目残る。
第272図 甕 図版 99	口: — 高: — 底: —	体部破片 床直	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③黄灰色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩きを密に施す。内面縦位・斜位撫でを施す。

124号住居跡

調査区南東部の北東側への急斜面地形に位置する。南半を調査区域外に延ばして検出された。

近接する住居跡は、北側に123号住居跡、西側には131号住・132号住が見られる。

平面形は軸長約4m程の方形を呈すると思われる。深さは約10cmを測り、遺存状態は悪い。

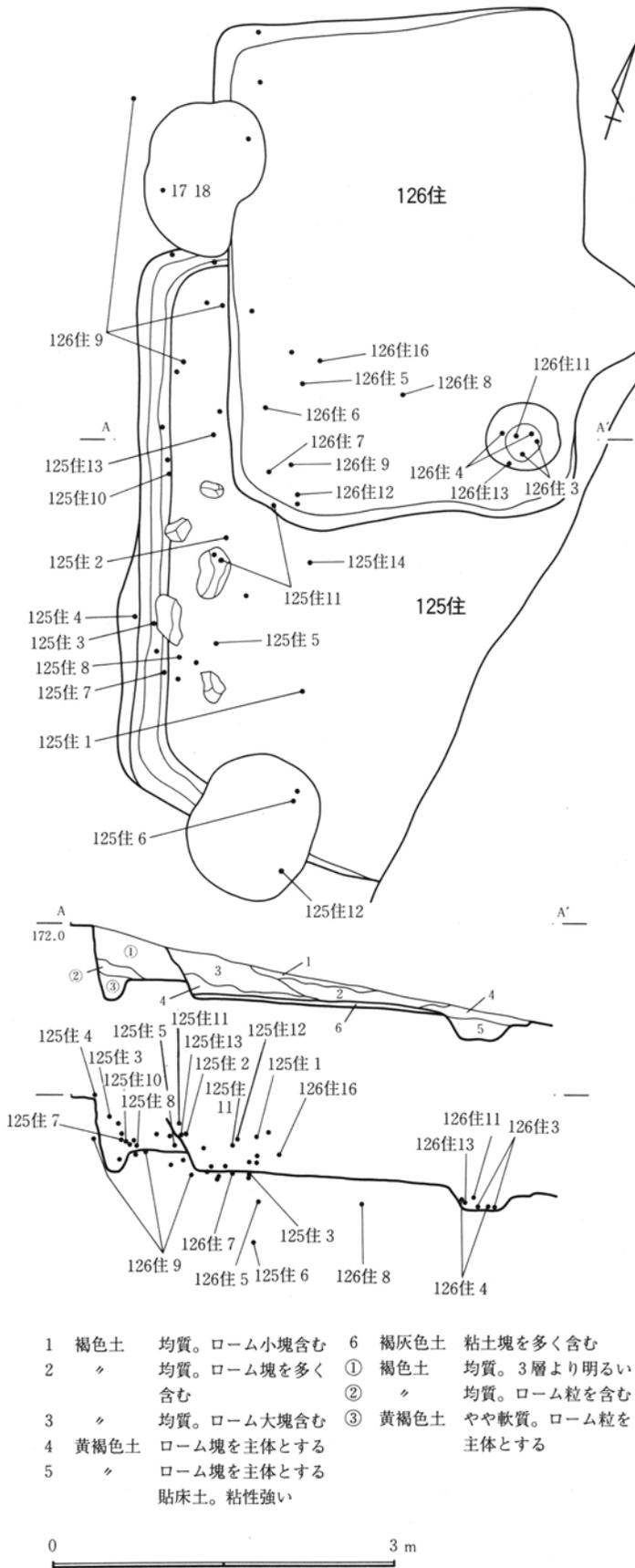
床面は、平坦面を築き、暗褐色土塊を主体とする貼床がなされる。硬化面は中央部に狭い範囲で確認された。

壁周溝は、西壁と北壁西半、やや距離をおいて北東隅に確認された。貯蔵穴・柱穴は特定できない。

竈もおそらく区域外に存在すると思われる。

床下遺構として、中央から東寄りに連なる大型円形の土坑を床下土坑として位置付けた。

遺物は、少量が出土したが、層的には床直上～床直に安定しており、住居跡廃絶時の時期を具現するものとする。



第273図 125・126号住居跡

125号・126号住居跡

調査区南東部の東側への急斜面地形に位置する。周辺は、遺構密度も比較的高く、本住居跡には3号掘立柱建物跡が重複し、西側には120号住と2号配石遺構、東側の攪乱坑を挟んで127号住や1号掘立柱建物跡が近接する。

本住居跡は、調査当初1号配石遺構や2号配石遺構に近似した段差を有する遺構と捉えた経緯がある。調査の進展に伴い北東部に焼土の散布がみられ、壁と貯蔵穴が検出されたことから、住居跡として認定した。さらに、南西部においては壁に沿って周溝が検出されたため、2軒の重複住居跡として調査した。新旧は126号住が新しい。

125号住は南西部で西壁と壁周溝を検出した。西壁の長さは5mを超えるため、おそらく大型の住居と思われる。深さも40cm前後で西壁の遺存状態は良い。ただし、南壁東半～東壁及び北壁は斜面地形と126号住との重複で、逸失しており、全容は把握できない。

床面は黄褐色ローム層を基盤とする地床である。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

126号住は、北東部で北壁・西壁・南壁及び貯蔵穴・竈を確認した。竈は、極めて遺存状態が不良で、範囲を推定するにとどまった。

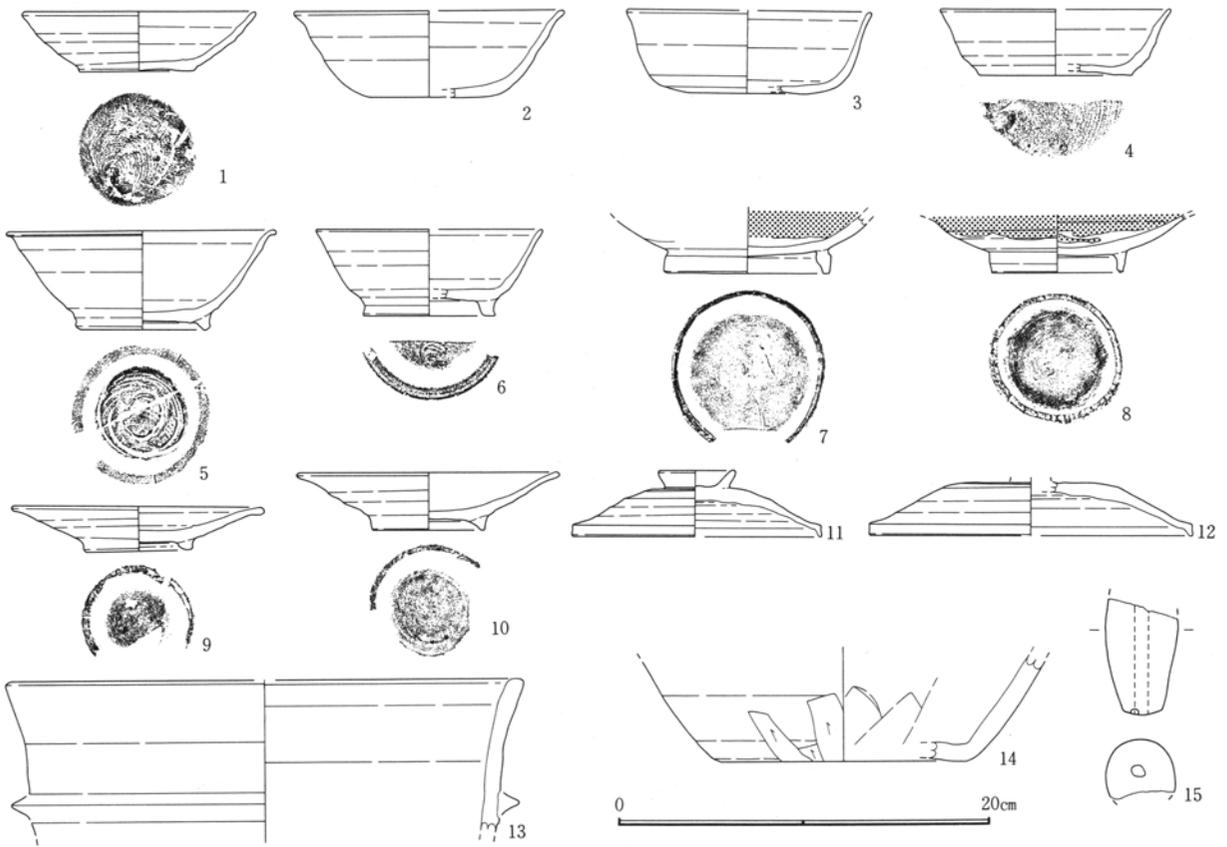
平面形は、約4.4×3.2mの横長の長方形を呈す。深さは約35cmを測るが斜面地形のため東半の壁は極僅かな検出となった。

床面は東側へ傾き、黄褐色ローム塊による貼床がなされていたが、北東側は流失する。

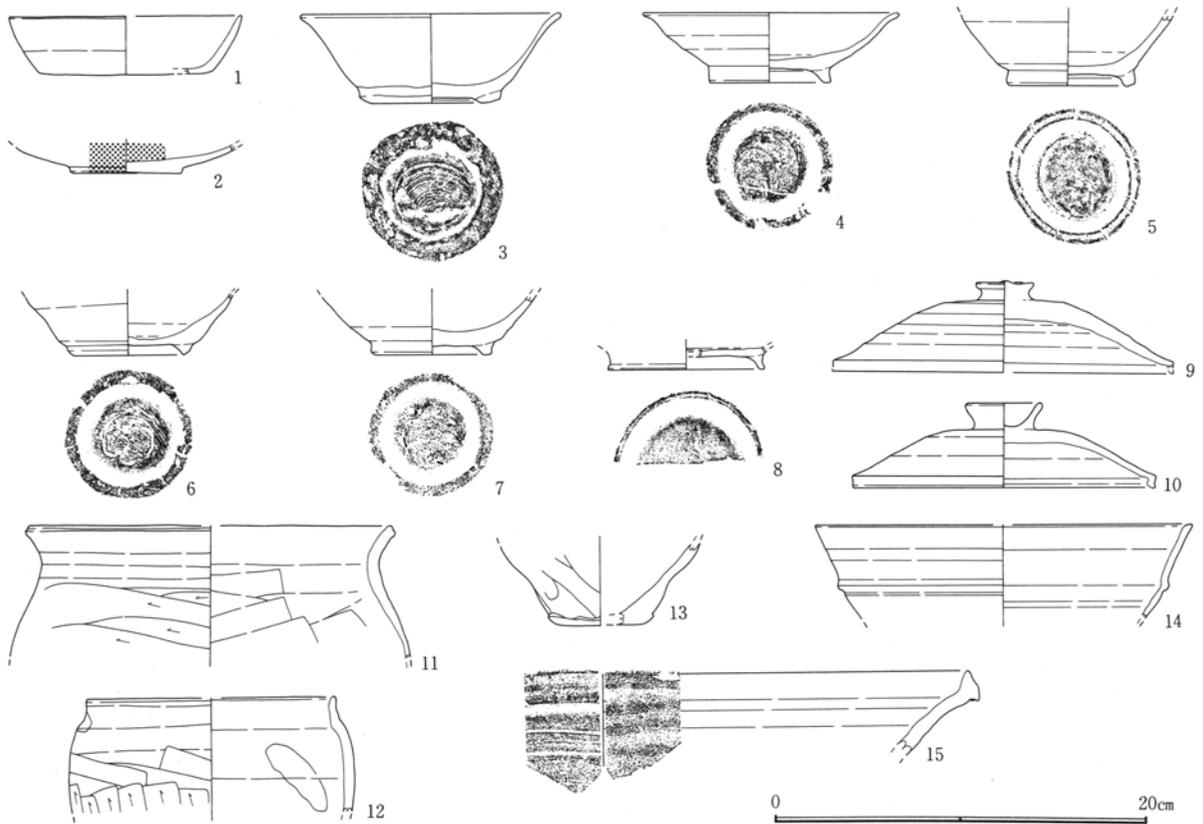
貯蔵穴は、南東隅の小型の円形土坑を充てる。須恵器杯・埴類を出土する。

両住居跡の出土遺物であるが、西壁際に集中する傾向がある。おそらく斜面地形に沿った流入によるものと捉えられ、居住に伴う出土とは思われない。

第5節 奈良・平安時代の住居跡



第274図 125号住居跡出土遺物



第275図 126号住居跡出土遺物

### 第三章 検出された遺構と遺物

第242表 125号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Crs-37・38	—	—×—×38	—	—	壁周溝	坏4 埴3 皿2 蓋2 甕1 甕1 土錘1	126住 3掘立

第243表 126号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Crs-37・38	長方形	442×318×35	N71°E	N75°E	貯蔵穴	坏1 埴5 皿2 蓋2 甕5 埴1 瓦1 金属器 2	125住 3掘立

第244表 125号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第274図 1 坏 図版 100	口：12.2 高：3.2 底：5.9	完形	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部～体部緩やかに内彎気味に一体化し大きく開く。下半で彎曲を持ち底部は僅かに突出する。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整。
第274図 2 坏 図版 100	口：(14.2) 高：(4.6) 底：(6.2)	約1/3	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	口唇部外反する。体部全体に丸みを帯びて開く。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整。器厚薄手。
第274図 3 坏 図版 100	口：(12.3) 高：(4.4) 底：(6.4)	破片	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部強く外反する。体部下半は丸みを帯び直立気味に開く。内面見込み部はやや明瞭。右回轉轆轤整形。体部下半は回轉調整。底部切り難し技法不明。
第274図 4 坏 図版 100	口：(12.0) 高：(3.5) 底：(8.0)	約1/3	①細 石英・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	口縁部緩やかに外反する。体部中位は強く彎曲し、底部は若干上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整。
第274図 5 埴 図版 100	口：(13.9) 高：5.3 底：6.6	約1/2	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③暗灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかに丸みを帯びる。高台は直立気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第274図 6 埴 図版 100	口：(11.8) 高：(4.6) 底：(7.0)	約1/3	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するも体部とはほぼ一体化する。下半に丸みを帯び高台は開き気味に付される。内面見込み部は明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第274図 7 埴 図版 100	口：— 高：— 底：8.5	底部	①緻密 ②還元焰 ③灰黄色 ④灰釉陶器	体部下半に丸みを持たせる。高台はやや内彎気味に付され三日月状を呈す。施釉は漬け掛け。右回轉轆轤整形。底部回轉斲削り後高台貼付。
第274図 8 皿 図版 100	口：— 高：— 底：6.8	約1/3	①緻密 ②還元焰 ③灰白色 ④灰釉陶器	体部下半に丸みを持たせる。高台は直立気味に付され三日月状を呈す。施釉は漬け掛け。右回轉轆轤整形。底部回轉斲削り後高台貼付。
第274図 9 皿 図版 100	口：(13.0) 高：5.8 底：2.4	約2/3	①粗 石英・白色粒 ②還元焰 ③オリーブ灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかに丸みを帯びる。高台は短く直立気味に付される。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第274図 10 皿 図版 100	口：(13.6) 高：3.0 底：(6.0)	約1/2	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位丸みを帯びる。高台は短く直立気味に付される。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第274図 11 蓋 図版 100	口：(13.1) 高： 3.5 摘： 4.0	約1/3	①粗 白色粒・砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部丸みを帯び、環状摘を付す。体部～裾部は彎曲し、かえり部は直立する。右回轉轆轤整形。天井部～体部上半回轉窺削りを施す。天井部切り離し後摘貼付。
第274図 12 蓋 図版 100	口：(17.0) 高： — 摘： —	約1/4	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部比較的平坦面を築く。摘剥落。体部～裾部は彎曲し、かえり部は直立する。右回轉轆轤整形。天井部回轉窺削り後摘貼付。
第274図 13 甌 図版 100	口：(27.0) 高： — 底： —	口縁部破片	①粗 小礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	口縁部長く外反する。罅は剥落するも痕跡から水平に付される。轆轤整形。回轉方向は不詳。
第274図 14 甌 図版 100	口： — 高： — 底：(13.1)	底部破片	①粗 小礫 ②酸化焰気味 ③暗赤褐色 ④須恵器	緩やかに開く底部形態。平底で底径は比較的広い。外面轆轤整形後縦位窺削り、内面は窺撫でを施す。体部器厚やや厚手。
第274図 15 土錘 図版 100	口：(3.1) 高： 1.9 底： 9.94 g	約1/2	① ②酸化焰 ③黄灰色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。欠損するが、中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態と思われる。外面縦位撫で。

第245表 126号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第275図 1 坏 図版 100	口：(12.2) 高：(3.1) 底：(9.2)	約1/4 覆土	①細 黑色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口縁～体部上半内彎気味に一体化する。下半は直線状に開き底部は平底を呈す。口縁部横撫で、体部は横位・斜位撫で、底面は窺削りを施す。
第275図 2 坏 図版 100	口： — 高： — 底：(5.8)	約1/4 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③緑灰色 ④緑釉陶器	強く開く体部下半。あるいは無台の皿か。右回轉轆轤整形。底部は摩滅し切り離し技法は不明。
第275図 3 埴 図版 100	口： 13.7 高： 4.7 底： 5.8	ほぼ完形 貯蔵穴 床直土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	口縁部外反し、体部中位～下半丸みを帯びる。高台は短く付される。右回轉轆轤整形。内面見込み部は緩やか。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。外器面摩滅著しい。口縁部器厚薄手。
第275図 4 埴 図版 100	口： 13.4 高： 3.7 底： 6.4	約4/5 貯蔵穴 床直土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口縁部外反し、体部中位に丸みを帯びる。体部は強く開き口径は広い。高台はやや開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第275図 5 埴 図版 100	口： — 高： — 底： 6.2	約2/3 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下半緩やかに開く。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部はやや明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第275図 6 埴 図版 100	口： — 高： — 底： 5.7	約1/3 床直	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	体部下半歪みを持ち彎曲を以て開く。高台は短く付される。内面見込み部は不明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第275図 7 埴 図版 100	口： — 高： — 底： 6.0	約1/3	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下半は緩やかに開く。高台は短く付される。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第275図 8 埴 図版 100	口： — 高： — 底：(8.4)	底部破片 床直	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	高台は短く外反気味に付される。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第275図 9 蓋 図版 100	口： — 高： — 摘： (3.0)	約1/4 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部高く丸みを帯び小型の円環状摘を付す。体部～裾部は一体化しかえり部は直立する。右回転轆轤整形。天井部回転窺削り後摘貼付。
第275図 10 蓋 図版 100	口： (15.8) 高： 4.5 摘： 3.8	約1/2 覆土	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦で環状摘を付す。摘み断面形は逆台形状を呈す。体部～裾部は直線状に一体化し、裾部は僅かに内傾する。右回転轆轤整形。天井部回転窺削り後摘貼付。
第275図 11 甕 図版 100	口： (19.0) 高： — 底： —	口縁部破片 貯蔵穴	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄橙色 ④土師器	口縁部～頸部外反し、頸部は彎曲しコ字状をなさない。体部上半の張りは弱くならぬ。口縁部横撫で、体部外面横位窺削り、体部内面は横位・斜位窺撫でを施す。
第275図 12 甕 図版 100	口： (13.2) 高： — 底： —	口縁部破片 貯蔵穴	①細 白色粒 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	口縁部短く、僅かに外反する。体部の張りは弱く上半に膨らみを持たせる。口縁部～体部上半横撫で、体部中位は斜位窺削り、下半は縦位窺削り。内面は横撫で。内面に微量の煤が付着する。
第275図 13 甕 図版 100	口： — 高： — 底： (4.6)	底部破片 覆土	①粗 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	底部は緩やかに開き、彎曲を経て体部下半は強く開く。全体にいびつな形状。外面は縦位・斜位窺削り、内面は撫でを施す。
第275図 14 甕？ 図版 100	口： (19.8) 高： — 底： —	口縁部破片 覆土	①緻密 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部は直線状に強く開き、頸部は稜状の屈曲を持たせる。体部は緩やかな丸みを帯びる。左回転轆轤整形。
第275図 15 甕 図版 100	口： (38.8) 高： — 底： —	口縁部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部内傾し、口縁部強く開く。轆轤整形。回転方向不詳。

127号住居跡

調査区南東部の北東側との急斜面地形に位置する。西半を攪乱坑に著しく破壊される。

近接する住居跡は、西側に131号住・132号住が、東側に123号住が見られ住居跡群の一隅をなす。

平面形は、南北軸長3.5m程の方形と思われ、深さは約40cmを測る。

床面は、黄褐色ローム塊を主体とした貼床がなされ、ほぼ平坦面を築く。柱穴は、見られなかった。貯蔵穴は東南隅の不整形の土坑を充てる。深さは約30cm程で掘り込みもしっかりしていた。

竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。浅く遺存状態は極めて悪い。焼土・炭化物の散布から範囲を確認した。

床下遺構は、中央やや北東よりに円形の床下土坑を検出した。

遺物は少量が出土している。覆土中の出土であり、流入と捉えた。

129号住居跡

C区東斜面際で検出された。周辺の斜面地形は緩やかになり、南側は谷地形が発達する。

近接する住居跡はなく、単独の占地である。その他の遺構でも、近世に比定される2号民家が接する。

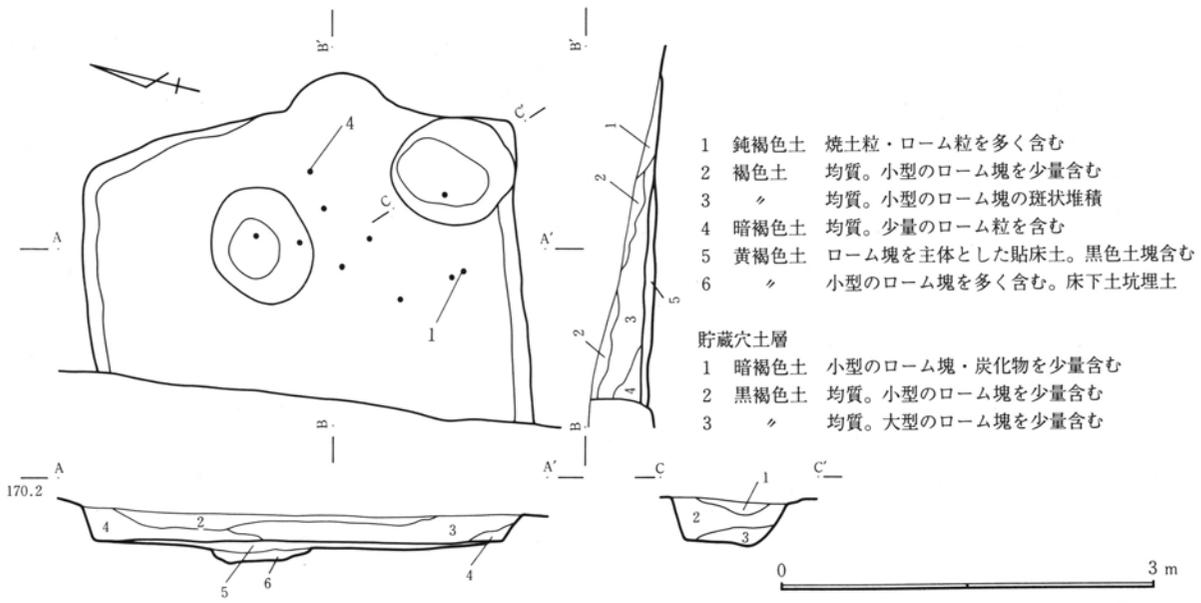
平面形は、約4.3×3.9mの方形を呈するが、南壁の遺存が悪く判然としない。深さも10cm未満であり、遺存状態は極めて悪い。

床面は、暗褐色土を基盤とする地床で、平坦面を築く。硬化面は不明瞭である。壁周溝は、西壁から北壁・東壁北半にかけて検出された。柱穴は無い。貯蔵穴は東南隅に距離をおいて不整形円状の土坑を検出した。浅く立ち上がりも弱い。

竈は、東壁南寄りに設けられる。遺存状態は悪く、焼土粒の散布により範囲を確定した。

遺物は、貧弱な出土量である。3点を図示したが土師器坏(1)は床直出土で、本住居跡に帰属し得る資料である。

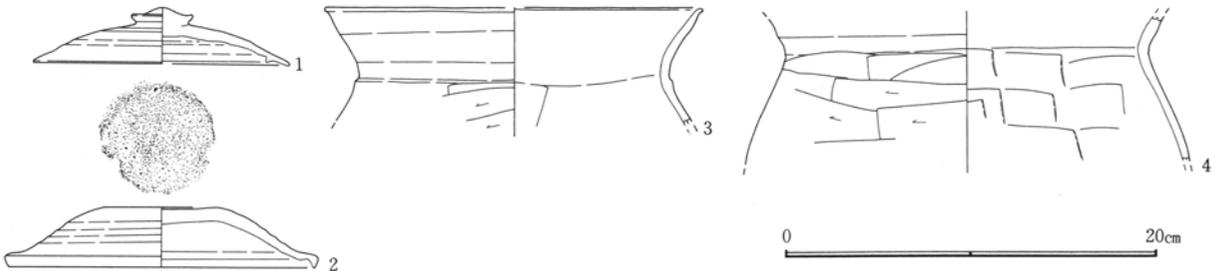
第5節 奈良・平安時代の住居跡



第276図 127号住居跡

第246表 127号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cp-36・37	—	—×345×40	N74°E	N75°E	貯蔵穴・床下土坑	蓋2 甕2	

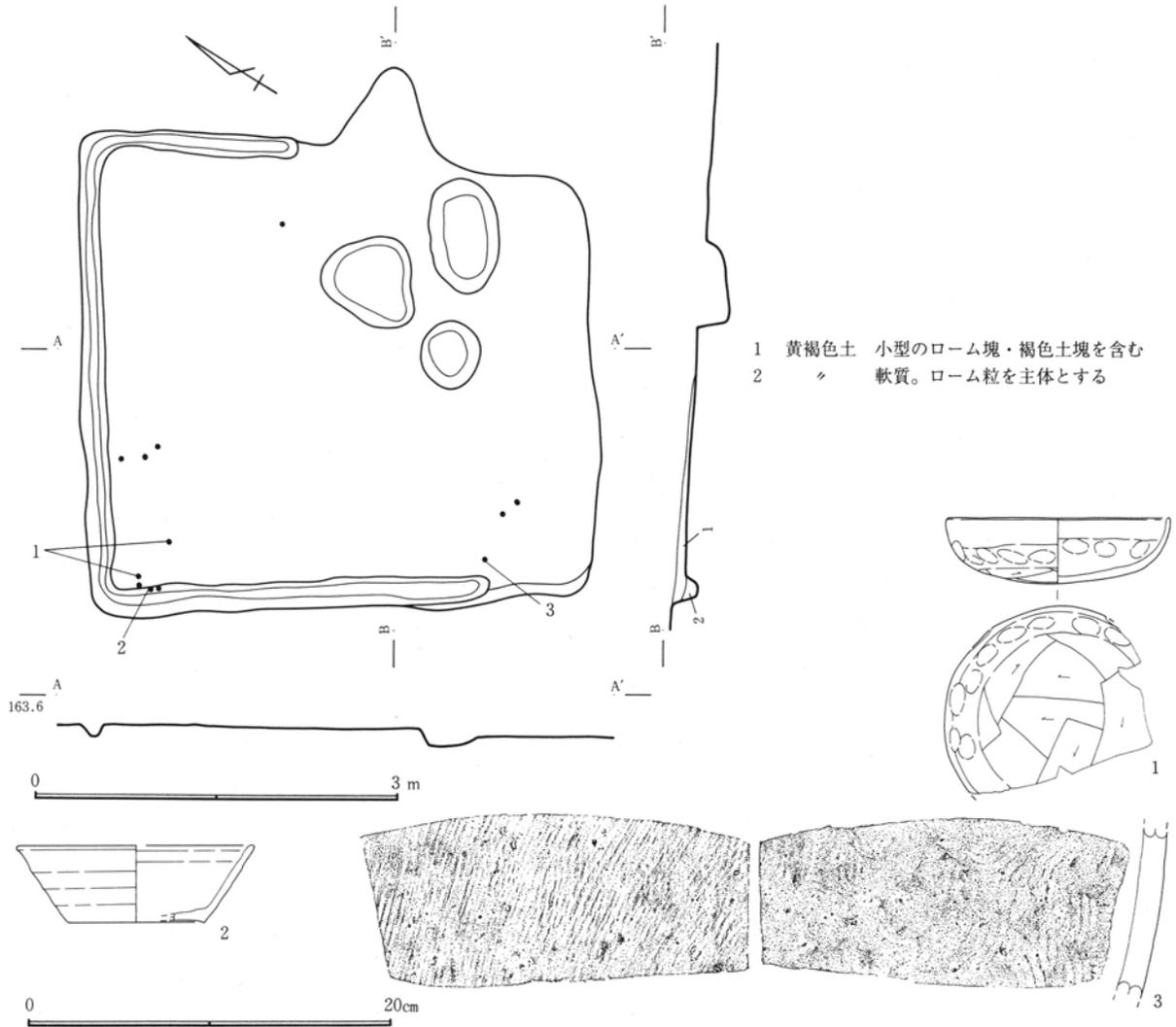


第277図 127号住居跡出土遺物

第247表 127号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第277図 1 蓋 図版	口：13.4 高：3.0 摘：3.2	約1/4 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	天井部丸みを帯び、体部～裾部と一体化する。宝珠状摘を付し全体に小型の作り。かえり部は内稜を持つ。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付。
第277図 2 蓋 図版	口：16.2 高：3.1 底：—	約2/3 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部平坦で無摘。体部～裾部緩やかに丸みを帯び、裾部は彎曲する。かえり部は内傾する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り。
第277図 3 甕 図版	口：(20.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部は強く外傾し頸部「く」字状に屈曲する。口縁部横撫で、体部横位篋削り。内面体部は横位篋撫でを施す。
第277図 4 甕 図版	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部欠損するも強い外傾を呈す。頸部は「く」字状に屈曲する。肩部に著しい張りを設けず体部中位に膨らみを持たせる。口縁部横撫で、体部横位篋削り、内面体部は横位篋撫で。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



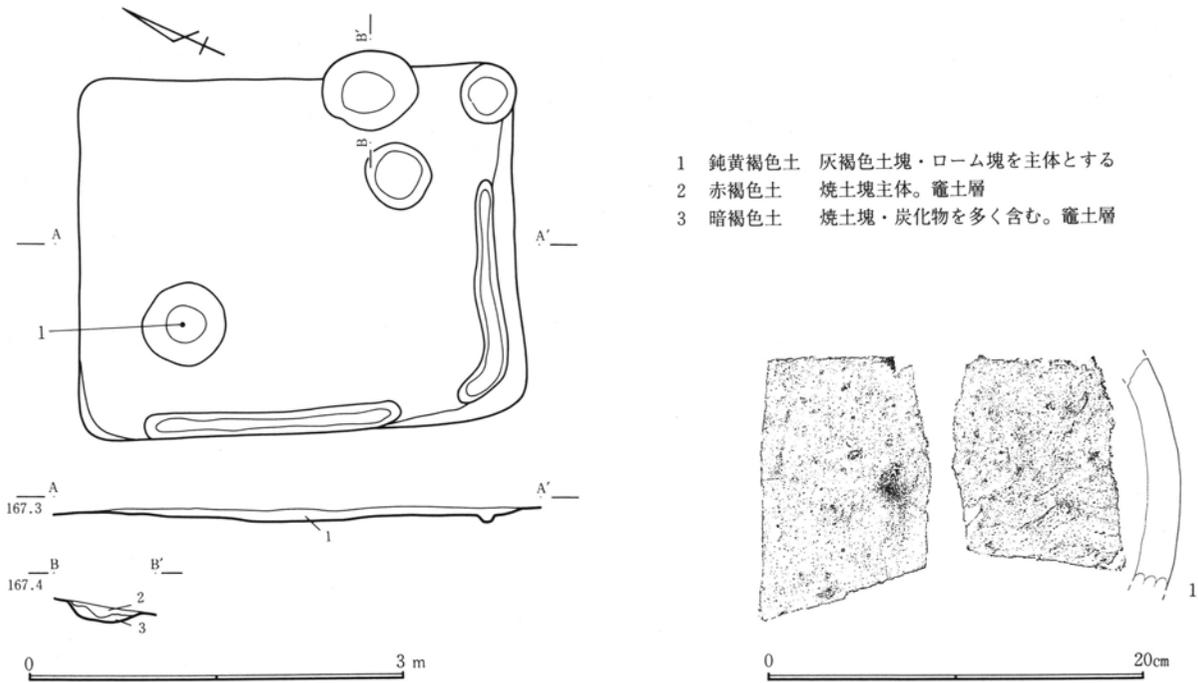
第278図 129号住居跡・出土遺物

第248表 129号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Chi-29~31	不整形	435×394×8	N56°E	N64°E	貯蔵穴	坏2 甕1	

第249表 129号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
第278図 1 坏 図版	口:(12.0) 高: 3.6 底: —	1/2	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁~体部内彎気味に一体化する。底部は丸底を呈す。全体に整った器形。口縁部横撫で。体部上半に指頭痕。底部は篋削りを施す。
第278図 2 坏 図版	口: 12.8 高: 4.2 底: 7.4	1/3	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部僅かに外反するも口縁部~体部はほぼ直線状に一体化する。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第278図 3 甕 図版	口: — 高: — 底: —	体部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③褐灰色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩きを密に施し、自然釉付着する。内面青海波状当て目残る。



第279図 130号住居跡・出土遺物

第250表 130号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cno-31・32	長方形	355×283×9	N63°E	N64°E	壁周溝	甕1	

第251表 125号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第279図 1 甕 図版	口: - 高: - 底: -	体部破片	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	大甕体部破片。外面叩き調整後撫で。内面撫でを施すが円環状当て目残る。

130号住居跡

調査区南東部のC区東斜面裾部に位置する。周辺は東側と南側への斜面地形であり、南東側の谷地形の影響のため、基盤も暗褐色ローム質土である。

住居跡密度は稀薄で、南側に117号住、北側に50・51号住が距離をおいて占地する。

平面形は、約3.5×2.8m横長の長方形を呈するが、東壁や北壁の残存は極めて悪く、判然としない。深さも、10cm未満で遺存状態は極めて不良である。

床面は、暗褐色土を基盤とし、ほぼ平坦面を築く。硬化面は不明瞭だった。

壁周溝は南壁と西壁に確認された。西壁南端で途切れが見られる。柱穴は認められない。

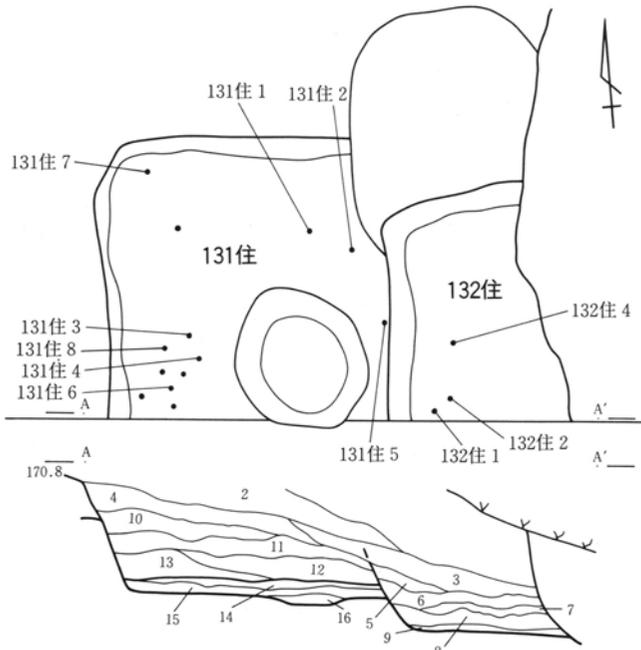
貯蔵穴は東南隅に設けられる。浅く、立ち上がりも弱い。

竈は、東壁南寄りに設けられる。遺存状態が悪く使用面下の検出となった。円形の掘り込みを有す。少量の焼土塊の堆積を見る。

床面中央北西寄りに円形の土坑を検出したが、床下土坑と同等の性格を考えた。

遺物は、円形土坑より須恵器甕体部破片が出土したのみである。

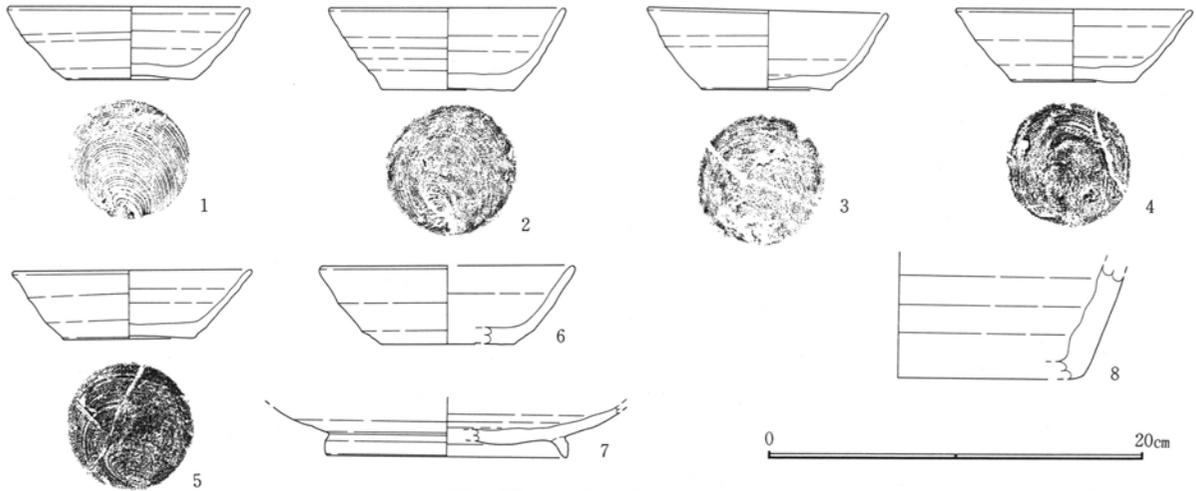
第三章 検出された遺構と遺物



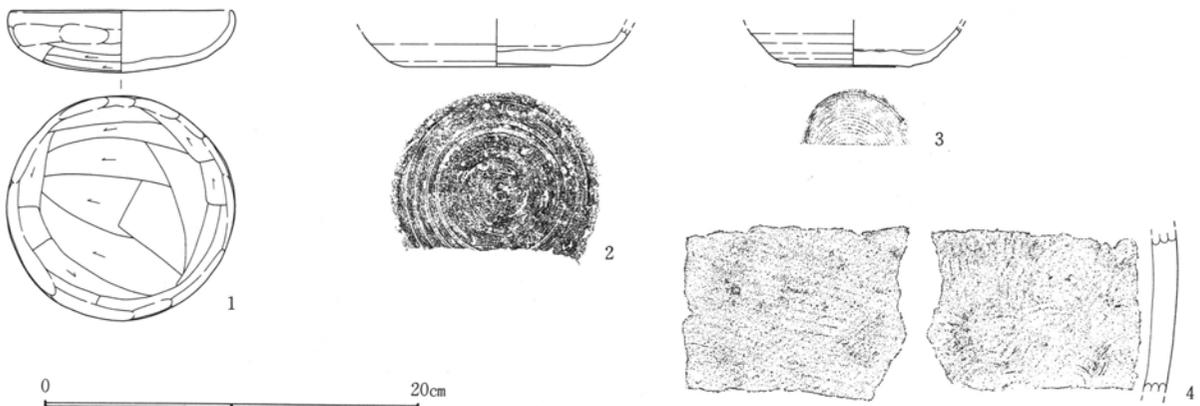
- |    |      |                     |
|----|------|---------------------|
| 1  | 褐色土  | As-Aを混入する表土         |
| 2  | 〃    | 明るい。As-Aを塊状に含む。表土   |
| 3  | 暗褐色土 | 締り乏しい。炭化物を含む        |
| 4  | 黄褐色土 | 均質。ローム塊の斑状堆積。締りは良好  |
| 5  | 褐色土  | 均質。ローム塊を主体とする。      |
| 6  | 暗褐色土 | 均質。少量のローム塊の斑状堆積     |
| 7  | 〃    | 均質。やや明るい。ローム塊を多く含む  |
| 8  | 暗褐色土 | 均質。やや暗い。ローム塊・炭化物を含む |
| 9  | 黄褐色土 | ローム粒を主体とした貼床土       |
| 10 | 暗褐色土 | 均質。ローム塊との斑状堆積。焼土粒含む |
| 11 | 〃    | 均質。明るい。炭化物微量含む      |
| 12 | 黄褐色土 | 均質。ローム塊を主体とする       |
| 13 | 〃    | 均質。ローム粒を主体とする。炭化物含む |
| 14 | 〃    | ローム塊を主体とした貼床土       |
| 15 | 〃    | 小型のローム塊を主体とする。締り乏しい |
| 16 | 〃    | 大型のローム塊を主体とする。締り乏しい |

0 3 m

第280図 131・132号住居跡



第281図 131号住居跡出土遺物



第282図 132号住居跡出土遺物

第5節 奈良・平安時代の住居跡

第252表 131号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cpq-38・39	—	—×—×80	—	—		坏6 盤1 甕1 瓦1	132住 152坑

第253表 132号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cp-38・39	—	—×—×57	—	—		坏3 甕1	131住 152坑

第254表 131号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第281図 1 坏 図版 101	口：12.9 高：3.9 底：6.1	ほぼ完形	①細 砂粒 ②還元焰 ③オリーブ灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するも体部とほぼ直線状に一体化する。底部は若干上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第281図 2 坏 図版 101	口：12.4 高：4.3 底：7.0	約3/4	①細 砂粒 ②還元焰 ③オリーブ灰色 ④須恵器	口縁部一部ほぼ直線状に一体化する。底部は極僅かに突出する。内面はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第281図 3 坏 図版 101	口：12.5 高：4.2 底：6.8	約3/4	①細 砂粒 ②還元焰 ③オリーブ灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中位に丸みを持たせる。底部は僅かに突出し、若干上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第281図 4 坏 図版 101	口：12.6 高：3.9 底：6.4	約1/2	①細 砂粒 ②還元焰 ③オリーブ灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するも体部とほぼ直線状に一体化する。底部は僅かに突出し若干上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第281図 5 坏 図版 101	口：12.5 高：3.6 底：6.9	約3/4	①細 砂粒 ②還元焰 ③オリーブ灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部緩やかに丸みを帯びる。底部は僅かに突出し若干上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第281図 6 坏 図版 101	口：(13.2) 高：(4.2) 底：(7.0)	約1/4	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	やや軟質。口縁部僅かに外反し、体部中位に緩やかな丸みを帯びる。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚やや厚手。
第281図 7 盤 図版 101	口：— 高：— 底：(12.6)	約1/5	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	体部下半は丸みを帯びて大きく開く。高台は内彎気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫でを施す。
第281図 8 甕 図版 101	口：— 高：— 底：(19.2)	底部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	あるいは壺・瓶種底部か。直線状に開く底部形態。轆轤整形。回転方向は不詳。外面撫で、内面は轆轤目が顕著に残る。

131号・132号住居跡

平成3年度の残地調査で検出された住居跡である。

調査区南東部の北東側への急斜面地形に位置し、南半を調査区域外に延ばして検出された。また、東

半を現代の墓地に攪乱され、全容は把握し難い。

近接する住居跡は、東側に124号住、北側に127号住が見られる。

平面形は両住居跡とも方形を基調とする。深さは、50cm以上を測るが、東側は斜面地形のため浅くなる。

第三章 検出された遺構と遺物

第255表 132号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第282図 図版	1 101	口： 11.6 高： 3.3 底： —	ほぼ完形	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明黄褐色 ④土師器	口縁～底部内彎気味に一体化する。底部丸底を呈す。口縁部横撫で、体部弱い撫で及び指頭痕、底部は篋削り。
第282図 図版	2 101	口： — 高： — 底： 9.8	約1/3	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	大型品。底部は平底ながらやや不安定。体部下半は内彎気味に開く。右回転轆轤整形。底部回転篋削りを施す。体部器厚に比して底部器厚極めて厚手。
第282図 図版	3 101	口： — 高： — 底： (6.0)	約1/4	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	底部僅かに突出し若干上げ底を呈す。体部下半は内彎気味に開き、底部にかけて彎曲する。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第282図 図版	4 101	口： — 高： — 底： —	体部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③黄灰色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩きを密に施し格子目状となす。内面青海波状当て目密に残る。

床面は、両者とも黄褐色ローム塊を主体とした貼床がなされ、平坦面を築く。

床面上の施設は認められず、131号住床下に、円形の床下土坑を確認したのみである。

遺物は比較的多く出土したが、殆どが覆土中の出土であり、斜面地形に沿った流入の可能性が高い。

尚、新旧であるが、土層観察では、132号住が131号住を切る様相を呈す。また、北側の土坑との重複関係は不明である。

## 第6節 土坑

本節では、検出された土坑の概略を述べる。第4節—縄文時代において、住居跡を中心に説明したが、その際、本書編集の都合上、縄文時代に比定される土坑に関しては、その出土遺物のみを第4節に掲載した。遺構図については、本節で土坑を一括して説明したため、分離した掲載となっている。縄文時代土坑に関しては、第4節と併せて活用していただきたい。

また、奈良・平安時代以降のいわゆる堅穴状遺構と呼称される遺構も土坑として取り扱った。この堅穴状遺構に関しても、第5節—奈良・平安時代の住居跡で説明した24号住居跡や25号住居跡等も堅穴状遺構の可能性が示唆されており、本節の一部で扱う堅穴状遺構との関係も視野に入れておかねばならないだろう。

本節では、調査時に付された土坑番号順に説明を加えたため、必ずしも時期別や性格別のまとまりを持たない。

さらに、多くの土坑が良好な遺物出土状態ではないので、帰属時期の判断に苦慮した。占地状況及び埋土の様相から、判断を加えたが、確定的ではなく圧倒的に時期不明の土坑が多い。

次に、土坑の性格に関しても、特定できない例が多い。貯蔵穴・墓壙等多くの用途・機能が想起されるが、良好な検出状態を呈す土坑は少ない。本節でも、何等かの位置付けを試みたが、これも確証性に乏しく、性格不明の土坑が多くなった。反省を踏まえて、今後の土坑調査方法も視点をかえる必要があるだろう。

以下、順次説明を加えるが、1号土坑が1号民家となった例、土坑群が掘立柱建物跡に変更した例など、調査時に遺構名変更がなされている場合や、極めて浅く小規模の自然的落込みの土坑番号を整理時に欠番としている。ご寛容願いたい。

2号土坑 調査区東側C区東斜面裾部で検出された。軸長約3.4m前後の不整形を呈し、南西隅の彎曲が壁外に突出する。坑底面は起伏が多く、全体

に壁の立ち上がりも緩やかである。調査当初、住居跡の可能性も示唆されたが、坑底面の様相や竈等の施設を持たないことから、堅穴状遺構とした。遺物は磁器壘と古銭がまとまって出土した。近世～近代の所産であろう。

3号土坑 調査区東側C区東斜面裾部で検出された。径約90cm程度の不整形を呈す。浅く皿状で、壁の立ち上がりも弱い。埋土から、近世～近代の所産か。

4号土坑 調査区東側C区東斜面裾部で検出された。径約90cm程度の不整形で、壁の立ち上がりは弱く皿状である。覆土から近世～近代の所産と捉えた。

5号土坑 調査区東側C区東斜面裾部で検出された。長軸約2.5m程度の不整形を呈する。数基の土坑の重複とも考えられる。時期・性格は不明である。

6号土坑 調査区東側C区東斜面裾部で検出された。小型の不整形土坑である。数基のピット・土坑の重複とも考えられる。時期は不明。

7号土坑 調査区東側C区斜面裾部で検出された。小型の不整形土坑である。坑底面に2連の小ピットを得たが、性格は不明である。時期は、埋土の様相から奈良・平安時代に比定した。

8号土坑 調査区東側C区斜面裾部で検出された。小型で不整形を呈し、坑底面は平坦で、壁の立ち上がりは良好である。埋土から奈良・平安時代に比定した。性格は不明。

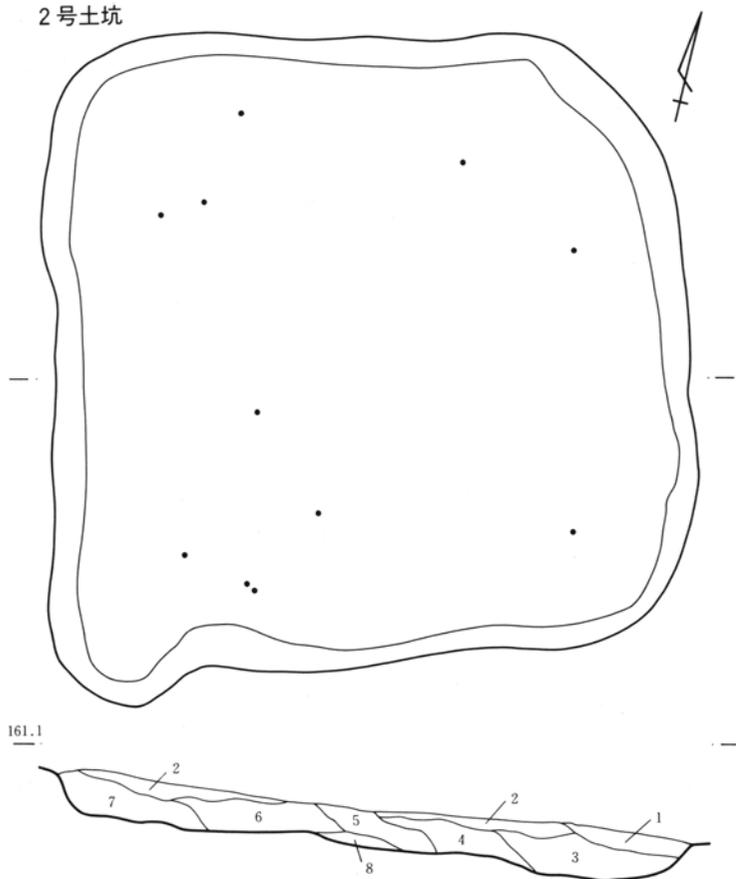
9号土坑 調査区東側C区斜面裾部で検出された。径1.1m程の不整形を呈し、浅く、皿状の断面形で立ち上がりも弱い。時期は不明である。

10号土坑 調査区東側C区斜面裾部で検出された。不整形で西壁の立ち上がりが弱い。皿状の断面形態である。埋土から奈良・平安時代に比定した。

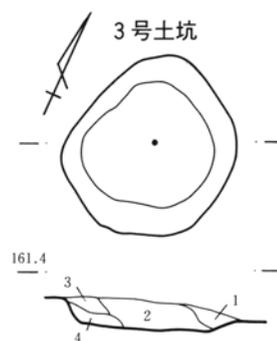
11号土坑 調査区東側C区斜面裾部で検出された。不整形の長楕円形状を呈し、壁の立ち上がりは良好である。坑底面は凹凸を持つ。平面形状から墓壙であろうか。時期は埋土から奈良・平安時代である。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

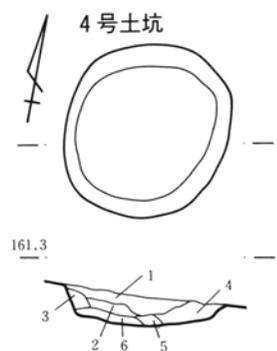
2号土坑



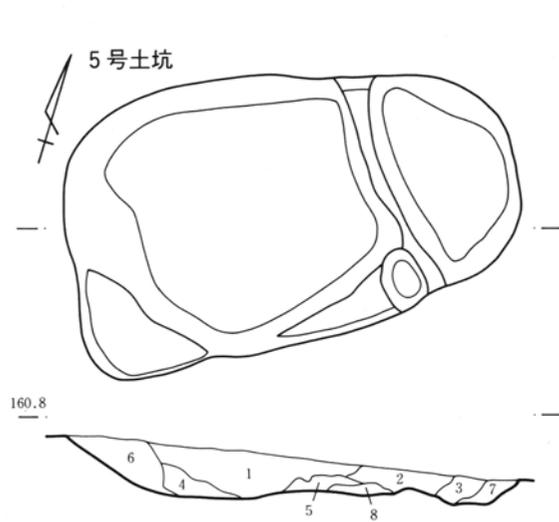
3号土坑



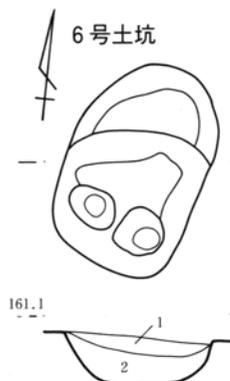
4号土坑



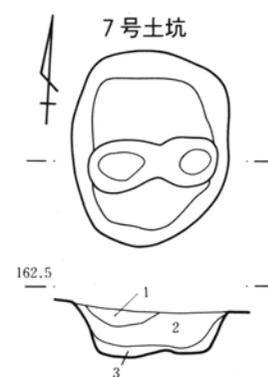
5号土坑



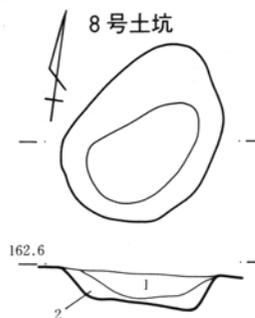
6号土坑



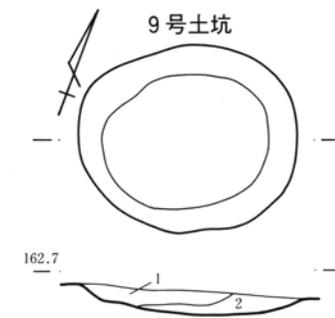
7号土坑



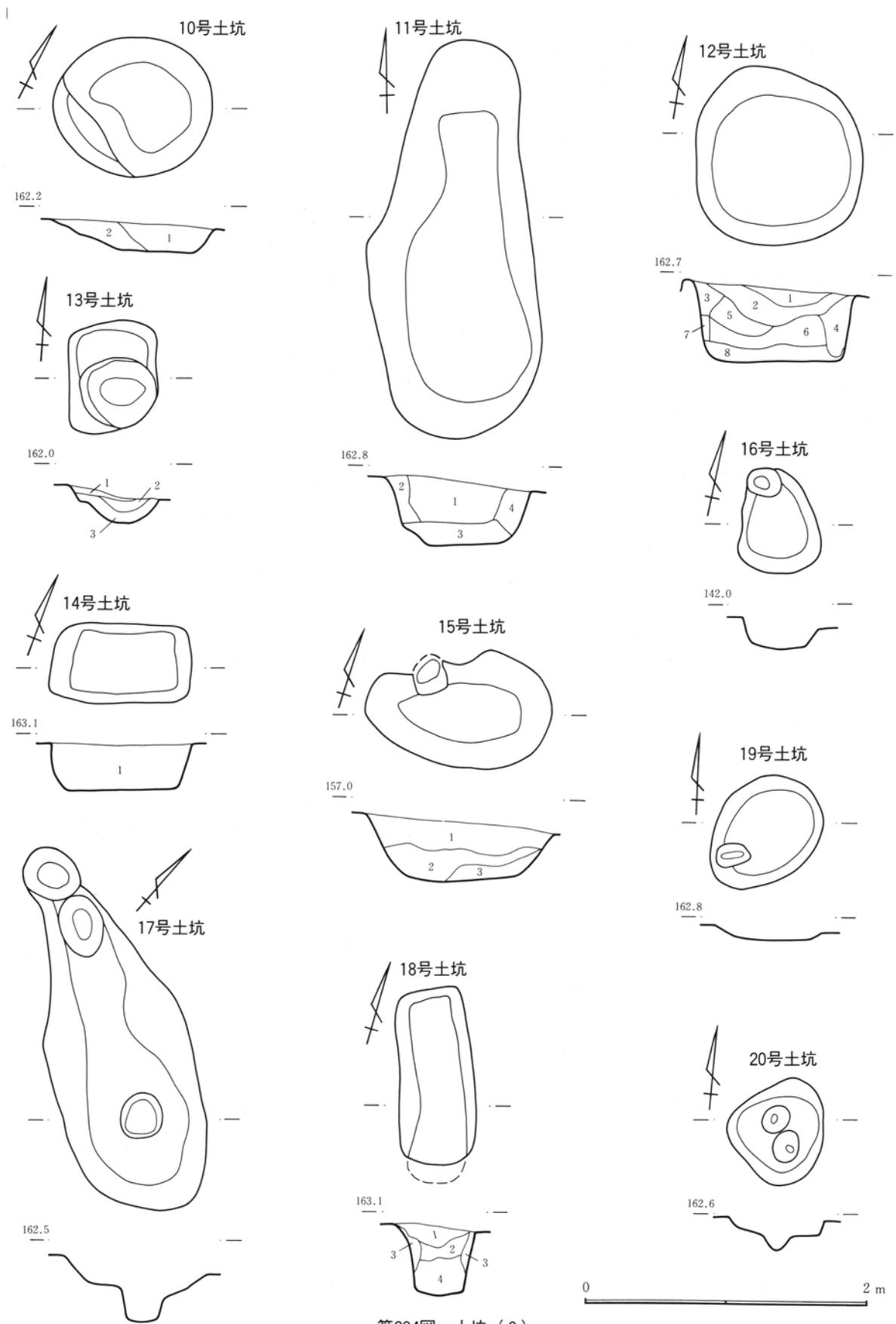
8号土坑



9号土坑

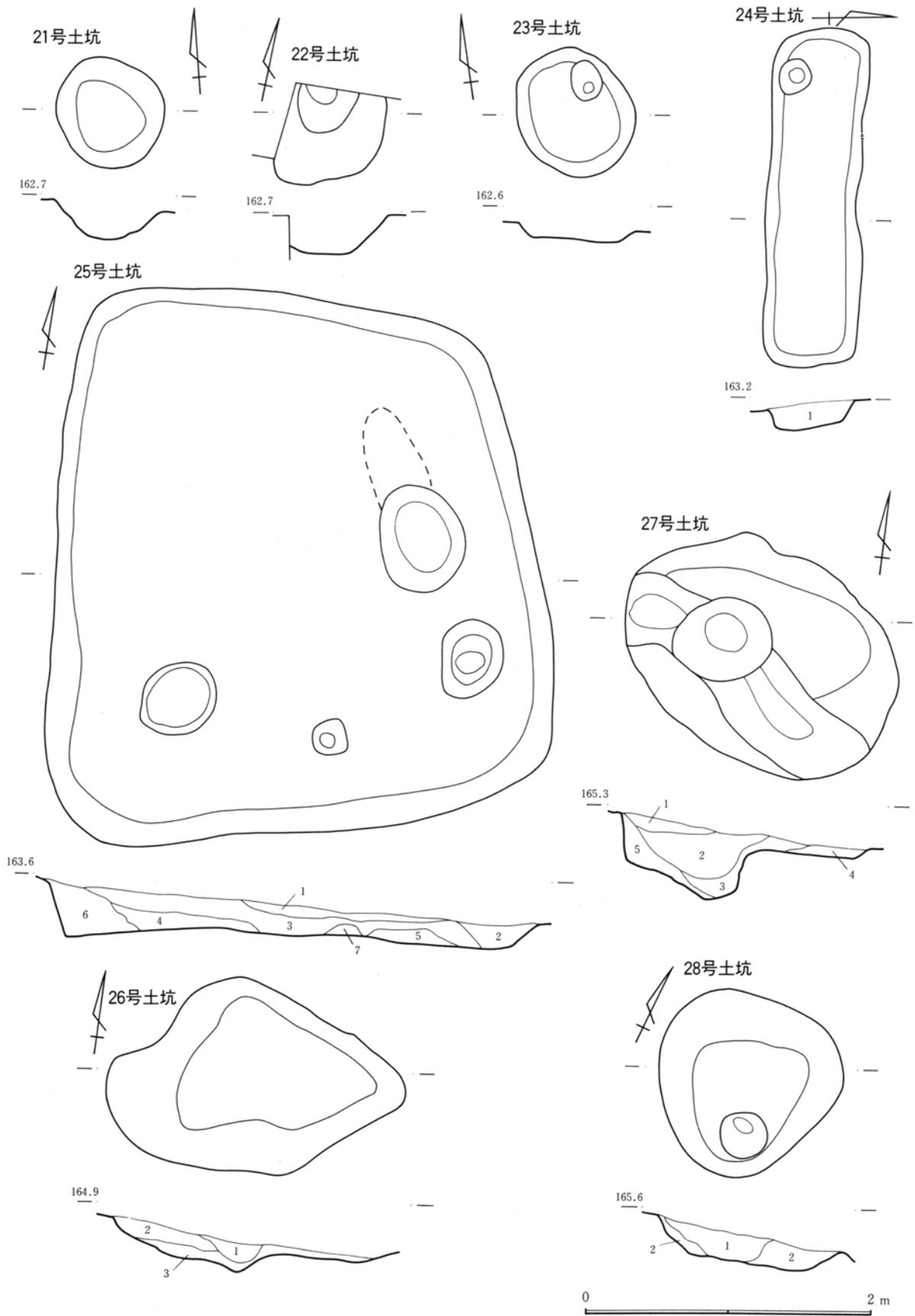


第283図 土坑 (1)



第284图 土坑 (2)

第三章 検出された遺構と遺物



第285図 土坑 (3)

12号土坑 調査区東側C区斜面裾部で検出された。径1.1m程の円形を呈す。坑底面は平坦で、壁の立ち上がりも良好でしっかりしている。近世軟質陶器が出土している。埋土も近世の特徴を見せる。墓壙であろうか。

13号土坑 調査区東側C区斜面で検出された。小型の不整形を呈し、浅く立ち上がりも弱い。時期は不明である。

14号土坑 調査区東側C区斜面裾部で検出された。整った方形を呈し、坑底面は平坦で、断面形状も箱形を呈す。埋土から近世～近代の所産と思われる。貯蔵穴か。

15号土坑 調査区東端のB区住居群内に位置する。不整楕円状を呈し、坑底面は不安定で、立ち上がりは緩やかである。時期は埋土から奈良・平安時代と思われるが性格は不明である。

16号土坑 調査区東側C区斜面裾部に位置する。小型の不整形を呈し、立ち上がりはやや弱い。時期・性格は不明である。

17号土坑 調査区東側C区斜面裾部下位に位置する。不整長楕円形状を呈し、3基の小ピットと重なる。時期・性格は不明である。

18号土坑 調査区東側C区斜面裾部で検出された。長軸長1.2m程の長方形を呈し、坑底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりもしっかりしていた。南壁は袋状を呈す。埋土から近世～近代と考えた。貯蔵穴か。

19号土坑 調査区東側C区斜面裾部に位置する。不整円形を呈し、浅く皿状で、壁の立ち上がりも弱い。時期・性格は不明である。

20号土坑 調査区東側C区斜面裾部に位置する。不整円形を呈し、坑底面にピットが重なる。時期・性格は不明である。

21号土坑 調査区東側C区斜面裾部に位置する。径70cm程度の円形を呈し、皿状の断面形で、緩やかな立ち上がりである。時期・性格は不明である。

22号土坑 調査区東側C区斜面裾部に位置する。北側を調査区域外に延ばすため全容は判然としない。壁の立ち上がりは緩やかである。

23号土坑 調査区東側C区斜面裾部に位置する。径80cm前後の不整円形を呈し、立ち上がりは弱い。時期・性格は不明である

24号土坑 調査区東側のC区斜面で検出された。長軸約2.3m程の長方形で、南西隅に小ピットを開ける。坑底面は平坦で、壁の立ち上がりは良好である。埋土から近世～近代の所産と考える。貯蔵穴か。

25号土坑 調査区東側のC区斜面で検出された。約3.8×3.5m程度の不整形を呈し、壁は緩やかな立ち上がりである。小ピット4基を坑底面に開け、底面は起伏がある。埋土は奈良・平安時代の特徴を示す。小竪穴状遺構とした。

26号～29号土坑 調査区東側のC区斜面でまとまって検出された土坑群である。いずれも不整形の平面形で、壁の立ち上がりも弱い。性格は不明だが、埋土から自然遺構の可能性もある。

30号土坑 調査区東側C区東斜面裾部で検出された。大型の不整形土坑であり、坑底面は起伏が多い。壁の立ち上がりも不安定である。埋土中より土師器坏・須恵器坏・埴・羽釜等の出土が見られ、時期は平安時代と考えた。性格は不明である。

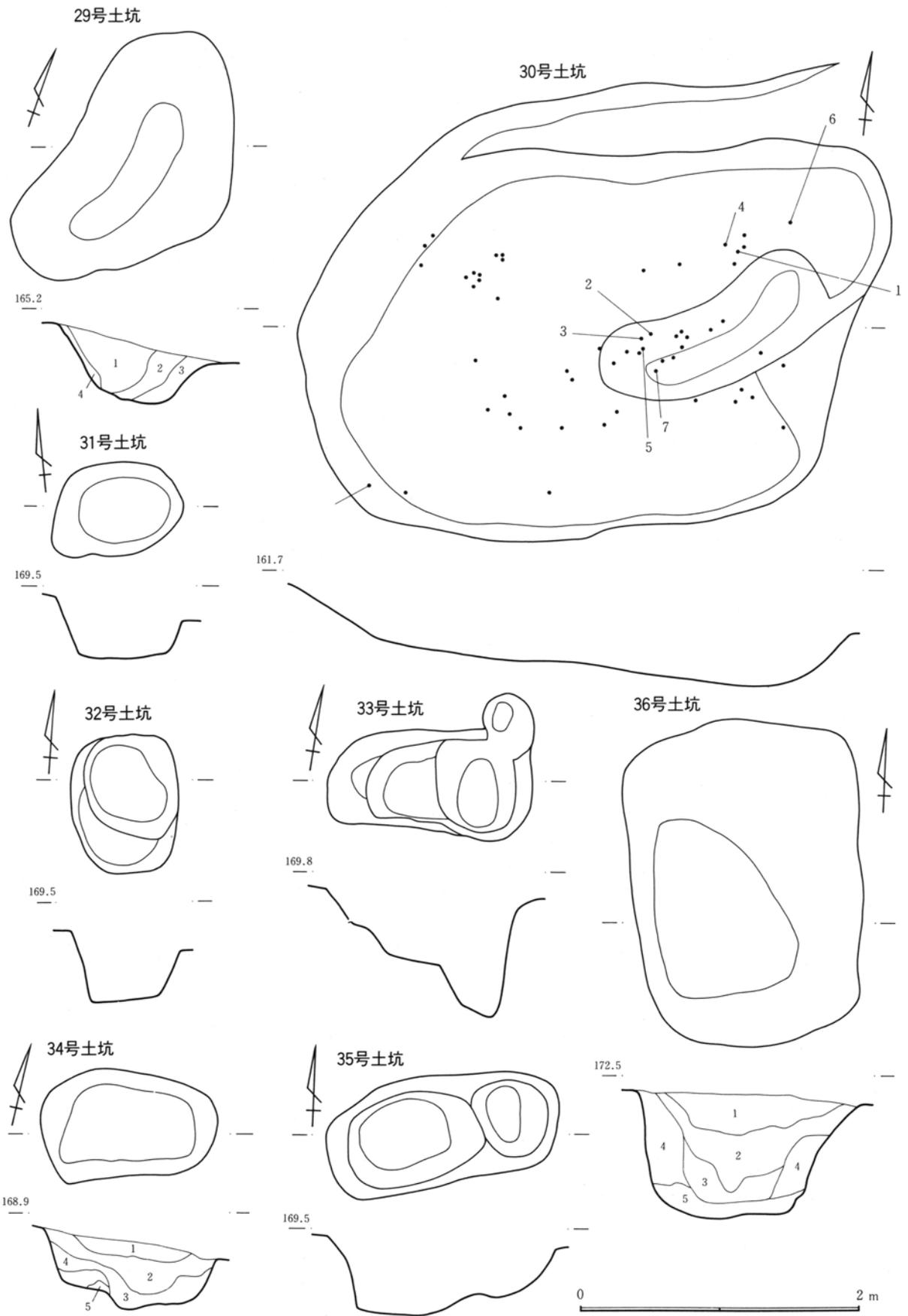
31号土坑 調査区東側C区斜面で検出された。32号・39号住と重複する。不整楕円状を呈し、坑底面は平坦で、壁の立ち上がりは良好である。時期・性格は不明である。

32号土坑 調査区東側C区斜面で検出された。38号住南で重複する。不整形だが壁の立ち上がりは良好である。時期・性格は不明である。

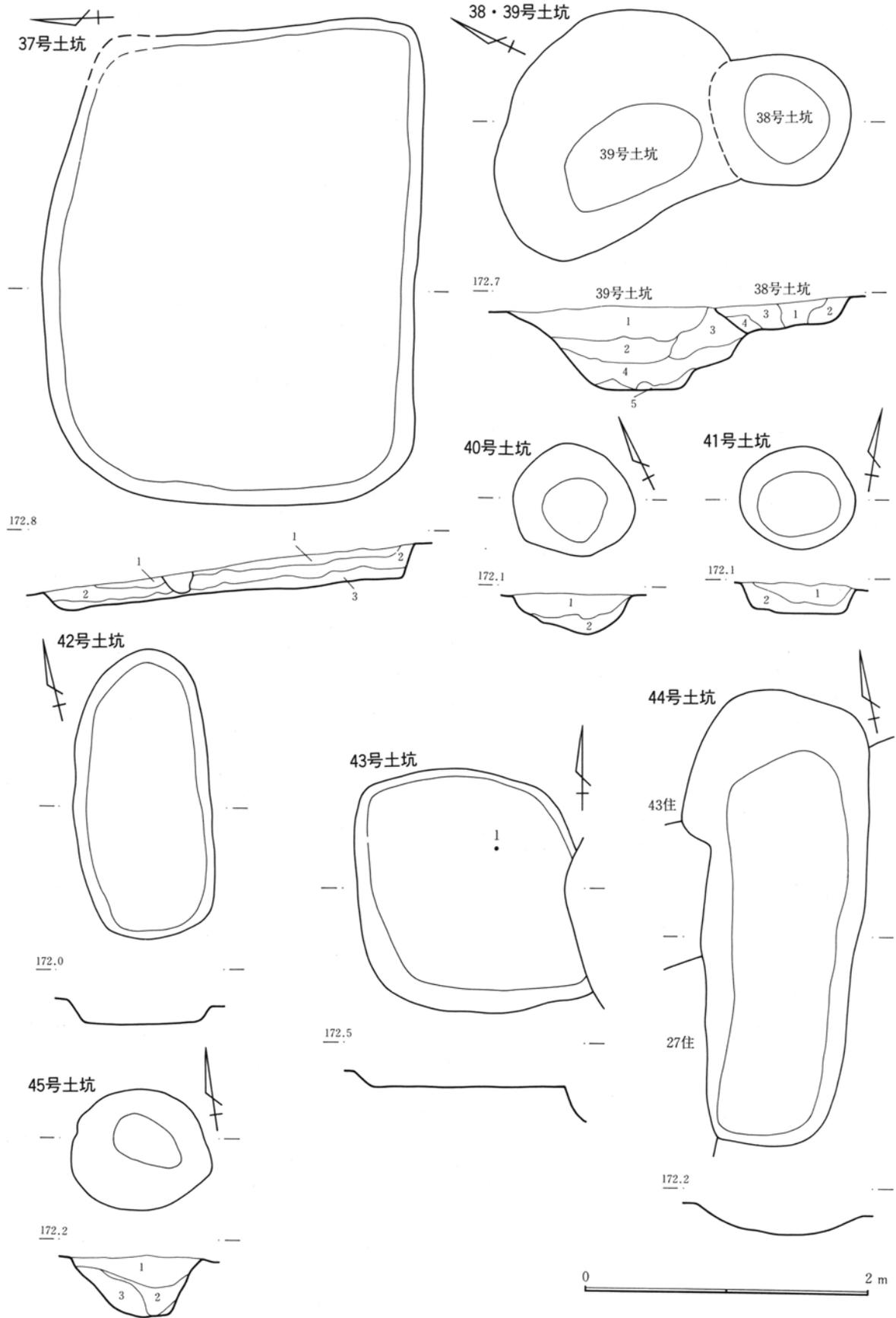
33号土坑 調査区東側C区斜面で18号住と重複して検出された。不整形で東に数回の段を有す。重複であろうか。時期・性格は不明である。

34号土坑 調査区東側C区斜面の38号住東に近接する。不整楕円状を呈し、坑底面は起伏がある。壁の立ち上がりは概ね良好である。埋土より奈良・平安時代の所産とした。墓壙か。

35号土坑 調査区東側C区斜面の32号住床で重複する。不整楕円状を呈すが重複の可能性はある。時期・性格は不明。

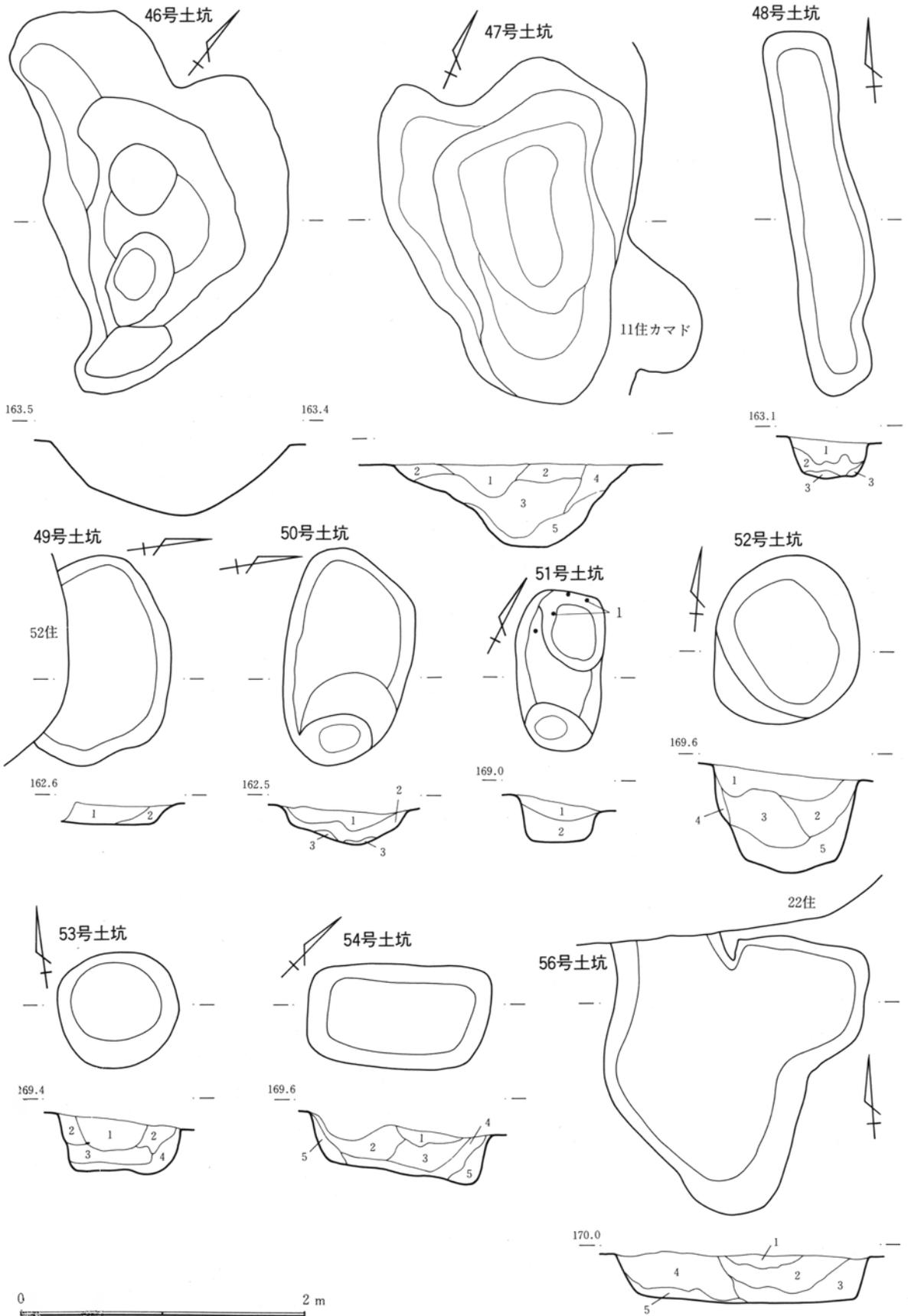


第286図 土坑(4)



第287图 土坑 (5)

第三章 検出された遺構と遺物



第288図 土坑 (6)

36号土坑 調査区中央北寄りのD区台地鞍部の43号住西に重複する。大型の不整形を呈し、深く掘り込みもしっかりしている。坑底面は凹凸を持つ。遺物は出土していないが、埋土より縄文時代の所産としたい。

37号土坑 調査区中央北寄りのD区台地鞍部に位置する。約3.4×2.4mの長方形を呈し、約20cmの深さを測る。坑底面は安定する。土師器細片を出土しており、時期は平安時代に比定されよう。竪穴状遺構であり、北東には25号住や26号住が近接する。

38・39号土坑 37号坑西に近接する。不整形土坑の重複である。両者とも埋土の様相から、奈良・平安時代と考えられる。性格は不明である。

40号土坑 D区台地鞍部に位置する。径80cm程の円形を呈し、皿状で壁の立ち上がりは弱い。埋土は奈良・平安時代の様相である。性格不明。

41号土坑 D区台地鞍部に位置する。径70～80cm程の円形を呈し、坑底面は平坦だが、壁の立ち上がりは弱い。埋土は奈良・平安時代の様相である。性格不明。

42号土坑 D区台地鞍部に位置する。長軸2m程の楕円形状を呈し、坑底面は平坦で浅い。時期は特定できないが墓壙であろうか。

43号土坑 D区台地鞍部の27号住西に重複する。不整形で壁の立ち上がりも極めて弱い。須恵器坏破片を出土する。平安時代の所産か。性格は不明。

44号土坑 D区台地鞍部の43号住南に重複する。不整形楕円形状を呈し、浅く皿状で壁の立ち上がりも弱い。近世の所産であろうか。貯蔵穴の可能性もある。

46号土坑 C区東斜面部の裾部下位で検出された。極めて不整形土坑で、坑底面・壁とも不安定である。埋土は均質で縄文時代の所産とした。埋土中出土の遺物は諸磯b式の破片である。

47号土坑 C区東斜面部の裾部下位11号住床下で検出された。極めて不整形土坑で、坑底面・壁とも不安定である。遺物は出土していないが埋土の様相から時期は縄文時代と考えた。

48号土坑 C区東斜面部の裾部下位の10号住と53号住の間に位置する。長軸2.5m程の長楕円状を呈し、坑底面は平坦で、壁の立ち上がりは良好である。土師器坏破片等を出土するが、埋土は近世の特徴を示す。貯蔵穴か。

49号土坑 C区東斜面部の裾部下位の52号住と重複する。不整形で浅く壁の立ち上がりも弱い。埋土から近世と考えた。性格は不明である。

50号土坑 C区東斜面部の裾部下位の52号住と近接する。不整形楕円状で皿状の断面形を呈し、壁の立ち上がりも弱い。埋土から近世と考えた。性格は不明である。

51号土坑 C区東斜面部の38号住北に近接する。不整形楕円形状を示すが重複遺構の可能性もある。出土遺物・埋土から奈良・平安時代と考えた。

52号土坑 C区東斜面部の31号住北に近接する。不整形で坑底面は凹凸を持ち、壁の立ち上がりは良好である。埋土は縄文時代の特徴である。貯蔵穴か。

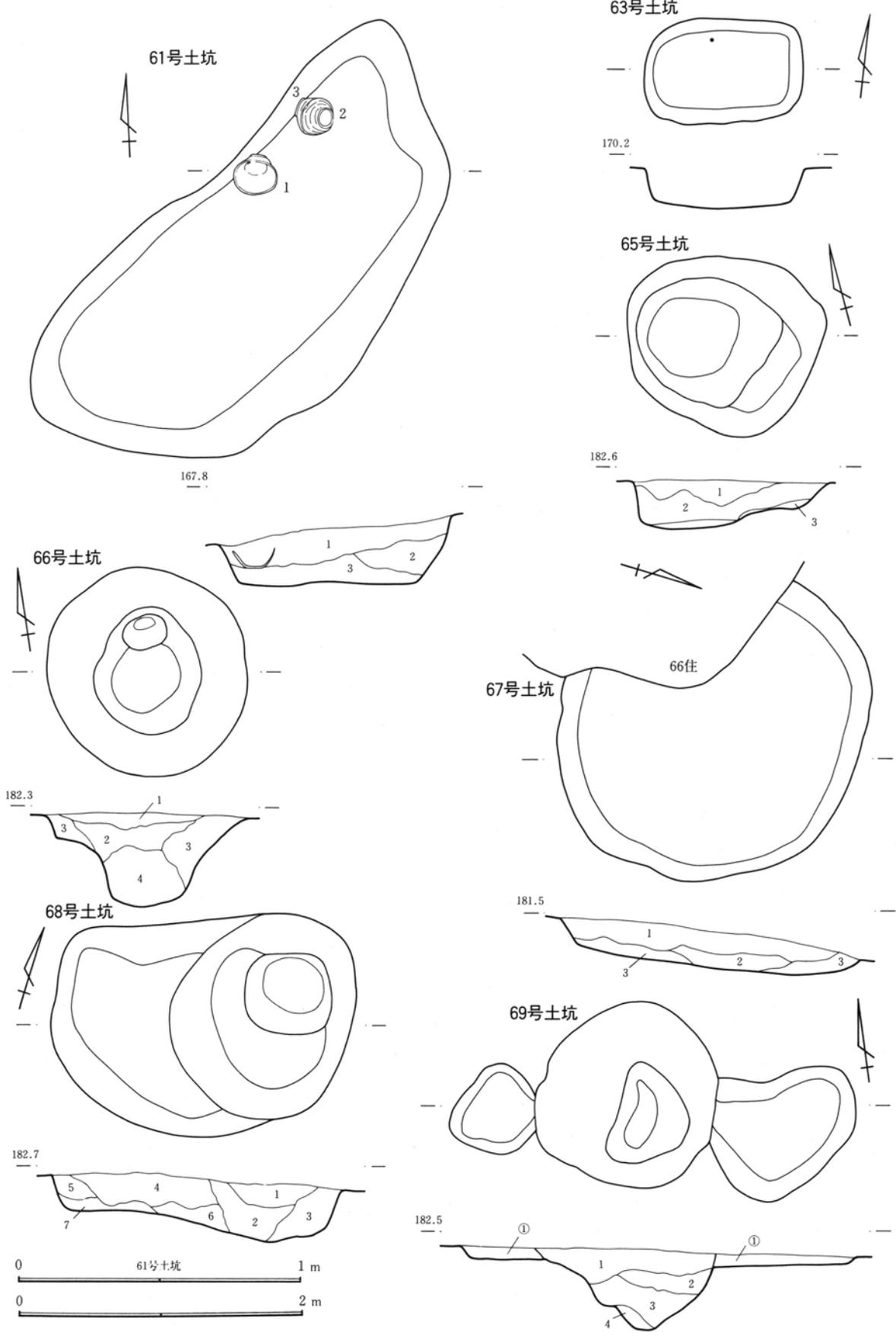
53号土坑 C区東斜面部の19号住南に近接する。径80cm程の円形を呈す。坑底面は凹凸を持つ。壁の立ち上がりは良好である。埋土の特徴は縄文時代に比定されよう。貯蔵穴か。

54号土坑 C区東斜面部の22号住東に近接する。小型の方形を呈し、坑底面は東へ傾斜する。壁の立ち上がりも良好である。埋土は奈良・平安時代の特徴である。墓壙か。

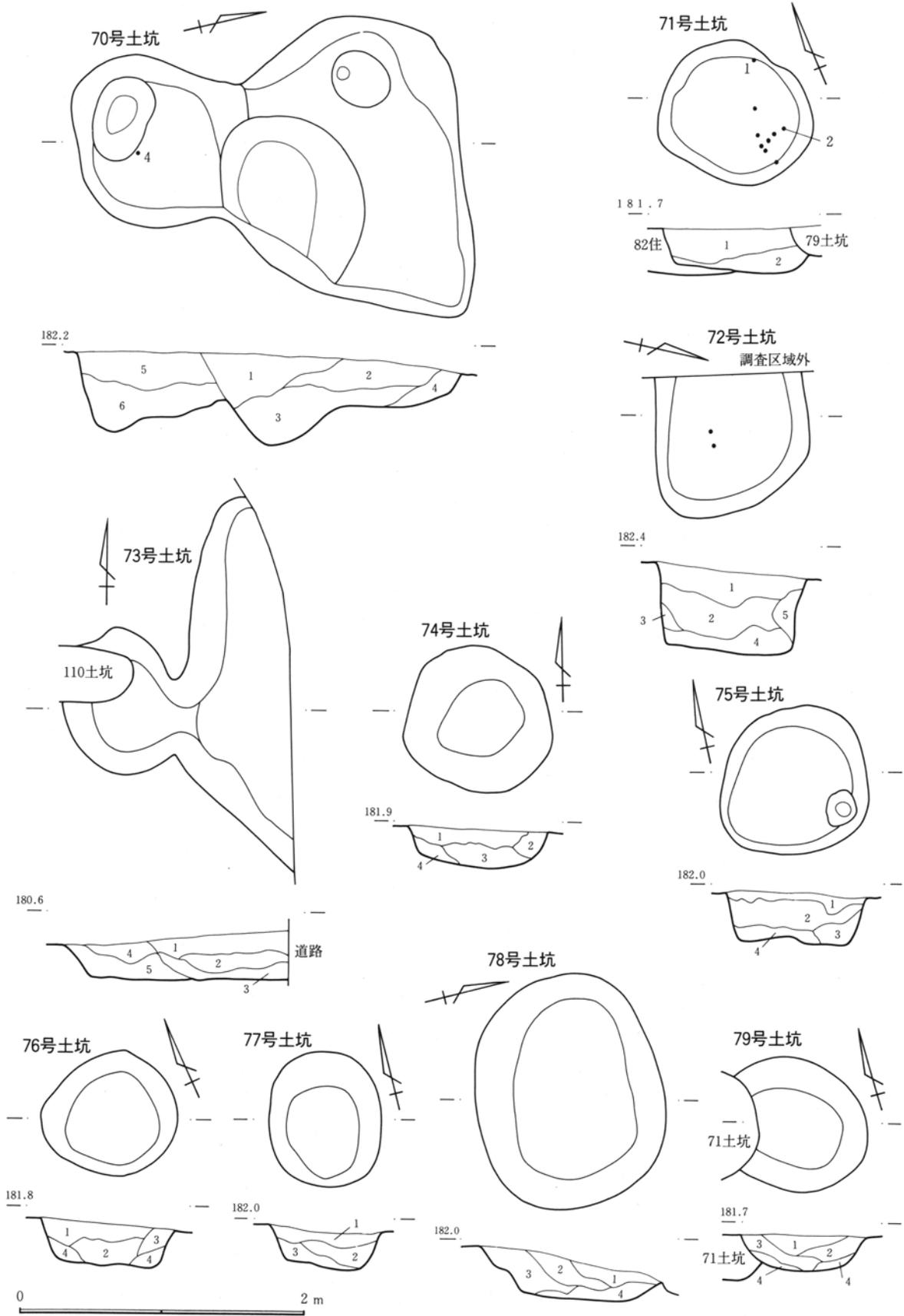
56号土坑 D区東斜面部の22号住南に接す。不整形で土層から2基の重複と捉えられる。埋土は奈良・平安時代の特徴を示す。

61号土坑 D区西斜面部で孤立した状態で検出された。大型の不整形を呈し、坑底面は平坦で、壁の立ち上がりは良好である。底面より浮いて須恵器壙3を出土する。平安時代の墓壙であろう。

63号土坑 D区東斜面部の23号住南東に位置する。長軸約1.1m程の方形を呈し、坑底面は平坦で壁の立ち上がりも良好である。北壁際より暗紋土師器坏1を出土している。奈良時代の所産であろうか。

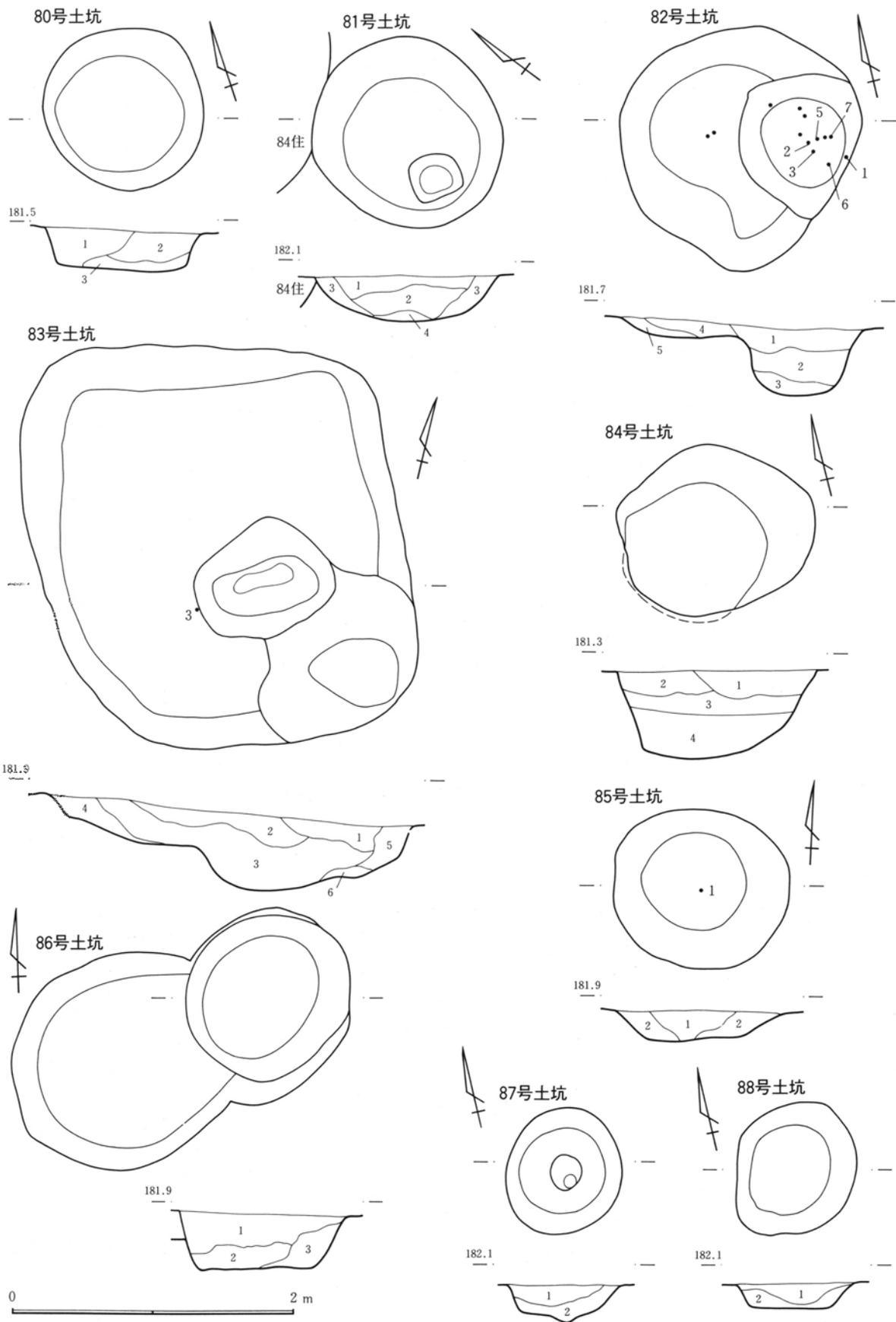


第289図 土坑 (7)



第290圖 土坑 (8)

第三章 検出された遺構と遺物



第291図 土坑(9)

65号土坑 D区台地頂部で検出された。不整形で西壁が緩やかである。坑底面は凹凸を持つ。埋土の特徴から、縄文時代に比定されよう。

66号土坑 D区台地頂部で検出された。径約1.4m程の円形を呈し、壁中に段を有す。50cmの深さで良好な壁立ち上がりである。諸磯b式の土器片を出土する。遺物・埋土から縄文時代前期の所産と考えた。貯蔵穴かあるいは墓壙転用とも捉え得る。

67号土坑 D区台地頂部で検出された。67号住北壁に重複する。大型の円形を呈し、浅く立ち上がりも弱い。坑底面は北東へ傾斜する。埋土から縄文時代の所産と考えた。

68号土坑 D区台地頂部で検出された。不整形を呈するが2基以上の重複の可能性もある。埋土中より諸磯b式の底部片が出土している。縄文時代の所産とした。性格は不明である。

69号土坑 D区台地頂部で検出された。3基の土坑が連なる。中位の土坑のみが有機的な所産である。埋土からは縄文時代に比定されよう。

70号土坑 D区台地頂部で検出された。2基の土坑の重複である。両者とも縄文時代の埋土の特徴を示す。縄文中期初頭期と後半期の土器片が混在する。

71号土坑 D区台地頂部で82号住・79号坑と重複して検出された。径1m前後の不整形円形を呈す。埋土は縄文時代の特徴を示し、遺物も加曾利EⅢ式の土器片を見る。墓壙か。

72号土坑 D区台地頂部で検出された。不整形だが掘り込みはしっかりしており、坑底面は平坦である。埋土・遺物とも縄文時代の所産であり、諸磯b式併行期の土器片が出土している。墓壙と考えたい。

73号土坑 D区台地頂部で検出された。2基以上の重複である。埋土の特徴は縄文時代に比定されるが性格等は不明である。

74号土坑 D区台地頂部で検出された。径1m程の不整形円形を呈す。壁はやや緩やかな立ち上がりを呈し、坑底面は皿状である。埋土の特徴は縄文時代に比定される。墓壙か。

75号土坑 D区台地頂部で検出された。径1m程の不整形円形を呈し、坑底面は起伏がある。壁の立ち上がりは良好である。埋土は縄文時代に比定される。墓壙か。

76号土坑 D区台地頂部で検出された。径90cm程の不整形円形を呈し、坑底面は凹凸を持つ。壁の立ち上がりは良好である。埋土は縄文時代の特徴を示す。墓壙か。

77号土坑 D区台地頂部で検出された。径90cm程の不整形円形を呈し、坑底面は東へ傾斜する。壁の立ち上がりはやや緩やかである。埋土は縄文時代の特徴である。墓壙か。

78号土坑 D区台地頂部で検出された。不整形円状を呈す。坑底面は北東へ傾斜し凹凸を持つ。壁の立ち上がりは緩やかで弱い。中期初頭期の土器片を出土する。墓壙と考えたい。

79号土坑 D区台地頂部で検出された。71号坑と重複する。小型の不整形円状を呈す。坑底面は皿状で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は縄文時代の特徴を示す。

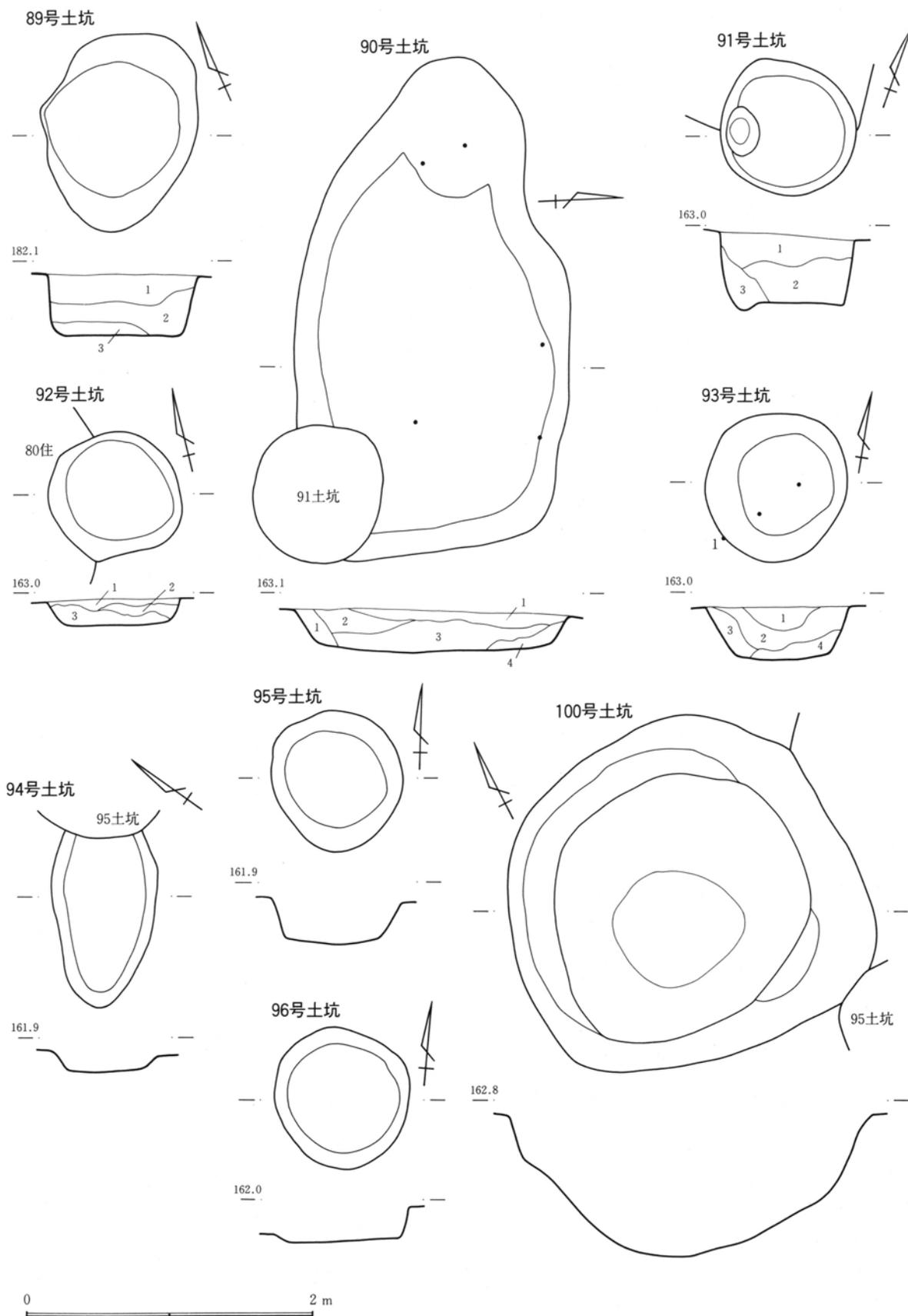
80号土坑 D区台地頂部で検出された。径1.1m程の円形を呈す。坑底面は平坦で壁の立ち上がりも良好である。前期終末～中期初頭の土器片を出土する。墓壙と考えたい。

81号土坑 D区台地頂部で検出された。径1.3m前後の不整形円形を呈し、坑底面は皿状で壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は縄文時代を示す。

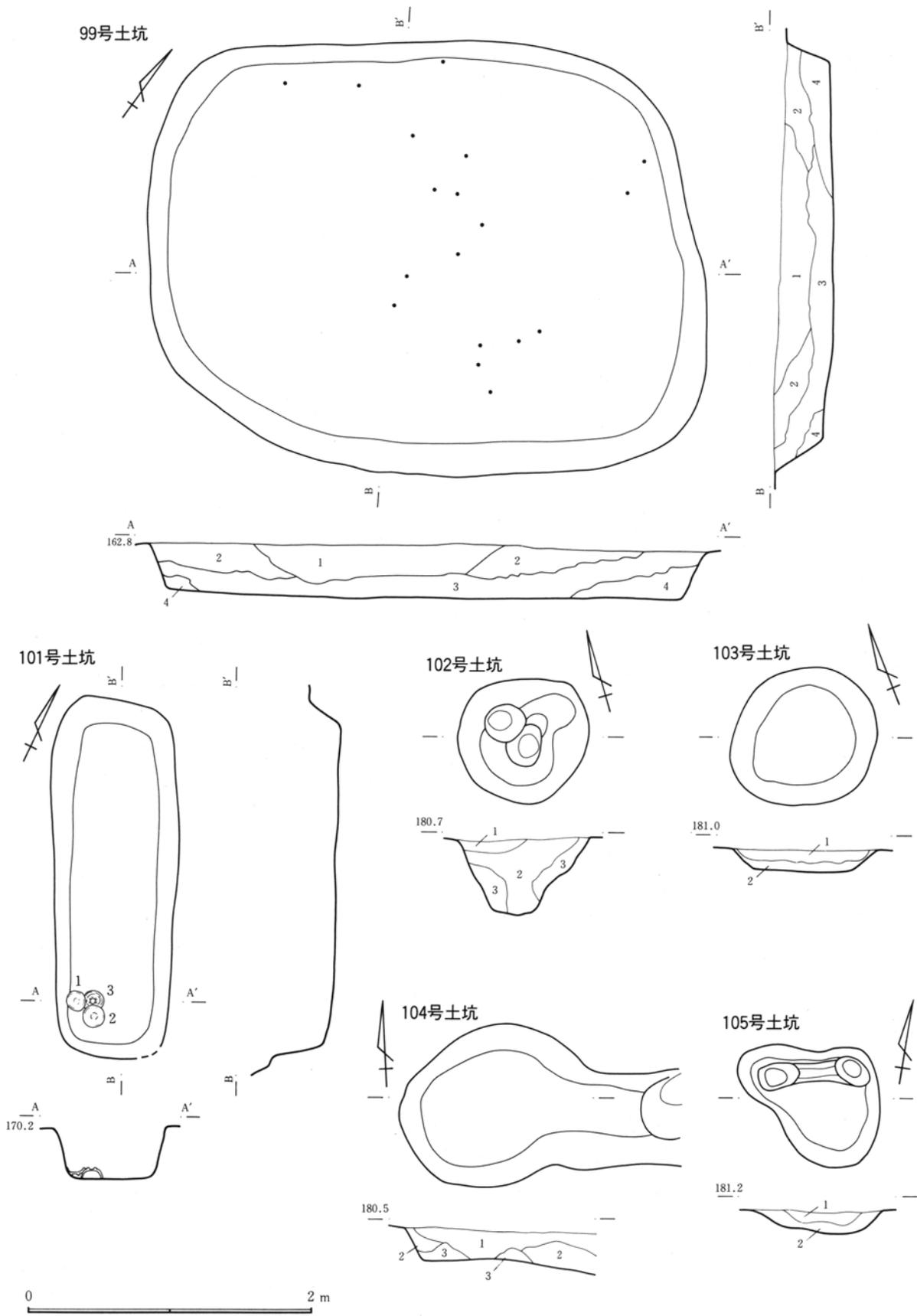
82号土坑 D区台地頂部で検出された。2基の重複である。東側の小型の土坑が有機的で、遺物は諸磯c式～中期初頭期の土器片を出土する。墓壙か。

83号土坑 D区台地頂部で検出された。大型の不整形円形を呈す。坑底面は不安定で壁の立ち上がりは緩やかである。諸磯c式の土器片を出土するが、性格は不明である。

84号土坑 D区台地頂部で検出された。不整形円形を呈す。南東側壁が若干袋状を呈す。中期初頭期の土器片を出土する。埋土も縄文時代の所産である。墓壙と考えた。

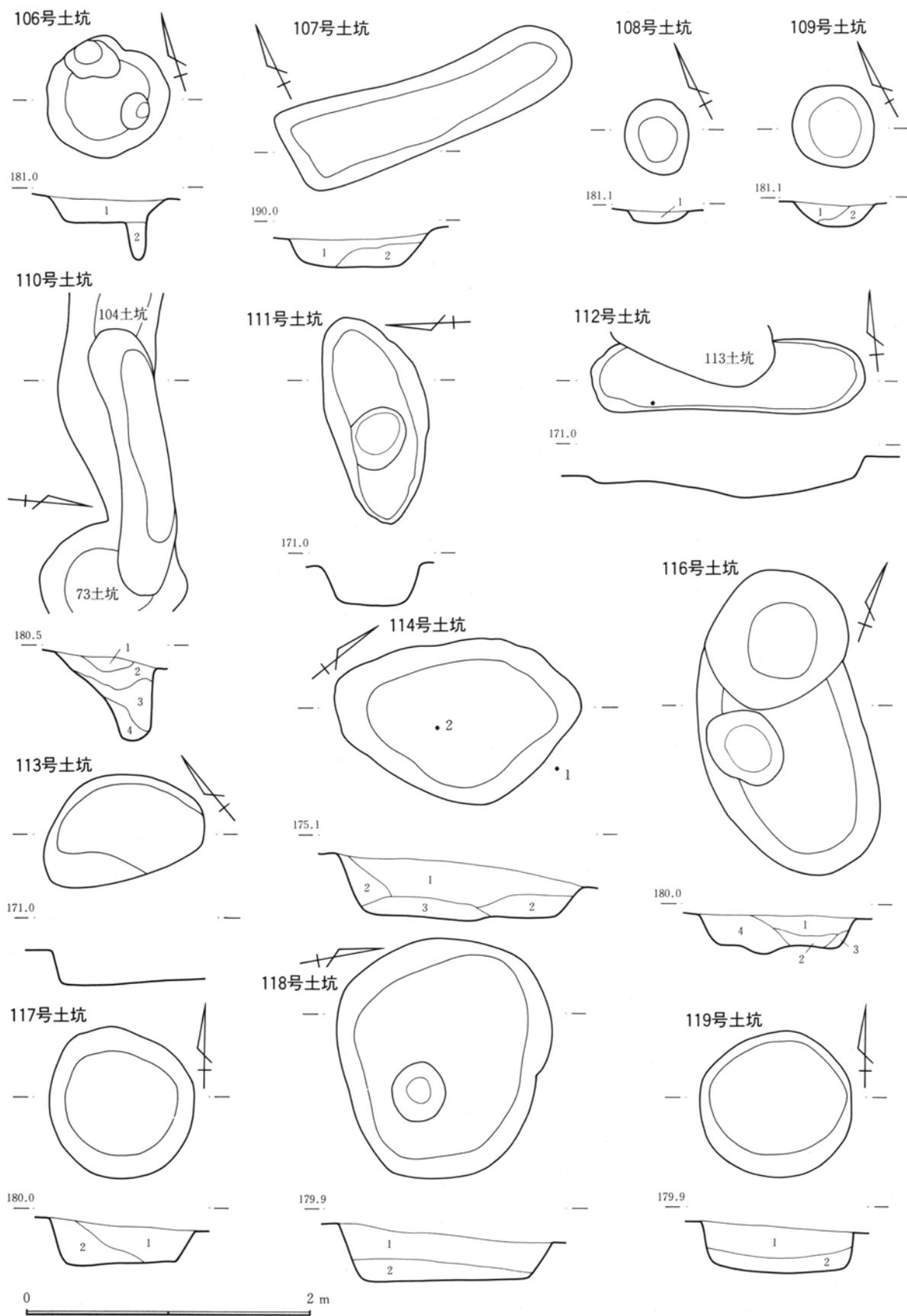


第292図 土坑 (10)



第293图 土坑 (11)

第三章 検出された遺構と遺物



第294図 土坑 (12)

85号土坑 D区台地頂部で検出された。径約1.2m程の円形を呈す。やや浅く壁の立ち上がりも緩やかである。中期初頭の土器片を出土する。墓壙か。

86号土坑 D区台地頂部で検出された。2基の重複であるが、東側の径約1m程の円形土坑が有機的である。前期末葉～中期初頭の土器片を出土する。墓壙と考えた。

87号土坑 D区台地頂部で検出された。径約80cm程度の小型円形を呈す。中位に浅い小ピットを開ける。縄文時代の埋土特徴を示すが、性格は不明である。

88号土坑 D区台地頂部で検出された。径約90cm程の不整円形を呈す。坑底面は平坦だが立ち上がりはやや弱い。埋土は縄文時代の特徴を示す。

89号土坑 D区台地頂部で検出された。不整形の平面形だが、坑底面は平坦で壁も直立状に立ち上がる。前期終末に比定される土器片の出土を見る。墓壙か。

90号土坑 C区東斜面部の裾部下位で検出された。不整楕円状を呈す。坑底面は比較的平坦だが立ち上がりはやや弱い。縄文時代前期後半の土器片を出土するが細片のため図示に至らなかった。

91号土坑 C区東斜面部の裾部下位で検出された。90号坑と重複する。径約90cm前後の円形を呈す。壁の立ち上がりも良好で底面は平坦である。埋土は縄文時代に比定される。墓壙であろうか。

92号土坑 C区東斜面部の裾部下位で検出された。80号住と重複する。径約90cm程の不整円形を呈し、坑底面は平坦で、壁の立ち上がりはやや緩やかである。遺物と埋土から縄文時代の所産と考えた。墓壙か。

93号土坑 C区東斜面部の裾部下位で検出された。径約1m前後の円形を呈し、坑底面は平坦ながら壁はやや緩やかである。須恵器坏の出土を見る。平安時代の所産であろうか。

94号土坑 C区東斜面部の裾部下位で検出された。不整楕円状を呈し、95号坑と重複する。浅く皿状の断面形を呈し、立ち上がりも弱い。時期・性格は不明である。

95号土坑 C区東斜面部の裾部下位で検出された。径約90cm前後の円形を呈し、坑底面もほぼ平坦で壁の立ち上がりも良好である。配置から縄文時代と考えたが、確証的ではない。

96号土坑 C区東斜面部の裾部下位で検出された。径約1m程の円形を呈す。壁は西壁の遺存が悪く、弱い立ち上がりである。配置から縄文時代と考えたが、確証性に乏しい。

99号土坑 C区東斜面部の裾部下位で検出された。やや西に位置する。住居跡として調査したが、床面・ピットが検出されず、大型の土坑とした。遺物は中期初頭の土器片を見るが図示し得たのは1点のみである。縄文時代中期初頭の所産であろう。竪穴状遺構と考えた。

100号土坑 C区東斜面部の裾部下位で検出された。80号住と重複する。大型の不整円形を呈し、坑底面は凹状で壁は傾斜を有す。埋土は均質土で、縄文時代の特徴を示すが、性格は不明である。

101号土坑 D区西斜面部の87号住と重複して検出された。主軸を南北に設け、長軸約2.5m程の長方形を呈す。坑底面は平坦で壁の立ち上がりも良好である。南西隅に3個体の須恵器壺がまとまって出土する。平安時代の墓壙と考えられる。

102号土坑 D区台地頂部に位置する。不整円形を呈し、坑底面は起伏に富む。時期・性格は不明である。

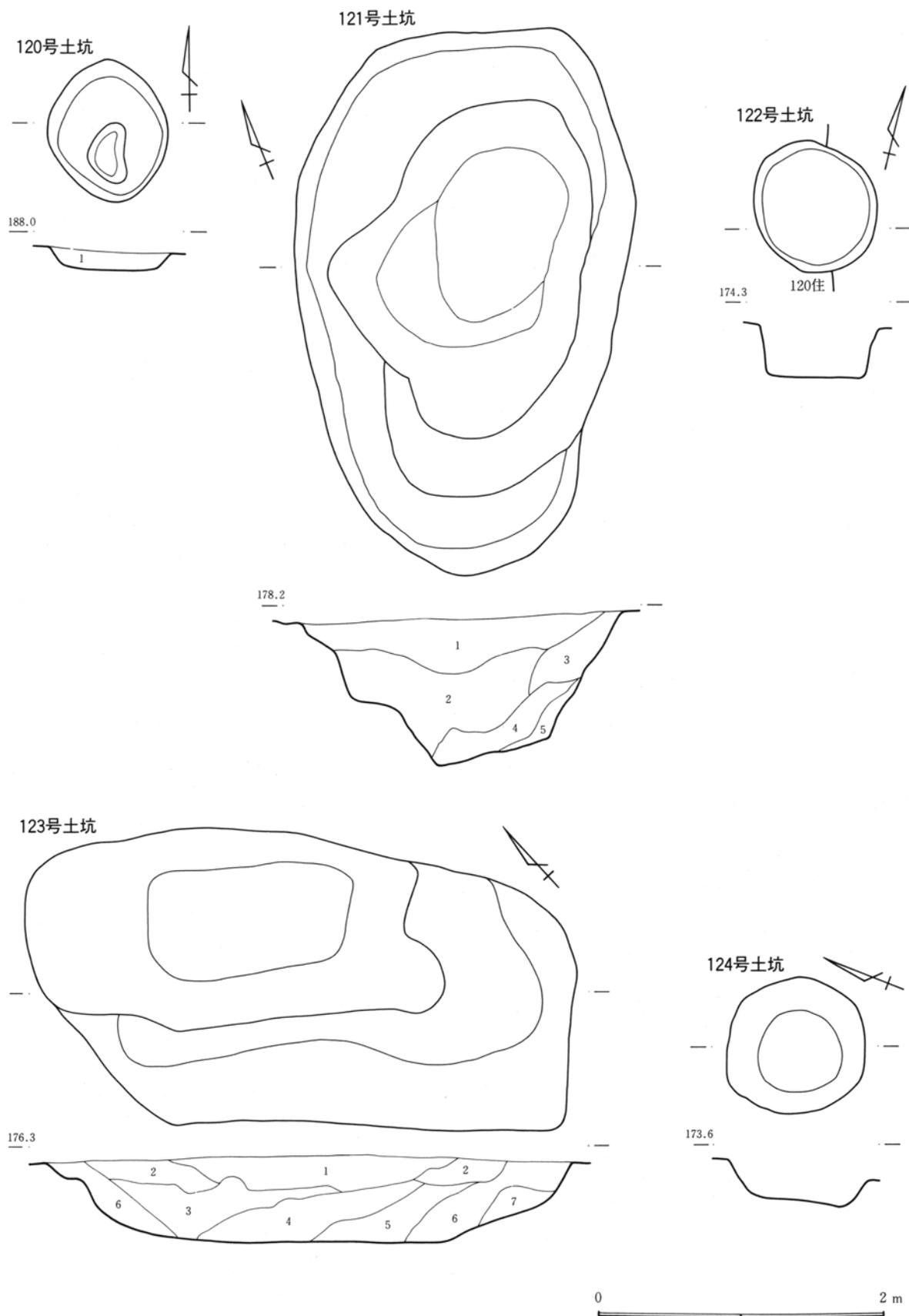
103号土坑 D区台地頂部に位置する。不整円形を呈し、壁の立ち上がりは弱い。埋土の特徴から縄文時代と考えた。性格は不明。

104号土坑 D区台地頂部に位置する。不整形土坑で有機的な所産と考え難い。須恵器坏・碗を出土する。

105号土坑 D区台地頂部に位置する。不整形土坑で有機的な所産とは考え難い。鉄製品が出土している。

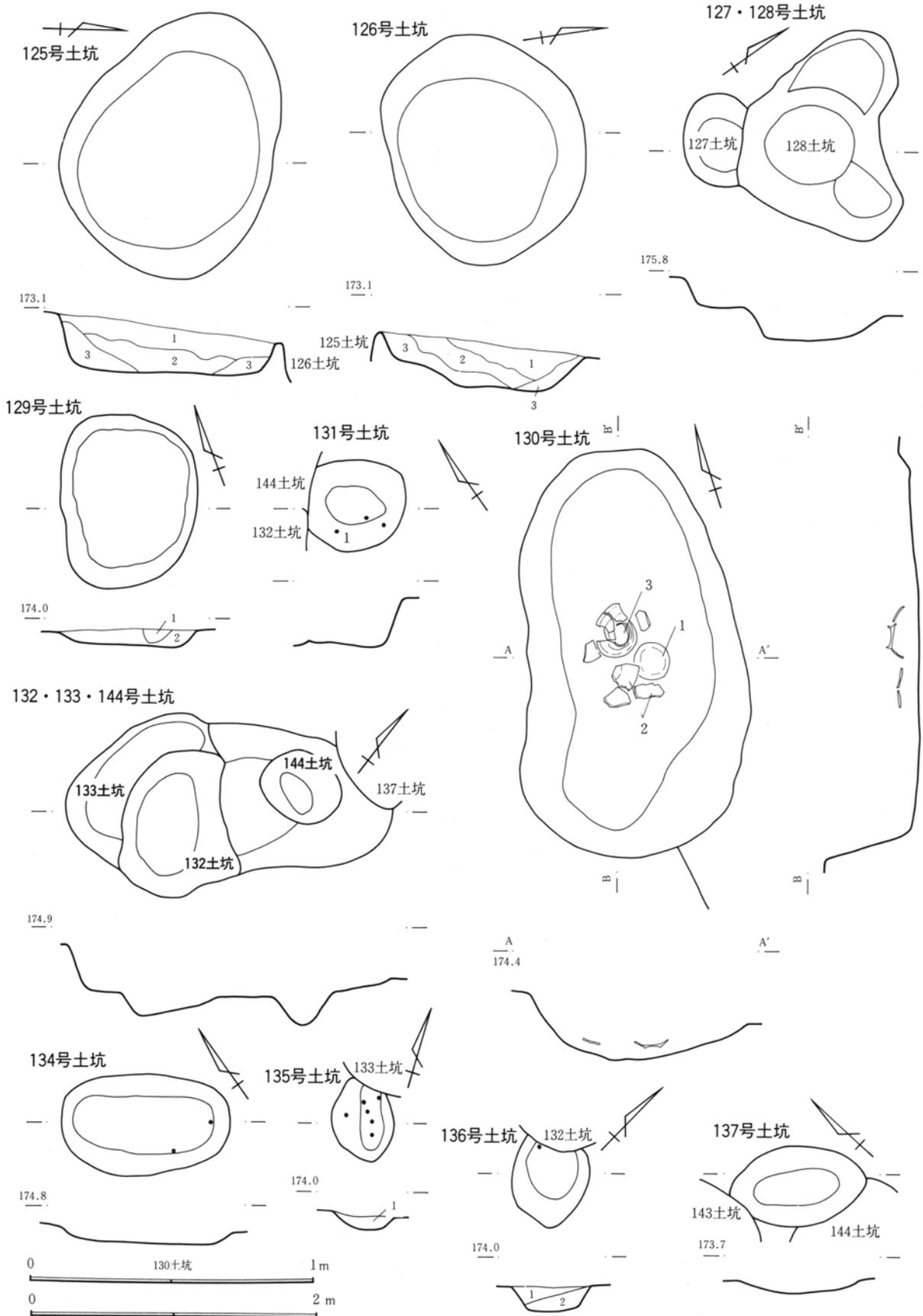
106号土坑 D区台地頂部に位置する。不整円形を呈し、壁の立ち上がりはやや弱い。埋土から近世～近代の所産と考えた。性格は不明。

107号土坑 D区台地頂部で検出された。長不整楕円状を呈し、壁の立ち上がりも良好である。埋土から近世～近代の所産とした。貯蔵穴か。



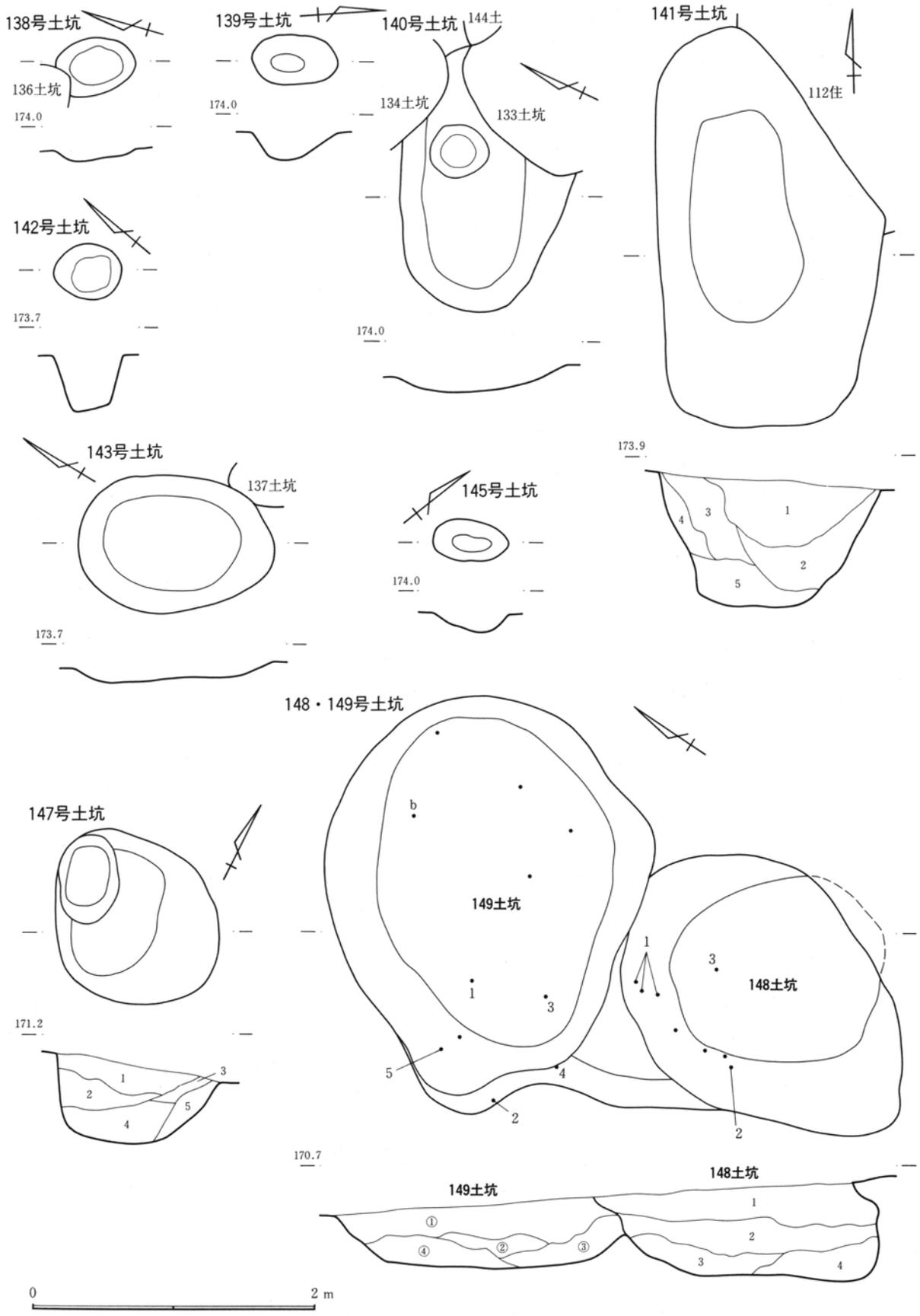
第295図 土坑 (13)

第6節 土坑



第296圖 土坑 (14)

第三章 検出された遺構と遺物



第297図 土坑 (15)

108号・109号土坑 D区台地頂部に位置する。小型の不整円形を呈する浅い土坑で、皿状の断面形を示す。近世～近代の所産か。性格は不明。

110号土坑 D区台地頂部に位置する。73号坑・104号坑と重複する。溝状の不整形土坑で、有機的所産とは考え難い。

111号土坑 D区台地鞍部の56号住東で検出された。不整楕円状を呈し、壁の立ち上がりはしっかりしている。時期・性格は不明である。

112号土坑 D区台地鞍部の55号住北で検出された。長楕円状を呈し、浅く立ち上がりも弱い。時期・性格は不明である。

113号土坑 D区台地鞍部の55号住北で検出された。不整形で、有機的な所産とは捉え難い。

114号土坑 D区台地鞍部の55号住北で検出された。不整形だが坑底面は安定し壁の立ち上がりも良好である。須恵器坏・土師器甕を出土する。性格は不明。

116号土坑 D区台地頂部で検出された。2基以上の重複か。埋土は縄文時代の特徴を示す。性格は不明。

117号土坑 D区台地頂部で検出された。径1m程の円形を呈し、坑底面は平坦である。壁の立ち上がりも良好である。埋土は縄文時代の特徴を示す。

118号土坑 D区台地頂部で検出された。大型の不整円形を呈し、坑底面は平坦である。壁の立ち上がりは良好。埋土は縄文時代に比定される。

119号土坑 D区台地頂部で検出された。径1m程の円形を呈し、坑底面は平坦である。壁は直立状の立ち上がりを見せる。埋土は縄文時代に比定される

120号土坑 D区台地頂部で検出された。不整円形を呈し、浅く壁の立ち上がりもやや弱い。時期・性格は不明である。

121号土坑 D区台地頂部際で単独で検出された。不整楕円状を呈し、深く、坑底面・壁は不安定である。埋土は均質で縄文時代の所産だが性格は不明である。前期終末～中期初頭の土器片が出土している。

122号土坑 C区東斜面部の122号住と重複する。径90cm程度の小型円形を呈し、坑底面～壁は良好な掘り込みを示す。遺物は磁器碗や播り鉢片が出土する。

123号土坑 D区台地頂部際で単独で検出された。不整楕円状を呈し、坑底面及び壁は不安定さを残す。埋土は均質で縄文時代の所産だが性格は不明である。

124号土坑 C区南西の東斜面部の2号配石と重複する。径90cm程の円形を呈するが、壁の立ち上がりはやや弱い。時期・性格とも不明である

125号・126号土坑 D区東斜面部の112号住東に位置する。両者とも不整形の土坑で、隣合う。125号坑底面は平坦で126号坑底面は皿状を呈す。埋土は奈良・平安時代の特徴を示す。性格は不明である。

127号・128号土坑 C区東斜面部の2号掘立柱建物跡西に位置する。不整形の重複土坑で、坑底面・壁とも判然としない。時期・性格とも不明である。

129号土坑 C区東斜面部2号掘立柱建物跡の北西に位置する。不整円形を呈し、浅く壁の立ち上がりも弱い。埋土は奈良・平安時代の特徴を示す。

130号土坑 D区台地鞍部の110号住西壁に重複する。不整長楕円状を呈し、坑底面は狭く平坦である。壁の立ち上がりは概ね良好である。底面よりやや浮いて須恵器碗2・灰釉陶器皿1が出土している。墓壙と考えた。

131号～140号・142号～145号土坑 D区台地鞍部の110号住北東で群をなす。重複状態で検出されている。

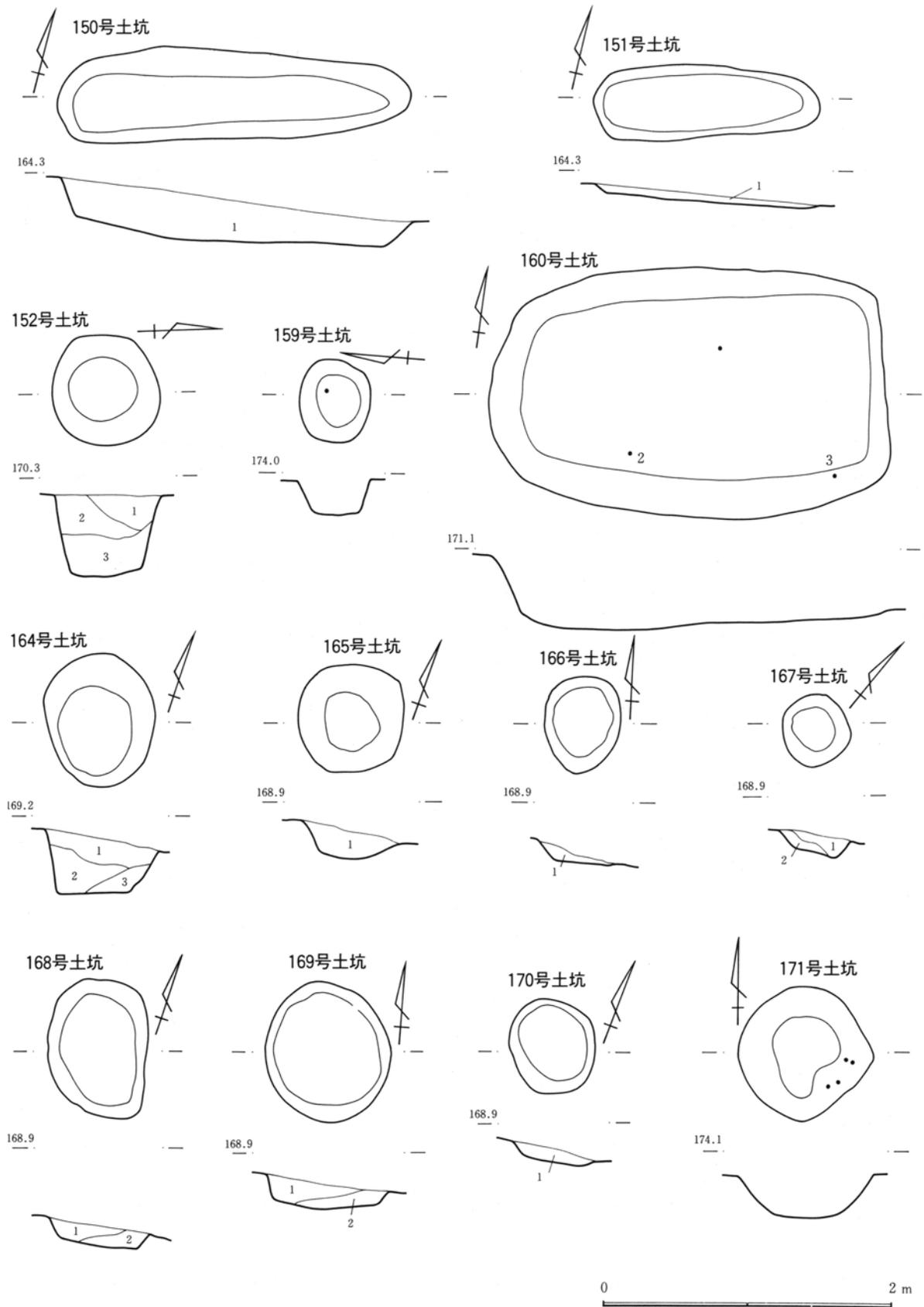
いずれも小型で不整形の小型土坑・ピットであり、状態の良好な土坑ではない。埋土は奈良・平安時代の特徴を呈していたが、性格は不明である。有機的な所産ではないと捉えた。

141号土坑 D区台地鞍部の112号住に重複する。大型の不整形を呈し、坑底面は凹凸を持つ。壁はしっかりした掘り込みである。埋土は均質で縄文時代の特徴を示す。

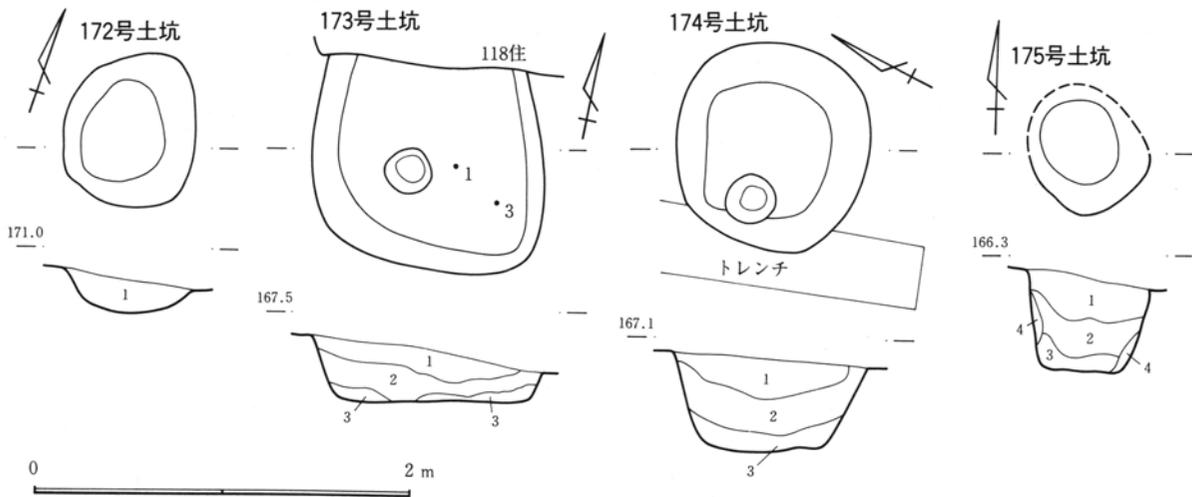
147号土坑 C区南西の東斜面部の3号掘立柱建物跡北に位置する。不整円形を呈し、壁の立ち上がりは良好である。埋土は奈良・平安時代の特徴を示す。

148号土坑 C区南西の東斜面部の3号掘立柱建物跡北東に位置する。やや大型の不整形を呈し、壁の立ち上がりは袋状になる箇所もある。土師器坏・須恵器坏・碗、さらに鉄斧・鉄釘の出土を見る。

第三章 検出された遺構と遺物



第298図 土坑(16)



第299図 土 坑 (17)

149号土坑 C区南西の東斜面部で148号坑北に接する。大型の不整形を呈し、壁はやや緩やかである。須恵器坏・埴・甕体部破片を出土する。

150号・151号土坑 C区東斜面部裾部で検出された。長楕円状の平面形で、浅く立ち上がりも弱い。埋土は近世～近代の所産である。貯蔵穴か

152号土坑 C区南の東斜面の131号・132号住に接する。小型円形を呈し、壁の立ち上がりも良好である。埋土は奈良・平安時代の特徴である。

159号土坑 D区台地鞍部の110号住東に位置する。小型円形のピット状土坑で、壁はしっかりしている。時期・性格は不明。

160号土坑 C区南西の120号住北に位置する。大型不整形の土坑で東壁を斜面のため流失する。坑底面は平坦である。土師器坏1・須恵器坏2を出土する。性格は不明。

164号～170号土坑 D区西斜面の90号住東で群をなす。いずれも小型不整形のピット状土坑で、配置等に規則性が看取できない。埋土は、奈良・平安時代の所産と思われるが、性格は不明である。

171号土坑 D区台地鞍部の110号住北東で群をなす131号坑等と伴に検出された。不整形で壁の立ち上がりはやや緩やかである。土師器・須恵器小破片や土錘が出土している。

172号土坑 C区南西の123号住西で検出された。小型の不整形円形を呈し壁の立ち上がりは緩やかである。時期・性格ともに不明である。

173号土坑 C区南西の東斜面部118号住南に重複する。小型の方形を基調としており、平坦な底面に小ピットを開ける。壁の立ち上がりは良好である。土師器坏1・須恵器蓋1・紡錘車1を出土する。埋土も奈良・平安時代の特徴を有す。

174号土坑 C区南西の東斜面部118号住南に接する。不整形円形を呈し、坑底面には小ピットを開ける。壁の立ち上がりは良好である。埋土は奈良・平安時代の特徴を示す。

175号土坑 C区南西の東斜面部で単独で検出された。小型円形のピット状の土坑で、掘り込みもしっかりしている。埋土は奈良・平安時代の特徴を示すが性格は不明である。

第三章 検出された遺構と遺物

第256表 土坑計測表

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
2号土坑	Bxy-23・24Gr	不整形	3.32×3.42×0.27
土層註	1 暗褐色土 ローム塊の班状堆積 2 〃 軟質 3 黄褐色土 ローム塊・褐色土塊を含む埋土 4 〃 ローム塊を主体とする埋土 5 〃 硬く締まる。埋土 6 明褐色土 褐色土塊を多く含む。埋土 7 〃 小型の褐色土塊を含む。埋土 8 黄褐色土 ローム塊を主体とする。埋土		
3号土坑	By-23・Ca-23Gr	楕円形	0.98×0.87×0.15
土層註	1 暗褐色土 大型のローム塊を含む 2 褐色土 ローム塊の班状堆積 3 〃 ローム粒主体 4 〃 ローム塊主体		
4号土坑	By-24・Ca-24Gr	楕円形	0.90×0.85×0.16
土層註	1 黒褐色土 暗褐色土塊を含む 2 鈍褐色土 ローム粒主体。塊状の堆積 3 黒褐色土 ローム粒少量含む 4 暗褐色土 小型のローム塊を少量含む 5 黄褐色土 ローム塊 6 暗褐色土 ローム粒を少量含む		
5号土坑	Bx-22Gr	不整形	2.43×1.45×0.27
土層註	1 黒褐色土 暗褐色土塊の班状堆積 2 暗褐色土 均質。締り良好 3 〃 暗い。黒褐色土塊を含む 4 〃 ローム塊を少量含む 5 〃 明るい。ローム塊を多く含む 6 〃 均質。明るい。ローム粒を少量含む 7 〃 均質。ローム塊の班状堆積 8 黄褐色土 ローム塊を主体とする		
6号土坑	By-22Gr	楕円形	1.13×0.73×0.24
土層註	1 暗褐色土 ローム粒を多く含む。締りは乏しい 2 〃 ローム塊を多く含む。締りは乏しい		
7号土坑	Ce-24Gr	楕円形	1.02×0.83×0.35
土層註	1 鈍褐色土 褐色土塊との班状堆積。ローム粒含む 2 〃 褐色土塊とローム塊の班状堆積 3 黄褐色土 ローム塊を主体とする。やや軟質		

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
8号土坑	Cd-23・24Gr	楕円形	1.00×0.72×0.17
土層註	1 暗褐色土 褐色土塊との班状堆積。炭化物を含む 2 鈍褐色土 ローム粒を多く含む		
9号土坑	Cd-25Gr	楕円形	1.13×0.97×0.12
土層註	1 暗褐色土 均質。白色粒を含む 2 〃 やや明るい。ローム粒を少量含む		
10号土坑	Ce-25Gr	円形	1.11×0.97×0.18
土層註	1 暗褐色土 均質。鈍褐色土塊との班状堆積 2 〃 均質。褐色土塊との班状堆積		
11号土坑	Ce-25・26Gr	不整形	2.78×1.16×0.48
土層註	1 鈍褐色土 褐色土塊・炭化物を含む 2 黄褐色土 ローム粒を主体とする 3 〃 ローム塊を主体とする 4 〃 大型のローム塊を主体とする		
12号土坑	Cde-26Gr	楕円形	1.28×1.18×0.53
土層註	1 褐色土 大型のローム塊を含み、締りは乏しい 2 暗褐色土 ローム粒を多く含む。締りは乏しい 3 黄褐色土 ローム塊を主体とする 4 〃 やや暗い。ローム塊を主体とする 5 暗褐色土 ローム塊・大型の炭化物を含む 6 〃 ローム小塊を多く含む。締りは乏しい 7 黄褐色土 ローム塊 8 〃 ローム塊を主体とする。締りは乏しい		
13号土坑	Cb-24Gr	不整形	0.77×0.61×0.20
土層註	1 褐色土 ローム粒・白色粒を含む 2 〃 ローム塊を含む 3 黄褐色土 ローム塊を主体とする		
14号土坑	Cef-24Gr	長方形	1.00×0.57×0.33
土層註	1 褐色土 ローム粒を多量に含む。締りは乏しい		
15号土坑	Bqr-18Gr 3号住居跡	楕円形	1.31×0.82×0.43
土層註	1 鈍褐色土 均質。暗褐色土塊との班状堆積 2 褐色土 均質。ローム塊を少量含む 3 〃 均質。ローム粒を少量含む		
16号土坑	Cb-24Gr	楕円形	0.84×0.58×0.19

第6節 土 坑

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
17号土坑	Ced-22Gr	不整形	2.66×1.00×0.40
18号土坑	Cef-23Gr	長方形	1.21×0.56×0.47
土層註	1 黒褐色土 ローム塊・炭化物を含む。締り乏しい 2 褐色土 炭化物少量含む。締り乏しい 3 ♪ 明るい。ローム塊を含む。締り乏しい 4 暗褐色土 炭化物少量含む。締り乏しい		
19号土坑	Cd-24Gr	楕円形	0.89×0.69×0.08
20号土坑	Ce-23Gr	楕円形	0.68×0.66×0.22
21号土坑	Ced-22Gr	円形	0.75×0.72×0.24
22号土坑	Cd-22Gr	楕円形	— × — ×0.27
23号土坑	Cc-23Gr	楕円形	0.89×0.79×0.08
24号土坑	Cn-24Gr	長方形	2.35×0.66×0.18
土層註	1 暗褐色土 炭化物を多く含む。締り乏しい		
25号土坑	Ccp-24・24Gr	不整形	3.86×3.53×0.38
土層註	1 暗褐色土 均質。鈍褐色土塊との班状堆積 2 ♪ やや砂質。ローム粒を含む 3 ♪ 焼土・炭化物を少量含む 4 ♪ ローム塊を多く含む 5 ♪ 小型の焼土塊を含む 7 ♪ 粘土塊		
26号土坑	Cn-27・28Gr	不整形	2.10×1.33×0.18
土層註	1 鈍褐色土 均質。やや暗い。 2 ♪ 均質。ローム粒を含む 3 ♪ 均質。ローム塊を少量含む		
27号土坑	Co-28Gr	楕円形	2.02×1.45×0.49
土層註	1 暗褐色土 均質。白色粒を微量含む 2 黒褐色土 均質。白色粒を少量含む 3 ♪ 均質。やや明るい 4 鈍褐色土 均質。ローム粒を少量含む 5 暗褐色土 均質。褐色土塊を含む		

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
28号土坑	Co-28Gr	楕円形	1.30×1.24×0.18
土層註	1 暗褐色土 均質。ローム塊を含む。硬く締まる 2 明褐色土 大型のローム塊を多く含む		
29号土坑	Co-27・28Gr	不整形	2.03×1.20×0.38
土層註	1 黒褐色土 均質。白色粒を多く含む 2 暗褐色土 均質。白色粒を少量含む 3 ♪ 2より明るい 4 黄褐色土 ローム塊		
30号土坑	Cab-25・26Gr	不整形	4.23×2.86×0.43
31号土坑	Cxy-25・26Gr 32・39号住居跡	楕円形	0.95×0.69×0.38
32号土坑	Cx-26Gr 18・38号住居跡	楕円形	0.95×0.78×0.46
33号土坑	Cwx-26・27Gr 18号住居跡	不整形	1.43×0.77×0.85
34号土坑	Cw-25Gr	不整形	1.23×0.76×0.48
土層註	1 暗褐色土 褐色土塊と班状堆積。炭化物を含む 2 ♪ 褐色土塊・ローム粒を含む 3 鈍褐色土 ローム塊・炭化物を含む 4 黄褐色土 ローム塊を主体とする 5 ♪ ローム塊		
35号土坑	Cx-25Gr 32・39号住居跡	不整形	1.67×0.78×0.53
36号土坑	Dde-27Gr 43号住居跡	不整形	2.30×1.66×0.86
土層註	1 鈍黄褐色土 均質。ローム塊を主体とする 2 ♪ 均質。暗褐色土塊を含む 3 黄褐色土 均質。暗褐色土塊を含む 4 ♪ ローム塊・暗褐色土塊を含む 5 鈍黄褐色土 ローム塊を主体とする		
37号土坑	Ded-28・29Gr	不整形	3.38×2.62×0.22
土層註	1 鈍褐色土 均質。ローム粒を多く含む 2 ♪ 均質。ローム粒を少量含む 3 ♪ 均質。ローム塊・炭化物を含む		

第三章 検出された遺構と遺物

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
38号土坑 39号土坑	Dde-28・29Gr	楕円形	1.93×1.40×0.58
土層註	1 鈍褐色土 均質。炭化物を微量含む 2 ♪ 均質。ローム粒を少量含む 3 褐色土 均質。塊状の堆積。炭化物を含む 4 暗褐色土 均質。褐色土塊の班状堆積 5 黄褐色土 やや暗い。ローム塊主体		
39号土坑 38号土坑	Dde-29Gr	楕円形	1.04×0.96×0.18
土層註	1 暗褐色土 やや軟質。少量のローム粒を含む 2 鈍褐色土 ローム塊を多く含む 3 ♪ ローム塊・炭化物を多く含む 4 黄褐色土 ローム塊を主体とする		
40号土坑 43号住居跡	Dd-27Gr	円形	0.81×0.80×0.27
土層註	1 鈍褐色土 均質。暗褐色土塊との班状堆積 2 褐色土 ローム粒を多く含む		
41号土坑	De-27Gr	楕円形	0.80×0.70×0.22
土層註	1 鈍褐色土 均質。褐色土塊との班状堆積 2 黄褐色土 ローム塊を多く含む		
42号土坑	De-26・27Gr	不整長円形	2.00×0.97×0.17
43号土坑	De-27・28Gr	不整形	1.74×1.56×0.19
44号土坑 27・43号住居跡	Dd-27・28Gr	長方形	3.13×1.21×0.18
45号土坑	Dd-28Gr	楕円形	1.00×0.86×0.44
土層註	1 褐色土 ローム粒を多く含む。締り乏しい 2 ♪ ローム塊を主体とする。締り乏しい 3 黄褐色土 ローム塊を主体とする。締り乏しい		
46号土坑	Ch-25・26Gr	不整形	2.49×1.71×0.48
47号土坑 11号住居跡	Cf-25・26Gr	不整形	2.30×1.76×0.56
土層註	1 鈍黄褐色土 均質。暗い。ローム粒を主体とする 2 ♪ 均質。ローム粒を主体とする 3 暗褐色土 均質。小型のローム塊を少量含む 4 黄褐色土 均質。ローム粒を主体とする 5 ♪ 均質。ローム粒を主体とする		

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
48号土坑	Cef-25・26Gr	長方形	2.53×0.55×0.25
土層註	1 褐色土 粒子粗い。締り乏しい 2 暗褐色土 黒褐色土塊を含む。締り乏しい 3 褐色土 粒子粗い。締り乏しい		
49号土坑 52号住居跡	Cde-26Gr	楕円形	1.33× — ×0.13
土層註	1 褐色土 ローム粒を含む。締り乏しい 2 ♪ ローム塊を含む。締り乏しい		
50号土坑	Cd-26Gr	楕円形	1.49×0.89×0.23
土層註	1 暗褐色土 ローム塊を多く含む。締り乏しい 2 褐色土 ローム粒を多く含む。締り乏しい 3 ♪ ローム塊を含む。締り乏しい		
51号土坑	Cx-26Gr	長方形	1.09×0.61×0.30
土層註	1 褐色土 均質。ローム粒少量含む 2 暗褐色土 黒褐色土塊を含む。締り良好		
52号土坑	Cy-25Gr	楕円形	1.20×1.04×0.66
土層註	1 鈍褐色土 均質。白色粒を微量含む 2 鈍黄褐色土 均質。炭化物を少量含む 3 鈍褐色土 均質。ローム粒を少量含む 4 黒褐色土 均質。褐色土塊を少量含む 5 鈍黄褐色土 均質。ローム塊を主体とする		
53号土坑	Cy-24・25Gr	円形	0.83×0.79×0.37
土層註	1 暗褐色土 均質。微量のローム粒を含む 2 鈍褐色土 均質。少量のローム粒を含む 3 ♪ 均質。少量のローム粒・炭化物を含む 4 黄褐色土 均質。ローム粒を主体とする		
54号土坑	Cy-24・25Gr	長方形	1.26×0.72×0.37
土層註	1 暗褐色土 黒褐色土塊を少量含む 2 褐色土 白色粒を少量含む 3 黄褐色土 褐色土塊との班状堆積 4 ♪ やや暗い。ローム塊を含む 5 暗褐色土 ローム塊を少量含む		

第6節 土 坑

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
56号土坑	Cy・Da-25Gr 22号住居跡	不整形	— ×1.74×0.34
土層註	1 暗褐色土 均質。白色粒を含む 2     〃 均質。ローム粒・白色粒を含む 3     〃 均質。ローム塊を含む 4 鈍褐色土 均質。暗褐色土塊と斑状堆積 5 黄褐色土 均質。ローム粒主体		
61号土坑	Dt-27Gr	不整形長方形	1.83×0.90×0.30
土層註	1 鈍黄褐色土 ローム塊を多く含む。締り乏しい 2     〃 明るい。ローム塊を多く含む 3 暗褐色土 ローム塊を含む		
63号土坑	Da-26Gr	長方形	1.11×0.72×0.27
65号土坑	Db-48Gr	不整形円形	1.36×1.23×0.34
土層註	1 暗褐色土 均質。少量の炭化物を含む 2     〃 均質。少量のローム粒を含む 3     〃 均質。やや明るい。ローム粒を含む		
66号土坑	Db-47・48Gr	円形	1.45×1.39×0.54
土層註	1 鈍褐色土 均質。少量のローム塊を含む 2 暗褐色土 均質。ローム塊・炭化物を含む 3 黄褐色土 ローム塊を主体とする 4     〃 褐色土塊・ローム塊を含む		
67号土坑	Db-45・46Gr 66号住居跡	円形	2.22×2.11×0.25
土層註	1 暗褐色土 均質。炭化物・ローム粒を含む 2 黒褐色土 均質。やや明るい。炭化物を多く含む 3 黄褐色土 均質。ローム粒を主体とする		
68号土坑	Dbc-48・49Gr	不整形	2.13×1.50×0.40
土層註	1 暗褐色土 ローム粒を含む・締りやや乏しい 2     〃 ローム粒・褐色土塊を含む 3 黄褐色土 ローム塊を主体とする 4 暗褐色土 やや明るい。炭化物を含む。締り良好 5 黄褐色土 ローム塊を主体とする 6     〃 小型のローム塊を主体とする 7     〃 ローム塊		

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
69号土坑	Dbc-48Gr	不整形	2.80×1.28×0.56
土層註	① 黄褐色土 均質でやや暗い。炭化物を含む 1 暗褐色土 均質。ローム粒を少量含む。締り良好 2     〃 均質。炭化物を少量含む。締り良好 3 黒褐色土 均質。炭化物・ローム粒を少量含む 4 黄褐色土 ローム塊		
70号土坑	Dbc-47Gr 70号住居跡	不整形	3.09×1.91×0.61
土層註	1 鈍黄褐色土 均質。ローム塊を主体とする。 2 暗褐色土 均質。炭化物・ローム塊を含む 3 黄褐色土 均質。ローム塊を主体とする 4 褐色土 均質。包含物少ない 5 鈍黄褐色土 均質。炭化物を少量含む 6     〃 均質。包含物少ない		
71号土坑	De-45Gr 82号住・79号土坑	楕円形	1.05×0.91×0.30
土層註	1 暗褐色土 ローム塊を少量含む。締りやや乏しい 2 黄褐色土 ローム塊を多く含む		
72号土坑	De-47Gr	不整形	— ×1.03×0.56
土層註	1 暗褐色土 均質。ローム塊を少量含む 2     〃 やや暗い。ローム粒を多く含む 3 鈍褐色土 均質。ローム粒主体 4     〃 大型のローム塊・暗褐色土塊を含む 5 黄褐色土 ローム塊主体		
73号土坑	Db-44Gr 110号土坑	不整形	— × — ×0.30
土層註	1 暗褐色土 均質。ローム粒を少量含む 2     〃 均質。炭化物を少量含む 3 黄褐色土 ローム塊・褐色土塊を含む 4 褐色土 均質。暗褐色土塊を含む 5 黄褐色土 均質。ローム粒を主体とする		
74号土坑	Ded-25Gr	楕円形	1.03×0.96×0.26
土層註	1 暗褐色土 均質。砂粒を少量含む 2 鈍褐色土 均質。小型のローム塊少量含む 3 暗褐色土 均質。大型のローム塊を多く含む 4 黄褐色土 軟質。ローム粒を主体とする		

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
75号土坑	Ded-46Gr	楕円形	1.14×1.03×0.24
土層註	1 黒褐色土 軟質。暗褐色土塊との班状堆積 2 〃 暗褐色土塊・ローム塊を含む 3 暗褐色土 均質。やや暗い 4 〃 大型のローム塊を含む		
76号土坑	Db-46Gr	楕円形	0.93×0.83×0.29
土層註	1 黒褐色土 やや砂質。暗褐色土塊と班状堆積 2 〃 均質。大型の暗褐色土塊を含む 3 〃 やや砂質。ローム粒を含む 4 褐色土 ローム粒を主体とする		
77号土坑	De-45・46Gr	楕円形	0.93×0.80×0.26
土層註	1 暗褐色土 均質。白色粒を少量含む 2 褐色土 ローム粒を多く含む 3 黒褐色土 小型のローム塊を多く含む		
78号土坑	De-45Gr 82号住居跡	楕円形	1.59×1.31×0.29
土層註	1 黒褐色土 ローム塊を多く含む 2 暗褐色土 ローム塊・炭化物を含む 3 〃 ローム塊を少量含む 4 黄褐色土 ローム塊を多く含む		
79号土坑	Dde-45Gr 82号住・71号土坑	楕円形	1.06×0.89×0.25
土層註	1 黒褐色土 小型のローム塊を多く含む 2 〃 やや明るい。ローム塊の班状堆積 3 暗褐色土 小型のローム塊を含む 4 〃 黒褐色土塊・ローム塊を含む		
80号土坑	Dde-45Gr	円形	1.10×1.10×0.28
土層註	1 黒褐色土 若干砂質。ローム塊を含む 2 暗褐色土 均質。ローム粒を含む 3 〃 均質。明るい。ローム塊を含む		
81号土坑	Dfg-45Gr 84号住居跡	円形	1.36×1.25×0.32
土層註	1 褐色土 少量の砂粒を含む 2 〃 ローム塊を少量含む 3 鈍褐色土 ローム粒主体 4 黄褐色土 ローム塊		

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
82号土坑	Dd-45Gr	楕円形	1.61×1.56×0.46
土層註	1 黒褐色土 暗褐色土塊を含む 2 〃 均質。少量のローム粒を含む 3 暗褐色土 大型のローム塊を含む 4 褐色土 均質。ローム粒を主体とする 5 黄褐色土 均質。ローム塊を主体とする		
83号土坑	Ded-45・46Gr	不整形	2.82×2.53×0.53
土層註	1 鈍褐色土 砂粒を少量含む。締りはやや乏しい 2 〃 砂質。締りは乏しい 3 暗褐色土 均質。ローム塊・黒褐色土塊の班状堆積 4 鈍褐色土 均質。ローム塊を含む 5 褐色土 均質。ローム粒を主体とする 6 〃 均質。ローム塊を主体とする		
84号土坑	De-45Gr	楕円形	1.86×1.16×0.61
土層註	1 黒褐色土 砂質。締りはやや乏しい 2 暗褐色土 均質。砂粒・ローム粒を含む 3 〃 均質。ローム塊を含む 4 黄褐色土 均質。ローム塊を主体とする		
85号土坑	Dd-45・46Gr	円形	1.21×1.16×0.22
土層註	1 黒褐色土 均質。ローム塊を含む 2 暗褐色土 均質。ローム粒を多く含む		
86号土坑	Dde-45・46Gr	不整形	1.18×1.06×0.41
土層註	1 暗褐色土 均質。砂粒・ローム塊を含む 2 黒褐色土 均質。ローム塊を少量含む 3 黄褐色土 ローム塊を主体とする		
87号土坑	De-46Gr	円形	0.90×0.80×0.26
土層註	1 鈍褐色土 小型のローム塊を含む 2 黄褐色土 ローム粒主体		
88号土坑	Dde-46Gr	楕円形	1.00×0.86×0.18
土層註	1 鈍褐色土 小型のローム塊を含む 2 黄褐色土 ローム粒主体		
89号土坑	Def-45・46Gr	不整形円形	1.38×1.08×0.42
土層註	1 黒褐色土 均質。少量の砂粒を含む 2 〃 均質。ローム塊・炭化物を含む 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む。締りやや乏しい		

第6節 土 坑

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
90号土坑	Cij-23・24Gr 29住・91坑・96坑	不整形	3.28×1.91×0.28
土層註	1 暗褐色土 均質。少量のローム粒を含む 2 〃 均質。少量のローム塊を含む 3 〃 均質。ローム塊と斑状堆積 4 〃 均質。ローム塊を多く含む 5 黄褐色土 均質。ローム塊を主体とする		
91号土坑	Ci-24Gr 90号土坑	円形	0.97×0.93×0.53
土層註	1 暗褐色土 黒褐色土塊の斑状堆積。炭化物を含む 2 〃 大型のローム塊を多く含む 3 〃 均質。ローム粒を主体とする		
92号土坑	Ci-24Gr 80号住居跡	楕円形	0.90×0.84×0.18
土層註	1 暗褐色土 均質。砂粒・少量のローム粒を含む 2 黒褐色土 均質。小型のローム塊・炭化物を含む 3 暗褐色土 均質。大型のローム塊を多く含む		
93号土坑	Cj-23Gr	楕円形	1.05×0.95×0.36
土層註	1 褐色土 炭化物を含む。締りは乏しい 2 暗褐色土 小型のローム塊を多く含む 3 黄褐色土 ローム塊を主体とする 4 黒褐色土 大型のローム塊を多く含む		
94号土坑	Cj-24Gr 96号土坑	楕円形	— ×0.72×0.14
95号土坑	Cj-24Gr 80住・94坑・100坑	円形	0.95×0.89×0.30
96号土坑	Ci-24Gr 80号住・90号土坑	円形	0.95×0.95×0.18
99号土坑	Ckl-24・25Gr	不整長方形	3.87×3.01×0.38
土層註	1 褐色土 均質。炭化物が少量含まれる 2 〃 均質。少量の鈍褐色土の斑状堆積 3 暗褐色土 均質。炭化物を少量含む 4 〃 均質。白色粒少量含む		
100号土坑	Cjk-23・24Gr 80号住・95号土坑	楕円形	2.32×2.27×0.97
101号土坑	Dm-24・25Gr 87号住居跡	隅丸長方形	2.47×0.87×0.36

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
102号土坑	Db-44・45Gr	楕円形	0.94×0.88×0.51
土層註	1 鈍黄褐色土 ローム塊を含む。締りは乏しい 2 鈍褐色土 ローム粒を含む。締りは乏しい 3 黄褐色土 ローム塊を主体とする		
103号土坑	De-44・45Gr	楕円形	1.05×0.96×0.14
土層註	1 暗褐色土 ローム塊・白色粒を少量含む 2 黄褐色土 白色粒を少量含む		
104号土坑 110号土坑	Dbc-44Gr	不整形	— ×1.11×0.23
土層註	1 暗褐色土 白色粒・焼土粒を少量含む 2 〃 ローム塊の斑状堆積 3 黄褐色土 ローム塊・暗褐色土塊を含む		
105号土坑	Dd-44・45Gr	不整形	1.08×0.82×0.13
土層註	1 黄褐色土 ローム粒・白色粒を少量含む 2 〃 包合物少ない		
106号土坑	Dd-45Gr	楕円形	0.82×0.81×0.40
土層註	1 黄褐色土 ローム粒を含む 2 〃 均質。ローム粒主体		
107号土坑	De-44Gr	隅丸長方形	2.06×0.61×0.18
土層註	1 黄褐色土 ローム粒・白色粒を含む 2 〃 包合物少ない		
108号土坑	Def-44Gr 69号住居跡	楕円形	0.62×0.44×0.08
土層註	1 黄褐色土 白色粒多く含む		
109号土坑	Df-44Gr 69号住居跡	円形	0.57×0.56×0.14
土層註	1 暗褐色土 ローム粒・白色粒を少量含む 2 黄褐色土 ローム塊・暗褐色土塊を含む		
110号土坑	Db-44Gr 73・104号土坑	不整長円形	1.85×0.35×0.54
土層註	1 褐色土 ローム塊を含む 2 黄褐色土 ローム塊を主体とする 3 褐色土 包合物は少ない 4 暗褐色土 ローム塊の斑状堆積		

第三章 検出された遺構と遺物

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
111号土坑	Di-24Gr	楕円形	1.44×0.70×0.28
112号土坑	Dhi-24Gr 113号土坑	不整長円形	1.91×0.51×0.21
113号土坑	Dhi-23・24Gr 112号土坑	楕円形	1.16×1.21×0.24
114号土坑	Dpq-37Gr	不整形	1.17×1.14×0.38
土層註	1 褐色土 均質。小型のローム塊・白色粒を含む 2 ♪ 均質。暗い。炭化物を少量含む 3 ♪ 均質。小型のローム塊を含む		
116号土坑	De-43Gr	不整形	2.11×1.12×0.27
土層註	1 黒褐色土 均質。ローム塊少量含む 2 暗褐色土 均質。白色粒・ローム粒を含む 3 褐色土 均質。ローム粒主体		
117号土坑	Dd-42・43Gr	楕円形	1.07×1.00×0.31
土層註	1 黒褐色土 均質。ローム塊少量含む 2 褐色土 均質。ローム粒主体		
118号土坑	Dc-42Gr	不整形	1.70×1.48×0.35
土層註	1 黒褐色土 均質。ローム塊少量含む 2 暗褐色土 均質。白色粒・ローム粒を含む		
119号土坑	Dc-42・43Gr	円形	1.04×1.00×0.32
土層註	1 黒褐色土 均質。ローム塊少量含む 2 暗褐色土 均質。白色粒・ローム粒を含む		
120号土坑	Dc-43Gr	不整形	0.98×0.82×0.13
土層註	1 黒褐色土 均質。ローム塊少量含む		
121号土坑	Dbc-39・40Gr	不整形	3.69×2.32×1.01
土層註	1 暗褐色土 均質。白色粒を少量含む 2 ♪ 均質。黒褐色土塊を少量含む 3 黄褐色土 均質。ローム粒を主体とする 4 暗褐色土 均質。黒褐色土塊の斑状堆積 5 暗褐色土 ローム塊・炭化物を含む		
122号土坑	Ct-38Gr 120号住居跡	円形	0.92×0.83×0.35

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
123号土坑	Cy-38Gr	不整形	3.81×2.01×0.59
土層註	1 褐色土 均質。炭化物を少量含む 2 ♪ 均質。ローム粒を含む 3 ♪ 均質。やや暗い。ローム塊を少量含む 4 暗褐色土 均質。やや暗い。白色粒を含む 5 ♪ 均質。やや暗い。締りは弱い 6 褐色土 均質。やや明るい 7 黄褐色土 均質。大型のローム塊を主体にする		
124号土坑	Dv-37Gr 2号配石	円形	0.96×0.93×0.20
125号土坑	Dbc-30・31Gr	楕円形	1.86×1.44×0.37
土層註	1 褐色土 均質。ローム粒を少量含む 2 ♪ 均質。やや暗い。ローム塊を少量含む 3 暗褐色土 均質。締り良好		
126号土坑	Dbc-30Gr	楕円形	1.57×1.37×0.32
土層註	1 褐色土 均質。白色粒・炭化物を少量含む 2 ♪ 均質。炭化物を少量含む 3 ♪ ローム塊を含む		
127号土坑	Cy-33Gr 128号土坑	円形	0.64× — ×0.17
128号土坑	Cy-33Gr 127号土坑	不整形	1.40×0.24×0.33
129号土坑	Da-31Gr	隅丸長方形	1.17×0.95×0.12
土層註	1 暗褐色土 炭化物・焼土粒を含む。締り乏しい 2 黄褐色土 ローム粒を主体とする		
130号土坑	Dbc-33Gr 110号住居跡	楕円形	1.41×0.78×0.27
131号土坑	Dab-32Gr 132・144号土坑	楕円形	0.70×0.69×0.33
132号土坑	Db-32・33Gr 131・133・136・144坑	不整形	1.01×0.84×0.42
133号土坑	Db-32・33Gr 132・135・140・144坑	不整形	1.19× — ×0.28
134号土坑	Db-32Gr 140号土坑	隅丸長方形	1.19×0.69×0.11
135号土坑	Db-33Gr 133号土坑	楕円形	0.56×0.42×0.08
土層註	1 暗褐色土 少量の焼土粒を含む		

第6節 土 坑

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
136号土坑	Db-32・33Gr 132・138号土坑	楕円形	— × 0.54 × 0.18
土層註	1 褐色土 炭化物を少量含む 2 黄褐色土 ローム粒を主体とする		
137号土坑	Dab-32Gr 143・144号土坑	楕円形	0.94 × 0.55 × 0.10
138号土坑	Dab-33Gr 136号土坑	楕円形	0.54 × 0.29 × 0.07
139号土坑	Db-33Gr	楕円形	0.55 × 0.35 × 0.18
140号土坑	Db-32Gr 133・134号土坑	楕円形	0.81 × 0.22 × 0.12
141号土坑	Dd-31Gr 122号住居跡	不整形	2.76 × 1.54 × 0.88
土層註	1 褐色土 粘土塊を少量含む 2 暗褐色土 黒褐色土塊を含む 3 ♪ ローム粒を含む 4 褐色土 ローム粒・白色粒を含む 5 黒褐色土 黒褐色土塊を含む		
142号土坑	Db-32Gr	楕円形	0.37 × 0.38 × 0.39
143号土坑	Db-32Gr	楕円形	1.38 × 0.95 × 0.11
144号土坑	Dab-32Gr 131・132・133・137坑	楕円形	— × — × 0.37
145号土坑	Db-33Gr	楕円形	0.53 × 0.28 × 0.13
147号土坑	Cs-35Gr	楕円形	1.33 × 1.13 × 0.56
土層註	1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む 2 ♪ 大型のローム塊を多く含む 3 ♪ 均質。暗い 4 ♪ 黒褐色土塊・ローム塊を多く含む 5 ♪ 均質。ローム粒を主体とする		
148号土坑	Cr-34・35Gr 149号土坑	楕円形	2.36 × 1.67 × 0.66
土層註	1 暗褐色土 炭化物・焼土塊を多量に含む 2 褐色土 均質。ローム塊を多く含む 3 ♪ 均質。ローム塊の班状堆積 4 暗褐色土 均質。包合物は少ない		

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
149号土坑	Cr-34Gr 148号土坑	不整形	2.71 × 2.31 × 0.45
土層註	① 褐色土 均質。ローム粒を少量含む ② ♪ 明るい。小型のローム塊を少量含む ③ ♪ 暗い。小型のローム塊を少量含む ④ ♪ ローム粒を多量に含む		
150号土坑	Cj-29・30Gr	隅丸長方形	2.43 × 1.52 × 0.32
土層註	1 暗褐色土 ローム塊を少量含む。埋土		
151号土坑	Cj-29Gr	隅丸長方形	1.54 × 0.51 × 0.04
土層註	1 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。埋土		
152号土坑	Cp-38Gr 131・132号住居跡	円形	0.79 × 0.72 × 0.54
土層註	1 褐色土 ローム粒を少量含む 2 鈍褐色土 ローム塊を多量に含む 3 暗褐色土 包合物は少ない		
159号土坑	Dab-33Gr	楕円形	0.56 × 0.50 × 0.23
160号土坑	Cuv-29Gr	不整形長方形	2.70 × 1.79 × 0.42
164号土坑	Dq-33Gr	楕円形	0.91 × 0.75 × 0.42
土層註	1 暗褐色土 少量のローム塊を含む 2 ♪ 暗い。ローム塊を多く含む 3 褐色土 大型のローム塊を多く含む		
165号土坑	Dq-33Gr	円形	0.73 × 0.72 × 0.20
土層註	1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を微量含む		
166号土坑	Dq-33Gr	楕円形	0.68 × 0.52 × 0.10
土層註	1 暗褐色土 暗い。ローム粒を含む		
167号土坑	Dq-33Gr	円形	0.49 × 0.48 × 0.13
土層註	1 褐色土 砂質。ローム粒を含む 2 黄褐色土 ローム塊を主体とする		
168号土坑	Dq-32Gr	楕円形	0.96 × 0.72 × 0.17
土層註	1 黒褐色土 ローム粒を少量含む 2 ♪ 大型のローム塊を少量含む		

### 第三章 検出された遺構と遺物

土坑名	位置(南東隅) 重複遺構	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ
169号土坑	Dqr-32Gr	円形	0.92×0.84×0.17
土層註	1 暗褐色土 暗い。ローム粒を少量含む 2 褐色土 小型のローム塊を少量含む		
170号土坑	Dq-32Gr	楕円形	0.66×0.58×0.10
土層註	1 黒褐色土 ローム塊を少量含む		
171号土坑	Db-33Gr 110号住居跡	楕円形	0.92×0.91×0.29
172号土坑	Cs-34Gr	楕円形	0.83×0.72×0.18
土層註	1 暗褐色土 均質。白色粒を少量含む		
173号土坑	Cm-35・36Gr 118号住居跡	不整形	— ×1.23×0.30
土層註	1 暗褐色土 ローム塊・炭化物を含む 2 〃 小型のローム塊を含む 3 黄褐色土 暗褐色土塊を含む		
174号土坑	C1m-35・36Gr	隅丸方形	1.08×1.03×0.48
土層註	1 暗褐色土 ローム粒・炭化物を少量含む 2 〃 やや暗い。炭化物を少量含む 3 〃 包合物少ない。締り良好		
175号土坑	C1-32・33Gr	楕円形	1.18×0.60×0.52
土層註	1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む 2 〃 ローム塊・褐色土塊を含む 3 〃 褐色土塊を多く含む 4 黄褐色土 ローム粒を多く含む		

#### (土坑出土遺物)

ここでは、土坑出土遺物を扱うが、主に奈良・平安時代の土坑出土遺物を優先する。

前述のように、縄文時代の土坑出土遺物は、第4節(第26図～第28図)に掲載している。また、奈良・平安時代に比定される金属器も第13節(第336図)に一括して掲載した。さらに、近世～近代と思われる土坑出土の土器類は第343図に、古銭は第348図と第349図に挙げている。

奈良・平安時代の土坑遺物として、良好な例とし

て、61号土坑出土の3個体の椀、101号土坑の3個体の椀、130号土坑の灰釉陶器皿と2個体の椀が墓壙と思われる土坑より出土しており、一括性に富む共伴資料として評価できよう。3例とも、3個体の土器は、完形あるいはほぼ完形で、坑底面直あるいは直上の出土であり、意図的な配置を背後にした集中を見せている。

これらの土坑を墓壙と考えた場合、出土した完形土器は供献用の祭具として位置付けられるが、現状の研究では、編年資料としての複数個体の共伴が目ざされており、祭祀―葬送儀礼としての視点到注意が払われていない。

また、供献された土器から、被葬者の地位や背後を類推する研究傾向も予想されるが、土器本来の持つ意味を吟味しなければ、供献行為と土器の関係が判然としないまま、土器に大げさな性格を付帯させてしまう研究になる。古墳時代研究に顕著な、供献土器＝副葬品という概念は払拭すべきであろう。

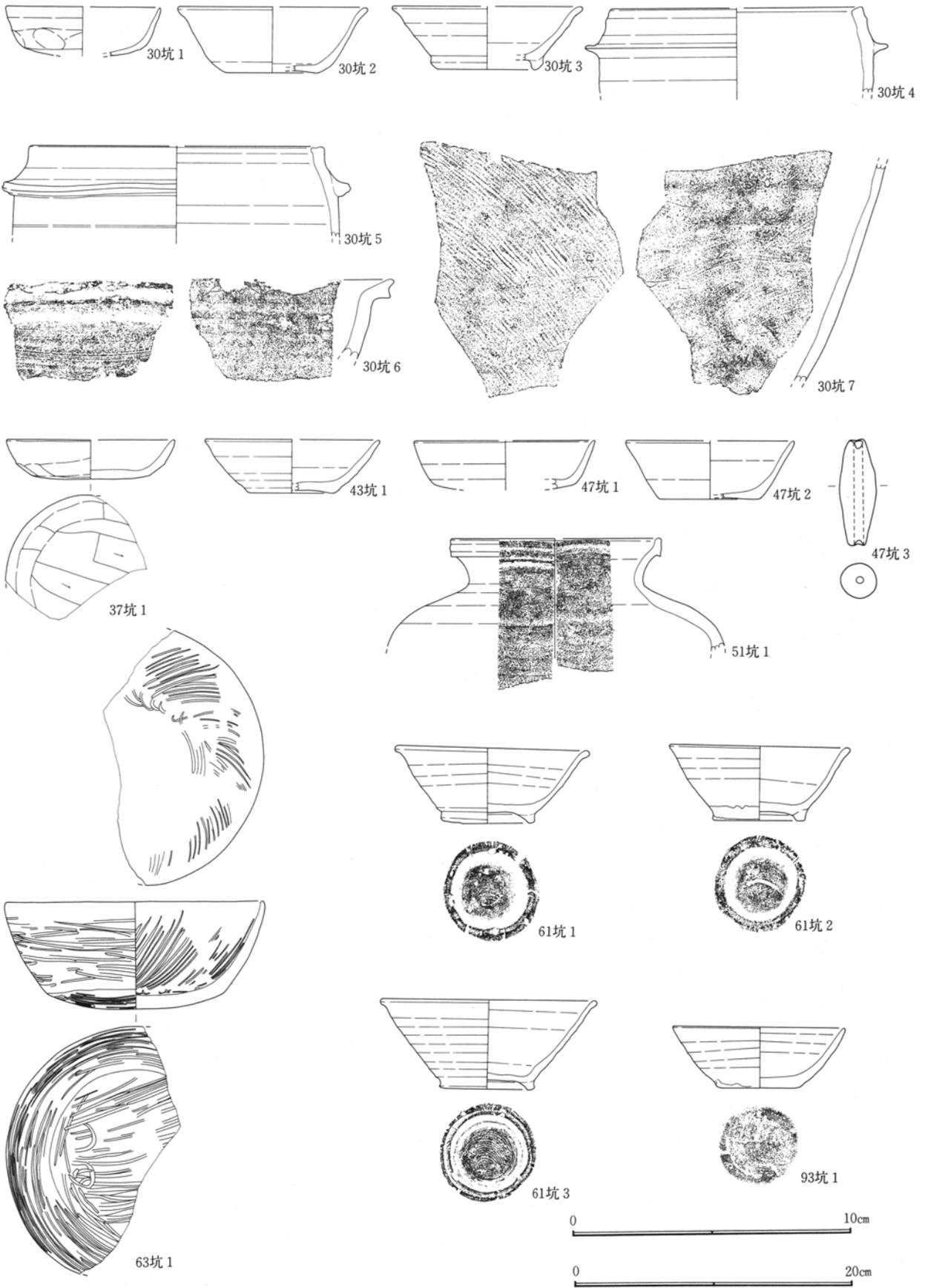
土器の共伴＝編年資料ではなく、出土土器の器組成―供膳具の在り方、さらに日常容器からの転用なのか等、明らかにすべき問題は山積する。本来ならば、容器としての土器の性格を煮つめ、編年なり供献された被葬者の性格を類推すべきであろう。

このように、墓壙内の出土土器に関しては、出土状態・出土位置・出土土器組成など、地域・時期毎にある程度の傾向は存在するものと考えられており、今後の分析視点の一つとして、さらに注視すべきであろう。

次に、特徴的な遺物としては、63号土坑出土の暗紋土師器坏がある。半完形ながら大型品で作りも良好である。共伴資料に恵まれず、土坑の性格も不明だが、当地域では希少な資料である。

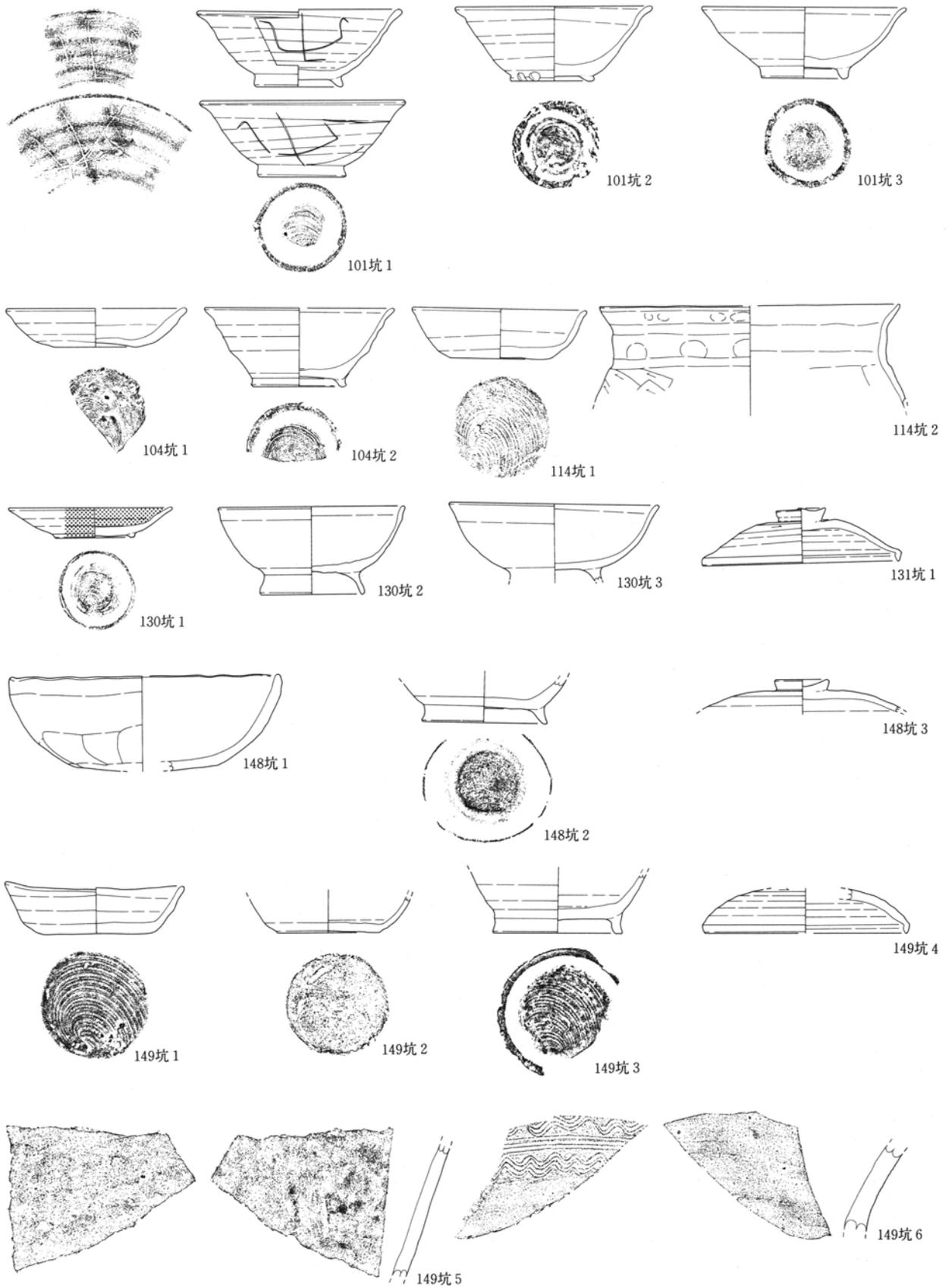
また、148号土坑の鉄斧も注意を要したい。1集落内に量的に保証される遺物ではなく、1点ないしは数点の出土を見るのみである。保有形態など問題は多い。

第6節 土 坑

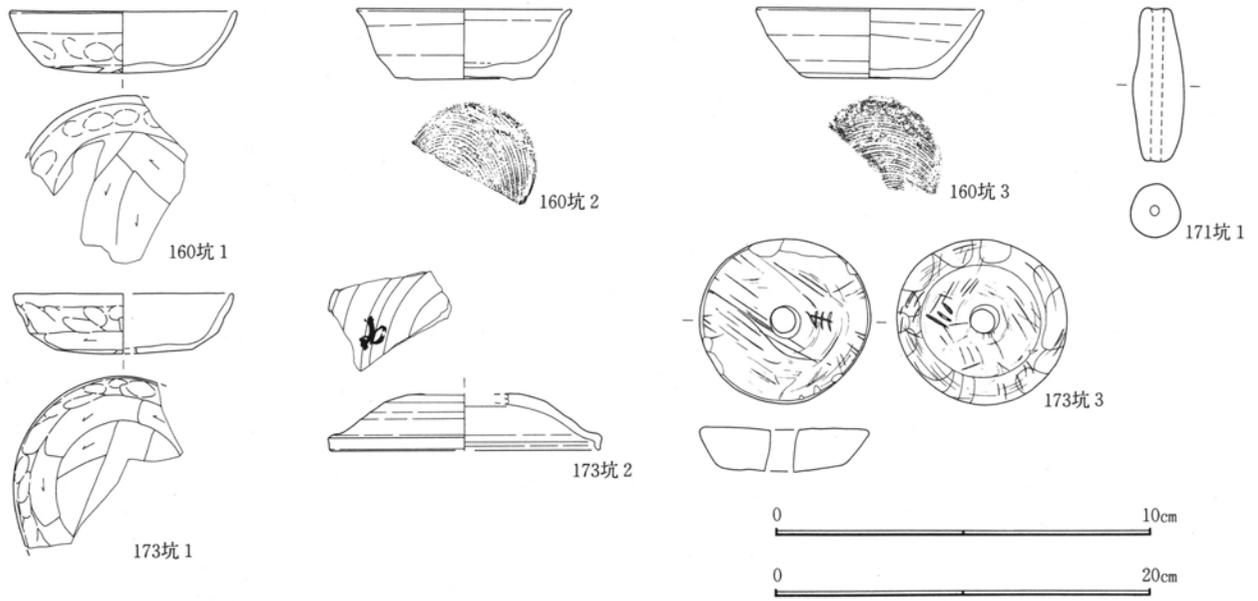


第300圖 土坑出土遺物 (1)

第三章 検出された遺構と遺物



第301図 土坑出土遺物(2)



第302図 土坑出土遺物（3）

第257表 30号土坑遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第300図 1 坏 図版 102	口：(10.9) 高：— 底：	約1/4	①細 片岩粒・砂粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口径は小さく小型品。口唇部尖り、口縁部～体部内彎気味に一体化する。口縁部横撫で、体部弱い撫で及び指頭痕。
第300図 2 坏 図版 102	口：(13.2) 高：(4.8) 底：(6.3)	約1/4	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部やや肥厚する。口縁部外反し、体部下半に丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整。外器面摩滅。
第300図 3 埴 図版 102	口：(13.4) 高：(4.5) 底：(7.0)	約1/5	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③褐灰色 ④須恵器	口縁部外反し、体部緩やかな丸みを帯びるがほぼ直線状に開く。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第300図 4 羽釜 図版 102	口：(17.8) 高：— 底：—	口縁部破片	①粗 小礫・石英 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部内傾し、鈔はやや外傾気味に水平に付される。轆轤整形後鈔貼付。貼付時横撫でを施す。
第300図 5 羽釜 図版 102	口：(20.6) 高：— 底：—	口縁部破片	①粗 小礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍橙色 ④須恵器	口縁部内傾し鈔上位と一体化する。鈔も内傾気味で彎曲を帯びて付される雑な作り。体部上半に影らみを設ける。轆轤整形後鈔貼付。貼付時の横撫では鈔上位に集中する。
第300図 6 鉢 図版 102	口：— 高：— 底：—	口縁部破片	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部著しく外反し、口頸部丸みを帯びる。轆轤整形。回轉方向不詳。
第300図 7 甕 図版 102	口：— 高：— 底：—	口縁部破片	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕体部破片。外面密接な平行叩き。内面丁寧な撫でを施す。外面に少量の自然袖付着する。



第262表 61号土坑遺物観察表

図 番号 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第300図 1 碗 図版 102	口： 13.5 高： 5.4 底： 6.1	ほぼ完形	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③暗灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。全体に歪みを持つ。
第300図 2 碗 図版 102	口： 12.6 高： 5.4 底： 5.8	完形	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③淡黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位～下半に丸みを帯びる。高台は短く外反気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第300図 3 碗 図版 102	口： 15.2 高： 6.4 底： 5.8	ほぼ完形	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部直線状に開く。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。

第263表 63号土坑遺物観察表

図 番号 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第300図 1 坏 図版 102	口： (18.3) 高： 7.8 底： (12.6)	約1/2	①細 砂粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁～体部緩やかな彎曲を以て一体化し外傾する。底部は偏平な丸底を呈す。外面体部横位篋磨き、底部は一定方向の篋磨き。内面体部は縦位篋磨きで放射状をなす。底面は一定方向の篋磨き。一部螺旋状。

第264表 93号土坑遺物観察表

図 番号 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第300図 1 坏 図版 102	口： 12.0 高： 4.4 底： 6.0	ほぼ完形	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部～体部内彎気味に一体化する。下半～底部やや彎曲し底部突出の印象を得る。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚やや厚手。

第265表 101号土坑遺物観察表

図 番号 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第301図 1 碗 図版 102	口： 14.0 高： 5.4 底： 5.8	ほぼ完形	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを持たせる。高台はやや短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。焼成後体部内外面に刻書。判読不能。
第301図 2 碗 図版 102	口： 13.5 高： 5.2 底： 5.7	完形	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位～下半に丸みを持たせる。高台は極めて短く付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第301図 3 碗 図版 102	口： 14.2 高： 5.0 底： 5.8	完形	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを持たせる。高台は直立気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。

第266表 104号土坑遺物観察表

図 番号 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第301図 1 坏 図版 102	口： (12.0) 高： 2.8 底： (5.8)	約1/4	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部は偏平で中位に丸みを持たせる。底部は上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第301図 2 碗 図版 102	口： (13.1) 高： 5.5 底： (6.2)	約1/4	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	口縁部～体部緩やかな彎曲を以て一体化する。下半はやや外反気味。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。

第三章 検出された遺構と遺物

第267表 114号土坑遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第301図 1 坏 図版 102	口： 12.0 高： 3.5 底： 6.8	ほぼ完形	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するも、丸みを帯びる体部上半と一体化する。体部下半で緩やかな彎曲をもって底部に至る。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第301図 2 甕 図版 102	口： 20.8 高： — 底： —	口縁部	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	口縁部上位外傾下位は直立する「コ」字状甕。肩部の張りはやや緩やか。口縁部横撫で上位と頸部で強く凹線状となす。中位弱く指頭痕残る。体部横位・斜位篋削り、内面体部は横位篋撫でを施す。

第268表 130号土坑遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第301図 1 皿 図版 102	口： 11.3 高： 2.1 底： 5.1	完形	①緻密 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④灰釉陶器	口縁部～体部上半直線状に一体化し、下半に緩やかな丸みを持たせる。高台は極めて短く直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。施釉は漬け掛けか。
第301図 2 椀 図版 102	口： 12.9 高： 6.2 底： 7.0	約2/3	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部～体部内彎気味に一体化する。重心を下半にを持たせる安定感ある器形。高台はやや長く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で、体部も撫でを加える。器面摩滅。
第301図 3 椀 図版 102	口： 14.4 高： — 底： —	高台部欠損	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部～体部内彎気味に一体化する。重心を下半にを持たせる安定感ある器形。高台は短く外反気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で、体部も撫でを加える。器面摩滅。

第269表 131号土坑遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第301図 1 蓋 図版 102	口： 13.6 高： 3.9 底： 3.4	約2/3	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部はやや凹み環状摘を付す。体部～裾部は丸みを帯び、かえり部は僅かに内傾する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付。

第270表 148号土坑遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第301図 1 坏 図版 103	口： (18.6) 高： — 底：	約1/3	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	大型品。口縁部～体部内彎気味に一体化する。底部不安定な丸底か。口縁部横撫で、体部下半に弱い篋撫で。器面全体に凹凸が見られる。
第301図 2 椀 図版 103	口： — 高： — 底： 8.5	底部	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下半は緩やかな丸みを帯びて開き、高台は外反気味に付される。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第301図 3 蓋 図版 103	口： — 高： — 底： 3.5	約1/4	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦で環状摘を付す。体部は緩やかな丸みを帯びる。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付。

第271表 149号土坑遺物観察表

図 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第301図 1 坏 図版 103	口： 12.4 高： 3.2 底： 7.0	ほぼ完形	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	器形やや歪み有り。口径・底径広く体部は偏平。口縁部～体部内彎気味に一体化する。内面見込み部は明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整。
第301図 2 坏 図版 103	口： — 高： — 底： 7.0	底部	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	底径やや広い。体部下半は緩やかな丸みを帯びて開く。底部は若干上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整。
第301図 3 碗 図版 103	口： — 高： — 底： 9.0	約1/4	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	体部下半は比較的弱く開く。高台も直立気味に付され、不安定な形態。内面見込み部はやや明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第301図 4 蓋 図版 103	口： (14.0) 高： — 底： —	体部破片	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部～裾部内彎気味に一体化する。かえり部は短く内傾する。右回轉轆轤整形。天井部回轉篋削りを施す。天井部篋削りで蓋と判断した。
第301図 5 甕 図版 103	口： — 高： — 底： —	体部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③ ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩き調整後撫で。内面撫で、環状当て目僅かに残る。
第301図 6 甕 図版 103	口： — 高： — 底： —	頸部破片	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③ ④須恵器	緩やかに外反する口頸部破片。外面数段の波状文と横位沈線が巡る。内面撫で。轆轤整形。回轉方向不詳。

第272表 160号土坑遺物観察表

図 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第302図 1 坏 図版 103	口： (11.8) 高： 3.3 底： —	約1/5	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口縁部～体部緩やかな内彎を以て強く開く。体部は偏平で底部は平底。口縁部横撫で、体部弱い撫で及び指頭痕。底部は篋削りを施す。
第302図 2 坏 図版 103	口： (11.2) 高： 3.7 底： 7.2	約1/3	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	やや小型品。口縁部外反し体部中位に丸みを持たせる。内面見込み部はやや不明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整。
第302図 3 坏 図版 103	口： 12.0 高： 3.7 底： (6.6)	約1/2	①粗砂礫 ②還元焰 ③黒褐色 ④須恵器	口縁部～体部緩やかな内彎を以て一体化する。底径やや広い。内面見込み部は明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後周縁撫でを加える。

第273表 171号土坑遺物観察表

図 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第302図 1 土錘 図版 103	口： 4.1 高： 1.4 底： 6.50	ほぼ完形	①細 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態。やや歪みがあり細身の印象を得る。外面縦位撫で。

### 第三章 検出された遺構と遺物

第274表 173号土坑遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第302図 1 坏 図版 103	口：(11.5) 高：(3.2) 底：(7.2)	約2/5	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口唇部丸みを帯び、体部中位はやや外反する。体部下半～底部に彎曲が見られ、底部は不安定な平底を呈す。口縁部横撫で、体部弱い撫で及び指頭痕。下半は横位篋削り。底部は篋削りを施す。
第302図 2 蓋 図版 103	口：(14.2) 高：— 底：	破片	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部平坦。体部～裾部緩やかな丸みを帯び、かえり部は内傾する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り。体部外面に墨書。判読不能。
第302図 3 紡錘車 図版 103	口：4.6 高：1.2 底：0.6	ほぼ完形	①蛇紋岩 ② ③ ④40.26g	断面形はやや偏平な台形を呈し、中央に小孔を穿つ。側面には剝離痕が残り、上下面には擦痕が一定方向に看取される。線刻であろうか、上面「生」、下面「川」か。

## 第7節 掘立柱建物跡

黒熊八幡遺跡では3棟の掘立柱建物が検出されている。本遺跡では、この3棟の他にも、礎石建物や1号～3号民家、さらに柱穴に相応する規模のピット等、竪穴住居跡とは上屋構造を異にする建物跡が確認されているが、これらとは分別をし、奈良・平安時代にほぼ比定され、かつ素掘りの柱穴が配置を以て確認された遺構を掘立柱建物跡として、本節にまとめた。

掘立柱建物の性格としては、竪穴住居跡と違い、高床式と平地式2者が想定されている。このうち、前者は、倉庫等の性格が想起されるが、後者は居住用の建物として考えられる。しかしながら、掘立柱建物跡は、検出される遺構が柱穴のみの場合が多く、両者を分別する手だては、現状の調査では持ち得ない。稀に、炉あるいは竈様の燃焼施設が確認された際に、居住が想定できる掘立柱建物跡として位置付が可能になる。

また、掘立柱建物跡が占地する位置関係を集落に照らし併せて、その機能を類推する分析も有効ではあるが、集落の全容を把握する調査遺跡で、なし得る分析である。しかしこの方法も、本遺跡のように集落の一部の検出状況では、果たし得ず、多くの遺跡に当てはめることはできない。

さらに、大型の柱穴を配する掘立柱建物跡を擁する集落に、郡衙あるいは寺院址等の性格を充てる例も見られるが、これも短絡的な位置付けは避けるべ

きである。

本遺跡でも、1号礎石や1号掘立柱建物跡や3号掘立柱建物の周辺に瓦が出土しており、寺院址やその関連施設の位置付けが可能である。しかしながら、本書では、寺院址としての可能性を指摘するにとどめ、近接する瓦窯址群や中西廃寺との関連の中で考えておきたい。

### 1号掘立柱建物跡

調査区南東部の北東側への急斜面地形に占地する。周辺の勾配は強いが、東側の谷地形に至ると比較的緩やかな傾斜となる。

周辺の遺構は、地形に反して比較的多く、本建物跡には5号溝が重複し、東側には123号住・117号住・118号住が、南側には127号住・124号住が近接する。

6基のピット配列を以て、掘立柱建物跡とした。北東への傾斜のため、北東隅と北側に対応する柱穴は痕跡も見いだせず、流失したものと考えた。規模は、2間×2間で、北辺が約4.2m、西辺が約4.0mを測る小型のものである。

各ピットの規模は(単位cm、長軸×短軸×深さ)

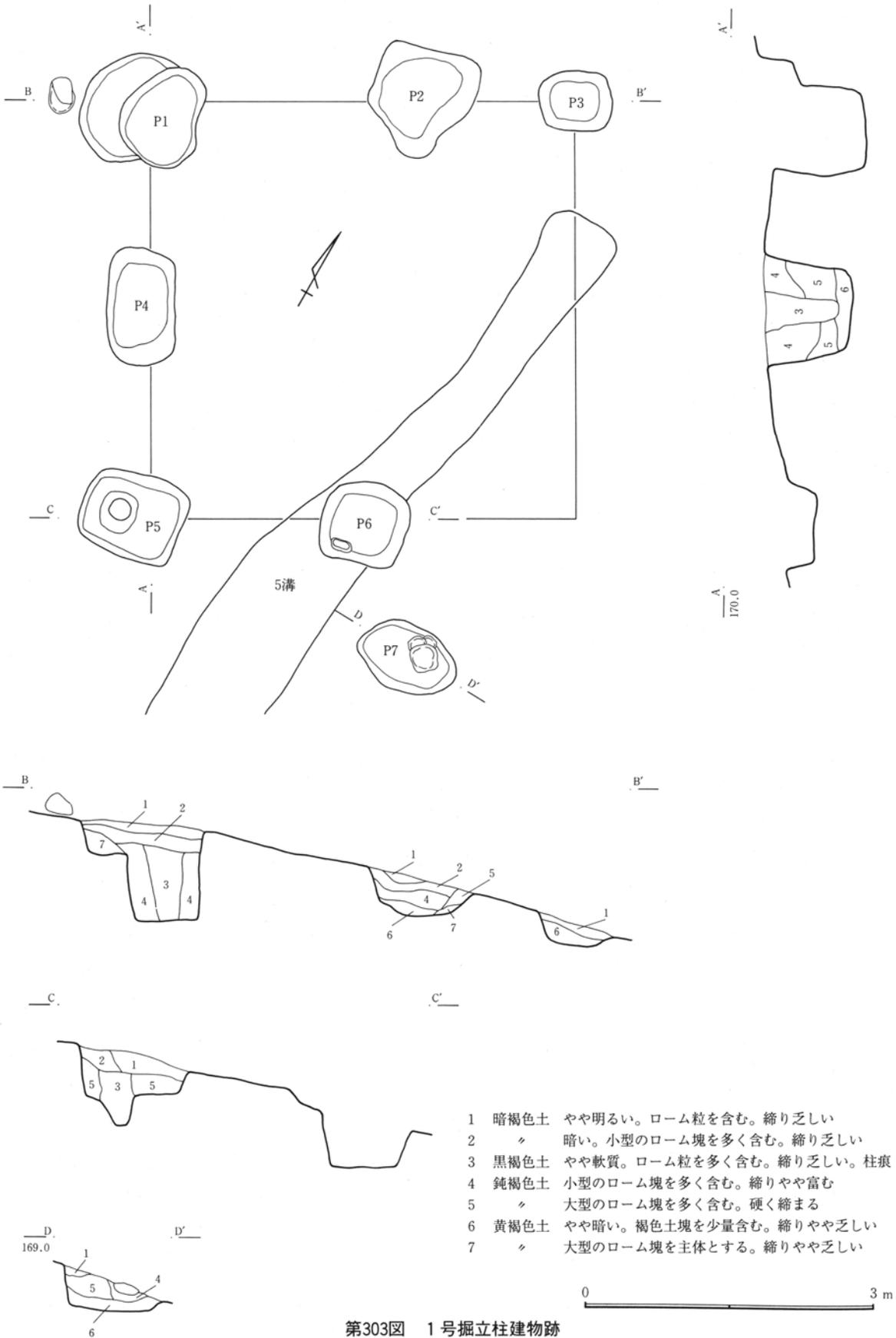
P1. 100×80×100 P2. 120×120×40

P3. 80×50×20 P4. 120×70×90

P5. 110×90×100 P6. 90×90×60

P7. 100×70×40 を測る。

このように各ピットの規模は一定ではなく規則性



第303図 1号掘立柱建物跡

### 第三章 検出された遺構と遺物

は看取できない。また、柱穴間の距離もP1～P4、P4～P5、P5～P6は約2mと等間隔に比して、P1～P2間は2.5m、P2～P3間は1.5mと北辺の配列が不規則である。尚、柱痕は、P1・P4・P5に認められた。

P6の南東にP7が確認されているが、自然石を上位に置き、埋土の特徴のP1～P5と同様なことから、本掘立柱建物跡に付随する施設と考えられる。本書では、位置的にはP2と対応するため、柱穴として捉えた。

炉・竈施設を示唆する焼土・炭化物の散布は見られなかったが、斜面地形のため存在の有無は確証的ではない。

遺物は出土しておらず、時期は確定できないが、埋土の特徴から奈良・平安時代と考えた。

#### 2号掘立柱建物跡

調査区中央台地鞍部のやや東側のC区～D区の境界で検出された。周辺は、北側及び東側への斜面地形が展開する地点とはいえ、勾配は緩やかであり、台地鞍部では最も平坦面に近くなる。

遺構密度は濃く、東側から北側にかけて、122号住・45号住・30号住・31号住・47号住等が群在する。また、西側には110号住が近接するが、南側は住居跡の近接は見られない。C～D区東斜面住居群の南端にあたる。その他の遺構としては、125号坑～129号坑も群をなす。このように、遺構密度が濃い地点ながら、本掘立柱建物跡と重複する竪穴住居跡は見られない。竪穴住居と掘立柱建物両者の意識下に占地がなされたのであろうか。

本建物跡は、主軸を北西に向けた2×5間の縦長の長方形で、規模は約8.2×4.6mを測る。西辺の柱穴配列に沿って溝が重なる溝持ちの建物跡である。溝は、東辺の一部でも検出されており、長辺に付帯する性格を窺わせる。

柱穴は20基からなる。このうち、P5・P6、P9・P10、P15・P16は建物跡内部に設けられており、総柱ではないものの、堅牢な上屋構造を想起させる。

各柱穴の規模は（単位cm、長軸×短軸×深さ）、

P1	70×60×40	P2	60×60×40
P3	60×50×20	P4	90×80×40
P5	30×30×35	P6	50×40×30
P7	70×60×20	P8	70×60×40
P9	60×60×40	P10	50×40×40
P11	70×60×30	P12	80×90×50
P13	90×70×40	P14	70×60×50
P15	40×40×30	P16	30×30×20
P17	80×50×40	P18	60×60×80
P19	70×60×50	P20	100×70×40

を測る。

次に柱穴間の距離としては、短辺のP1～P2間が約2.5m、P2～P3間が約2.3mで、P18～P19間とP19～P20間とほぼ対応する。長辺の柱穴間距離は概ね1.6mを基準とするが、P1～P4間が約1.4m、P4～P8間が約1.8mと不規則な配置を示す。

建物跡内部の柱穴として、P5・P6、P9・P10、P15・P16が充てられるが、小規模であり、配置も南北辺のP2・P19とは相応せず、3間間隔である。P5・P6、P15・P16は良好な配置を見せ、建物本体の支持柱としての機能よりも、高床材の支持に重点が置かれた機能が想起されよう。

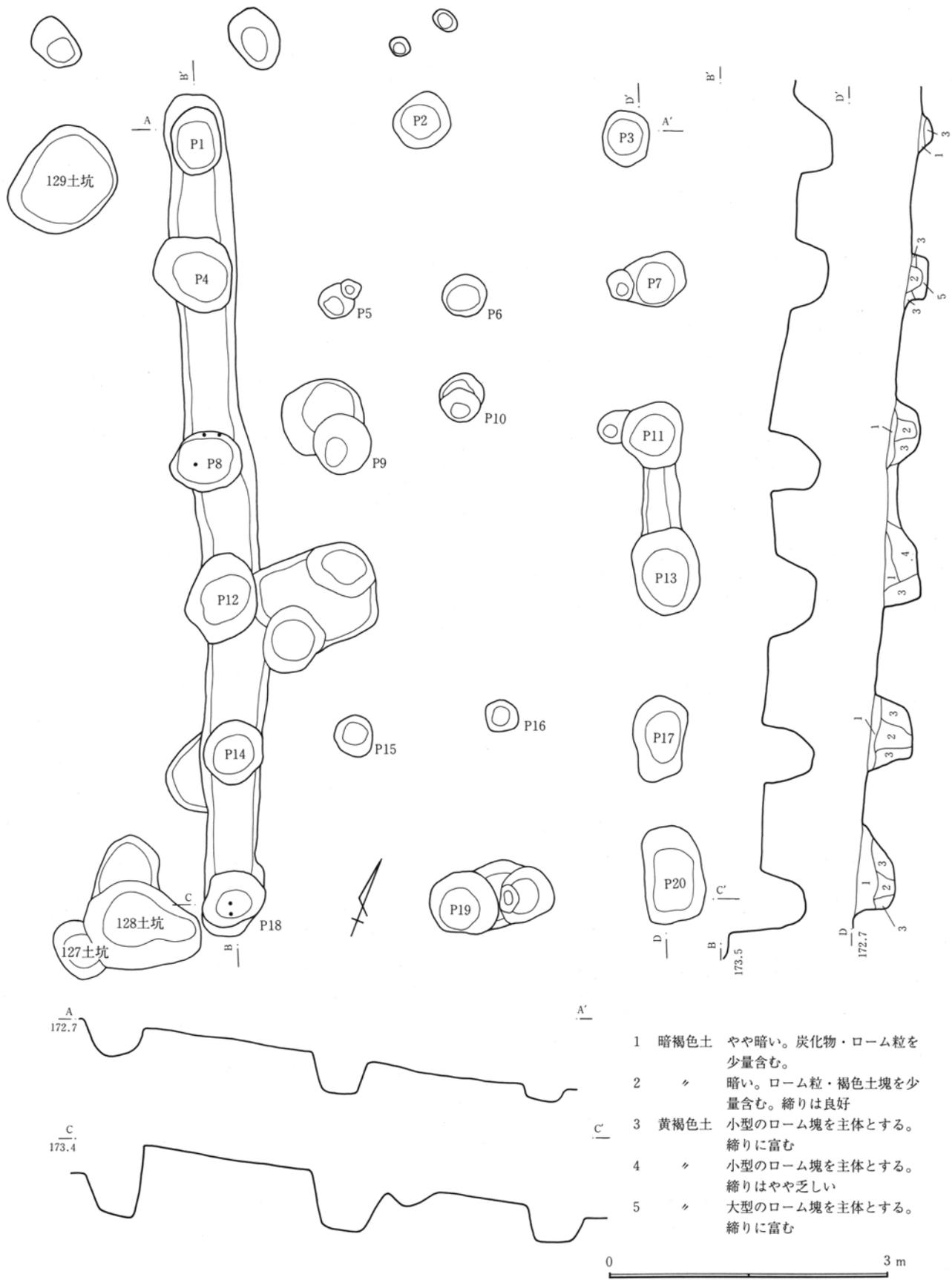
西辺ピット間及び東辺P11・P13間に浅い溝が連結する。断面形は皿状で、若干浅く、掘り込みも緩やかだが、建物に付随する有機的な遺構として捉えられる。柱穴設営時の所産であろうか。

炉・竈施設を示唆する焼土・炭化物の散布は見られなかった。周辺の土坑として、129号坑と128号坑が西辺の南北端で検出されている。129号坑は奈良・平安時代に比定され、配置から本建物跡との関係も念頭に置いたが、本掘立柱建物跡に付帯する施設の可能性は低いものと判断した。

遺物は、P8及びP18等西辺の溝内より出土している。細片が多く辛うじて2個体を図示し得た。

時期は、柱穴埋土及び遺物から、奈良・平安時代の所産と考えられよう。

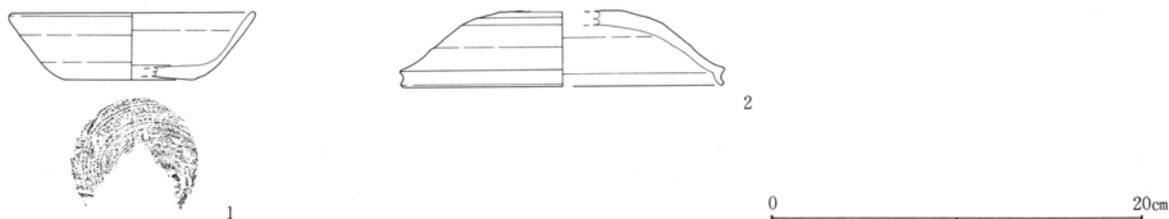
このように、2号掘立柱建物跡は、竪穴住居跡が



- 1 暗褐色土 やや暗い。炭化物・ローム粒を少量含む。
- 2 暗い。ローム粒・褐色土塊を少量含む。締りは良好
- 3 黄褐色土 小型のローム塊を主体とする。締りに富む
- 4 小型のローム塊を主体とする。締りはやや乏しい
- 5 大型のローム塊を主体とする。締りに富む

第304図 2号掘立柱建物跡

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第305図 2号掘立柱建物跡出土遺物

第275表 2号掘立柱建物跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第305図 1 坏 図版 103	口：13.0 高：(3.6) 底：(7.0)	約1/2	①細 片岩粒・砂粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部～体部緩やかな丸みを帯びて一体化する。体部はやや偏平で底径もやや広い。内面見込み部やや不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第305図 2 蓋 図版 103	口：(16.8) 高：— 底：—	約1/4	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	摘部欠損。天井部比較的高く平坦。体部～裾部は緩やかな丸みを帯びる。かえり部は外反気味に直立する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り。

密集する、C～D区東斜面住居群内に占地し、住居跡との重複がなく、大型の建物構造が想起されることから、集落内においても、中心的な存在が充てられる建物である。倉庫等の性格も考えられるが、本書では敢えて性格は付与せず、集落に関連する建物として位置付けたい。

3号掘立柱建物跡

調査区南東部の東側への急斜面地形に位置する。周辺の勾配は強く、丘陵性地形を具現する。

急勾配に反して、周辺の遺構密度は比較的濃密で、本掘立柱建物跡には125号・126号住が重複し、西側には120号住・2号配石遺構が、また東側には1号掘立柱建物跡が軸を一致して近接する。土坑も比較的多く見られ、北側に147号～149号坑が、西には122号坑と124号坑が近接する。

このように、急斜面地形にもかかわらず、遺構が密接に占地する状況は、南側調査区域外に僅かながら広がる緩斜面あるいは平坦面の存在が大きい。おそらく、居住以外の施設の存在が想起でき、竪穴住居跡もある程度は、分布するものと考えられる。

居住を伴わない施設としては、本遺跡西に隣接する黒熊中西遺跡でも検出された、古代寺院跡や付帯

する施設が考えられよう。

3号掘立柱建物は、斜面地形と東側の墓地に伴う攪乱のため、南東部分を大きく逸失している。125号住及び126号住調査の際、重複する土坑群として認定されていた。前述の攪乱坑の存在のため、当初は掘立柱建物跡としては検出されておらず、そのため、土層軸及び土層観察の誤認があり、柱痕の検出は果たせなかった。

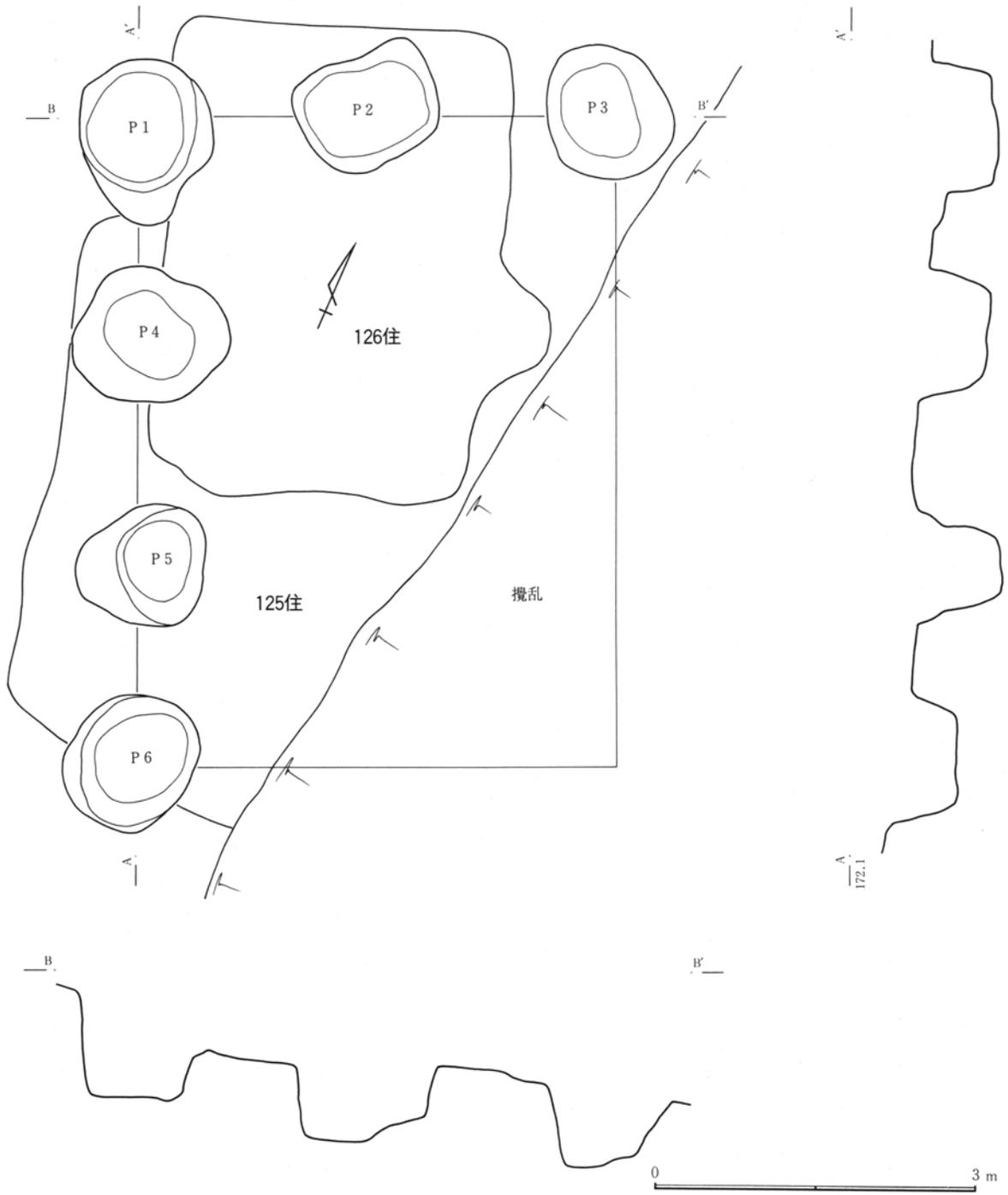
本掘立柱建物跡は、6基の柱穴からなり、長辺約5.7m・短辺約4.2mの主軸を北西に向けた、2×3間の長方形を呈す。攪乱坑に逸失された部分においても、南辺と東辺が想起されよう。

柱穴規模 (単位cm、長軸×短軸×深さ) は、  
 P1 130×120×60      P2 130×100×60  
 P3 120×120×60      P4 150×120×60  
 P5 120×110×80      P6 120×120×60

を測る。概ね径120cm、深さ60cm前後で統一性が看取されよう。掘り込みもしっかりしており、壁の立ち上がりも良好である。

柱穴間の距離も、短辺は約2.1m、長辺は約1.9～2.0mにまとまりを見せる。

このように、柱穴の配列は比較的整然としており、柱穴規模からも、極めて有機的な施設が考えられる。



第306図 3号掘立柱建物跡

## 第8節 配石遺構

本遺跡の調査では、2基の配石遺構が検出されている。2基とも隣接しており、基盤の黄褐色ローム層を削平したテラス状の平坦面に自然石が出土したものである。自然石には、意図的な配置も見られ、かつ奈良・平安時代の土器類も出土していることから、人為的な遺構と判断を加え、配石遺構として位置付けた。

配石遺構の基盤は、方形を基調としたテラス状平坦面である。調査当初は、この方形の平面形から、120号住周辺の数軒の重複住居跡として、あるいは堅穴状遺構として調査を進めた。しかしながら、底面や周辺に大型の自然石が集中すること、柱穴・竈・貯蔵穴、床面が確認されなかったこと、さらに、段差が連続的であり、住居跡重複とは様相を異にすることから、住居跡・堅穴状遺構とは別種の遺構として考えた。

自然石の集中は、大きく2箇所に分かれ、南側の集中を中心に1号配石、北側を2号配石として命名した。自然石の集中箇所周辺には、前述のように段差が連続的に認められ、各々が連結することから、密接な関連が想起された。同時期に存在する施設としても可能性は高い。

しかしながら、本遺跡及び周辺遺跡には、配石遺構と考えられる遺構の存在はなく、集落内の位置付け等の性格は不明である。

以下順次概略を述べる

### 1号配石

調査区中央南のC区南西部の東斜面に位置する。周辺地形は、東側への急勾配を形成するが、特に西側は強い傾斜を見せる。

近接する遺構としては、北側に後述する2号配石遺構、北西に120号住が重複する。また西側には、105号住がやや距離をおいて占地する。尚、本遺構は南側にその段差が延び、未調査部分となっている。

本遺構は、東西に連続する3段の段差からなる。南北長は7mを超え、東西も5m以上の大型の範

囲が対象である。段差の走行は南北で、彎曲を持つ。そのため、全体に不整の印象を受け、規格性は看取されない。しかし、北側で屈曲し北辺に至ると、上位と中位が一致東西への走行を見せることから、段差間は同一意識化に形成されたものと判断できよう。

最も急激な段差は、上位段で約50cmを測る。中位・下位の段差は緩やかであり、傾斜に近い段である。

段差下の底面は、緩やかな東側への傾斜を呈すが、ほぼ平坦面が意識された削平である。尚、貼床・硬化面は確認されなかった。

中位段差下の底面には径70cm程の不整円形の土坑が検出されている。周辺には須恵器大甕の破片がまとまって出土しているが、浅く壁の立ち上がりも弱く、埋土の特徴にも性格を特定する要素は見られなかった。

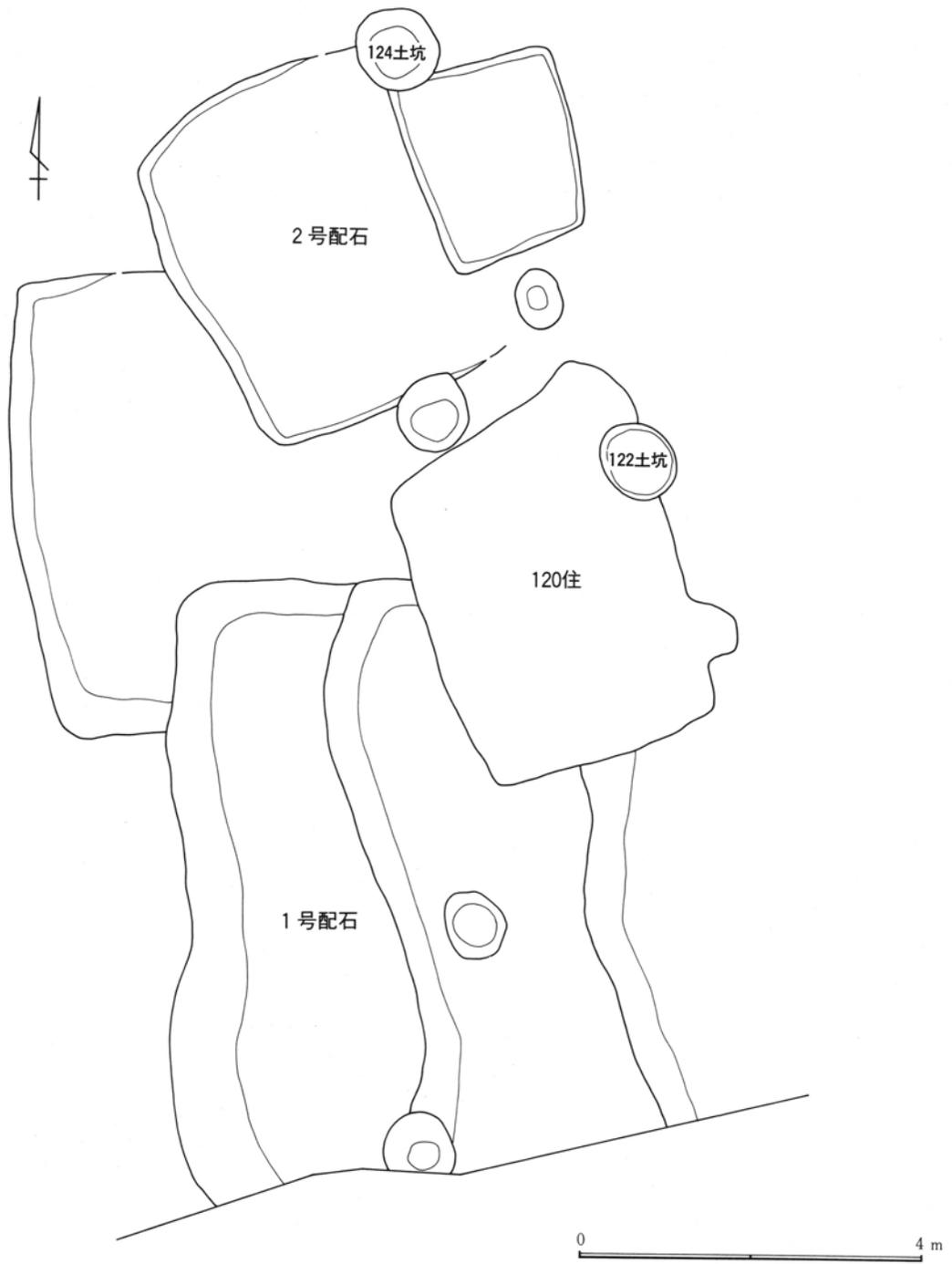
さらに、中位段差の上端部にも同規模の土坑を見るが、本遺構に伴う土坑としても確証性はない。重複の可能性もある。

配石は、上位段差の上下で確認された。上端の配石は、川原石を主体とし、斜面に密着した状態である。まとまった出土ではあるが、配置等には規則性や背後の意図は看取できない。下端の配石は川原石と角礫が集中する。底面に沿った出土で、若干浮いた状態の礫も見られた。上面を揃えた形跡はないが、意図的な集中とも捉えられる。

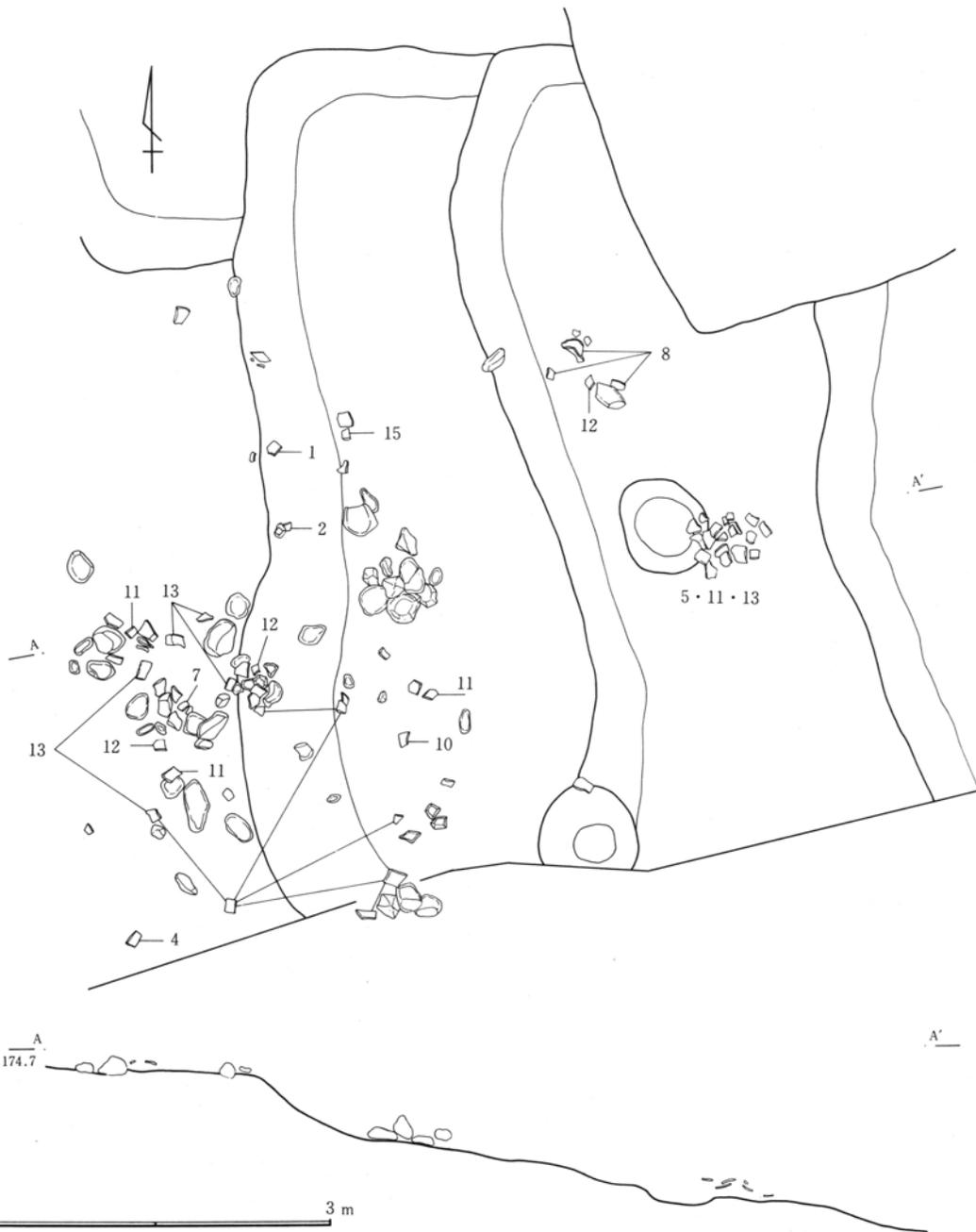
遺構内に焼土・炭化物の集中や炉址等は検出されなかった。

遺物は、配石周辺と前述の中位段差下の土坑東に出土している。配石周辺の遺物は、やや浮いた状態で、土坑東のものも底面より若干浮く。また、配石周辺遺物と土坑東の遺物に接合関係が見られることから、斜面上からの一括廃棄あるいは短期間の流入の可能性が高い。本配石遺構の性格を示唆する遺物とは確定し難い。

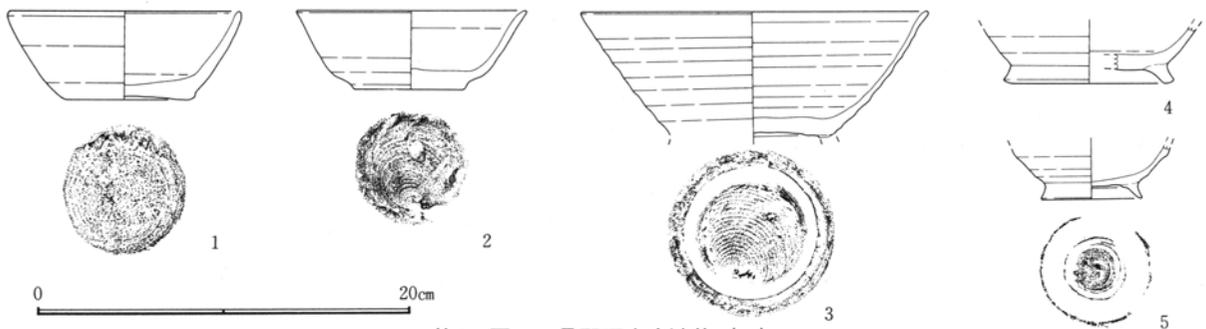
このように本配石遺構は、3箇所の段差と2箇所の配石からなる。時期は恐らく平安時代の所産と考えられるが、性格等の特定は控えたい。



第307図 1・2号配石遺構

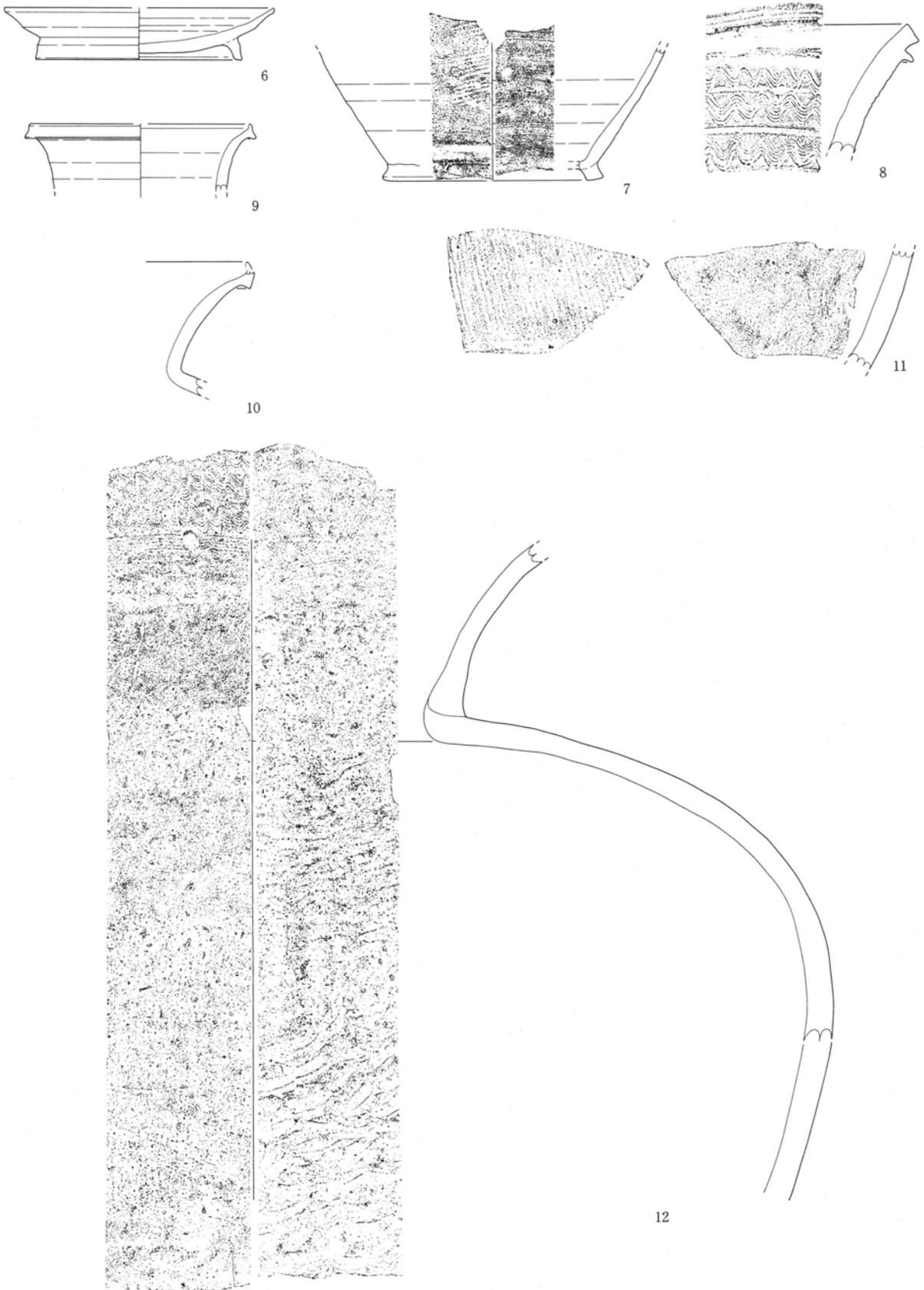


第308図 1号配石遺構



第309図 1号配石出土遺物 (1)

第8節 配石遺構



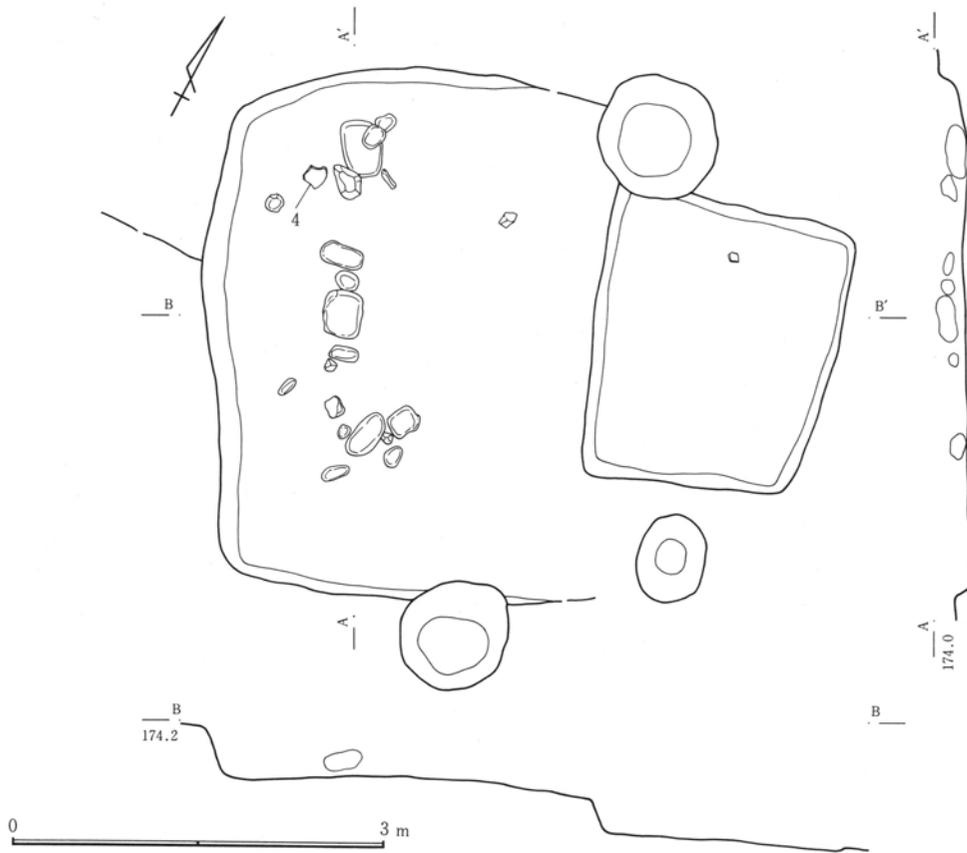
0 20cm

第310図 1号配石出土遺物(2)

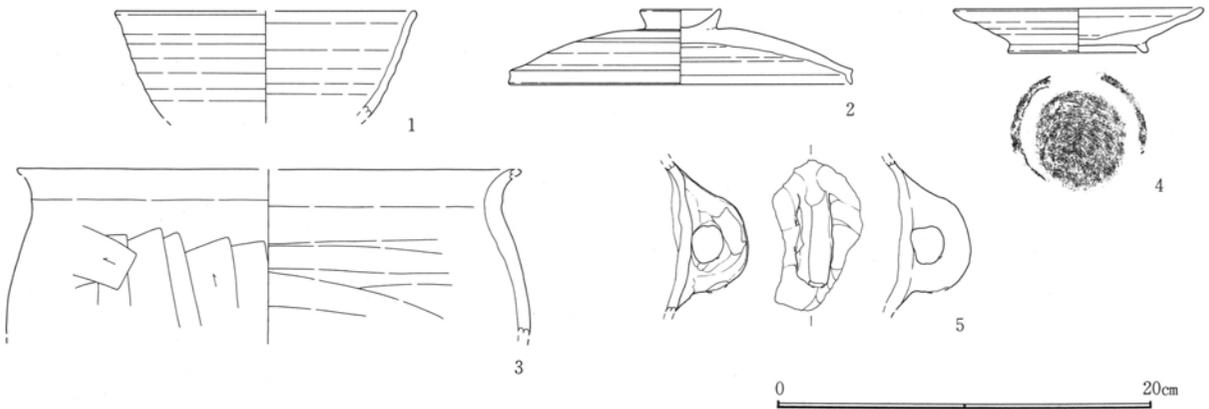
第三章 検出された遺構と遺物

第276表 1号配石遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第309図 1 坏 図版 103	口：(12.2) 高： 4.7 底： 6.6	約3/4	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部～体部僅かな丸みを帯びて一体化する。底部は若干上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第309図 2 坏 図版 103	口：(12.0) 高： 4.2 底： 5.8	約1/3	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部～体部一体化し直線状に開く。下半で彎曲し底部突出の印象を得る。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第309図 3 椀 図版 103	口： 18.3 高： — 底： —	約3/1 高台部欠損	①細 片岩粒・石英 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部は直線状に開く。内面見込み部はやや明瞭。高台は剥落する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第309図 4 椀 図版 103	口： — 高： — 底： (8.0)	底部約1/3	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下半は丸みを帯びて開く。高台は比較的しっかりした作りで開き気味に付される。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第309図 5 椀 図版 103	口： — 高： — 底： 5.2	底部	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④須恵器	小型品。体部下半は内彎気味に帯びて開く。高台は開き、端部は尖り気味。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で1号配石6須恵器盤。
第310図 6 皿 図版 103	口：(18.6) 高： 3.6 底：(14.2)	破片	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③橙色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを持たせる。高台は長く開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部調整後高台貼付。貼付時の撫でが底面全面に及ぶため切り離し技法不詳。
第310図 7 甕 図版 103	口： — 高： — 底：(13.2)	底部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③暗赤褐色 ④須恵器	体部下半緩やかな彎曲を帯びて開く。高台は開く。轆轤整形後外面平行叩き後撫で、内面撫でを施す。
第310図 8 甕 図版 103	口： — 高： — 底： —	口縁部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口唇部段を有す。外反する口頸部には数段の波状文と横位沈線紋が配される。轆轤整形。
第310図 9 甕 図版 103	口：(15.1) 高： — 底： —	口縁部破片	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③褐灰色 ④須恵器	小型甕か。口唇部尖る。口縁部内傾し口頸部緩やかに外反する。右回転轆轤整形。
第310図 10 甕 図版 103	口： — 高： — 底： —	口縁部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部直立し口頸部大きく外反する。頸部の屈曲は強い。
第310図 11 甕 図版 103	口： — 高： — 底： —	口縁部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③ ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩き調整を密に施す。内面青海波状当て目顕著に残る。
第310図 12 甕 図版 103	口： — 高： — 底： —	体部破片	①粗 小礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口頸部外反し、頸部屈曲強い。肩部は張り体部上半に膨らみを持たせる。口縁部は波状文を数段配す。体部外面は平行叩き調整後撫でを加え、内面円環状当て目を残す。



第311図 2号配石遺構



第312図 2号配石出土遺物

2号配石遺構

1号配石遺構の北側に近接して検出された。本遺構より北側も斜面地形が発達し、遺構密度は稀薄となる。前項でも述べたように、東側への傾斜も勾配が強く、このような急傾斜地形を選んで占地する遺構の性格も考えなければならないだろう。

周辺の遺構としては、南側に120号住が近接し、124号坑が北壁に重複する。

本遺構も、1号配石遺構と同様に方形を基調としたテラス状平坦面からなる。やはり調査当初は住居跡としての可能性も含んで着手したが、1号配石遺構同様、居住施設として疑問が持たれ、配石遺構と

### 第三章 検出された遺構と遺物

第277表 2号配石遺物観察表

図 器 種	番号 ( )推定値	法量 (cm) 出土状態	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第312図 碗 図版 104	1	口：(15.7) 高：— 底：—	約1/5	①細 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③褐灰色 ④須恵器	口縁部緩やかに外反し体部中位から下半に丸みを持たせる。右回転轆轤整形。器厚やや薄手。
第312図 蓋 図版 104	2	口：(18.2) 高：4.0 底：4.2	約1/2	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部低く平坦面に環状摘を付す。体部～裾部丸みを帯びて一体化する。かえり部は短く直立する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付。
第312図 甕 図版 104	3	口：— 高：— 底：—	口縁部破片	①粗 片岩粒・石英 ②酸化焰 ③黒色 ④土師器	口唇部欠損。口縁部外反し、頸部強く彎曲する。肩部の張りはなだらかで体部上半に膨らみを設ける。口縁部横撫で、体部縦位篋削り。内面体部は横位篋撫で。器厚やや厚手。
第312図 皿 図版 104	4	口：(13.0) 高：2.4 底：7.2	約1/2	①細 片岩粒・砂粒 ②酸化焰気味 ③灰黄褐色 ④須恵器	口唇部僅かに内彎し体部直線状に開く。高台は短く開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第312図 甕? 図版 104	5	口：— 高：— 底：—	把手	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	甕体部に付される橋状把手。粘土紐貼付後撫でによる整形を施す。使途痕残る。

された。

2号配石遺構は、自然石が集中した、西側の方形状の段差を主とするが、東側の不整形の土坑も関連性を求めたい。

西側の方形状段差は、南北軸長は約4mで1号配石遺構と比してやや小型の規模である。

深さは、約30cmを測り、西壁の立ち上がりは良好で掘り込みもしっかりしている。南壁・北壁とも東側への斜面地形のためか徐々に遺存が悪くなり、東壁は流失したものと捉えた。

底面は東側へ緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦面が意識された削平を呈す。緩やかながら起伏が見られ、貼床・硬化面等は認められなかった。

付帯する施設として、注意を要する遺構は、東南に検出された不整形の土坑が挙げられる。調査当初はこれを貯蔵穴として考えたが、貯蔵穴が竈に隣接する性格から、焼土・炭化物の散布が認められておらず、貯蔵穴としての位置付けは、捉えられなかった。

配石は、底面西寄りに西壁に沿って検出された。ほぼ底面に密着あるいは僅かに浮いた状態の出土であり、本遺構に伴う所産と捉えられた。

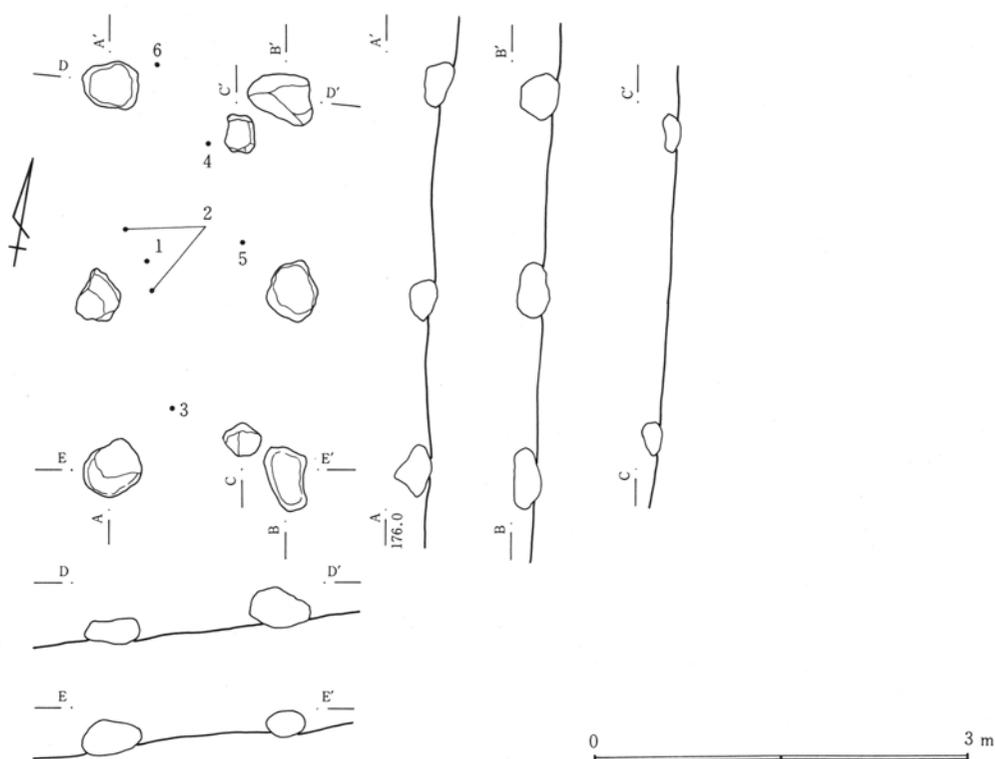
すべて自然石で加工痕等は観察されず、1号配石に比して、やや量的に乏しいが、川原石を主体とし、南北方向が意識された意図的な配置が看取され、列石状の配石と捉えられた。特に、配石中央と北壁際に配された、大型の川原石は上面が平坦であり、作業台あるいは礎石状の機能が想起された。

出土土器は、すべて覆土下層～底面直上で出土している。配石を意識した出土状態ではなく、廃棄行為あるいは短期間の流入と捉えられよう。

このように、本配石遺構は1号配石遺構と同様に、自然石を配した遺構として、時期を平安時代に求めるのみとし、特定の性格付けを避けたい。

以上のように、2基の配石遺構の性格は確定できず、時期を平安時代の所産と考えた。出土した自然石の一部は流入あるいは廃棄行為に伴う例も考えられるが、殆どが意図的な配置が看取され、かつ包括する方形を基調とした、段差状遺構には居住施設としての可能性は極めて乏しい。

本書では、黒熊中西遺跡で検出されたテラス状遺構に近似した形態を重視し、斜面地形に積極的に設営された施設として、様々な可能性を残しておく。



第313図 1号礎石建物

## 第9節 礎石建物跡

調査区南西部のD区西斜面部で検出された。

周辺は、比較的勾配の強い西側への斜面地形が展開するが、本遺構の周囲は、傾斜も緩やかであり、平坦面が意識される。本遺構の東側には、段差が南北に走り、調査所見では人為的削平による段差と観察されている。この削平による平坦面は、本遺構の西側及び北東約8mに広がりを見せ、南側の調査区域外に延長する。幅狭の平坦面といえよう。

ただし、前節で述べた配石遺構周辺に見られるテラス状の平坦面とはやや趣を異にしており、段差は1段のみで、削平にやや消極性が窺われる。

周辺の遺構は、東側に102号住、南側に101号住が近接するが、斜面地形の影響であろうか、密接な住居占地傾向ではない。

本礎石建物跡は、8基の礎石からなる。礎石下にはピット・土坑等の掘り込みを持たず、礎石配列と周囲の平坦面から建物の存在を考えた。

礎石列は、南北に長軸を設け、1間×2間で長辺

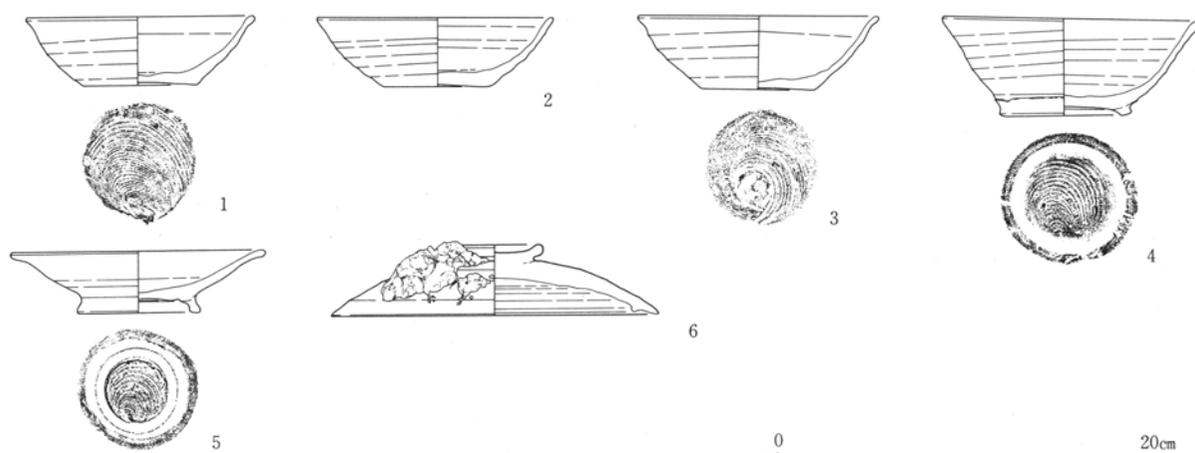
約3m、短辺約1.3mの小型の規模を呈す。長辺の礎石間の距離は約1.5m程の規則性が窺われる。全体に整った形状の平面形である。

礎石上面は、必ずしも平坦ではなく、角礫面を充てる例がある。また、上面は若干の差はあるが、南北方向は、ほぼ同一の高さを以て配される傾向が看取されよう。柱支持面として平坦面は意識されず、高さが重視された様相として位置付けられよう。

東辺礎石列の約20cm内側にも、2基の礎石を検出した。他の礎石に比して、やや小型の礫が使用されており、支柱に要した礎石と様相を異にする。2基の間隔は約2.3mを測り、他の礎石間距離と差が認められる。東辺柱の補助的な柱であろうか。

遺物は、礎石建物内出土の遺物を図示した。削平面直上出土であり、礎石建物構築～廃絶間を具現する遺物と捉えたが、注意すべきは、周辺地形が勾配の強い斜面地形を呈するため、流入の可能性も存在する。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第314図 1号礎石出土遺物

第278表 1号礎石遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第314図 1 坏 図版 104	口：12.0 高：3.7 底：6.0	完形	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に僅かな丸みを持たせる。底部は僅かに突出し上げ底を呈す。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第314図 2 坏 図版 104	口：12.4 高：3.7 底：5.5	約3/4	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部～体部内彎気味に一体化する。下半で彎曲し底部突出の印象を得る。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第314図 3 坏 図版 104	口：12.6 高：3.9 底：6.0	約2/3	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③黒褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。底部は僅かに突出する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第314図 4 埴 図版 104	口：(13.4) 高：5.2 底：6.0	約3/4	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部中位に緩やかな丸みを持たせる。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第314図 5 皿 図版 104	口：13.2 高：3.3 底：6.3	約1/2	①粗 片岩粒・砂礫 ②酸化焰気味 ③暗灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。高台は比較的しっかりした作りで開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第314図 6 蓋 図版 104	口：(17.3) 高：3.8 底：4.6	約1/4	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦で環状摘を付す。体部～裾部丸みを帯びて一体化する。かえり部は鋭く内稜を持つ。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付。体部に窯片著しく付着する。器厚厚手。

本礎石建物跡は、黒熊中西遺跡で検出された古代寺院跡と、削平面に建てられ、礎石を有する建物として共通点を持つ。しかしながら、化粧基壇や盛り土は認められず、瓦の出土も見ないことから、一概に寺院跡としては性格を特定できない。

前節と前々節で述べた配石遺構・掘立柱建物跡は東側斜面部に占地しており、本礎石建物跡とは距離を大きく離す。群在が認められれば、寺院跡等の性

格も想起されるが、ここでは、確証性に乏しい。

削平面を重視すれば、本礎石建物跡の南側に延びる様相が看取され、あるいは南側調査区域外に礎石建物・掘立柱建物の存在が予想されよう。今回は、寺院跡の存在は確定できなかったが、本礎石建物跡南側にその存在を予測しておきたい。

## 第10節 溝

黒熊八幡遺跡の調査では、6条の溝を検出した。そのうち1号溝は、2号民家に付帯する施設として位置付けられるため、本節では扱わず、第14節で後述している。

本節で扱う2～6号溝は、5号溝を除き、台地鞍部にもあたるD区西斜面で確認されている。

本遺跡の調査主体部分は殆どが台地であり、丘陵性の地形を呈す。通常、平地が基準である、平野部の集落遺跡の場合、溝は水利・地境等の性格が想起されている。しかしながら、本遺跡のような丘陵性台地に営まれる集落では、平地の集落と地形的な制約もあり、その性格付けは慎重にならざるを得ない。

本遺跡では、丘陵性地形そのものに、地境あるいは水利に便があり、大規模な溝は、積極的に設営されなかったと考えられ、平地に設営される溝とは性格を異にして考えなければならないだろう。

例えば、環濠集落あるいは囲堯施設のように、特定の集落・遺構の性格を溝で囲む行為は、丘陵性地形のため、必要としなかったようで、地形そのもので独立性が保持されていたものと思われる。

水利に関しては、集落の生業にかなり密接に関連すると考えられる。農耕を主体とする、平地の集落の場合、耕作地に至る水利用の溝は不可欠であり、労働力を要した施設としても位置付けられている。また、生活空間においても、比高差のない集落内では、水利を管理・運営しなければ、衛生面からも不都合が生じるものとする。

一方、丘陵性台地における水利は、その斜面地形を最大限に利用するものと考えられ、生活用水等は、特に溝の利用を果たさなかったものと捉えられよう。生業に関しても、本遺跡の場合、農耕地を平地に求めているものと捉えられ、集落内生業においても、大規模な溝設営が必要なかったものと考えた。

本遺跡で検出された溝の多くが、地境や削平に伴う設営が妥当な位置付けと考えている。また、丘陵性地形の場合、道路状施設として、頂部に至る溝はその性格を充てられよう。本遺跡に西隣する黒熊中

西遺跡では、頂部に占地する古代寺院跡に至る南北の溝のいくつかを道路状の施設として位置付けている。

以下、順次概略を加えるが、1号溝と6号溝に関しては、第14節で説明を加える。

### 2号溝

調査区中央のD区台地鞍部西側の斜面で検出された。斜面地形は西側と北側へ傾くが、勾配は弱く、比較的緩やかな傾斜である。

周辺の遺構としては、56号住・73号住が本溝と重複する。重複関係は、本溝が両住居跡覆土を切る。また、東側には55号住、西側には59号住・72号住が近接する。土坑も東側に112号～114号坑が接しており、遺構密度の高い地点といえよう。

2号溝の走行は、73号住と重複するやや北側で緩やかに彎曲するが、ほぼ南北に向く。深さは、南側が浅く北側が深くなり、地形傾斜に沿った掘削を呈す。北側は調査区域外に延び、南端は浅く途切れる。南側の途切れの延長上に、3号溝と6号溝があるが、両者とも本溝と走行は一致せず、関係性は稀薄と考えた。ただし、両溝とも頂部に走行を延ばしており、道路上の機能を考えた際に、本溝と連結する溝として位置付けられよう。

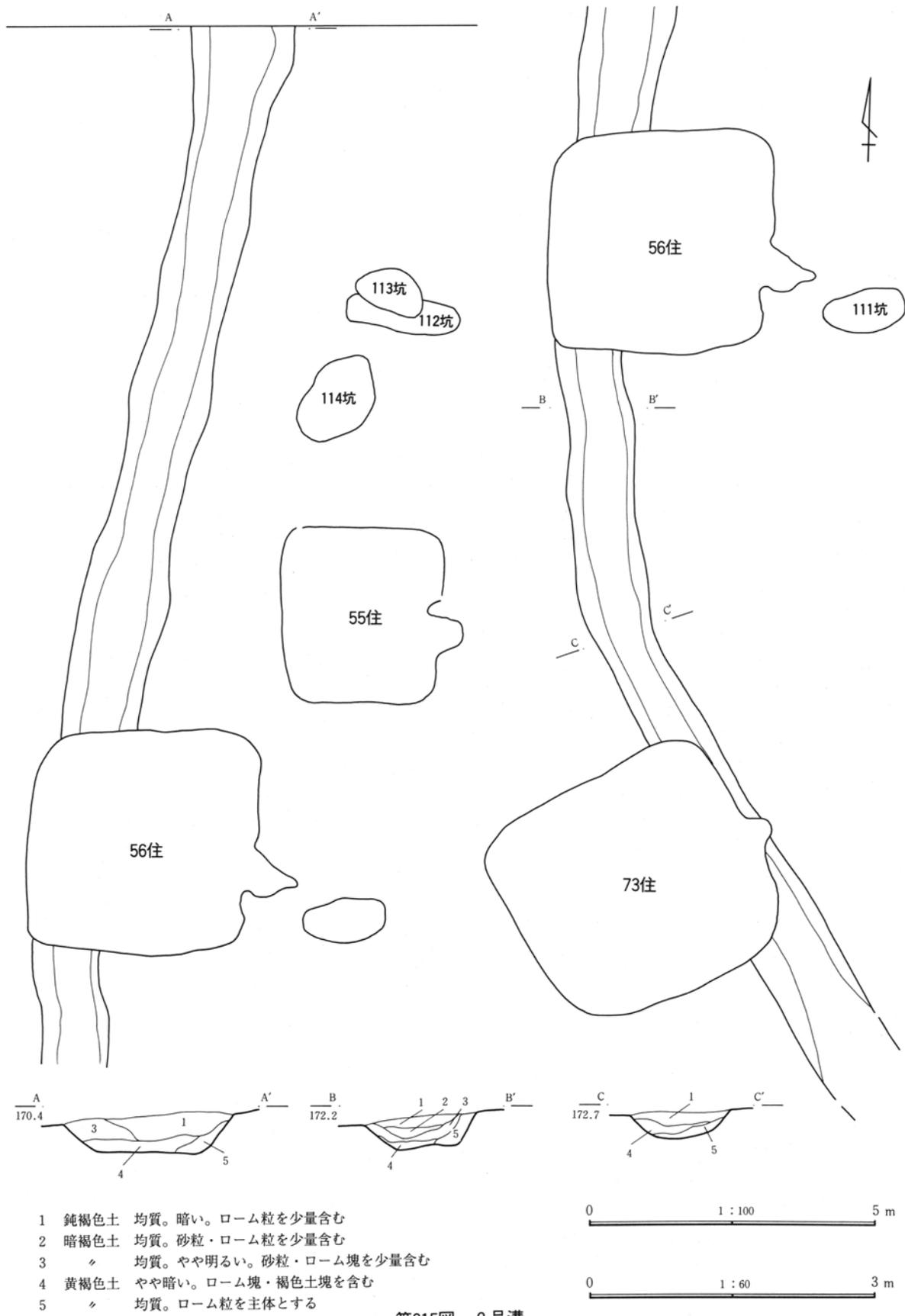
幅は、約110～150cm程でほぼ一定している。壁の平面形は弱い彎曲が見られ、直線的ではない。

溝底面は、平坦面が意識されるものの、凹凸が顕著で、壁の立ち上がりもやや緩やかである。

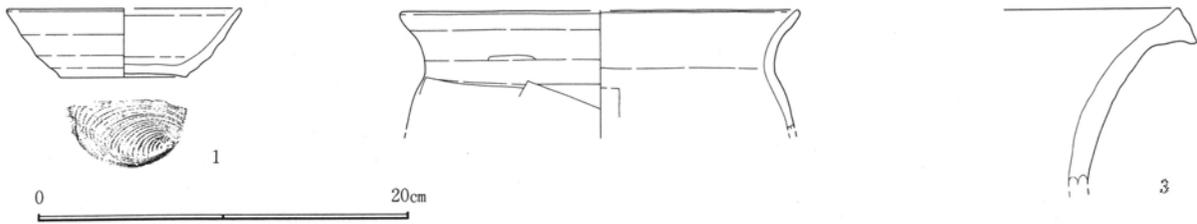
深さは、30～40cmでやや浅く、断面形状は皿状といえよう。

埋土は、比較的均質な暗褐色土を基調としており、砂層あるいは鉄分等水利を示唆する土層は得られなかった。また、埋土上層は若干ながら硬く締まっており、この硬化面は、南北に連続的に認められている。

遺物は埋土中より細片が多く出土したが、図示に堪え得る破片は3点のみである。一括性には乏しく、周辺住居跡からの流入の可能性が高い。



第315図 2号溝



第279表 2号溝遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第316図 1 1 坏 図版 104	口：(12.2) 高： 3.7 底： 6.7	約1/3	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口縁部～体部ほぼ直線状に一体化し開く。下半は緩やかに彎曲し底部突出の印象を得る。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第316図 2 2 甕 図版 104	口：(21.0) 高： — 底： —	口縁部破片	①細 片岩粒・砂粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部上位内彎気味に開き下位は直立する「コ」字状口縁甕。頸部は緩やかな彎曲を呈し肩部の張りはやや弱い。口縁部横撫で上位と下位で強く凹線状となす。体部外面横位篋削り、内面横位篋撫で。
第316図 3 3 甕 図版 104	口： — 高： — 底： —	口縁部破片	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部内傾し、口頸部は緩やかに外反する。轆轤目弱い。右回転轆轤整形か。

以上のように、2号溝は、水利の痕跡を見いだせず、また、地境としての機能も捉えきれず、その要素は極めて薄いものと考えられよう。

本溝と走行は一致しないが、南側に近接する3号溝と6号溝の存在を併せて考えると、台地頂部に向かう南北走行の溝であり、道路状の施設としての位置付けも可能である。台地鞍部を頂部に至る導線は、台地を登坂する線として、最も妥当な線である。

実際的に、現道もほぼ同等の導線で頂部に至っており、本溝の取る走行は、道路として良好な位置・方向を目指した線として考えた。

2号溝は、台地鞍部に設けられた道路上施設の痕跡として性格付けが果たせよう。

時期は、重複する各住居跡を切ることから、平安時代以降の所産と捉えたい。

### 3号溝

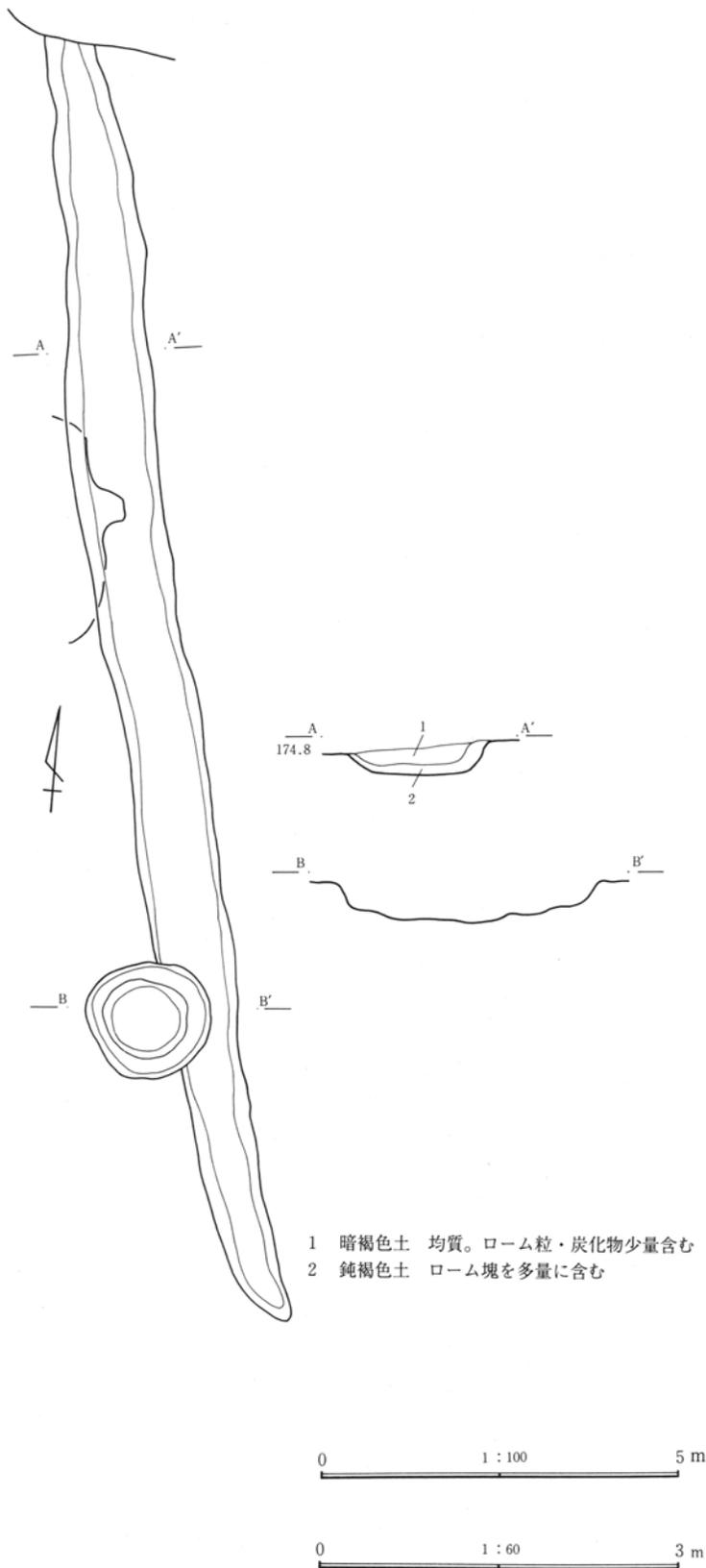
調査区中央やや西よりの台地鞍部西側に位置する。周辺は、緩やかな北側への斜面地形で、比較的平坦面に近い安定した地点である。ただ西側に至ると、徐々に斜面地形が強くなる。

周辺の遺構としては、107号住と108号住が重複する。107号住は溝中央で、108号住は溝北端で重なる。重複関係は、両住居跡とも本溝に切られる。その他では東側に98号住が近接し、さらに6号溝が南北に走る。また、前述の2号溝南端が北側に近接し、北へ延びる。遺構密度は比較的高い。

走行は、2号溝と同様に南北方向を基準としているが、南側で彎曲する2号溝に比して、本溝は直線状に延びる。尚、南端は4号溝北でとどまり、全長約18m程の短い溝となっている。

幅は、1m前後で南北端は狭くなるが、中位においてはほぼ一定の幅を保つ。

深さは、北側への傾斜に沿って徐々に深度を増すが、平均的には約20～30cmと浅く、断面形状も皿状を呈するものである。



第317図 3号溝

溝底面は、全体的には平坦面を築くが、凹凸も各所に見られ不連続な印象を得る。壁の立ち上がりも弱く、緩やかである。

埋土は、暗褐色土を基調としており、2号溝との共通性は認められる。ただし、2号溝で看取された埋土上層の硬化面は、本溝では確認できなかった。水利に供された特徴である。砂層・鉄分包含層も観察されていない。

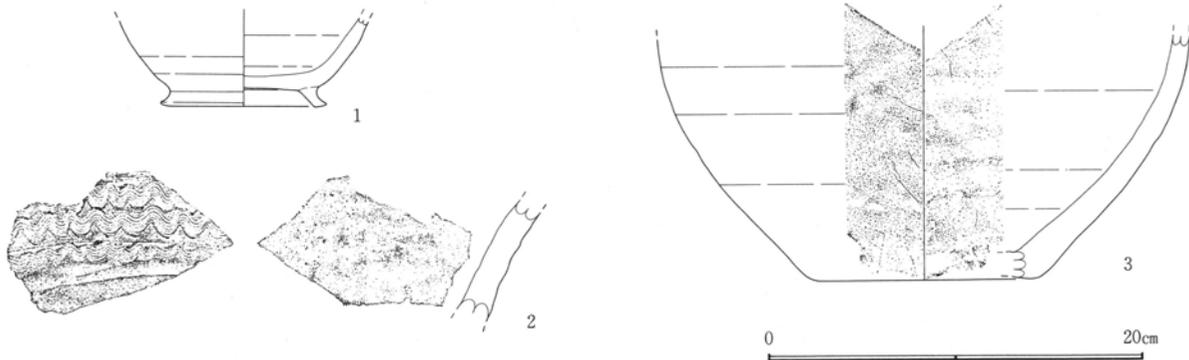
また、溝南側で西壁と重なり円形の土坑が検出された。溝に付帯する設備が単なる重複か判然としないが、付帯設備としての可能性も考えておきたい。

遺物は、少量が出土した。すべて埋土中であり、小破片を主体としており、遺存状態は良くなく、溝の性格を特定し得る出土状態ではない。3点を図示し得たが、斜面地形あるいは重複関係から、周辺住居跡からの流入も可能性が高い。

このように3号溝は、2号溝の延長上にあるながら直線状をなし、2号溝との関係性は確定し難い。しかしながら、台地鞍部の走行を重視すると、2号溝と同様に道路状施設としての性格が最も妥当な理解と考えられる。

時期は、住居跡との重複から、平安時代以降の所産としたい。

調査所見でも、2号溝と別個の溝として、観察が加えられており、2号溝の南東への彎曲と6号溝の北東への屈曲は、同一の溝とするには不自然であり、2号溝の消長する箇所で見切れるものと考えたい。つまり、2号溝・3号溝・6号溝は、別の溝でありながら、走行が南北方向で、ほぼ同一規模で設けられる共通性を持つ。



第318図 3号溝出土遺物

第280表 3号溝遺物観察表

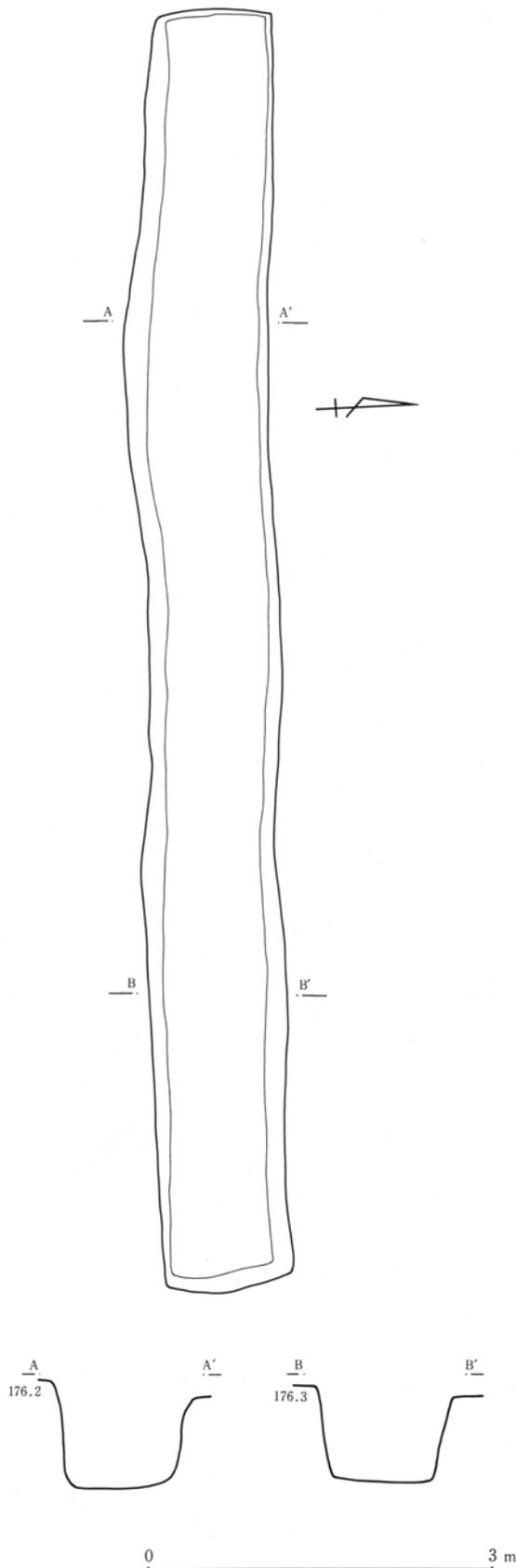
図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第318図 1 壺 図版 104	口： — 高： — 底： (7.6)	底部破片	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下半緩やかな丸みを帯びて開く。高台は開き気味に付される。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部器厚は厚く量感に富む。
第318図 2 甕 図版 104	口： — 高： — 底： —	頸部破片	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕口頸部破片。外反する形態。数段の波状文が施される。内面撫で。轆轤整形。回転方向不詳。
第318図 3 甕 図版 104	口： — 高： — 底： (11.0)	体部～ 底部破片	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下半は緩やかに丸みを帯びて開く。膨らみは恐らく体部中位に設けるのであろう。内外面とも丁寧な横撫でを施す。

道路状の施設として、2号・3号溝の性格を類推したが、6号溝も同等の性格を有するものと考えれば、6号溝と2号溝の接点は、道路上施設における分岐点として捉えられよう。2号溝によって、頂部を目指した導線が、台地鞍部で分岐し、一方の3号溝は鞍部を直線状に登り、他方の6号溝は地形変換点周縁に沿って登る様相が看取されよう。

詳細な時期は特定できないが、平安時代以降であるが、埋土の特徴は近世ではない。おそらく、平安時代後半～中世に至る所産と考えられ、頂部あるいは頂上部に何等かの施設あるいは集落が営まれた可能性を示唆したい。施設としては、東斜面で検出された1号・3号掘立建物跡や西斜面の礎石建物跡さらに、頂部平坦面に予想される寺院跡様の施設が想起されよう。

本書では、2号・3号・6号溝による台地鞍部における導線を重視し、この3条の溝に道路上施設と

しての機能を付与し、走行の目指す頂部およびその周辺に、大型の施設の存在を予測した。しかしながら、この予測はあくまでも、溝の走行のみを念頭においた不確定な要素を多分に含み、確証的ではない。今後、周辺遺跡特に本遺跡南側に調査の手が及んだ際に明らかになる要素であり、将来的な希望を多く含む。



第319図 4号溝

#### 4号溝

調査区中央D区東側で検出された。周辺は緩やかながら西側と北側への斜面地形が続き、頂部の平坦地形と鞍部平坦地形の中間点にあたる。

傾斜地形のためか、周辺の遺構は稀薄であり、重複はみられず遺構単独の検出が多い。

近接する遺構としては、東側には99号住、西側に100号住・103号住、また北側には3号溝南端が近接する。

4号溝は、走行を東西に向ける。他の溝とは異なり、地形に反する走行である。東西両端は、強く立ち上がり収束する。東西長が約11mの短い溝で、長方形の土坑状を呈す。

溝幅は、約1.1m前後ではほぼ一定している。壁は、直線状に設けられるが、僅かな彎曲がみられる。

深さは約80cmを測り、壁の立ち上がりも直立状をなし、しっかりした掘り込みを呈す。

溝底面は、僅かな凹凸が見られるものの、ほぼ平坦面を築き、安定した様相である。

埋土は、ローム塊を含む明褐色土を主体とした締りの乏しい土層を主体としており、人為的な埋土状態を示していた。

遺物は出土していない。

4号溝は、台地傾斜に沿わず、等高線に沿った走行を見せる。このことから、本溝の性格が水利には求められず、また、2号・3号・6号溝のような道路状施設としても位置付けられない。

本溝は、土坑状の形態であり、溝としての分類も躊躇する形状である。ただ、掘り込みはしっかりしており、直線状の走行を加味すると、意図的な溝設置が想起されよう。

土坑状の形態としっかりした掘り込みから、貯蔵施設としての機能が充てられるが、反面、約11mの長さを要する貯蔵対象物を指摘できない。

あるいは、台地を横断する走行から、根切り溝としての機能も考えに入れておきたい。

時期は、埋土の特徴から近世～近代の所産と捉えた。

5号溝

調査区南東部の北東側への急斜面地形に占地する。周辺の勾配は強いが、東側の谷地形に至ると比較的緩やかな傾斜となる。

周辺の遺構は、地形に反して比較的多く、本溝にも1号掘立柱建物跡が重複する。新旧は不明である。

また、東側には123号住・117号住・118号住が、南側には123号住・124号住が近接する。

走行は、南北を向く。傾斜に沿った走行である。北端は緩やかに立ち上がり、南端は斜面地形のため消長する。ただ、比高差は大きくなく、南北端は約30cm程度である。

溝幅は、約60~120cmと北側が狭小で、南側は徐々に幅広となる。壁平面形も彎曲が見られ不連続な印象を得る。

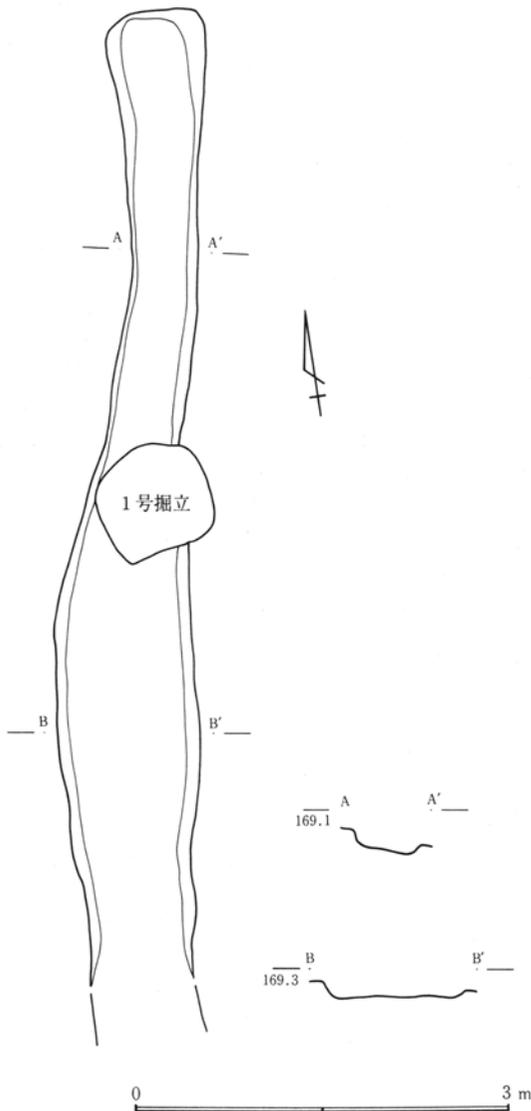
深さは、約10cm程度で浅く、壁の立ち上がりも緩やかである。断面形状は皿状といえよう。

溝底面も、平坦面は意識されるものの、凹凸が顕著で、不規則な掘り込みである。

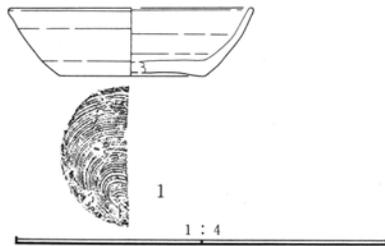
埋土は、明確な土層観察を果たし得なかったが、調査所見では、暗褐色土を基調としており、周辺遺構との差が見られなかった。砂層・鉄分包含層は確認されていない。

遺物は、埋土中より数点の土器片を見たが、殆どが細片で、図示し得た個体は須恵器坏1点のみである。本溝に帰属する遺物とは考えられず、流入と捉えられよう。

本溝の性格は、他の溝とは異にするようだが、明瞭な位置付けは果たし得ない。時期は、埋土の特徴から、奈良・平安時代に比定したが、1号掘立柱建物跡との新旧も把握できなかった。



第320図 5号溝



第321図 5号溝出土遺物

第281表 5号溝遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第321図 1 図版 104	口：(12.8) 高：(3.6) 底：(7.5)	約1/4	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部~体部内彎気味に一体化する。底径やや広く若干上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整。

## 第11節 水田址

調査区東端のA区低地部分で検出された。浅間B軽石（As-B）下の水田址である。

A区は、調査主体となった台地部分（B～D区）東端の崖状の急斜面地形を経た沖積地を主体とする。沖積地は、南側にかけて徐々に標高を増し、谷頭相当地点に、現在も溜池が存在している。また、東側は黒熊栗崎遺跡西端にあたり、丘陵性の台地が展開する。本遺跡同様急斜面地形によって、台地と低地が画される地形形状である。北側は、この沖積地が発達し、現在も水田地帯として営まれており、周辺集落の重要な生業となっている。

調査は、A区における試掘資料を元に、浅間B軽石下の水田址の検出を目的として行った。沖積地ではあるが、本遺跡台地部分と黒熊栗崎遺跡台地部分に挟まれた狭小な低地ともいえるため、浅間B軽石の確認は果たし得たとしても、水田址の確認には疑問が持たれていた。

また、A区西端には水路が南北に走るように、各所で湧水が見られ、湧水対策及び安全対策に関しては万全の体制が望まれた。

調査の結果、東西の台地傾斜は沖積地と目された地点にかなり嵌入しており、水田耕土として必要な粘質土の堆積する範囲は極狭い範囲の確認となった。しかし、褐灰色粘質土を基盤とする、畦畔が狭い範囲ながら検出され、浅間B軽石を含む浅い溝も東側で見られたこともあり、水田址として認定した。

畦畔は低く、遺存状態は不良である。僅かながらの高まりを畦畔と考え、水田区画を確認した。区画は方形を基調とするが、台地傾斜部分等は地形の影響が不整形を呈す。比較的遺存状態の良好な中位の水田区画は約5×5m規模の大型の区画も見られた。

各区画には、畦畔の途切れが検出され、水口として捉えたが、規則性は看取されない。遺存状態の悪い畦畔に関しては、数箇所途切れを見る結果となり、全てを水口とするには確証性に乏しい。

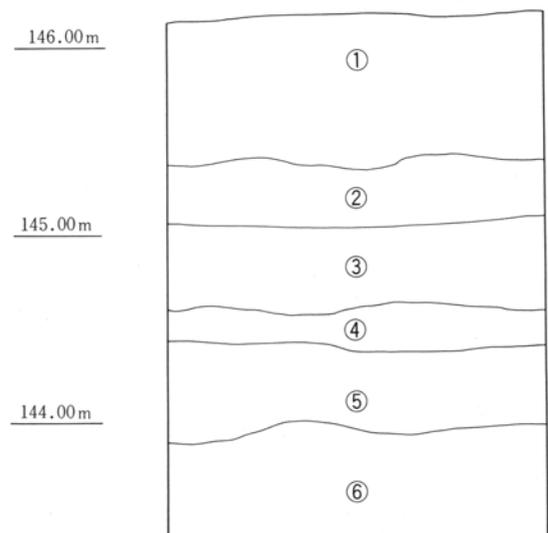
溝は、東側の黒熊栗崎遺跡台地端部で検出された。浅い溝ながら、浅間B軽石を埋土としている。断面

形状は皿状で、壁の立ち上がりも緩やかである。走行は台地形状に沿って、南北に走る。おそらく、水田耕作における給排水に利された溝と考えられよう。

以上のように、黒熊八幡遺跡における浅間B軽石下水田は遺存状態も不良で、また、花粉分析・プラントオパール分析においても、積極的な水田跡としての確証を得ない。しかしながら、数区画の面は低いながらも明瞭な畦畔で画されており、水田址としては確定できよう。

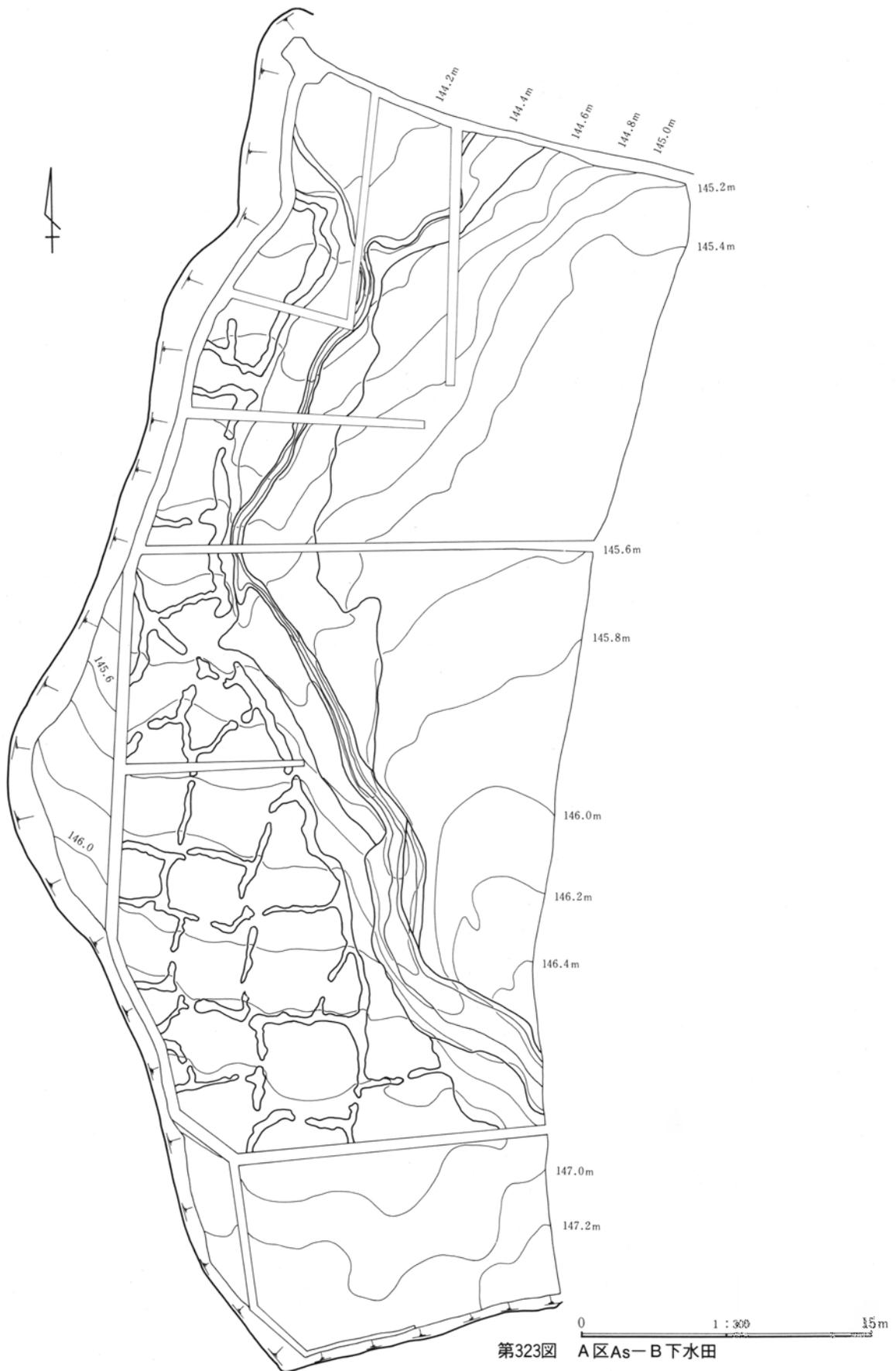
水田址の延長は、北側の沖積地にも広がりを見せるものと考えられ、当時の耕作の主体は、北側沖積地に求められるものと捉えた。

- ① 表土層 現耕作土層盛り土
- ② 旧表土層 褐色を呈し、締り乏しい
- ③ 暗褐色土 やや粘質で、As-Bを混在する
- ④ 浅間B軽石層 As-B主体層。地点によっては塊状の堆積を示す
- ⑤ 褐灰色粘質土 耕土
- ⑥ 灰色粘質土 多量の礫を混入する。



1:40

第322図 A区As-B下水田土層柱状図



## 第12節 出土古瓦

本節では、調査で得られた平安時代に比定される瓦類を一括して報告する。瓦そのものの詳細は図及び観察表を参照していただきたいが、ここでは、瓦出土地点に注意を払い、本遺跡における瓦分布域を考えてみたい。

本遺跡における出土古瓦は、住居跡内の出土が目立つ。おそらく、竈構築材として再利用された例として位置付けられよう。

通常、瓦の出土は、周辺に寺院跡及び郡衙等の普遍的な集落とは性格を異にする施設に使用される傾向がある。実際に、西隣の黒熊中西遺跡では、礎石建物を付帯する平安時代の寺院跡に伴って多量の瓦が出土している。また、東に接する黒熊栗崎遺跡南側でも周辺で採取される瓦から、塔之峯廃寺の存在が示唆されている。

このように、周辺遺跡の様相として、瓦の出土は古代寺院跡の存在を窺わせており、本遺跡の瓦出土様相も、充分その予測に値しよう。

しかしながら、本遺跡及びその周辺遺跡南の、丘陵性山地における瓦・須恵器窯址群の群在する様相は、第Ⅱ章第2節で述べたとおりであり、当地域は、

瓦生産地と至近距離でもある。瓦窯址群としては、金山窯跡・滝の前窯跡は調査・研究の手がおよび分析の俎上に乗っている。

黒熊八幡遺跡の性格は、古代瓦を出土する集落として、古代寺院跡の存在を示唆し、寺院併設型集落としての位置づけは充分可能だが、瓦窯址群の存在から、窯跡群からの持込みも微細な事柄ながら、注意事項として念頭におくべきだろう。

本遺跡出土の古代瓦は、寺院跡等の施設の屋根材として、帰属し得る出土状況ではない。しかし、前述のように、調査区域外に瓦葺きの施設が存在する可能性はあり、確定性は乏しいまでも、存在を類推する傾向は提示したい。ここでは、瓦の出土分布状況から、瓦葺き施設の存在を推定してみたい。

黒熊八幡遺跡より出土した古代瓦は、調査区全域

より出土している。奈良・平安時代の住居跡より出土した例としては、12住・22住・23住・31住・44住・66住・92住・95住・101住・104住・105住・109住・117住・118住・126住・131住である。また、1号配石遺構と2号溝からも出土を見る。遺構外では、台地頂部およびC区南東部の谷部分周辺に出土が集中する。瓦を出土した住居跡は、C～D区東斜面住居跡群及び緩斜面住居跡群に見られるが、特徴として、台地頂部周縁を囲む形状で出土を見る。調査区内の標高の高い地点で検出された住居跡に瓦の出土が顕著である。

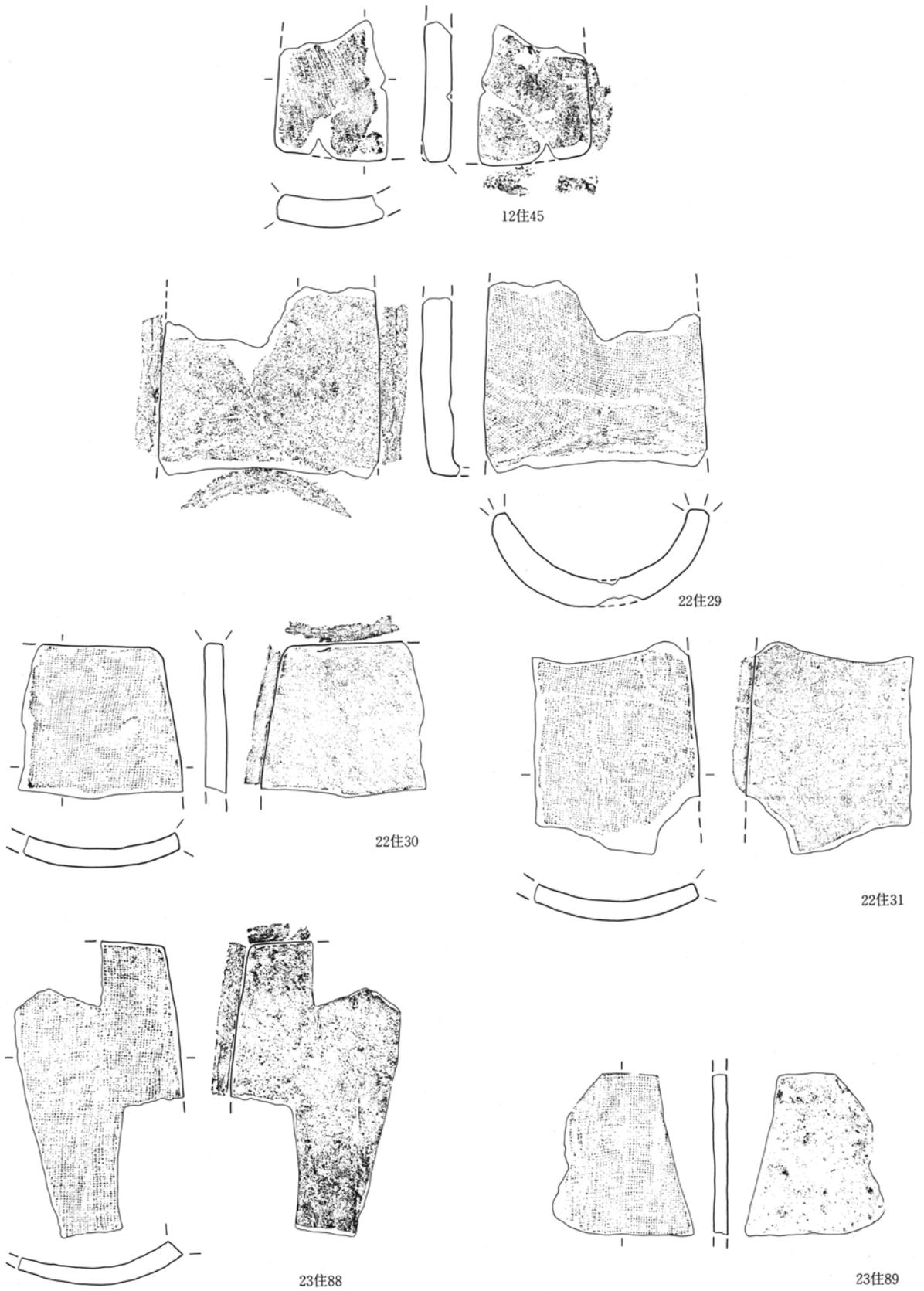
多くは図示していないが、遺構の帰属し得ない瓦の出土もグリッドに置き換えると、台地頂部～斜面際に集中する傾向が看取された。

このことから、本遺跡で検出された住居跡出土瓦は、台地頂部周辺を主体として、採取されたと考えられる。

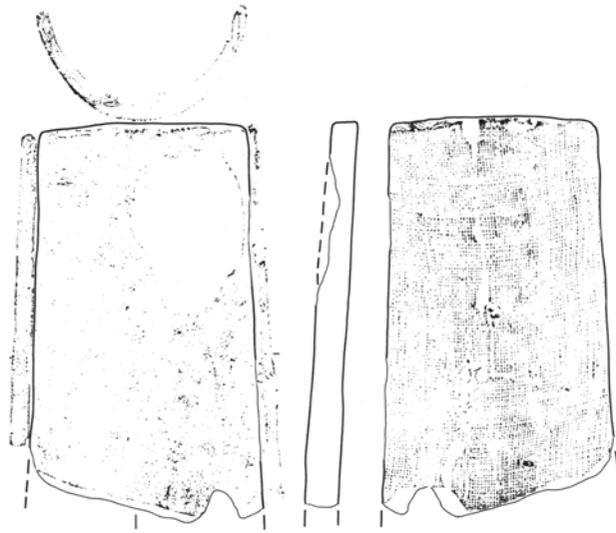
実際に、台地頂部の調査区域外ではあるが、瓦が集中的に表採される地点があり、地形的にも周辺の急斜面地形に比して、やや緩やかである。当地点に瓦を葺く施設が存在が想起できるのではないだろうか。また、西側斜面の1号礎石建物跡や、東斜面に占地する1号・3号掘立柱建物跡周辺の住居跡やグリッド遺物にも瓦が見られ、南側の調査区域外に、この建物跡と連関する施設を推定したい。

つまり、黒熊八幡遺跡では瓦を葺く施設存在は、南側調査区域外に求められ、その一部が礎石建物や掘立柱建物と位置付けたい。この場合、礎石建物跡・1号・3号掘立柱建物跡周辺に濃密な瓦出土を見ない事実から、これらの建物跡は瓦葺きではなく、板葺き・茅葺きの建物であり、瓦葺き建物の付帯設備として捉えておく。

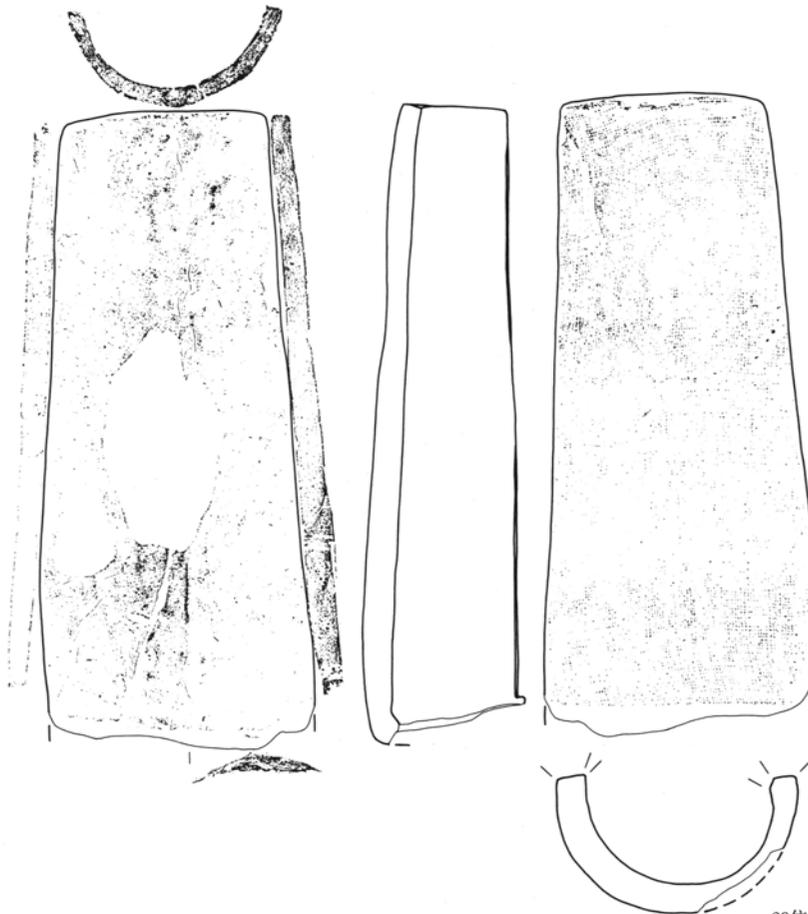
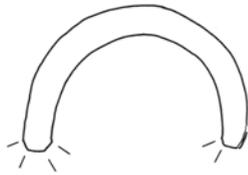
瓦葺きの施設を、寺院跡と断定はできないが、黒熊中西遺跡や黒熊栗崎遺跡（塔之峯廃寺）の在り方から、黒熊八幡遺跡においても、平安時代に比定される寺院跡を包括する集落を類推しておきたい。



第324図 出土古瓦 (1)

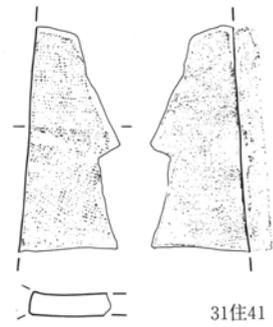
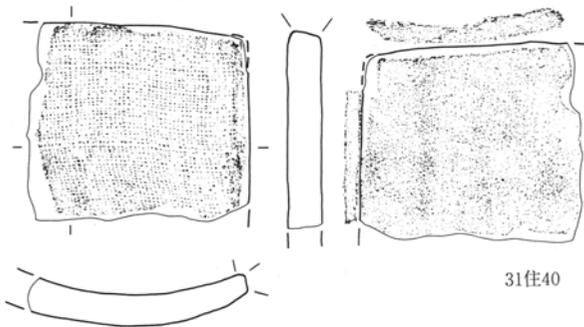
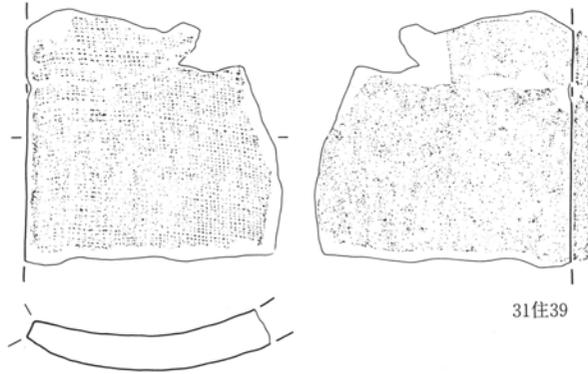
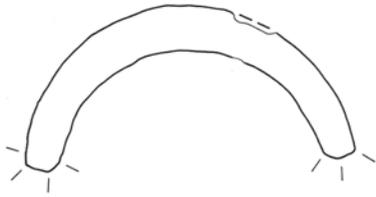
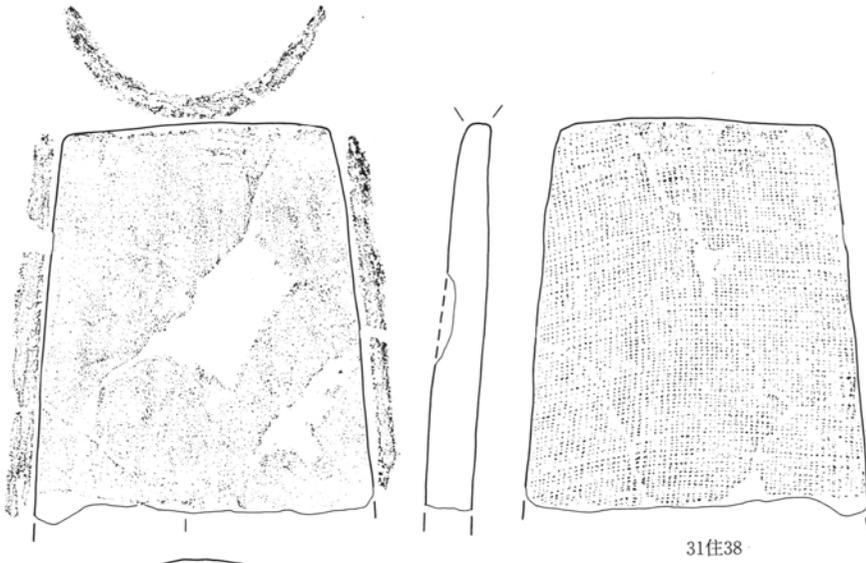


23住90



23住91

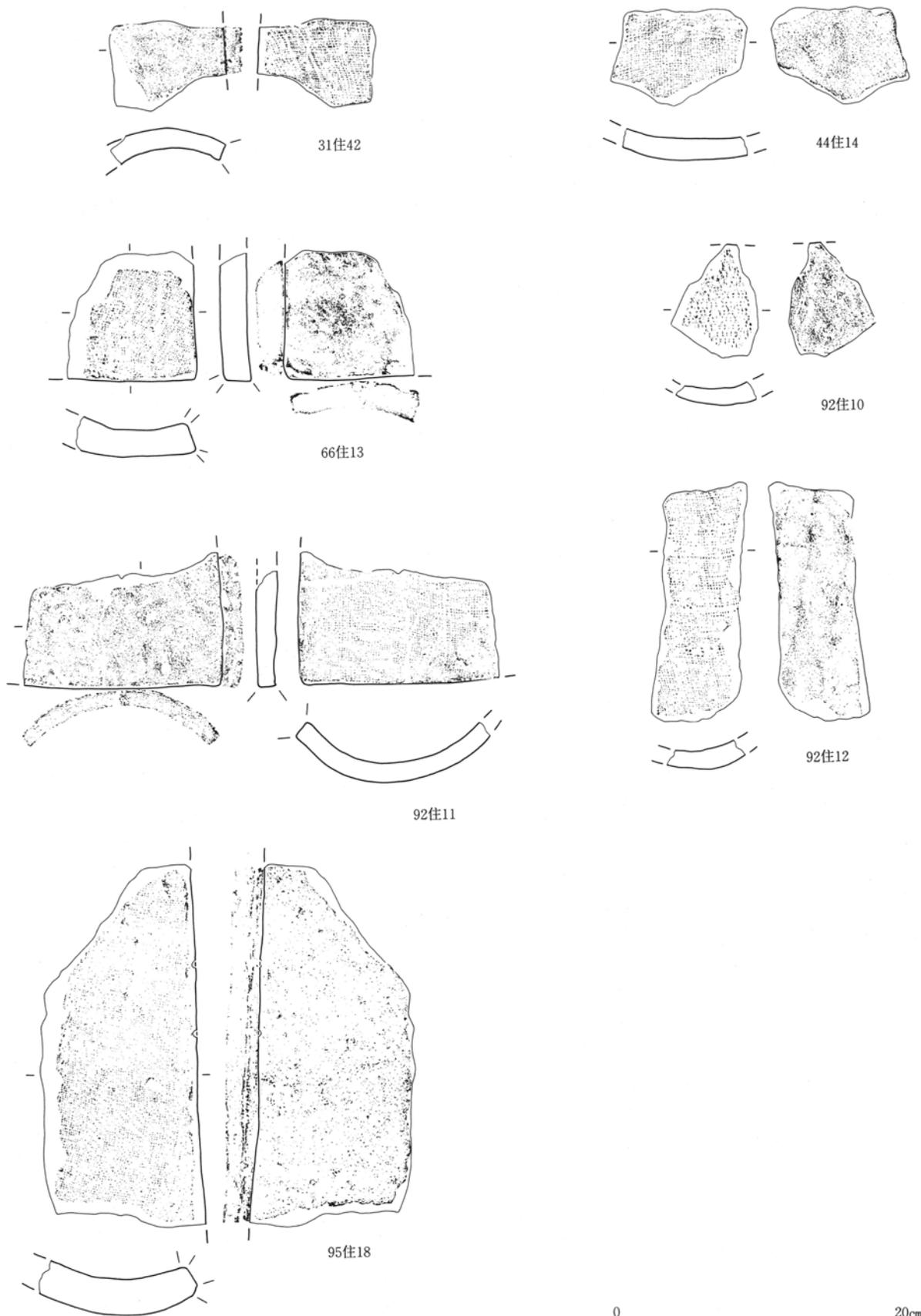
第325図 出土古瓦（2）



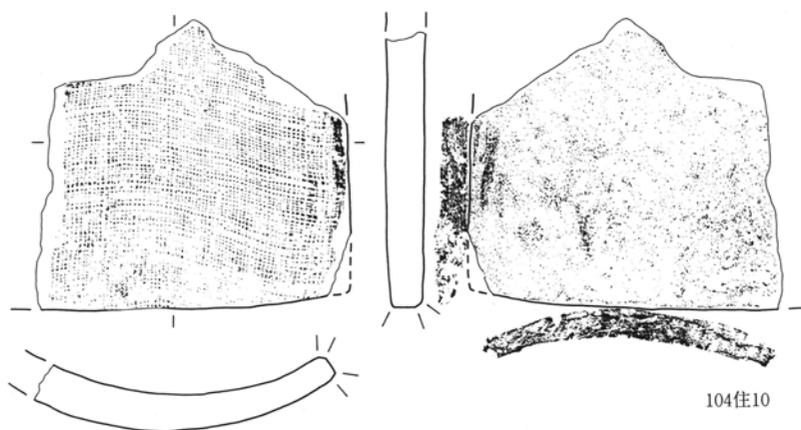
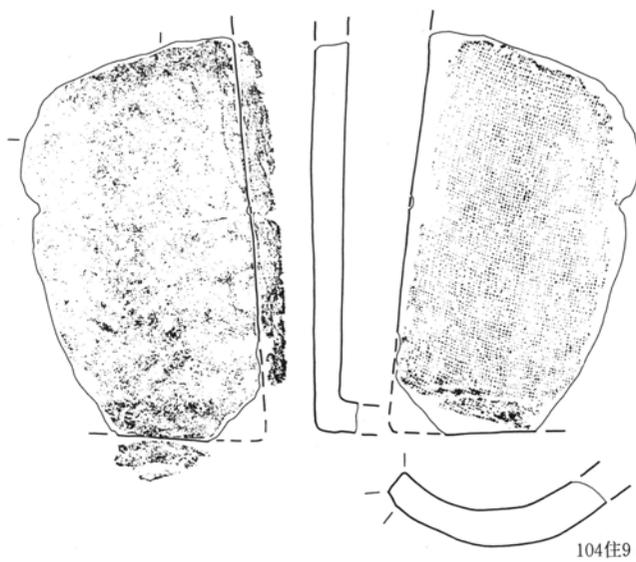
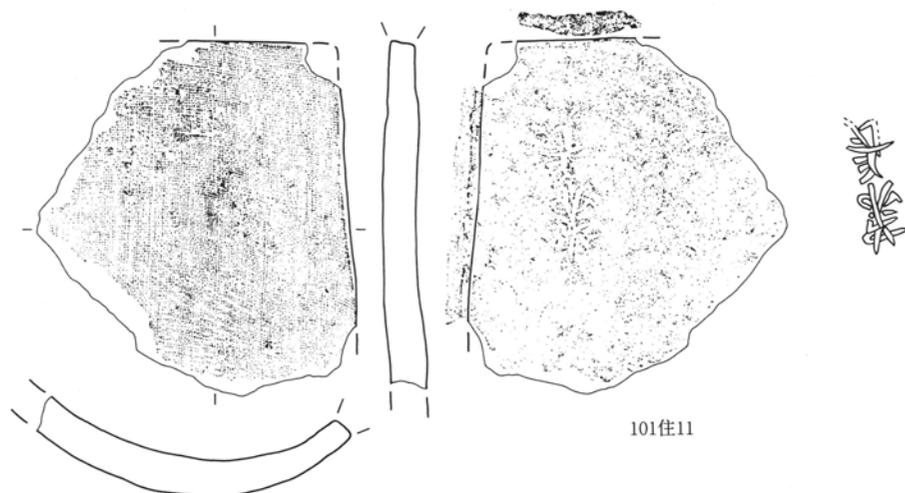
0 20cm

第326図 出土古瓦 (3)

第三章 検出された遺構と遺物

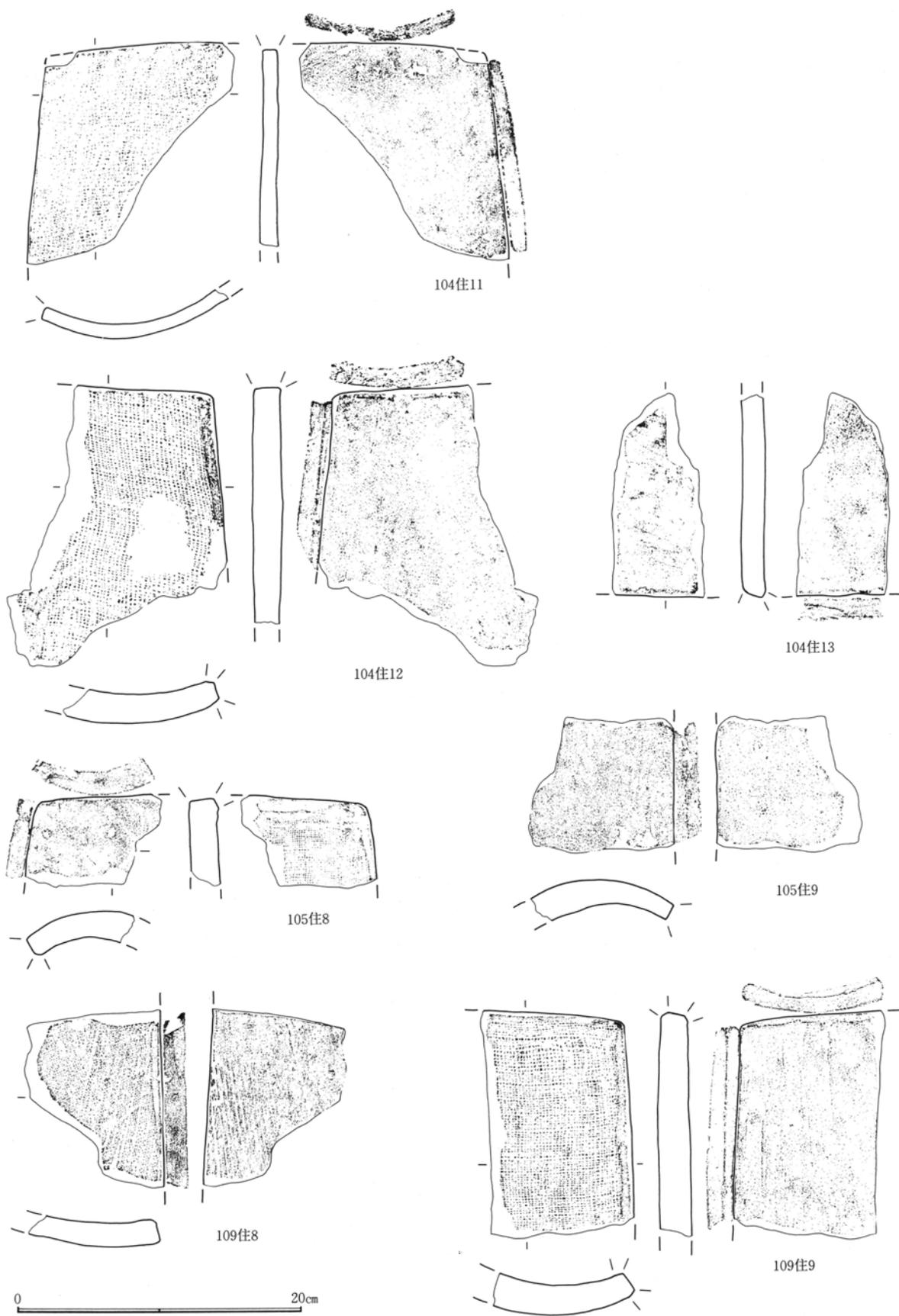


第327図 出土古瓦(4)

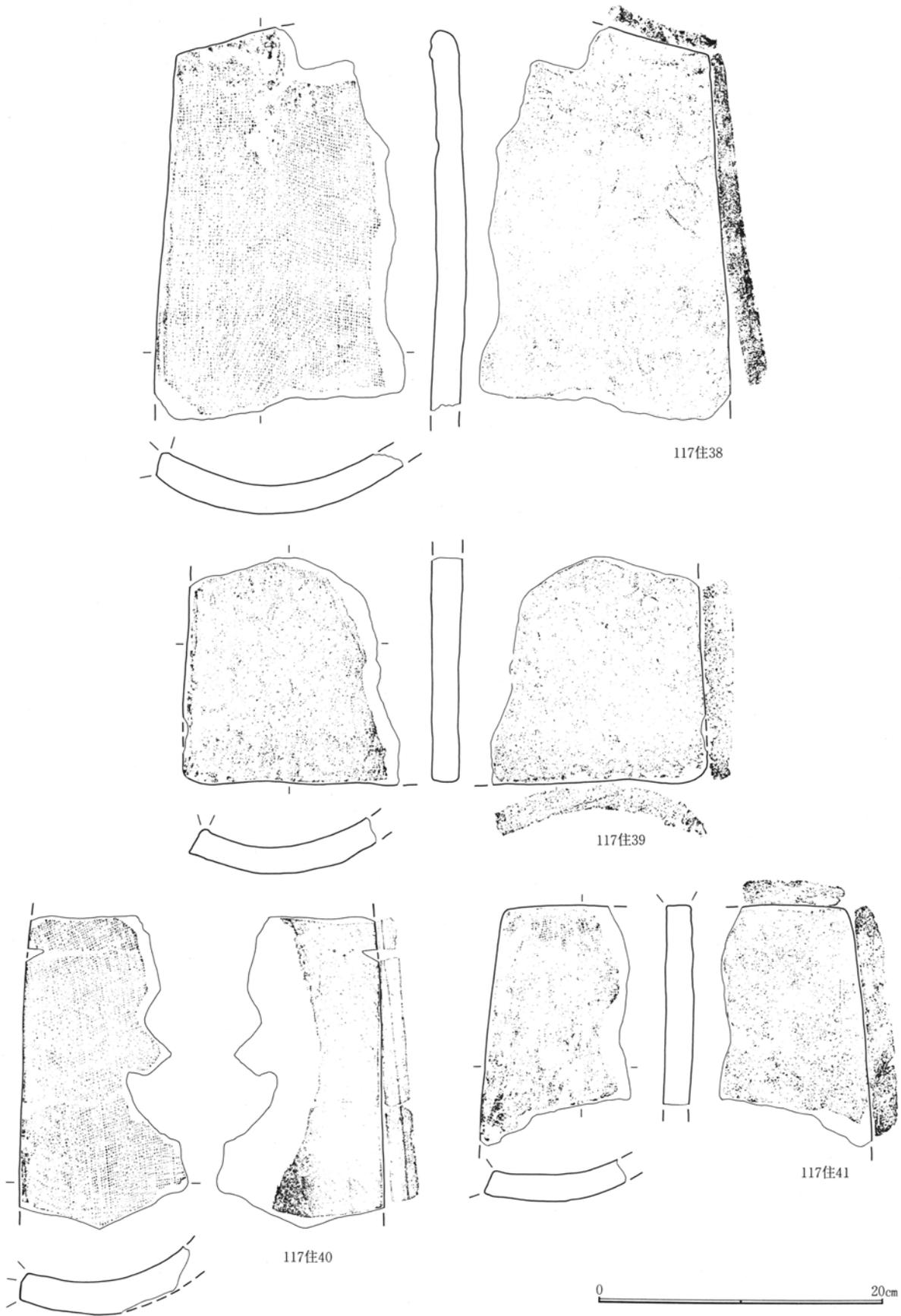


0 20cm

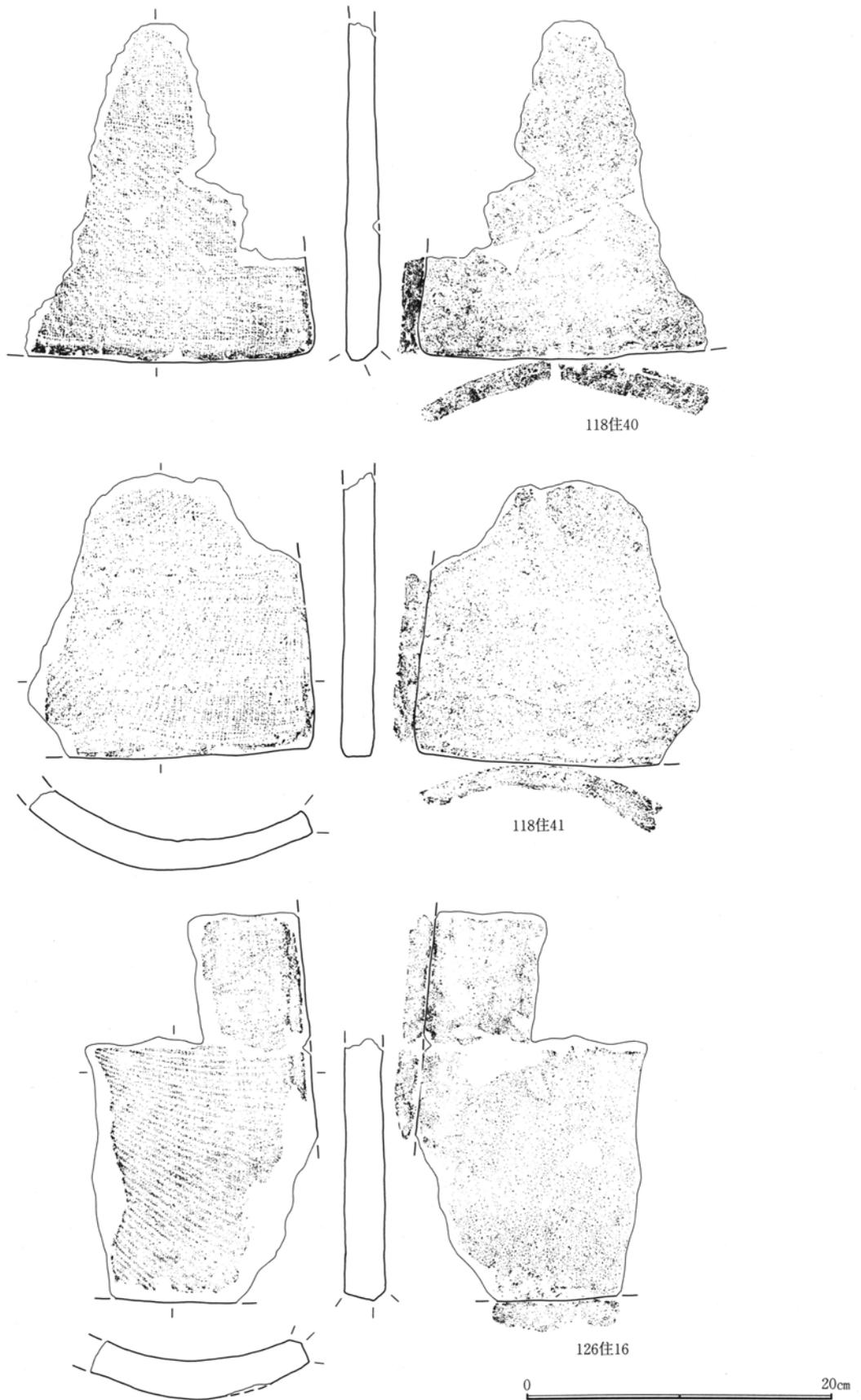
第328図 出土古瓦 (5)



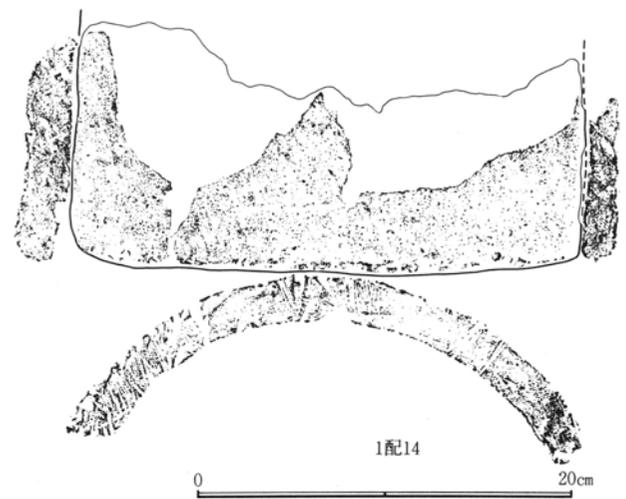
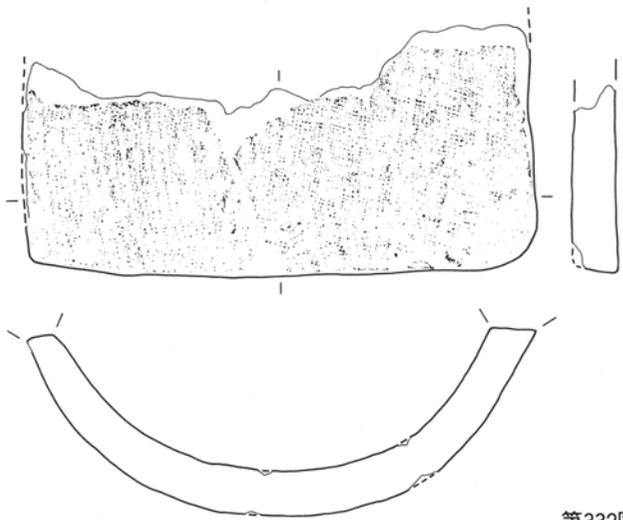
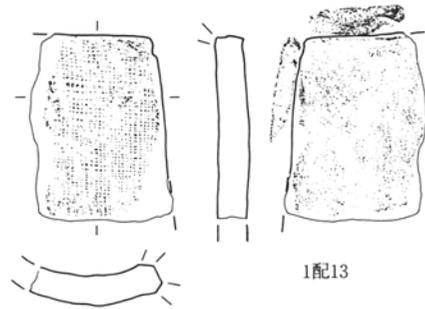
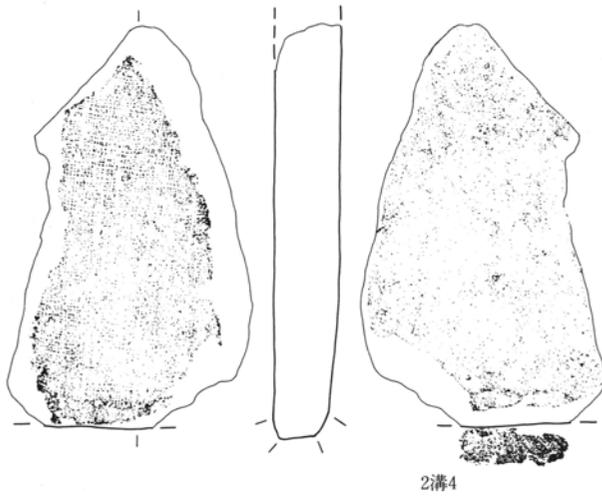
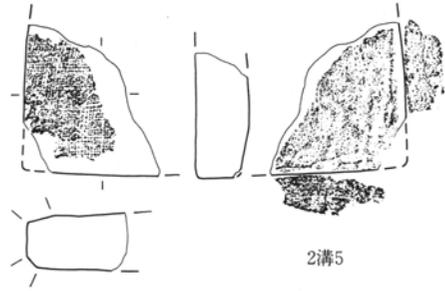
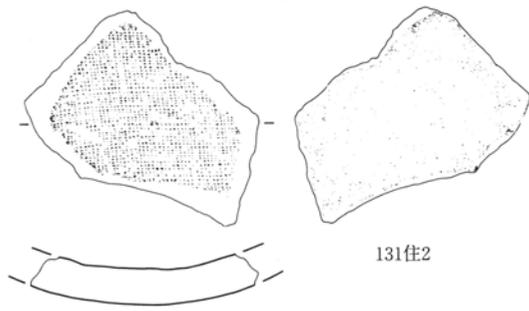
第329図 出土古瓦（6）



第330图 出土古瓦 (7)

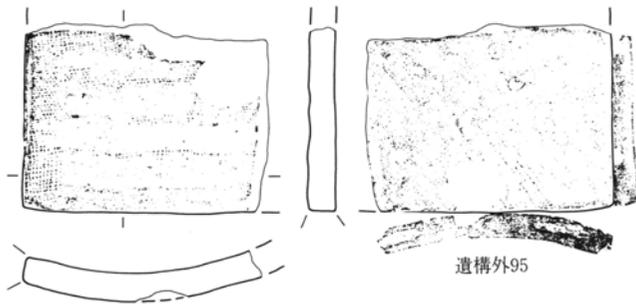


第331図 出土古瓦（8）

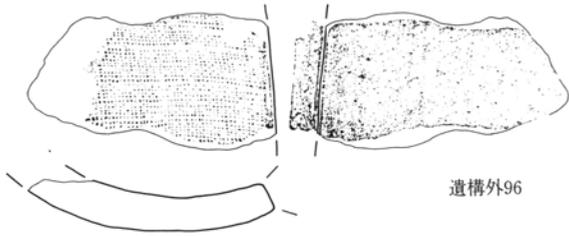


第332図 出土古瓦 (9)

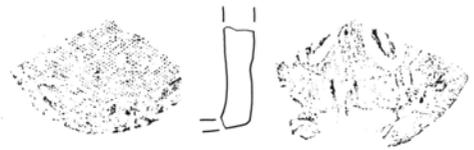
第三章 検出された遺構と遺物



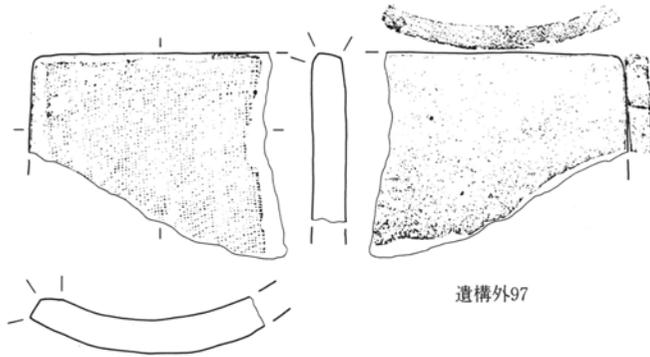
遺構外95



遺構外96



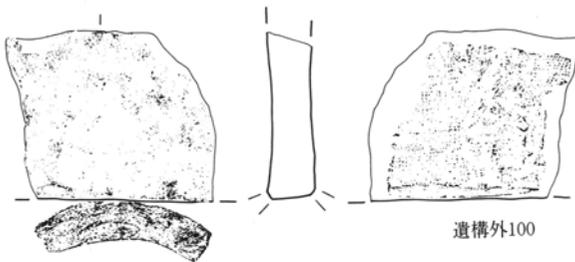
遺構外98



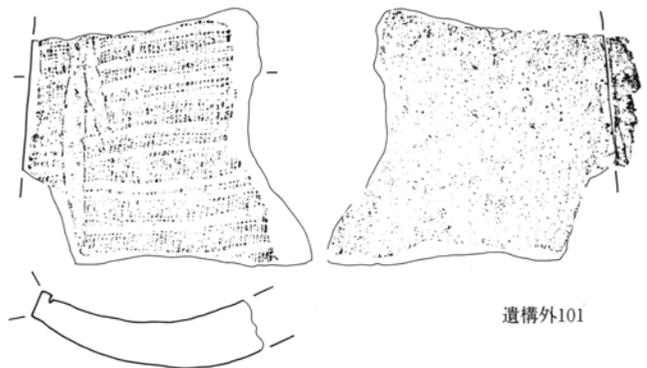
遺構外97



遺構外99



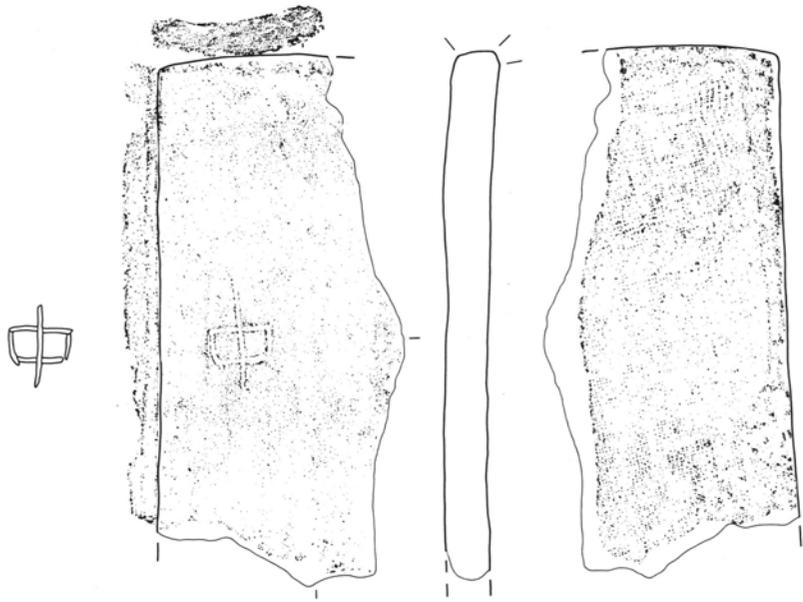
遺構外100



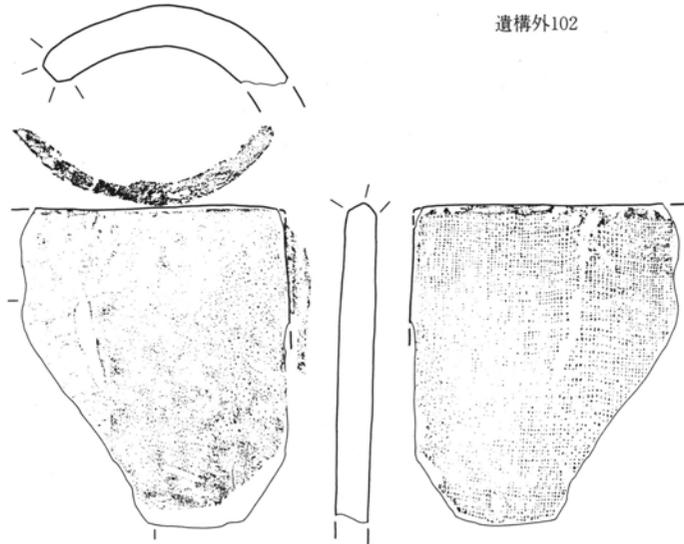
遺構外101

0 20cm

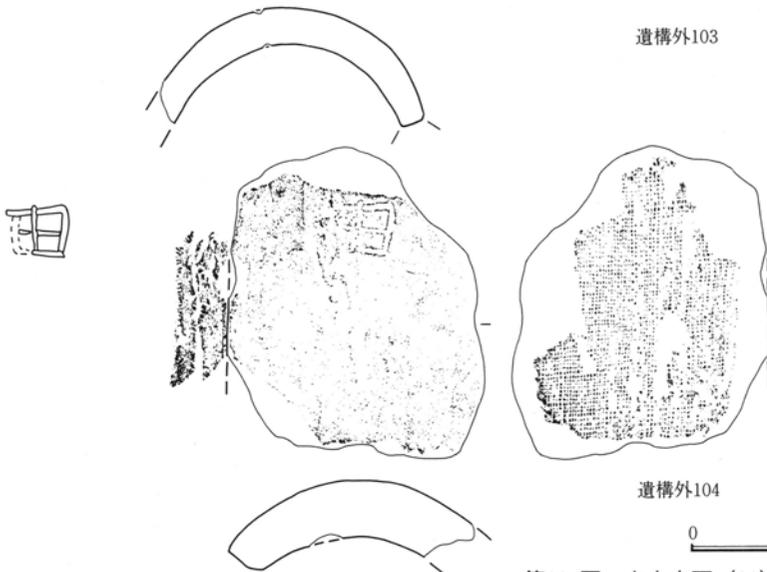
第333図 出土古瓦 (10)



遺構外102



遺構外103



遺構外104

0 20cm

第334圖 出土古瓦 (11)

### 第三章 検出された遺構と遺物

第282表 瓦遺物観察表

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第324図 図版	12住45 平瓦 109	長: - 幅: - 厚: 1.7	破片	①粗 石英・砂礫 ②還元焰 ③灰色	凹面布目、剥ぎ取り痕明瞭。凸面縦位撫で。側部及び端部とも面取りは1回か
第324図 図版	22住29 軒丸瓦 109	長: - 幅: 15.4 厚: 2.0	約1/4	①粗 石英・片岩 ②酸化焰気味 ③黄灰色	凸面叩き調整後丁寧な撫で。凹面布目。両側部とも面取りは2回
第324図 図版	22住30 平瓦 109	長: - 幅: - 厚: 1.4	破片	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄灰色	凸面叩き調整後斜位撫で。凹面布目。側部・端部とも面取りは1回
第324図 図版	22住31 平瓦 109	長: - 幅: - 厚: 1.3	破片	①粗 石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄灰色	凸面平行叩き調整後斜位・縦位撫で。凹面布目。側部面取りは1回
第324図 図版	23住88 平瓦 109	長: - 幅: - 厚: 1.2	破片	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色	凸面平行叩き調整後縦位撫で。凹面布目。側部面取りは1回
第324図 図版	23住89 平瓦 109	長: - 幅: - 厚: 1.0	破片	①粗 白色粒・砂礫 ②還元焰 ③灰色	凸面叩き調整後縦位撫で。凹面布目。やや薄手
第325図 図版	23住90 丸瓦 109	長: - 幅: - 厚: 1.6	約2/3	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③橙色	凸面叩き調整後丁寧な縦位撫で。凹面布目。端部面取りは1回、側部は2回
第325図 図版	23住91 軒丸瓦 109	長: - 幅: 14.5 厚: 1.6	軒丸部欠損	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色	凸面叩き調整後丁寧な縦位撫で。凹面布目。端部・側部とも面取りは1回
第326図 図版	31住38 丸瓦 109	長: - 幅: - 厚: 2.5	2/3	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄灰色	凸面平行叩き調整後丁寧な縦位撫で。凹面布目。端部面取りは1回、側部は2回。
第326図 図版	31住39 平瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.8	破片	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③橙色	凸面叩き調整後撫で。凹面布目。側部面取りは1回
第326図 図版	31住40 平瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.7	破片	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄灰色	凸面叩き調整後縦位撫で。凹面布目。端部・側部とも面取りは1回
第326図 図版	31住41 平瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.1	破片	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③浅黄色	凸面叩き調整後縦位撫で。凹面布目。側部面取りは1回。やや薄手
第327図 図版	31住42 丸瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.4	破片	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色	凸面叩き調整後縦位撫で。凹面布目。側部面取りは1回。
第327図 図版	44住14 平瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.5	破片	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③鈍黄灰色	凸面叩き調整後斜位撫で。凹面布目

第12節 出土古瓦

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第327図 図版	66住13 平瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.9	破片	①粗 砂礫・片岩・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後撫で。凹面布目。側部面取りは1回
第327図 図版	92住10 平瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.7	破片	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面撫で。凹面筵目。端部面取りは1回か
第327図 図版	92住11 丸瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.1	破片	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面平行叩き調整後縦位撫で。凹面布目。端部・側部とも、面取りは1回。
第327図 図版	92住12 平瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.3	破片	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③鈍褐色	凸面叩き調整後撫で。凹面布目。
第327図 図版	95住18 平瓦 110	長: - 幅: - 厚: 2.4	約1/4	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③明黄褐色	凸面叩き調整後撫で。凹面布目。側部面取りは1回
第328図 図版	101住11 平瓦 113	長: - 幅: - 厚: 1.8	破片	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色 ④文字瓦 (刻書)	凸面叩き調整後撫で。凹面布目、剥ぎ取り痕。端部・側部とも面取りは1回。凸面に刻書。「弟長」か
第328図 図版	104住9 軒丸瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.9	約1/4	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③暗灰黄色	凸面叩き調整後撫で。凹面布目。側部面取りは2回
第328図 図版	104住10 平瓦 111	長: - 幅: - 厚: 2.0	破片	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後縦位撫で。凹面布目。面取りは端部2回、側部は3回に及ぶ
第329図 図版	104住11 平瓦 110	長: - 幅: - 厚: 1.0	破片	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後丁寧な撫で。凹面布目、剥ぎ取り痕。端部・側部とも面取りは1回
第329図 図版	104住12 平瓦 111	長: - 幅: - 厚: 2.1	破片	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後縦位撫で。凹面布目。面取りは端部2回、側部は3回に及ぶ
第329図 図版	104住13 平瓦 111	長: - 幅: - 厚: 1.6	破片	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③黄灰色	凸面叩き調整後撫で。凹面布目。斜位撫でを施す。端部面取りは2回
第329図 図版	105住8 丸瓦 111	長: - 幅: - 厚: 1.9	破片	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後丁寧な縦位撫で。凹面布目。端部・側部とも面取りは2回。やや厚手
第329図 図版	105住9 丸瓦 111	長: - 幅: - 厚: 1.8	破片	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③黄灰色	凸面叩き調整後丁寧な縦位撫で。凹面細かな布目。側部面取りは1回
第329図 図版	109住8 平瓦 111	長: - 幅: - 厚: 1.7	破片	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色	凸面叩き調整後撫で。筵目状圧痕。凹面布目。剥ぎ取り痕。側部面取りは1回

第三章 検出された遺構と遺物

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第329図 図版	109住9 平瓦 111	長: - 幅: - 厚: 2.2	破片	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③灰黄色	凸面平行叩き調整後撫で。凹面布目。端部・側部とも面取り3回に及ぶ
第330図 図版	117住38 平瓦 111	長: - 幅: - 厚: 2.0	約1/3	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍赤褐色	凸面叩き調整後縦位撫で。凹面布目。剥ぎ取り痕。面取りは端部1回、側部は2回
第330図 図版	117住39 平瓦 111	長: - 幅: - 厚: 1.9	破片	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色	凸面叩き調整後撫で。凹面細かな布目。面取りは端部1回、側部は2回
第330図 図版	117住40 平瓦 111	長: - 幅: - 厚: 2.2	破片	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後縦位・斜位撫で。凹面布目。剥ぎ取り痕。側部の面取りは2回
第330図 図版	117住41 平瓦 112	長: - 幅: - 厚: 1.9	破片	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後丁寧な撫で。凹面細かな布目。端部・側部とも面取りは1回
第331図 図版	118住40 平瓦 111	長: - 幅: - 厚: 1.9	破片	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後撫で。凹面布目、剥ぎ取り痕。面取りは端部2回、側部は1回
第331図 図版	118住41 平瓦 112	長: - 幅: - 厚: 2.0	破片	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③暗灰黄色	凸面叩き調整後丁寧な縦位撫で。凹面布目、剥ぎ取り痕。面取りは端部・側部とも1回
第331図 図版	126住16 平瓦 112	長: - 幅: - 厚: 2.4	破片	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③橙色	凸面叩き調整後丁寧な撫で。凹面布目、剥ぎ取り痕。面取りは端部・側部とも2回。やや厚手
第332図 図版	131住2 平瓦 112	長: - 幅: - 厚: 1.9	破片	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③浅黄色	凸面叩き調整後撫で。凹面布目
第332図 図版	2溝4 平瓦 112	長: - 幅: - 厚: 3.5	破片	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後縦位撫で。凹面布目。端部の面取りは3回。やや厚手
第332図 図版	2溝5 平瓦 112	長: - 幅: - 厚: 2.9	破片	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後撫で。凹面布目。面取りは端部1回、側部3回に及ぶ
第332図 図版	1配13 平瓦 112	長: - 幅: - 厚: 1.6	破片	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③浅黄色	凸面平行叩き調整後丁寧な縦位撫で。凹面布目。面取りは端部2回、側部3回に及ぶ
第332図 図版	1配14 平瓦 112	長: - 幅: 27.5 厚: 2.4	約1/4	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色	凸面平行叩き調整後縦位・斜位撫で。凹面布目、剥ぎ取り痕。面取りは端部・両側部とも1回。やや厚手
第333図 図版	外95 平瓦 113	長: - 幅: - 厚: 1.5	破片 頂部表採	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄色	凸面平行叩き調整後縦位・斜位撫で。凹面布目、横位指撫で。面取りは端部・側部とも1回

第12節 出土古瓦

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第333図 図版	外96 平瓦 113	長：－ 幅：－ 厚：2.0	破片 頂部表採	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③明黄褐色	凸面叩き調整後縦位撫で。凹面布目。側部面取り1回
第333図 図版	外97 平瓦 113	長：－ 幅：－ 厚：1.8	破片 頂部表採	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色	凸面叩き調整後丁寧な撫で。凹面布目、剥ぎ取り痕。端部・側部とも面取りは2回
第333図 図版	外98 軒丸瓦 113	長：－ 幅：－ 厚：1.5	破片 試掘Cトロンチ	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③暗灰黄色	瓦当面花卉文。沈線で縁取る。弁数不明。凹面は布目
第333図 図版	外99 軒丸瓦 113	長：－ 幅：－ 厚：0.9	破片 試掘Aトロンチ	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍褐色	瓦当面は花卉文か。凹面布目
第333図 図版	外100 丸瓦 113	長：－ 幅：－ 厚：2.1	破片 東斜面表土	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③灰黄褐色	凸面叩き調整後撫で。凹面布目。端部面取りは3回
第333図 図版	外101 平瓦 113	長：－ 幅：－ 厚：2.3	破片 Ch-32Gr 覆土	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄橙色	凸面叩き調整後丁寧な縦位撫で。凹面布目、横位撫でを加える。側部面取りは1回
第334図 図版	外102 丸瓦 113	長：－ 幅：－ 厚：2.2	約2/3 Cl-34Gr 覆土	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③橙色 ④文字瓦 (刻書)	凸面叩き調整後丁寧な縦位撫で。凹面細かな布目。面取りは端部2回、側部は3回に及ぶ。凸面に刻書「中」か
第334図 図版	外103 丸瓦 113	長：－ 幅：－ 厚：1.9	約1/3 Cs-38Gr	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰白色	凸面叩き調整後丁寧な撫で。凹面布目。面取りは端部2回、側部1回
第334図 図版	外104 丸瓦 113	長：－ 幅：－ 厚：2.9	破片 Cl-34Gr 覆土	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③明赤褐色 ④文字瓦 (刻書)	凸面叩き調整後撫で。凹面布目。側部の面取りは1回。凸面に刻書「田」であろうか

## 第13節 出土金属器

黒熊八幡遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居跡・土坑等から、鉄製品を筆頭に比較的良好に金属器が出土している。本節では、それらを一括して掲載し、おおまかな傾向を提示したい。

金属製品を出土した住居跡は、5住・12住・17住・21住・22住・26住・29住・30住・36住・40住・43住・44住・48住・55住・56住・59住・61住・63住・69住・73住・76住・107住・108住・113住・114住・117住・118住・126住と多い。このうち、69号住は小鍛冶遺構であり、鉄製品出土の蓋然性は高いが、他の住居跡の出土は鉄製品生産が背景ではなく、農耕あるいは居住に必要な用具として、捉えられよう。

種類も、釘・刀子・鎌があり、居住・生業に伴う製品でとして理解できる。36号住出土の帯金具は、希少な例として位置付けたい。また、29号住出土の轡は、古墳時代の所産と考えられ、鑄潰すために、搬入した可能性も考えておきたい。同様に44号住出土の金環も搬入と捉えた。

金属製品、特に鉄製品を出土した住居跡の分布を概観すると、調査区北側のC～D区東斜面の住居群とD区西斜面の住居群に集中が見られる。両斜面とも、調査区内では比較的緩やかな傾斜地形であり、積極的な居住が指向され、重複住居も群在する箇所である。反面、調査区南側の急傾斜地形に立地する住居跡では、117住・118住・126住の3軒が見られるのみで、鉄製品と居住の安定性に関連が示唆されよう。この傾向を、前節で述べた古代瓦の分布と対比すると、瓦分布は、比較的調査区南側に偏る傾向を示しており、北側に集中する鉄製品と対象的である。前節では、瓦分布状況から南側調査区域外に瓦葺き建物の存在を推定し、南側で検出された礎石建物跡や1号・3号掘立柱建物跡を関連する施設として可能性を探った。

鉄製品の出土分布から、特定施設を示唆する例は、瓦と同様に南側に占地する117号住・118号住・126号住で出土した鉄釘に注意を要する。通常竪穴住居跡で、柱・桁・梁等の設置に鉄釘を用いる例は少な

いものと考え、ここでは、3軒の住居跡出土の鉄釘を流入・搬入と捉えたい。これら鉄釘の原位置を、瓦同様南側調査区域外の瓦葺きの建物に求める類推は飛躍であろうか。検討を要する。

刀子・鎌等生活用品を出土した北側の住居跡群の性格は、鉄製品のみでは言及できないが、豊富な土器量を出土する住居や大型住居も内包しており、単純な1生業で固定される集落ではないようだ。南側調査区域外に推定される瓦葺き建物を寺院跡と位置付けた場合は、北側の住居跡群は寺院併設型集落として、黒熊中西遺跡で検出された、斜面裾部の住居跡群との比較が可能になろう。

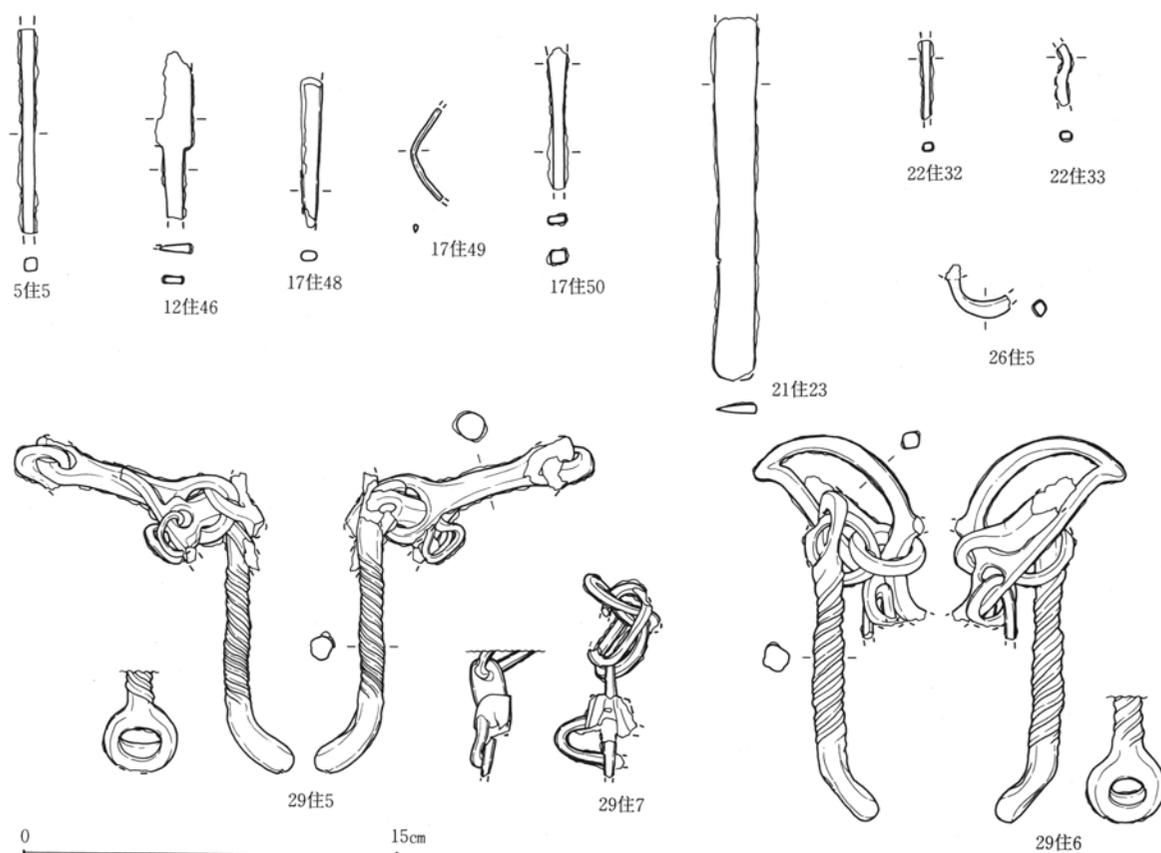
次に土坑出土の鉄製品を概観する。148号土坑では、鉄釘数点と袋状の鉄斧1点が出土している（第337図49～52）。本土坑は、調査区南側であり、前述の117号住や126号住と同一斜面に開く不整形の土坑である。故に鉄釘の出土はあるいは、117号住出土の鉄釘等と同様の出土要因と考えられるが、鉄斧は本遺跡唯一の例である。

周辺の遺跡でも鉄斧の出土は知られるが、1遺跡でまとまった出土はなく、いずれも本遺跡のように1例を見るのみである。西隣の黒熊中西遺跡は1号集積遺構より、東隣の黒熊栗崎遺跡は27号住の出土である。2点とも平安時代に比定される袋状鉄斧として報告されている。鉄斧の出土分布としては、他の地域に比して、集中する状況といえよう。

ところで、大型の鉄製品は機能を果たさなくなった際に、鑄潰しにより、再利用が行われる製品である。そのため、農耕を主体とする平野部の集落でも、鉄製の鍬・鋤といった大型製品の出土は少ない。

本遺跡が立地する、丘陵性台地においても背後の山林地の開発、あるいは窯操業に必要な燃料の確保等に鉄斧は重要な利器である。にもかかわらず、1遺跡に1点程度の希薄な出土は、頻繁な鑄潰し―再利用が想起されよう。

その他の金属製品としては、2号配石より出土した鉄製品は、針金状で用途・機能は不明である。飾り金具の類であろうか。

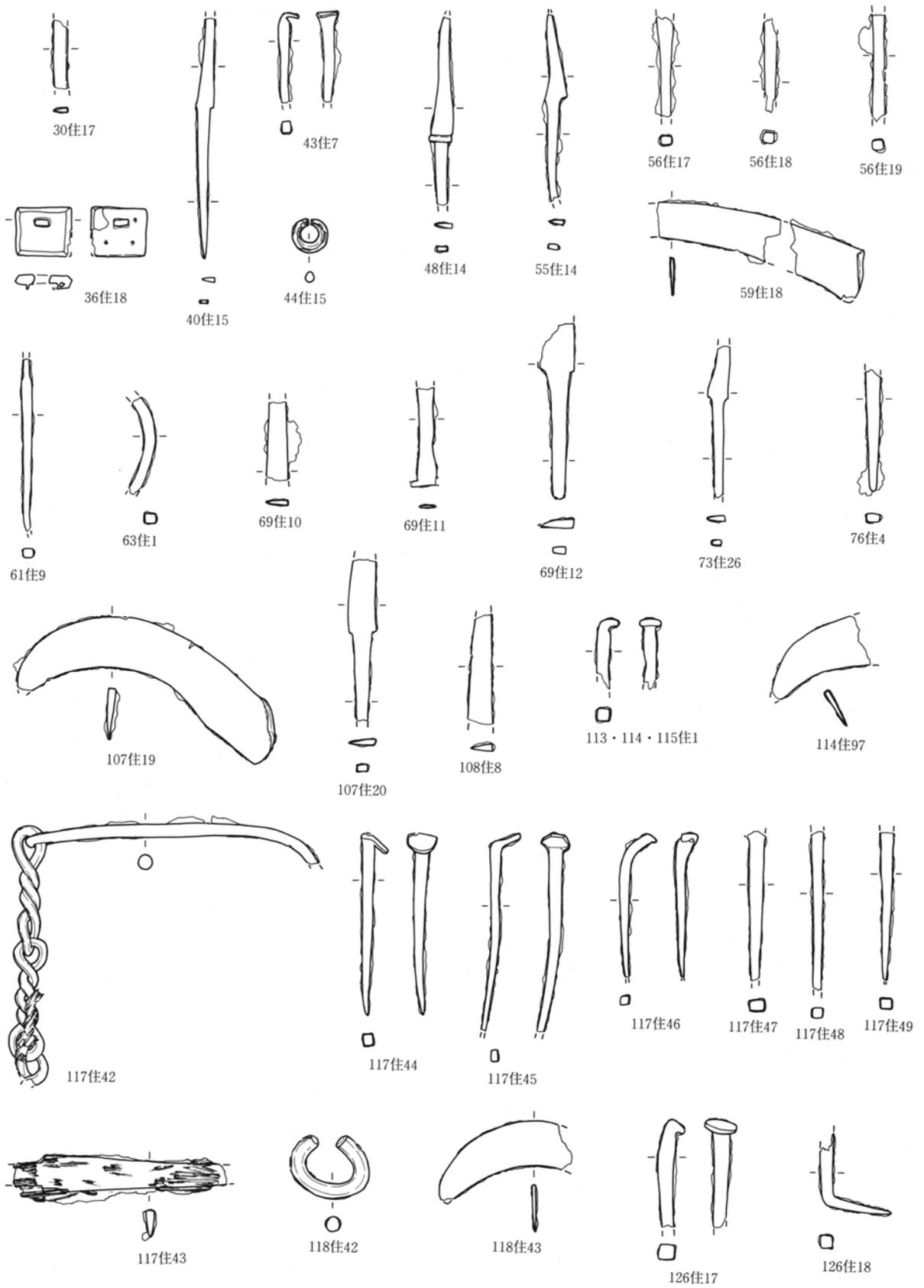


第335図 出土金属器 (1)

遺構外ながら銅製品である丸柄（第337図66）が出土している。36号住出土の帯金具と併せて良好な例として位置付けたい。丸柄が出土したグリッドに相応する該期遺構ではないが、単独占地の129号住に近接する。また、鉄鏝・刀子等も遺構外から出土している。遺存状態は良くない。鉄鏝（第337図70）に関しては、試掘時の出土であり時期は不明だが、遺構密度と出土地点から奈良・平安時代と判断できよう。

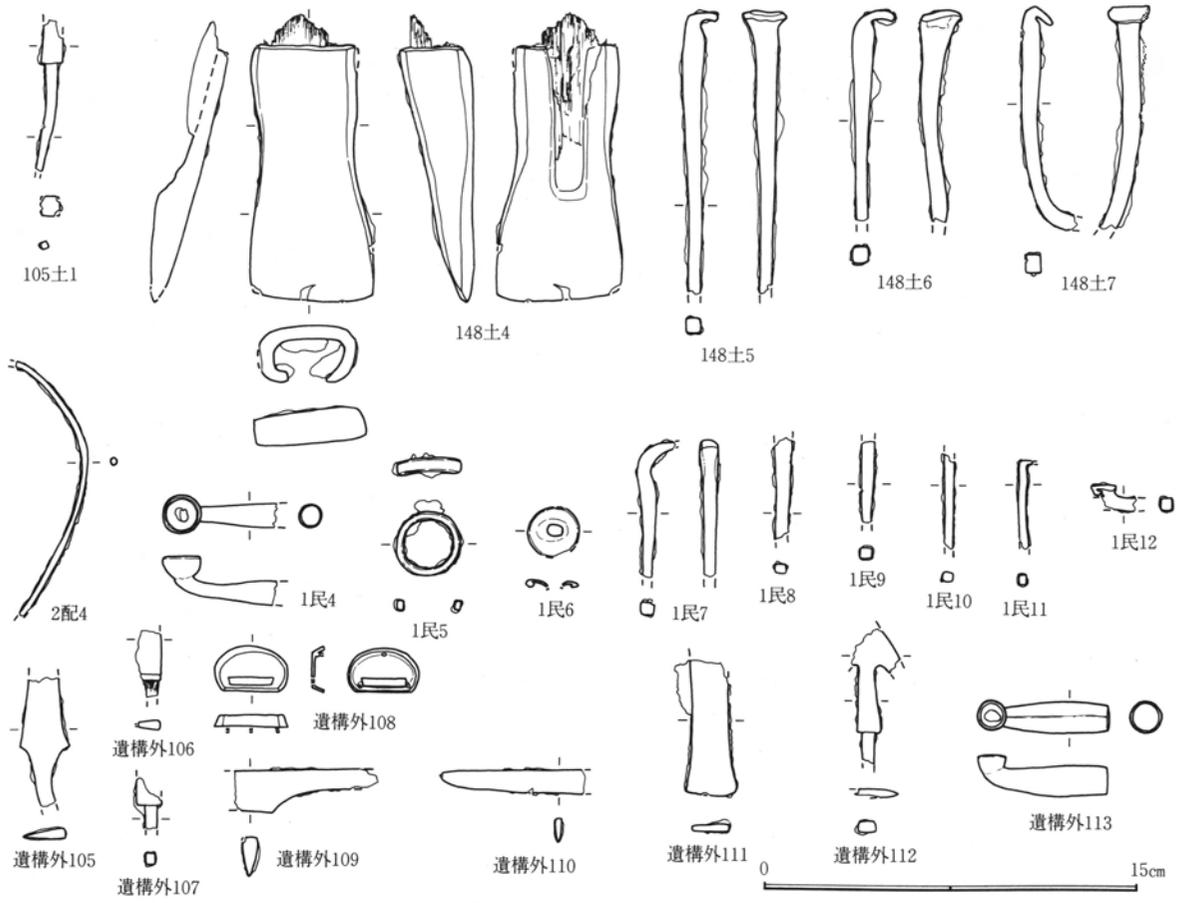
次節で述べる近世～近代に比定される民家跡より出土した、釘・煙管雁首・責金具・銅製品・不明品等も第337図54～62に掲載した。

第三章 検出された遺構と遺物



第336図 出土金属器(2)

第13節 出土金属器



第337図 出土金属器 (3)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第283表 金属器遺物観察表

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 重量
第335図 図版	5住5 鉄器 114	長：( 8.1) 幅：( 0.9) 厚： 0.8	破片 8.10
第335図 図版	12住46 鉄器 刀子 114	長：( 6.7) 幅：( 1.6) 厚： 0.4	破片 7.80
第335図 図版	17住48 銅製品 114	長：( 5.0) 幅：( 0.9) 厚： 0.4	軸部破片 9.93
第335図 図版	17住49 金属器 114	長：( 3.7) 幅：( 1.2) 厚： 0.4	破片 1.29
第335図 図版	17住50 鉄器 114	長：( 5.6) 幅：( 0.9) 厚： 0.7	破片 6.75
第335図 図版	21住23 鉄器 114	長：(14.4) 幅：( 2.0) 厚： 0.4	破片 31.98
第335図 図版	22住32 鉄器 114	長：( 3.1) 幅：( 0.7) 厚： 0.4	破片 1.23
第335図 図版	22住33 鉄器 114	長：( 2.4) 幅：( 0.7) 厚： 0.4	破片 0.70
第335図 図版	26住5 鉄器 馬具 轡 114	長：( 2.1) 幅：( 2.6) 厚： 0.7	破片 2.11
第335図 口絵	29住5 鉄器 馬具 轡 図版114	長：(13.3) 幅：(11.1) 厚： 7.2	134.33
第335図 口絵	29住6 鉄器 馬具 轡 図版114	長：(15.3) 幅：( 8.9) 厚： 5.1	175.11
第335図 口絵	29住7 鉄器 馬具 轡 図版114	長：( 8.0) 幅：( 4.3) 厚： 5.7	破片 26.28
第336図 図版	30住17 鉄器 刀子? 114	長：( 3.6) 幅：( 0.9) 厚： 0.3	破片 1.77
第336図 口絵	36住18 鉄器 帶金具 図版114	長： 2.6 幅： 3.0 厚： 0.8	一部欠損 9.55

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 重量
第336図 図版	40住15 鉄器 刀子 114	長：(12.5) 幅： 1.1 厚： 0.3	約2/3 5.37
第336図 図版	43住7 鉄器 釘 114	長：( 4.7) 幅： 1.2 厚： 0.7	約1/2 6.09
第336図 口絵	44住15 銅製品金環 図版114	長： 1.8 幅： 1.9 厚： 0.6	ほぼ完形 5.65
第336図 図版	48住14 鉄器 刀子 114	長：( 9.7) 幅： 1.3 厚： 0.4	約2/3 7.94
第336図 図版	55住14 鉄器 刀子 114	長：( 9.8) 幅： 1.3 厚： 0.4	約3/4 6.20
第336図 図版	56住17 鉄器 114	長：( 5.2) 幅：( 1.4) 厚： 0.6	破片 7.40
第336図 図版	56住18 鉄器 鎧 114	長：(10.8) 幅：( 5.1) 厚： 0.3	約2/3 18.07
第336図 図版	56住19 鉄器 114	長：( 5.5) 幅：( 1.5) 厚： 0.7	破片 7.79
第336図 図版	59住18 鉄器 鎧 114	長：(10.8) 幅：( 5.1) 厚： 0.3	破片 6.84
第336図 図版	61住9 鉄器 114	長：( 8.9) 幅：( 0.8) 厚： 0.5	破片 6.00
第336図 図版	63住1 鉄器 114	長：( 5.1) 幅：( 1.4) 厚： 0.6	破片 7.54
第336図 図版	69住10 鉄器 刀子 114	長：( 4.1) 幅：( 1.4) 厚： 0.4	破片 5.76
第336図 図版	69住11 鉄器 114	長：( 5.2) 幅：( 1.4) 厚： 0.2	破片 2.11
第336図 図版	69住12 鉄器 刀子 114	長：( 9.1) 幅： 1.8 厚： 0.6	約1/2 12.00
第336図 図版	73住26 鉄器 刀子 114	長：( 7.9) 幅：( 1.1) 厚： 0.4	約1/2 3.97

第13節 出土金属器

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 重量
第336図 図版	76住4 鉄器 114	長：( 6.5) 幅：( 1.4) 厚： 0.5	破片 5.39
第336図 図版	107住19 鉄器 鍔 115	長： 13.6 幅： 7.7 厚： 0.8	一部欠損 51.08
第336図 図版	107住20 鉄器 刀子 115	長：( 8.4) 幅： 1.5 厚： 0.5	約1/2 7.60
第336図 図版	108住8 鉄器 刀子 115	長：( 5.7) 幅：( 1.4) 厚： 0.5	破片 7.50
第336図 図版	113~115 住1 鉄器 釘 115	長：( 3.7) 幅： 1.3 厚： 1.1	約1/3 5.39
第336図 図版	114住97 鉄器 鍔 115	長：( 5.2) 幅：( 4.2) 厚： 0.4	破片 9.38
第336図 図版	117住42 鉄器 馬具 轡? 115	長：(14.0) 幅：(16.0) 厚： 0.8	38.79
第336図 図版	117住43 鉄器 刀子 115	長：(13.1) 幅： 2.6 厚： 0.7	約1/2 36.66
第336図 図版	117住44 鉄器 刀子 115	長： 9.4 幅： 1.5 厚： 1.6	ほぼ完形 14.44
第336図 図版	117住45 鉄器 刀子 115	長：(10.3) 幅：( 2.1) 厚：( 1.6)	先端部欠損 15.46
第336図 図版	117住46 鉄器 刀子 115	長：( 7.5) 幅： 1.9 厚： 1.2	ほぼ完形 10.83
第336図 図版	117住47 鉄器 刀子 115	長：( 7.8) 幅：( 1.0) 厚： 0.7	約2/3 14.71
第336図 図版	117住48 鉄器 刀子 115	長：( 8.2) 幅：( 0.8) 厚： 0.5	破片 6.47
第336図 図版	117住49 鉄器 刀子 115	長：( 7.7) 幅：( 0.8) 厚： 0.6	約2/3 10.50
第336図 図版	118住42 鉄器 鉄環 115	長： 3.3 幅： 4.1 厚： 0.8	ほぼ完形 14.85

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 重量
第336図 図版	118住43 鉄器 鍔 115	長：( 6.9) 幅：( 4.1) 厚： 0.3	約1/3 8.89
第336図 図版	126住17 鉄器 釘 115	長：( 5.6) 幅： 1.5 厚： 0.8	約1/2 11.45
第336図 図版	126住18 鉄器 釘 115	長：( 4.3) 幅：( 3.7) 厚： 0.8	破片 5.91
第337図 図版	105土1 鉄器 115	長：( 6.0) 幅：( 1.1) 厚： 0.9	破片 5.02
第337図 口絵	148土4 鉄器 斧 図版115	長： 11.4 幅： 5.0 厚： 3.0	ほぼ完形 228.80
第337図 図版	148土5 鉄器 釘 115	長：(11.2) 幅： 1.7 厚： 1.7	一部欠損 23.04
第337図 図版	148土6 鉄器 釘 115	長：( 8.4) 幅： 1.8 厚： 1.7	約2/3 14.75
第337図 図版	148土7 鉄器 釘 115	長：( 8.8) 幅：( 2.1) 厚：( 2.1)	約2/3 17.13
第337図 図版	2配4 鉄器 116	長：(10.1) 幅：( 2.8) 厚： 0.4	破片 5.08
第337図 図版	1民4 銅製品 煙管 116	長：( 4.5) 幅： 1.5 厚：( 2.0)	雁首約2/3 3.71
第337図 図版	1民5 鉄器 貴金属 116	長： 3.0 幅： 2.7 厚： 1.0	完形 3.61
第337図 図版	1民6 銅製品 116	長： 2.0 幅： 2.0 厚：( 0.3)	破片 2.62
第337図 図版	1民7 鉄器 釘 116	長：( 5.4) 幅：( 1.6) 厚： 0.7	約1/2 4.77
第337図 図版	1民8 鉄器 116	長：( 4.0) 幅：( 0.9) 厚： 0.5	破片 1.63
第337図 図版	1民9 鉄器 116	長：( 3.2) 幅：( 0.7) 厚： 0.5	破片 1.92

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 重量
第337図 図版	1民10 鉄器 116	長：( 3.7) 幅：( 0.6) 厚： 0.5	破片 1.50
第337図 図版	1民11 鉄器 釘 116	長：( 3.6) 幅：( 0.7) 厚： 0.5	破片 1.45
第337図 図版	1民12 鉄器 116	長：( 1.2) 幅：( 1.8) 厚： 0.6	破片 1.82
第337図 図版	外105 鉄器 刀子 116	長：( 5.1) 幅：( 2.0) 厚： 0.5	破片 Bg-17Gr 2.01
第337図 図版	外106 鉄器 刀子 116	長：( 2.7) 幅：( 1.0) 厚： 0.4	破片 Bg-17Gr 2.01
第337図 図版	外107 鉄器 刀子 116	長：( 2.0) 幅：( 1.1) 厚： 0.7	破片 Bg-17Gr 1.73
第337図 口絵 図版	外108 銅製品丸鞘 116	長： 1.8 幅： 2.9 厚： 0.7	ほぼ完形 Gi-24Gr 3.72
第337図 図版	外109 鉄器 刀子 116	長：( 5.6) 幅：( 1.3) 厚： 0.7	破片 Ci-27Gr 11.39
第337図 図版	外110 鉄器 刀子 116	長：( 5.6) 幅：( 1.0) 厚： 0.4	破片 Db-44Gr 3.12
第337図 図版	外111 鉄器 110	長：( 5.4) 幅：( 2.5) 厚： 0.5	破片 台地東表 11.48
第337図 図版	外112 鉄器 鐵 110	長：( 5.4) 幅：( 1.9) 厚： 0.6	約1/2 試掘Cトレンチ 6.36
第337図 図版	外113 銅製品 煙管 110	長： 5.2 幅： 1.3 厚： 1.6	雁首完形 B区表土 9.46

## 第14節 近世～近代

本節では、奈良・平安時代に比定し得なかった、掘立柱建物跡及び平坦面を中心に、時期を出土遺物及び重複関係、ピット埋土の特徴から、近世～近代の所産と判断し、奈良・平安時代の建物跡と区別するために「民家」の名称を与えて概略を述べる。

「民家」の名称に関しては、果して検出された遺構が居住に供された性格を有するのかという疑問が持たれ、検出された遺構は、倉庫・家畜小屋等の可能性も高い。しかしながら、居住施設である「主屋」に付帯する建物・設備・さらには墓を含めて「民家」として位置付け、3基の遺構を近世～近代に比定される民家として報告する。

尚、本節では、第6・10節で言及できなかった近世～近代に比定される土坑遺物・1号溝と6号溝に関しても併載する。

3基の遺構は、調査区北半で検出されている。いずれも、斜面地形に占地しながらも、比較的緩やかな勾配の地点が選ばれており、これは、奈良・平安時代の竪穴住居跡の占地傾向とも一致する。すなわち、周辺には竪穴住居跡が群在しており、3基の近世～近代の遺構は、奈良・平安時代の住居跡群と重複・近接した状態で検出された。奈良・平安時代の東斜面住居跡群は、その分布傾向から、北側の緩斜面地点に範囲を広げる傾向が看取されるが、近世～近代の遺構も、同様の分布を呈するものと捉えられた。現代の農家も、北側に濃密な屋敷構えを見せており、南側の高標高地点には、積極的な施設を設けてはいない。近世～近代の居住域—民家についても、現代農家の占める範囲と類似性が求められ、おそらく、黒熊地区の現代居住域と一致するものと考えられる。そのような傾向の中で、3基の民家とされた遺構は、該期における、丘陵性台地の開発の最先端ともいべき施設と考えられ、近世黒熊地区における最標高部分の施設の可能性が高い。近世村落の拡大—特に丘陵性地形に及ぶ開墾は、労働対象物—作物の選択、さらに血縁・地縁の強固な連繋を背後に積極的な進出が図られたものと考えられる。

当時の文献・伝承は編者の管見に触れ得る資料ではなく、3基の民家に関する確定的な位置付けは果たし得ないが、上記に述べたように、近世～近代における、当地域における台地開発の具体例の1つとして考えたい。また、黒熊栗崎遺跡で検出された、墓壙さらに神社跡も、当地域の台地利用の一形態であり、本遺跡の該期遺構との関係も深いものと考えられよう。

以下、1号～3号民家及び1号溝と6号溝の概略を述べる。

### 1号民家

調査区東側のB区で検出された。周辺は極緩やかな東側への傾斜を呈するが、調査区内台地部分ではほぼ平坦地ともいえる地点である。奈良・平安時代の住居跡も群をなし、1号～7号住がB区住居群として確認されている。本遺構南西には2号住が接し、北東には1号住・5号住・6号住が近接する。

尚、本遺構は調査当初、1号土坑として認定されており、調査進展に伴い、平坦面が広く確認され、建物状施設として位置付けられた経緯がある。

本遺構は、南・北・西を掘り込みで画された施設である。おそらく東側も壁が存在していたものと考えられるが、斜面地形のためか、確認できなかった。

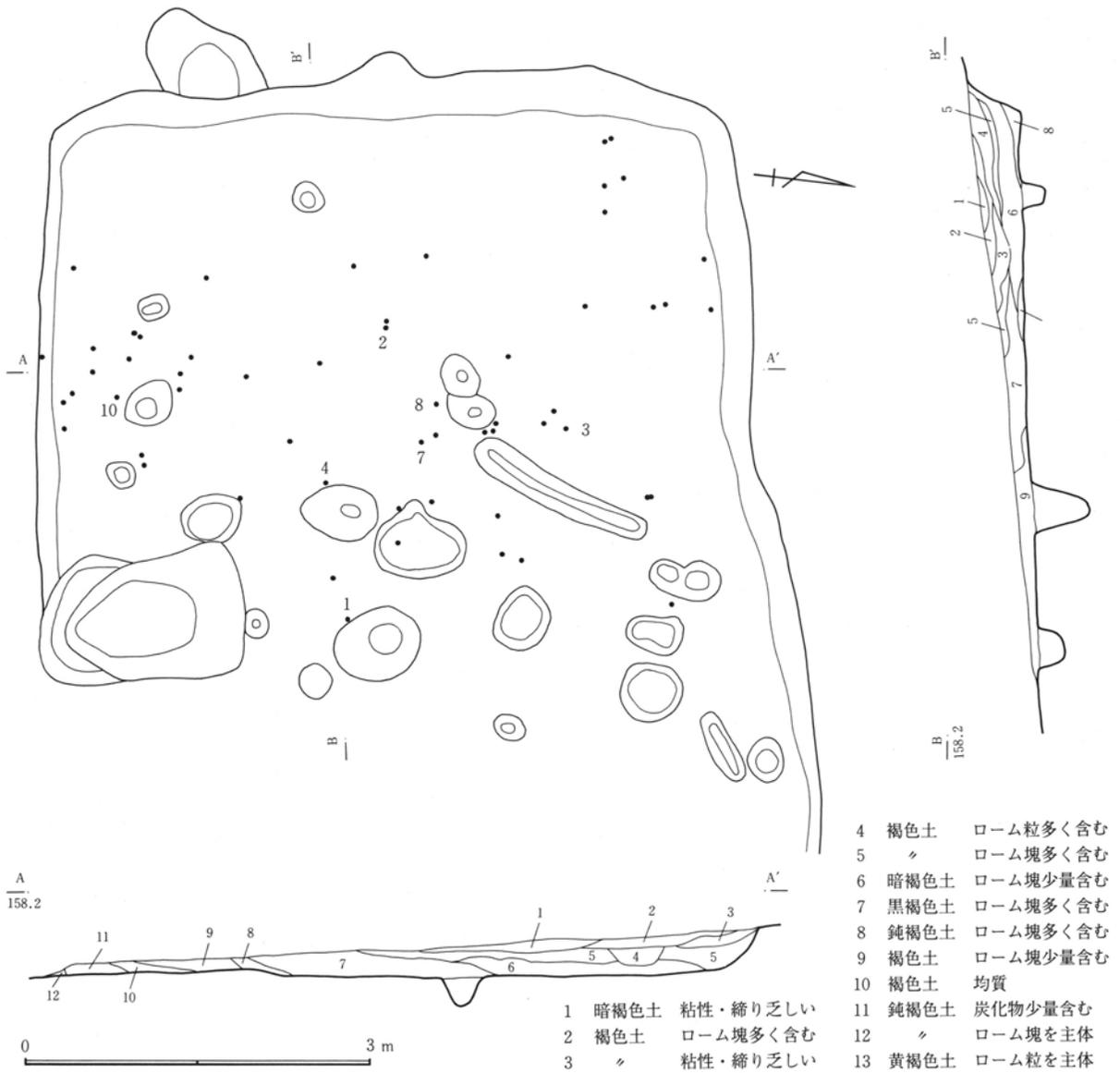
平面形は、南北軸長約6mを測る不整形を呈する。北壁および小ピットの分布から、東西軸長は約7m程度で東西を主軸とする長方形と思われる。

深さは、掘り込みのしっかりした西壁で約50cmを測るが、全体に浅い掘り込みである。西壁の立ち上がりが最も良好である。

遺構底面はほぼ平坦面を築く。黄褐色ロームを基盤としており、硬化面等土間を想起させる要素は見られなかった。

平坦な底面上には浅い小ピットが多く検出された。掘り込みは弱く、柱穴としては、配置・深さに検討を要する。焼土・炭化物の集中も見られなかった。

南西隅に不整形の土坑が確認された。貯蔵穴様の



第338図 1号民家

施設として位置付けを試みたが、埋土の特徴も乏しく、遺物も出土していない。性格は不明である。

遺物は、遺構全域から古銭・鉄製品をを多く出土した。層的には底面に密着する例は少なく、底面より数cm浮いた状態の出土が目立つ。その他では、灯明皿・陶磁器の出土が見られた。

埋土は、褐色土を主体としており、周辺の奈良・平安時代の住居跡と色調・質感に差がある。

本遺構は、少なくとも3方を壁で囲まれた施設で、おそらく、方形状の掘り込みを呈するものと捉えた。

西壁の立ち上がりが見え、明瞭な要素から、斜面地形の掘削により、底面の平坦面を築き上げた様相を重視したい。また、ピットの配列は上屋を想定し得ず、存在したとしても簡素な構造と考えられる。

遺物の組成は、墓塚に近く、鉄釘は建物ではなく棺に供された可能性がある。このことから、本遺構は、方形の平坦面上に設けられた、墓域として位置付けたい。規模からも、単体の埋葬ではなく、複数の埋葬が示唆されよう。屋敷墓あるいは共同墓地(総墓)等の性格も想起されるが、近世墓制は不明点も多く、詳細は類例の増加を待ちたい。



第339図 1号民家出土遺物

第284表 1号民家遺物観察表

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第339図 灯明皿 図版	1 104	口：( 6.8) 高：( 2.3) 底：( 5.0)	約1/4	①緻密 ②還元焰 ③暗赤褐色 ④陶器	灯明皿受け皿。鉄泥を内面及び外面口縁部～体部中位にまで塗布。製作地不詳。江戸時代の所産か
第339図 鉢 口絵 図版	2 104	口：(15.3) 高： - 底： -	口縁部破片	①緻密 ②還元焰 ③オリーブ褐色 ④陶器	あるいは皿か。備前陶器である。口縁部内彎する。器厚薄手。青緑釉と褐色釉の掛け分けを施す。内野山窯。17世紀後半～18世紀初頭
第339図 碗 口絵 図版	3 104	口：(11.8) 高： - 底： -	破片	①緻密 ②還元焰 ③黄褐色 ④陶器	口縁～体部緩やかな内彎を呈す。瀬戸美濃製で焼成不良。内外面飴釉を施し、口縁部に薬灰釉が掛かる。所謂尾呂茶碗か。18世紀前半～中頃の所産と思われる

## 2号民家

調査区東-C区東斜面部の裾部下に位置する。周辺は、ほぼ平坦地形ともいえる東緩斜面地形であり、良好な居住地形を呈する。奈良・平安時代の住居跡も多く検出されており、C区東緩斜面住居跡群とした10号住～13号住が群在する。ただ、これらの住居跡の多くは、近世～現代にかけての耕作により、全体に遺存状態は悪く、その一因を担う例として2号民家も要因をなす。

また、本遺構北辺には1号溝が重なり、西辺を巻く様に屈曲する。両者とも、近世遺物を出土しており、重複関係も土層観察においては切り合いが認められないことから、ほぼ同時期の共伴する遺構として捉えられる。その他の重複遺構としては46号土坑が挙げられるが、縄文時代の所産である。

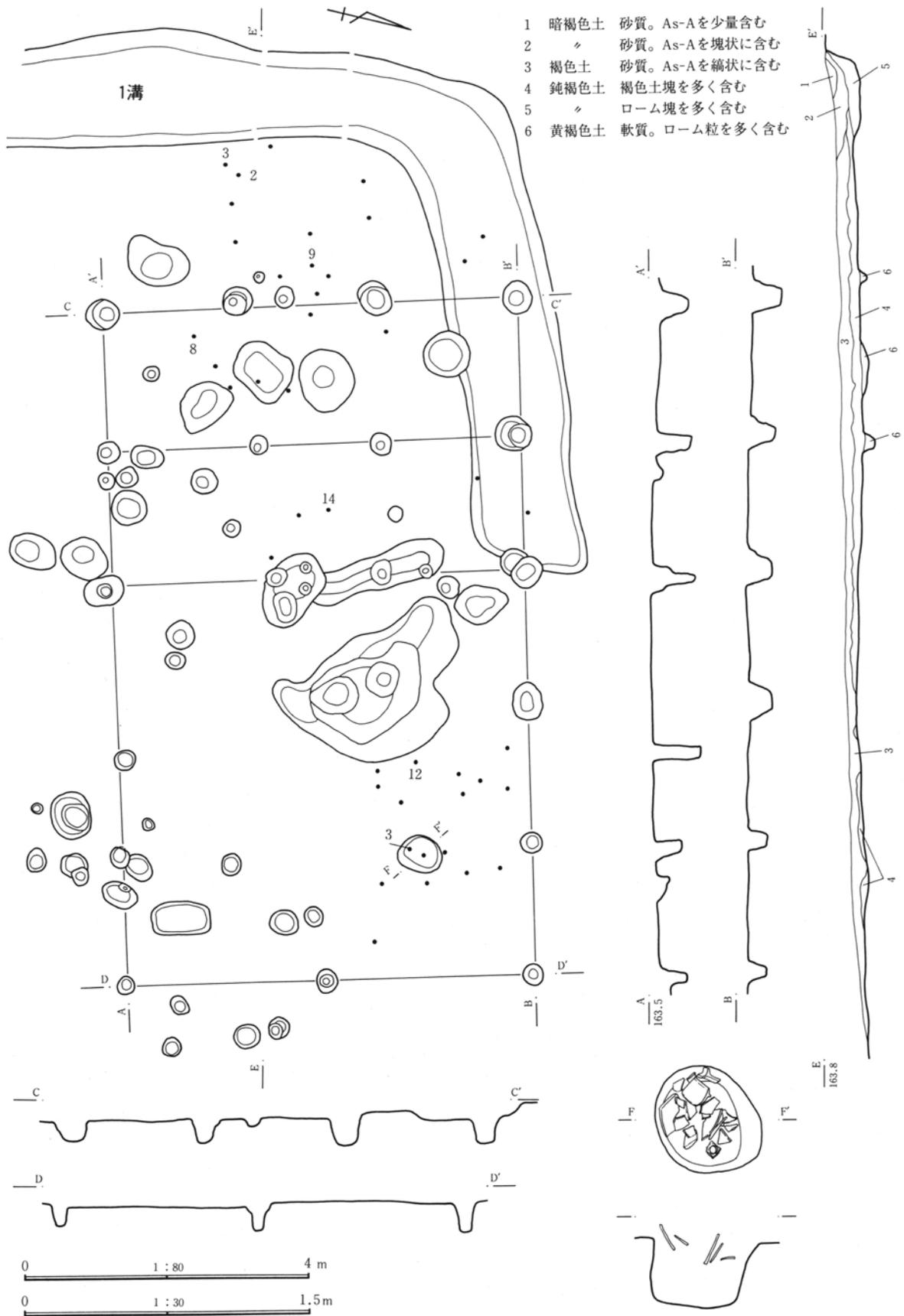
本遺構は、掘立柱建物を主体とする。建物跡は、3×5間の柱穴配置で、東西に長軸を設ける約9.4×5.6mの大型の長方形を呈す。柱穴はすべて素掘りで、19基のピットからなる。

また、1号溝より東側は平坦面が連続しており、建物跡はこの平坦面に立地する。傾斜地形削平による平坦面作出と捉えられよう。

柱穴に相当するピットの規模は、概ね径20～40cm、深さ約20～50cmと小型の柱穴であるが、柱穴配置は整っており、周辺で検出された小ピットとの分別は比較的容易であった。

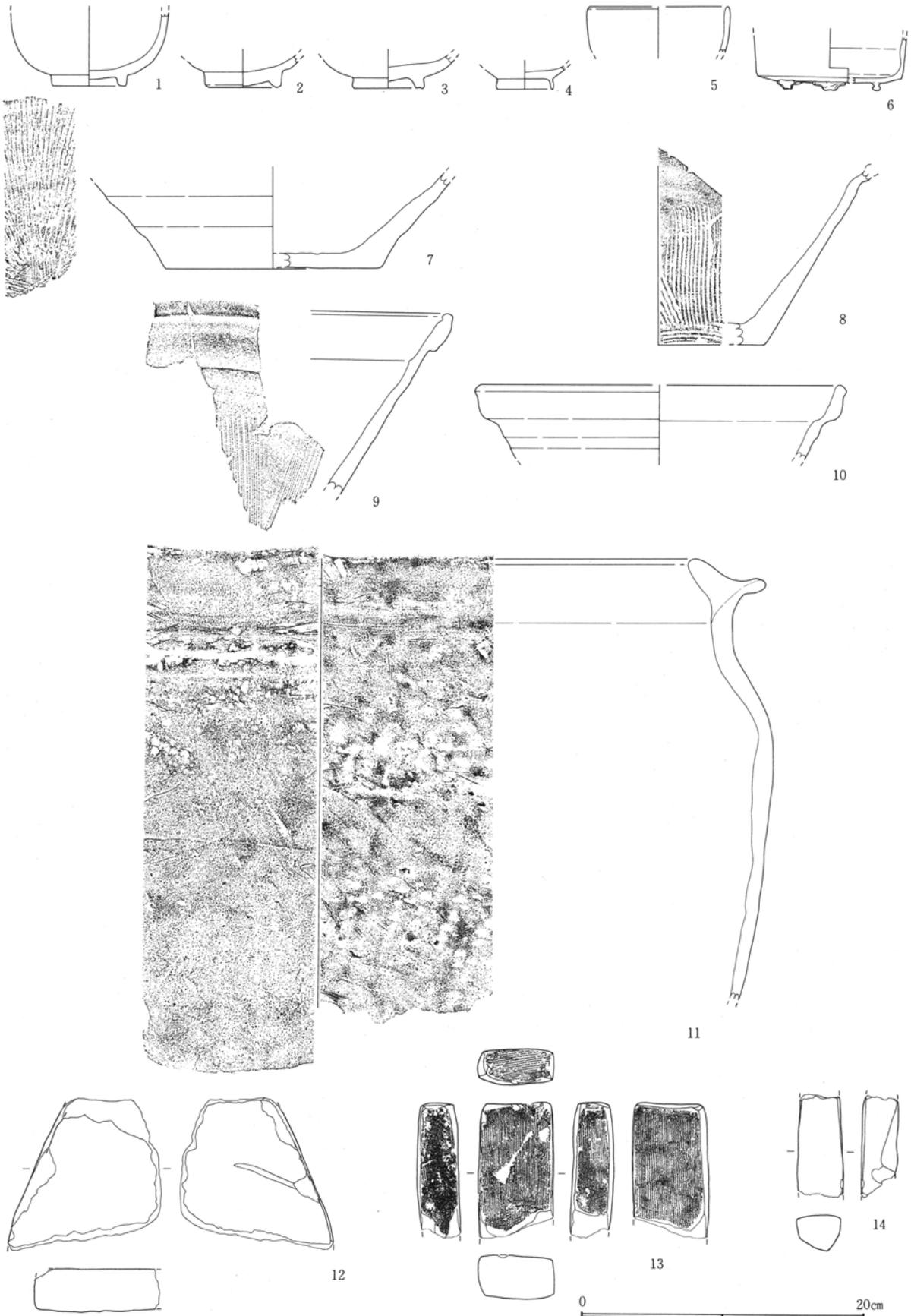
柱穴間の距離は、概ね約2mを基準とするが、P5～P6間は約1.8m、P11～P12間は約1.3m、P12～P13間は約1.4m、P14～P15間は約1.8mと不規則な配置も見られる。また、東辺の柱穴配置は2間であり、柱穴間距離は約2.8mを測る。

建物跡内部の柱穴としては、P15～P19が確認されている。いずれも建物跡西側に配され、西辺のP7・P8に対応する配置を見せる。反面、建物跡東側には、良好な配置を呈す柱穴は見られない。このことから、建物跡東半は土間状の施設が存在していたものと思われ、建物内柱穴が見られる西半は高床状の形態を取るものと考えられる。換言すれば西半は居住に供された空間であり、東半は作業場―土間としての機能が想起されよう。ただし、西側には炉が検出されておらず、「囲炉裏」としての施設は特定できない。また東側も竈様の痕跡は確認されておらず、間取りの性格付けについては傍証を得ていない。土間とした東半にしても硬化面の検出は果たせ



第340図 2号民家

第14節 近世～近代



第341図 2 民家出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

第285表 2号民家遺物観察表

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第341図	1 碗 口絵 図版104	口: - 高: - 底: 5.0	約1/3	①緻密 ②還元焰 ③オリーブ褐色 ④陶器	高台は直立し、体部下半の彎曲顕著。瀬戸美濃。内外面飴釉。高台脇から下位は無釉 18世紀代
第341図	2 碗 口絵 図版104	口: - 高: - 底: 4.8	底部	①緻密 ②還元焰 ③橙色 ④陶器	やや厚手の器厚。瀬戸美濃。内面飴釉。見込み部に藁灰釉付着。外面鉄泥を薄く塗布。所謂尾呂茶碗か 18世紀代
第341図	3 碗 口絵 図版104	口: - 高: - 底: 5.1	底部	①緻密 ②還元焰 ③オリーブ褐色 ④陶器	瀬戸美濃。内外面飴釉。高台脇から下位は無釉 18世紀代
第341図	4 碗 口絵 図版104	口: - 高: - 底: 3.8	底部	①細 砂粒 ②還元焰 ③白色 磁器	肥前磁器。蓋の可能性も高い。文様はコンニャク印判で意匠は不明。17世紀終末～18世紀
第341図	5 碗 口絵 図版104	口: (9.6) 高: - 底: -	口縁部破片	①緻密 ②還元焰 ③明黄褐色 ④陶器	口縁～体部は一体化し、緩やかな内彎を呈す。瀬戸美濃製で内外面飴釉を施す。器厚薄手
第341図	6 香炉 口絵 図版104	口: - 高: - 底: (10.0)	底部破片	①緻密 ②還元焰 ③オリーブ褐色 ④陶器	体部は直立し、強い屈曲を以て底部に至る。底面に脚を3箇付す。瀬戸美濃製の香炉。外面に飴釉。江戸時代の所産と思われる
第341図	7 搦鉢 図版 104	口: - 高: - 底: (14.9)	体部～底部 破片	①細 砂礫 ②還元焰 ③褐色 ④陶器	腰部に緩やかな彎曲を持たせ、体部は強く開く。轆轤整形で焼き締め陶器。摺り目放射状で、疎らながら全域に設ける。生産窯不明。17世紀代の所産か
第341図	8 搦鉢 図版 104	口: - 高: - 底: (14.8)	体部～底部 破片	①細 砂粒 ②還元焰 ③褐色 ④陶器	体部は緩やかに開き、口縁部は外反する。摺り目は等間隔で疎らに設けられる。瀬戸美濃製で18世紀代と思われる
第341図	9 搦鉢 図版 104	口: - 高: - 底: -	口縁部～体 部破片	①細 砂粒 ②還元焰 ③褐色 ④陶器	口縁部は肥厚し、体部は緩やかに開く。摺り目は等間隔で疎らに施される。瀬戸美濃製で19世紀の所産か
第341図	10 搦鉢 図版 104	口: (25.0) 高: - 底: -	口縁部破片	①細 砂粒 ②還元焰 ③赤褐色 ④陶器	有段の口縁。肥厚気味に彎曲する。摺り目は体部下半に設けられるのか判然としない。瀬戸美濃製で18世紀代の所産
第341図	11 大甕 図版 105	口: (52.8) 高: - 底: -	口縁部～体 部破片	①粗 砂礫 ②還元焰 ③暗褐色 ④焼締陶器	常滑甕。口縁部鐮状の突帯を付して内傾する。体部上半に緩やかな膨らみを設ける。内面指側痕あり。外面撫で。自然釉口縁部～体部上半付着する。19世紀中葉以降の所産。
第341図	12 砥石 図版 105	口: 10.7 高: 10.8 底: 3.1	一部	①牛伏砂岩 ④399.00 g	表裏面とも平坦で、断面形は偏平。狭小ながら滑沢面を持つ。擦痕は判然としないが、摩耗度は高い。荒砥であろうか
第341図	13 砥石 図版 105	口: 9.5 高: 5.5 底: 3.1	一部	①砥沢石 ④262.80 g	表裏面とも平坦で、断面形は偏平。各面とも長軸方向の条線が残る。未使用品か
第341図	14 砥石 図版 105	口: 7.2 高: 3.2 底: 2.6	約1/2	①砥沢石 ④84.49 g	4面とも滑沢面を持ち、特に裏面は歪みが見られる。擦痕は僅かながら長軸方向に認められる。仕上げ砥か。

なかった。しかし、東半には大型の甕（第341図11）を付帯する土坑P20が検出されており、貯水等の用途が考えられることから、東半を非居住空間とする位置付けは妥当性を帯びよう。ただ、破片状態の出土であり、甕本来の原位置はあるいは土坑外の可能性もあり、注意を要する。

建物外部の施設としては、前述の1号溝に注意したい。P1～P3と重なり、建物西側を画し、平坦面を築く端緒である。詳細は後述するが、居住域を区画し、排水等の機能が想起されよう。この1号溝は、南側でさらに屈曲し東西に走行するため、方形状に囲堯する形態を取る。建物跡と1号溝南側は10m以上の距離を保ち、その間に何等施設の痕跡はない。建物跡南側の空白域としては、庭あるいは屋外作業場としての位置付けも可能ではあるが、今回の調査では確定性に乏しく判断を控えたい。可能性のみの指摘である。

遺物は、建物跡内外から散漫に出土する。底面に密着する出土状態ではなく、殆どがやや浮いた状態である。前述の甕の他椀類・播り鉢・古銭・砥石等の出土を見る。

2号民家は大型の掘立柱建物を主体とする住居と考えられる。西側に顕著な削平段と平坦面及び南側の空白域を含めた範囲－1号溝によって画された範囲を民家として考えたい。

建物跡内部には、炉・竈のような煮沸・暖房施設は、調査の面がローム層に及んだためか検出されなかったが、柱穴の配置から、高床状の空間（座敷）と土間状の空間（土間）が併存しており、民家としての機能性は非常に高く、近世～近代の民家として好例を提供するものと捉えた。土間と考える東半部では、埋設された甕が出土しているが詳細な性格は特定できないが、位置的には、水利に供された可能性が高い。

また、1号溝による方形状の区画及び平坦面の削平は、建物及び居住の安定性を図った証左と思われ、定着的な居住と考えられる。出土遺物の貧弱さから、

詳細な位置づけはできないが、南側の空白域を考え併せると、建物跡は一般農家の屋敷としての性格を付与したい。

また、方形状の区画・削平は1号民家にも見られている。前項では、1号民家は方形の平坦面上に設けられた墓域として位置付けられており、居住地ではなく葬送地として考えた。同様の区画削平行為を併せる2号民家を居住施設とした本節から、短絡的ではあるが2号民家居住者と1号民家（墓域）被葬者の関連も興味深い。

### 3号民家

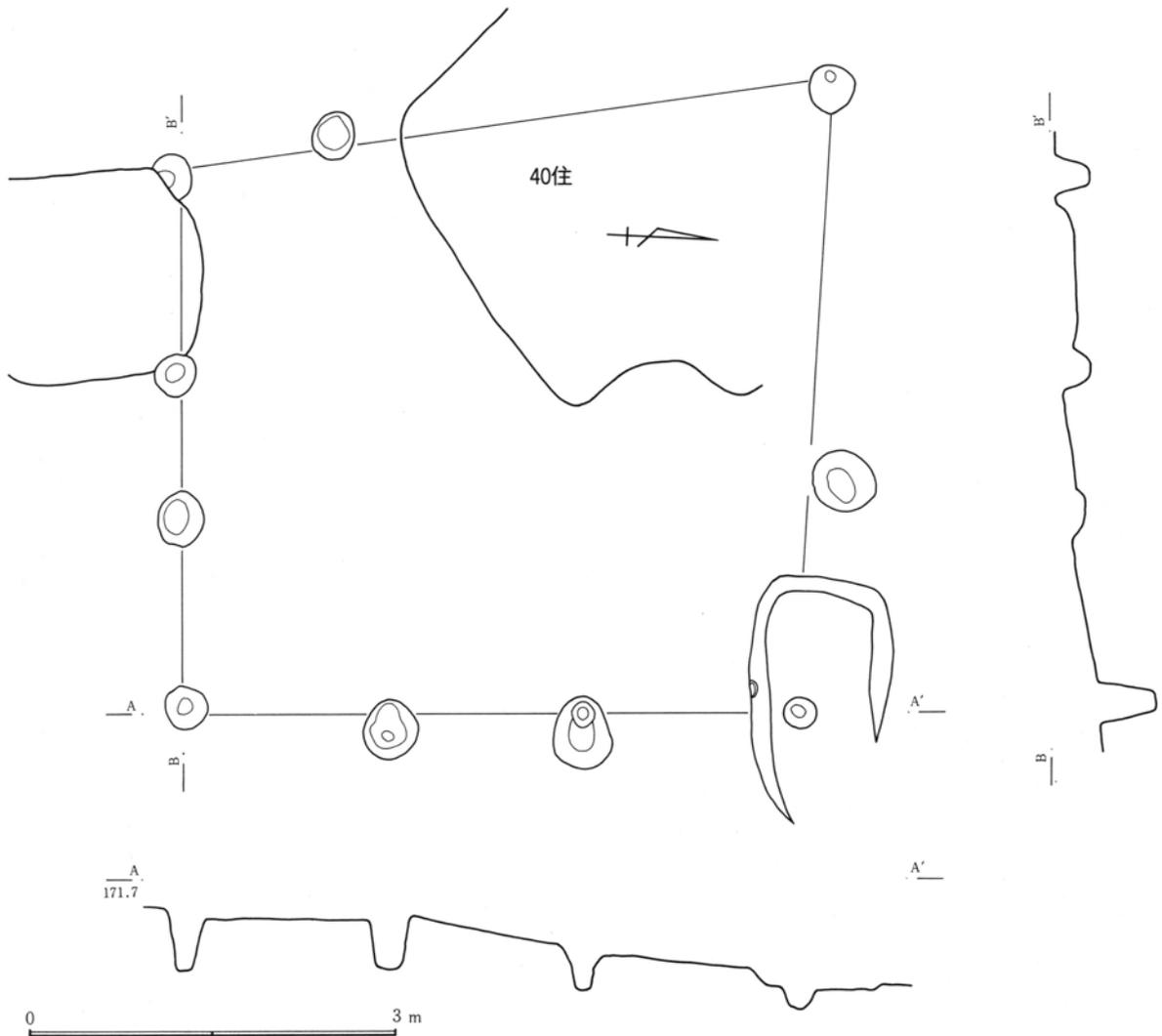
調査区中央北よりのD区台地鞍部に位置する。奈良・平安時代の住居跡や土坑が群在しており、C～D区住居群の西側にあたる箇所である。本遺構は、40号住や43号住と重複している。

周辺地形は、緩やかな東・北斜面地形を呈すが、勾配は緩やかで、本遺構は平坦地形に占地するといえよう。この平坦地形の成因は不明だが、あるいは本遺構の占地・使用に伴う削平の可能性は高い。

本遺構は10基のピットからなる掘立柱建物跡である。調査当初は、40号住・43号住の調査が先行し、本遺構の確定は、南辺のピット配列の検出によって東辺との規則性から建物跡として位置づけられた。柱痕等のピット埋土の資料化は果たせ得なかったが、締りの乏しい明褐色土を主体としており、近世～近代の遺構埋土と同調のため、該期の遺構として捉えた経緯がある。

建物跡というものの、柱穴配置は、整ってはならず北辺のP1・P2および西辺のP4が不規則な配置を見せる。比較的整然とした配列を呈する南辺と東辺は3間×3間で、規模は、南北軸が約5mで東西軸は4.3m程度の小型の建物と考えられる。前述のように、周辺には奈良・平安時代の住居跡・土坑が密集しており、柱穴配置の特定は、整いを見せる東・南辺を軸に北辺と西辺の対応する柱穴を抽出したが、確定性はやや乏しい。

柱穴間距離は、東辺のP8～P3間は1.6～



第342図 3号民家

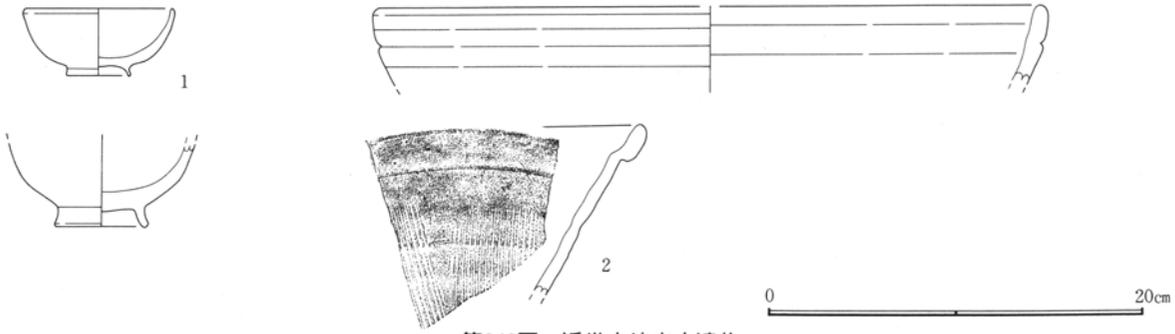
1.75m、南辺のP 5～P 8間は1.6m前後にまとまるが、北辺と西辺は配置と同様不規則である。また、南辺のP 6・P 7間は約1.2mを測り、意図的な柱穴配置と捉えられる。両者とも他の柱穴に比して浅く、機能差を想起させる。入口部であろうか。

建物跡内部には、焼土の散布も見られず、炉・竈等の施設は特定できない。また、硬化面も見られなかった。2号民家のような土間・座敷を画する柱穴配置ではなく、比較的単純な建物構造と捉えられよう。

また、本遺構周辺は、1号・2号民家に特徴的だった平坦面の掘削も不明瞭である。周辺の斜面地形

に比して、若干平坦面が意識されるが、掘削を伴う平坦面とは考えられない。

以上のように本遺構は、出土遺物も無く、前述した1号・2号民家のような大型の施設ではなく、掘削による平坦面をも持たないことから、居住に伴う施設とは考え難い。柱穴規模も小規模であり、配置の不規則性からも、上屋は貧弱な構造と考えられる。建物内部に居住痕跡等を示唆する遺物・施設は検出されておらず、作業小屋あるいは納屋のような例が想起されよう。



第343図 近世土坑出土遺物

第286表 2号坑遺物観察表

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第343図 口絵 図版105	1 碗	口： 7.7 高： 3.6 底： 3.3	完形	①緻密 ②還元焰 ③緑白色 ④磁器	製作地不詳の磁器碗。型押し整形。釉はクローム青磁。明治～大正期の所産か

第287表 12号坑遺物観察表

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第343図 図版 105	1 焙烙	口： (35.0) 高： - 底： -	口縁部破片	①細 砂粒 ②酸化焰 ③黒褐色 ④軟質陶器	焙烙。口縁部緩やかに内彎し。体部は直立する。底部欠損。体部中に接合痕。

第288表 122号坑遺物観察表

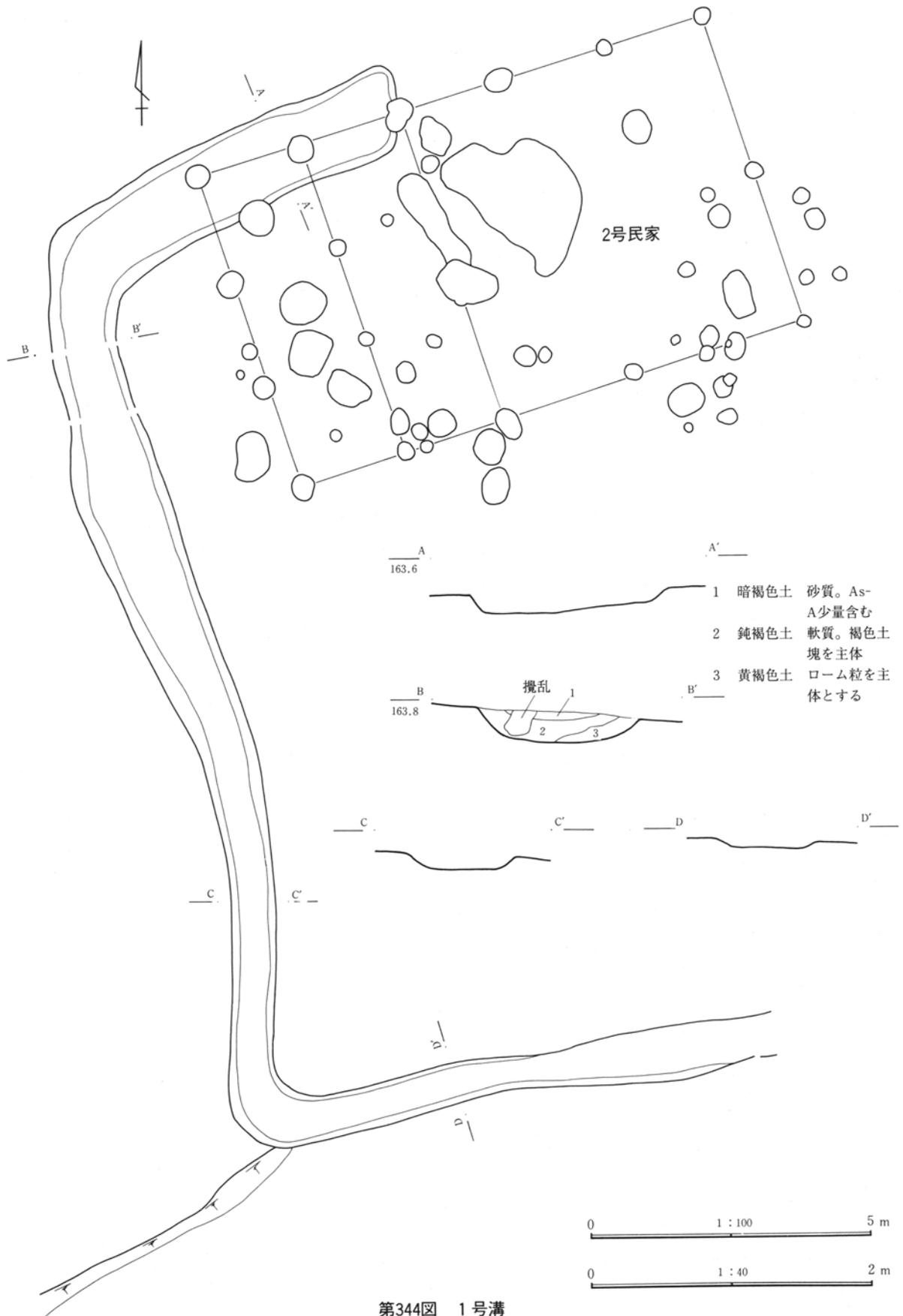
図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第343図 図版 105	1 碗	口： - 高： - 底： 5.0	体部～底部破片	①緻密 ②還元焰 ③淡黄色 ④陶器	備前陶器碗。高台は緩やかに開き体部下半の彎曲を呈す。17世紀後半～18世紀初頭の所産。所謂呉器手碗
第343図 図版 105	2 搦鉢	口： - 高： - 底： -	口縁部破片	①細 砂粒 ②還元焰 ③褐色 ④陶器	口縁部内彎気味に肥厚する。体部は直線状に開く。摺り目は等間隔で疎らに設けられる。瀬戸美濃製。18世紀代か

(近世～近代土坑遺物)

第6節で触れ得なかった近世～近代に比定された土坑出土土器を掲載する。近世に比定された土坑は、2～4号坑・12号坑・14号坑・18号坑・24号坑・48～50号坑・106～109号坑・122号坑・150号坑・151号坑等が挙げられるが、出土遺物として特定された土坑は、2号坑・12号坑・122号坑のみである。他は埋土の特徴や、重複関係から推定したものであるが、該期における土坑利用に関しては、積極的な検

証を経ていないため、確定性に乏しい。ここに掲げた出土土器に関しても土坑の性格を具現化する例ではなく、土坑埋土中に流入した遺物として捉えられた。

時期的には、2号坑は明治時代以降の磁器碗が、122号坑は18世紀代に比定される出土土器を得ているように、まとまりを持たない。ただし、2号民家出土遺物の大半は18世紀代に充てられるように、122号坑出土遺物と近縁性が求められよう。



第344図 1号溝



第345図 1号溝出土遺物

289表 1号溝遺物観察表

図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第345図 鉢 口絵 図版105	1	口： - 高： - 底： -	口縁部破片	①緻密 ②還元焰 ③灰緑色 ④陶器	口縁部強く外反し、直線状に開く体部形態。内面体部上半に横位波状文を施し、灰釉に銅緑釉を流す。瀬戸美濃製。江戸時代の所産か
第345図 砥石 図版 105	2	口： 8.8 高： 2.4 底： 1.4	一部欠損	①砥石 ④44.62 g	細身の砥石。四面とも平坦で、方形の断面形状を呈す。表裏面は滑沢だが、側面には条線が残る

### 1号溝

2号民家西で確認されている。本溝より西側は比較的勾配の強い斜面地形が展開するが、本溝を境に、東側は平坦面に近い緩やかな傾斜を呈する。

前述のように、本溝は2号民家の施設の一部とする位置付けは極めて妥当性を帯びる。2号民家建物跡の北辺より重なる本溝は、西辺で屈曲し、南北に走行する。さらに南側でも再屈曲し、東西の走行を見せる。南辺最東端では、斜面地形による消長が見られ、判然としない。

溝幅は、北辺が最も広く1.5m前後だが、西辺・南辺と徐々に狭くなり、西辺が約1m、南辺が約70cmを測る。掘り込みも北辺と西辺は比較的しっかりしており、壁の立ち上がりも明瞭だが、南辺に至ると、立ち上がりは弱く判然としなくなり、断面形状も皿状を呈す。溝底面の標高値は、北側から南にかけて低くなる。底面形状は比較的平坦である。

西辺の掘り込みは、西側の急傾斜地形が意識されており、一部の壁西側は直立状を呈していた。反面東側はやや緩やかであり、東側の2号民家とその周辺の平坦面が影響したものと考えられよう。あるいは、

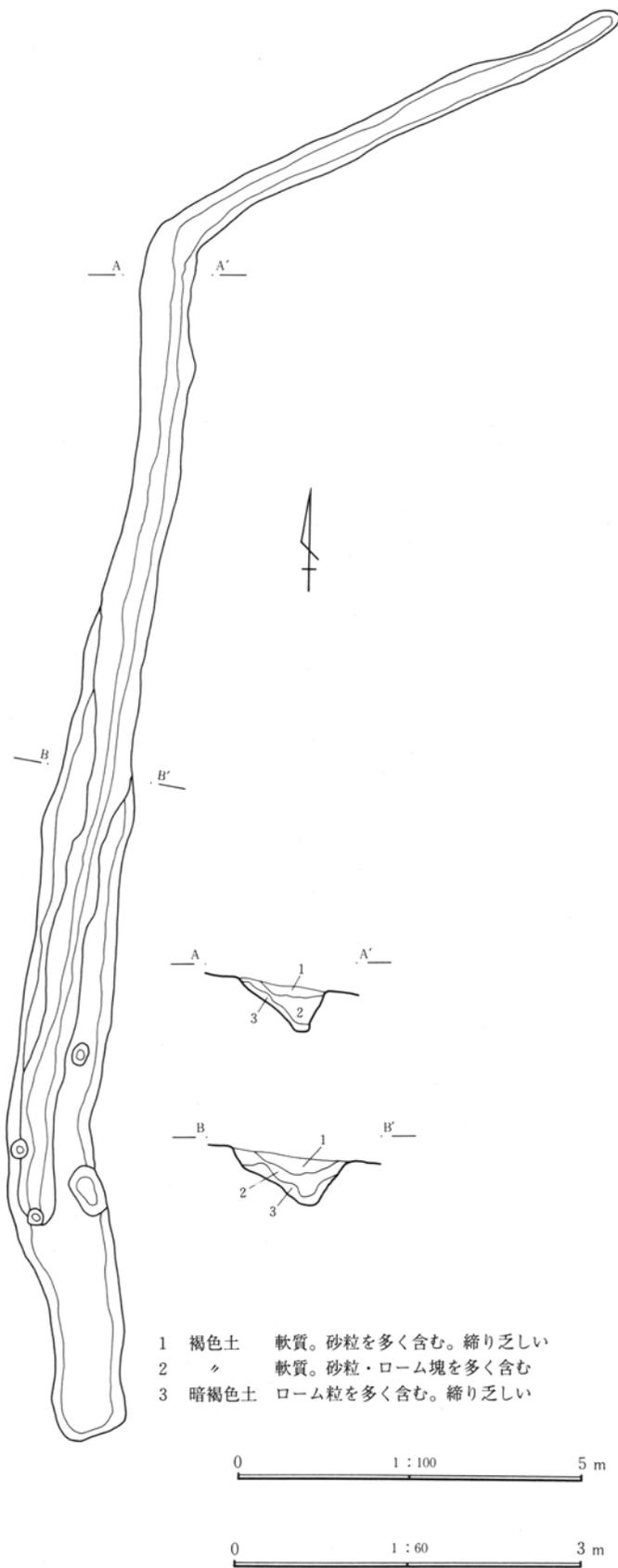
2号民家設置の際に、平坦面掘削が行われ、本溝西辺も入念な掘削が及んだ可能性もあろう。

また、溝底面の標高値が南側に下がる傾向は、水利施設としての機能も想起されよう。2号民家北辺西端に民家内水利施設を推定した場合、本溝は排水施設としての位置付けが可能である。

さらに、本溝の走行が2回の屈曲を経て、東側へ消長する形態は、明らかに2号民家と周辺を囲む例であり、地境としての機能も具有した溝性格も考えておきたい。

以上のように、1号溝は2号民家施設の一部であり、平坦面確保・水利・地境を兼ねた、2号民家囲堯施設としての機能が推定されよう。

尚、本溝出土遺物は、瀬戸美濃産の鉢破片と砥石のみであるが、2号民家出土遺物は、18世紀代の遺物を中心とすることから、本溝は近世江戸時代の屋敷溝の良好な例と位置付けられよう。



- 1 褐色土 軟質。砂粒を多く含む。締り乏しい
- 2 軟質。砂粒・ローム塊を多く含む
- 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む。締り乏しい

0 1 : 100 5 m

0 1 : 60 3 m

第346図 6号溝

### 6号溝

6号溝は、既に第10節で述べた古代溝でも言及している。台地鞍部を軸上に走行する形態から、頂部に至る道路状遺構の可能性を示唆した。第10節では2号溝との関連を重視し、本溝との接点を道路上遺構の分岐点として可能性を求めてみた。しかしながら、6号溝は、時期的な帰属が近世～近代に比定され、2号溝との同時性は果たし得ない。第10節では、道路状遺構としての2号溝の継続性あるいは6号溝初現が遡る可能性も考え、両溝の関係を模索したが、両溝の同時性は確認できない。

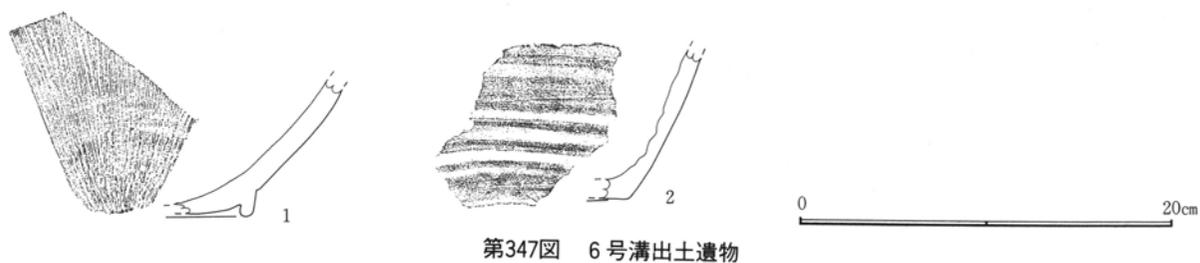
6号溝は、D区台地鞍部で南北の走行をもって確認された。北側で緩やかに屈曲するが、ほぼ南北に直線状の走行を見せる。

溝幅は北側が約40cm前後と狭いが、南側の台地頂部付近は約130cm前後で、良好な掘り込みを呈す。溝底面は葉研状ながら不定形であり凹凸も多い。底面標高は北側へ傾斜し、周辺地形に沿うものである。

第10節では、本溝を道路状遺構として性格を位置付けた。周辺に走行する2号溝や3号溝が、台地頂部の施設への導線と捉えた際に、平行して走行する6号溝にも同様の性格を考えてみた。

6号溝が帰属し得る近世～近代にかけては、台地頂部には特筆する施設の存在は無く、積極的な導線としては捉えられない。しかしながら、現道も台地鞍部を南北に走行しており、おそらく、D区台地鞍部における南北の導線は、近世～現代にかけても生活に密接に繋がる指向と考えられよう。

本書では、6号溝及びその周辺の溝を道路状遺構として考えてみたが、丘陵性台地における、道路痕跡検出にも問題があり、検討の余地は多い。

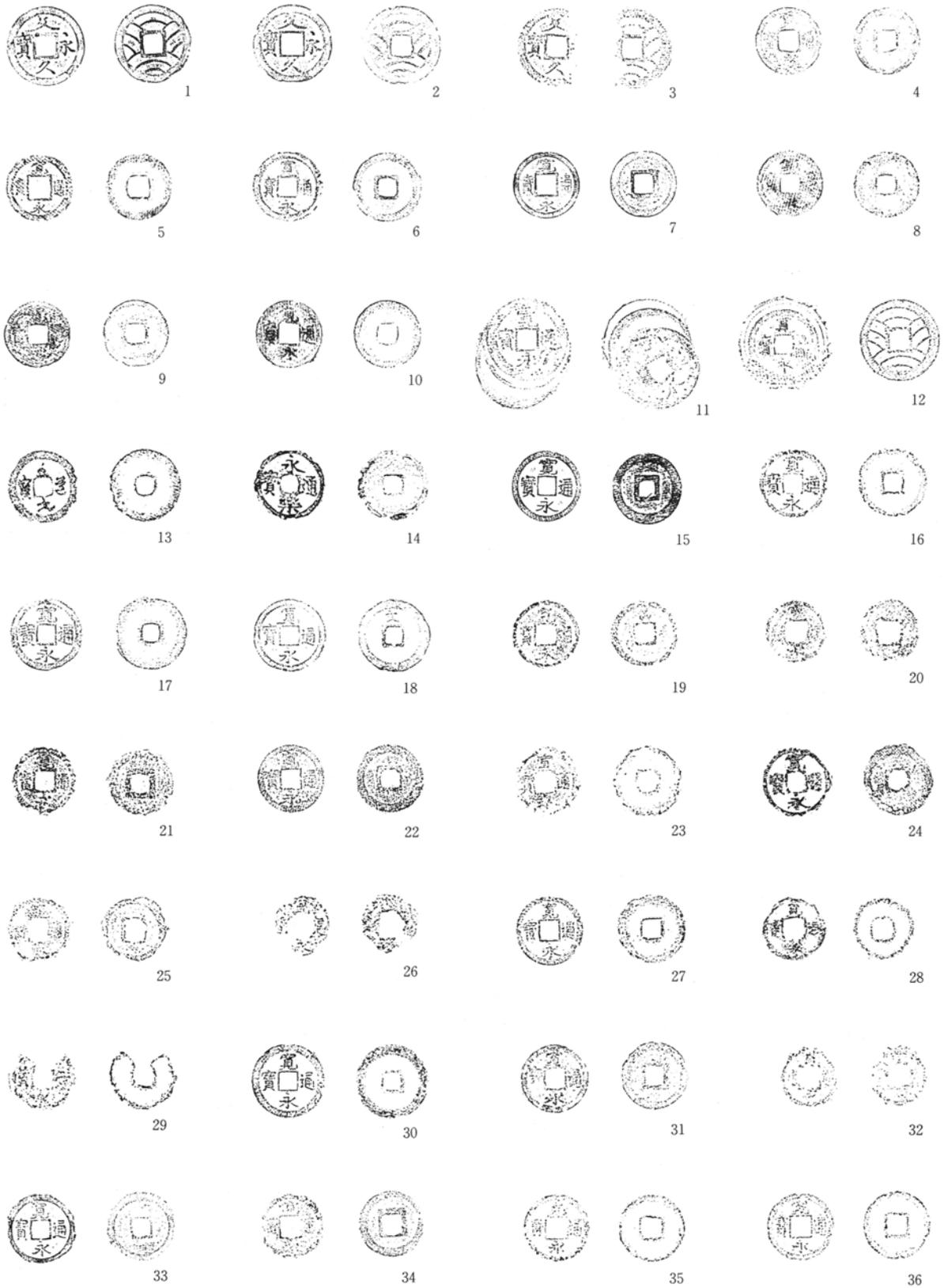


第347図 6号溝出土遺物

第290表 6号溝遺物観察表

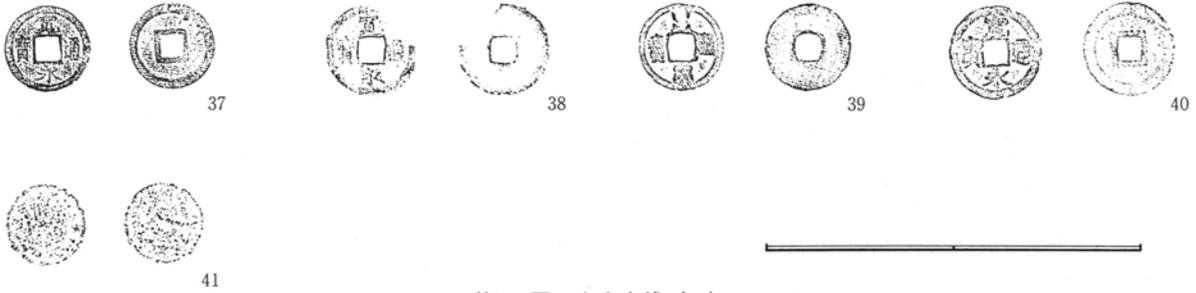
図器	番号種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第347図 図版	1 擂鉢 105	口： - 高： - 底： -	底部破片	①細 砂粒 ②還元焰 ④陶器	体部は緩やかに内彎し底部とはほぼ一体化する。腰部に高台が付される。轆轤整形。生産窯・時期不明
第347図 図版	2 甕 105	口： - 高： - 底： -	底部破片	④軟質陶器	緩やかな彎曲を帯びて開く体部下半。内面の轆轤目強い。外面鉄釉を施す。瀬戸美濃製。時期は不明。

第三章 検出された遺構と遺物



0 10cm

第348図 出土古銭 (1)



第349図 出土古銭（2）

第291表 古銭計測表

挿図番号 器種	法量 (cm) (g)	出土位置	特 徴
第 図1 銅銭 図版	径：2.65 孔：0.70 重：2.92	2号土坑	「文久永寶」
第 図2 銅銭 図版	径：2.65 孔：0.70 重：3.75	2号土坑	「文久永寶」
第 図3 銅銭 図版	径：2.60 孔：0.70 重：1.41	2号土坑	「文久永寶」
第 図4 銅銭 図版	径：2.20 孔：0.65 重：2.46	2号土坑	「新寛永通寶」
第 図5 銅銭 図版	径：2.20 孔：0.70 重：2.07	2号土坑	「新寛永通寶」
第 図6 銅銭 図版	径：2.30 孔：0.60 重：2.40	2号土坑	「新寛永通寶」
第 図7 銅銭 図版	径：2.20 孔：0.65 重：2.15	2号土坑	「新寛永通寶」
第 図8 銅銭 図版	径：2.20 孔：0.60 重：1.83	2号土坑	「新寛永通寶」
第 図9 銅銭 図版	径：2.20 孔：0.65 重：2.06	2号土坑	「新寛永通寶」
第 図10 銅銭 図版	径：2.20 孔：0.65 重：2.23	2号土坑	「新寛永通寶」
第 図11 銅銭 図版	径：2.80 孔：0.65 重：12.63	2号土坑	「新寛永通寶」 2枚目 径：2.80 3枚目 径：2.80

挿図番号 器種	法量 (cm) (g)	出土位置	特 徴
第 図12 銅銭 図版	径：2.40 孔：0.60 重：8.96	2号土坑	「新寛永通寶」 2枚目 径：2.60 孔：0.60 3枚目 径：2.80 孔：0.65
第 図13 銅銭 図版	径：2.40 孔：0.60 重：2.38	1号民家	「至道元寶」 北宋銭
第 図14 銅銭 図版	径：2.30 孔：0.65 重：2.41	1号民家	「永樂通寶」
第 図15 銅銭 図版	径：2.35 孔：0.60 重：2.38	1号民家	「寛永通寶」
第 図16 銅銭 図版	径：2.30 孔：0.60 重：2.14	1号民家	「寛永通寶」
第 図17 銅銭 図版	径：2.40 孔：0.60 重：2.51	1号民家	「寛永通寶」
第 図18 銅銭 図版	径：2.30 孔：0.65 重：3.25	1号民家	「新寛永通寶」 背に「文」
第 図19 銅銭 図版	径：2.30 孔：0.65 重：1.53	1号民家	「新寛永通寶」 背に「佐」
第 図20 銅銭 図版	径：2.00 孔：0.70 重：1.73	1号民家	「新寛永通寶」
第 図21 銅銭 図版	径：2.20 孔：0.70 重：1.82	1号民家	「新寛永通寶」
第 図22 銅銭 図版	径：2.25 孔：0.65 重：2.60	1号民家	「新寛永通寶」

第三章 検出された遺構と遺物

挿図番号 器 種	法 量 (cm) (g)	出土位置	特 徴
第 図23 銅銭 図版	径： 2.30 孔： 0.70 重： 1.65	1号民家	「新寛永通寶」
第 図24 銅銭 図版	径： 2.30 孔： 0.60 重： 1.77	1号民家	「新寛永通寶」
第 図25 銅銭 図版	径： 2.20 孔： 0.65 重： 1.24	1号民家	「新寛永通寶」
第 図26 銅銭 図版	径： - 孔： - 重： 0.57	1号民家	「新寛永通寶」
第 図27 銅銭 図版	径： 2.30 孔： 0.65 重： 1.50	1号民家	「新寛永通寶」
第 図28 銅銭 図版	径： 2.10 孔： 0.70 重： 0.99	1号民家	「新寛永通寶」
第 図29 銅銭 図版	径： - 孔： - 重： 0.90	1号民家	「新〇永通寶」
第 図30 銅銭 図版	径： 2.40 孔： 0.60 重： 1.71	1号民家	「新寛永通寶」
第 図31 銅銭 図版	径： 2.30 孔： 0.65 重： 1.78	1号民家	「新寛永通寶」
第 図32 銅銭 図版	径： - 孔： 0.60 重： 0.78	1号民家	「新寛永通寶」

挿図番号 器 種	法 量 (cm) (g)	出土位置	特 徴
第 図33 銅銭 図版	径： 2.30 孔： 0.60 重： 2.13	1号民家	「新寛永通寶」
第 図34 銅銭 図版	径： 2.20 孔： 0.65 重： 1.73	1号民家	「新寛永通寶」
第 図35 銅銭 図版	径： 2.20 孔： 0.70 重： 1.54	1号民家	「新寛永通寶」
第 図36 銅銭 図版	径： 2.20 孔： 0.70 重： 2.27	1号民家	「新寛永通寶」
第 図37 銅銭 図版	径： 2.30 孔： 0.65 重： 2.75	2号民家	「新寛永通寶」
第 図38 銅銭 図版	径： 2.40 孔： 0.70 重： 1.47	1号溝	「新寛永通寶」
第 図39 銅銭 図版	径： 2.30 孔： 0.70 重： 1.74	De-45Gr	「皇宋通寶」 北宋銭
第 図40 銅銭 図版	径： 2.50 孔： 0.65 重： 2.81	表採	「寛永通寶」
第 図41 銅銭 図版	径： 2.10 重： 2.47	2号土坑	「一銭」

## 第15節 遺構外出土遺物

本節では、住居跡・土坑等の遺構外出土以外の遺物を扱う。発掘調査の手順上、表面採集・試掘・表土重機掘削時出土の遺物、遺構確認時出土の際に帰属する遺構が不明な遺物を掲載した。尚、出土遺物のうち、縄文時代に帰属する遺構外出土遺物は、編集の都合上第4節に、出土古瓦、金属器は第13節・第14節に掲載しており、本節とは分けた。本節では、主に奈良・平安時代の遺構外出土器を扱ったが、近世遺物である播り鉢1点を併載している。

掲載にあたっては、遺存度の高い個体を優先し、墨書土器や特殊遺物は遺存度が少々低い場合も取り上げた。また、遺構確認時出土の資料は、調査時には分布図を作成しているが、一括廃棄あるいは平地住居の在り方を示すような出土状況ではないため、表組にグリッド名を記すことによって出土位置・出土状況とさせていただいた。重機による表土掘削出土遺物は、掘削時に詳細な出土地点を知る術を持たなかったため、表採として扱った。

本遺跡の遺構外出土遺物の特徴としては、奈良三彩小壺や円面硯などの稀少遺物の出土が挙げられる。古瓦も線刻を施した例が出土しており、通有の該期集落の出土遺物に比してやや稀少性を持つ。しかしながら、その量は少量であり、例えば奈良三彩の出土をもって、本遺跡の性格を通常集落と別個のものとするには短絡である。おそらく、これらの出土遺物は、周辺の寺院跡・窯跡の影響に要因が求められ、本遺跡で検出された住居跡群と直接的な関連を求めるのは早計である。周辺の調査が整った際に再度検討を要したい。

以下、主だった遺物を抽出して述べる。

土師器坏では4・5が古墳時代終末に比定され、本遺跡の検出された住居跡には例が無い。黒熊中西遺跡や黒熊栗崎遺跡でも少数しか出土しておらず、黒熊栗崎遺跡2号住居跡にまとまった例が見られるのみである。須恵器蓋では無摘の例(9)、墨書を施した例(12・13)が目立つ。

奈良三彩小壺(15)は、当該地域では初出の例と

位置付けられよう。内面に煤が付着するが、断面にも及んでおり、2次的な付着の可能性は高い。

円面硯(16)は脚部を欠損するが、他の住居跡出土の例と併せて、当地域における硯普及率の高さを物語る。

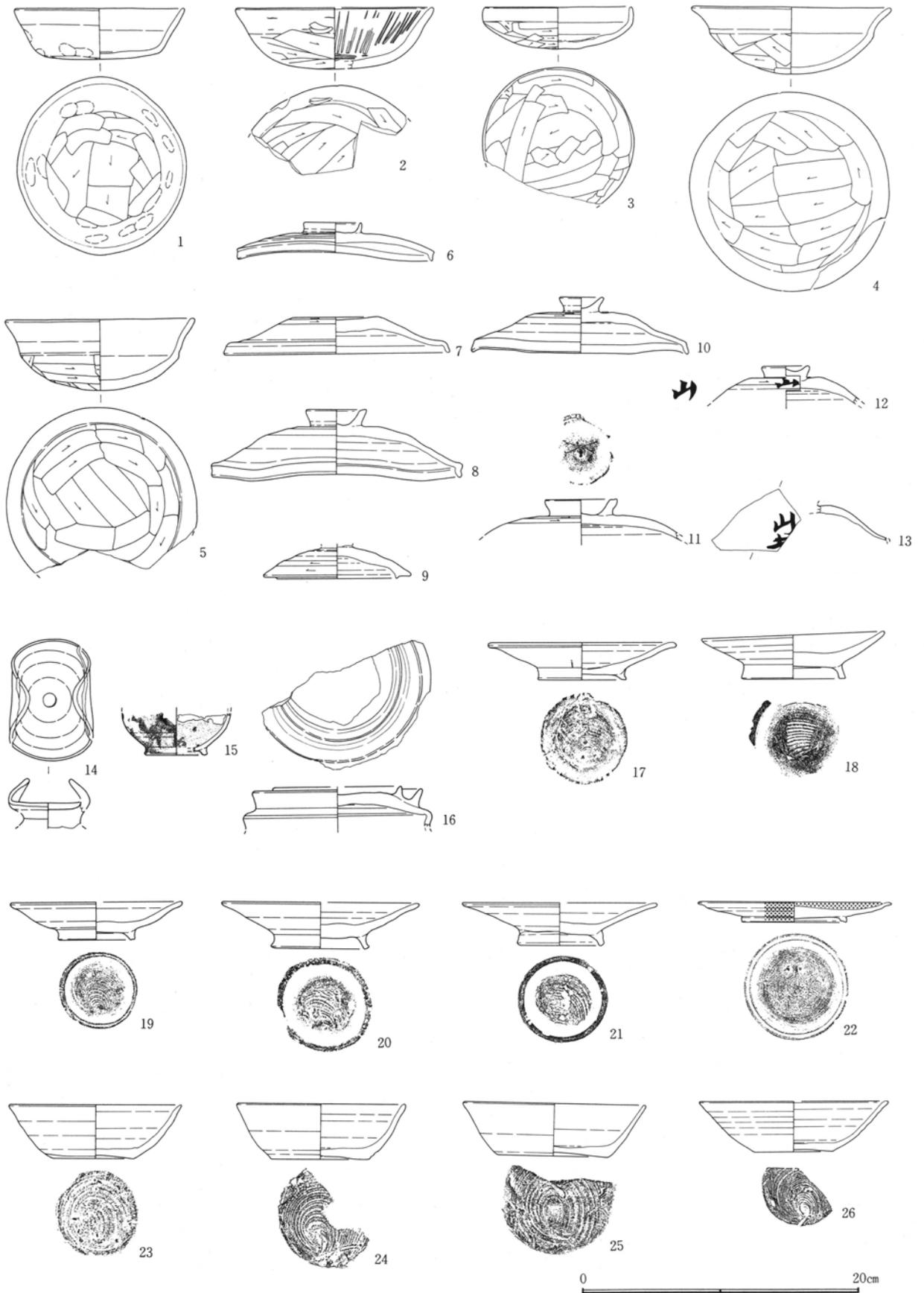
供膳具の出土率は高い。須恵器皿・坏・碗類は他器種を圧倒する出土量である。灰釉陶器皿(22)は内面のみ刷毛掛け施釉で黒笹窯の所産と捉えられよう。供膳具に施される墨書土器(52~60)も見られる。先の須恵器蓋と併せて出土量としては少なくない。黒熊中西遺跡や黒熊栗崎遺跡における墨書出土量に比して、若干ながら量的には多いものと捉えられた。

土師器大型鉢(61)や須恵器大型碗(65)の出土も特徴的である。須恵器大型碗は出土数は少ないものの、104号住等にも見られ、本遺跡の供膳具組成の一隅をなすものと考えられよう。

その他では、須恵器甕の凝着例(73)や鐙付盤(84)は本遺跡の特性と考える。甕体部破片の凝着例では無いが、115号住~117号住には須恵器坏の凝着した個体が出土しており、本遺跡と窯跡の地理的な近縁性が想起される。鐙付盤は、周辺の遺跡に例が無く、遺構外出土のため时期的な検証も果たせない。おそらく平安時代終末期の所産と考えたが、今後の類例増加を待ちたい。

土製品として、土錘の出土量がまとまる。細身の小型品(87・88)と大型品(90)など多様性を含む。大型品にしても、漁網の錘りとしては軽量であり、編物などの生産用の錘りとしても考えを巡らせない。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

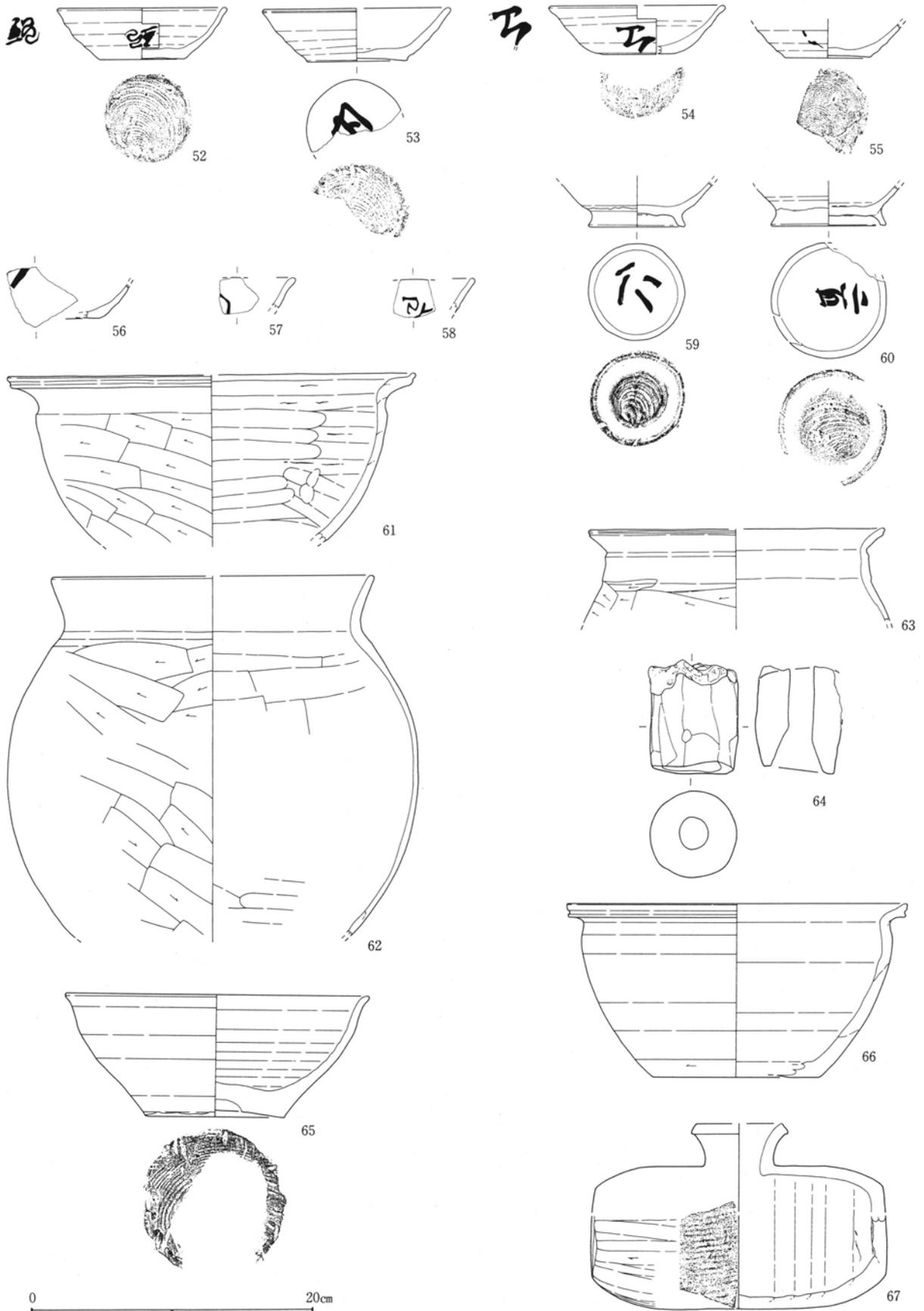


第350図 遺構外出土遺物(1)



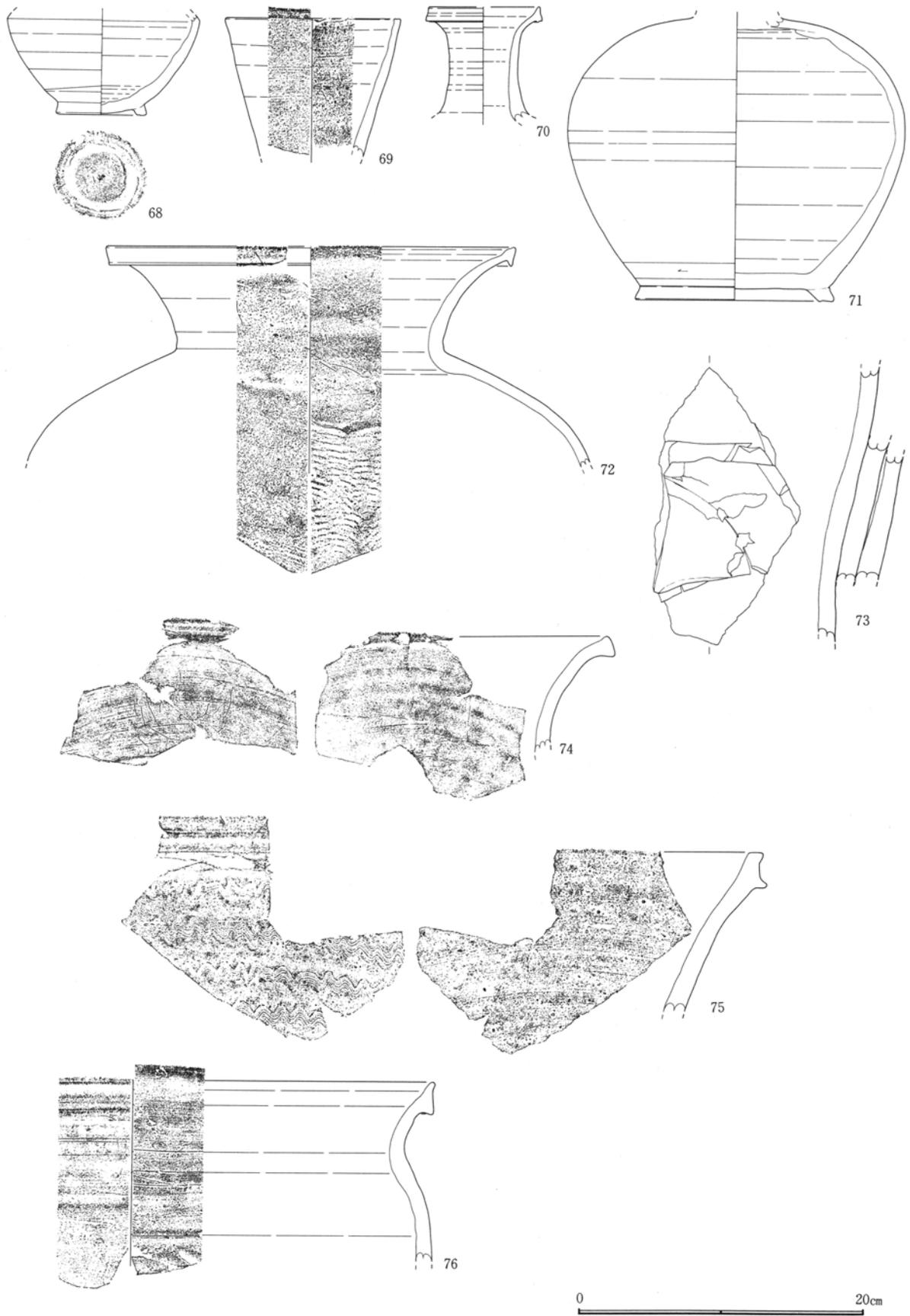
第351図 遺構外出土遺物 (2)

第三章 検出された遺構と遺物



第352図 遺構外出土遺物 (3)

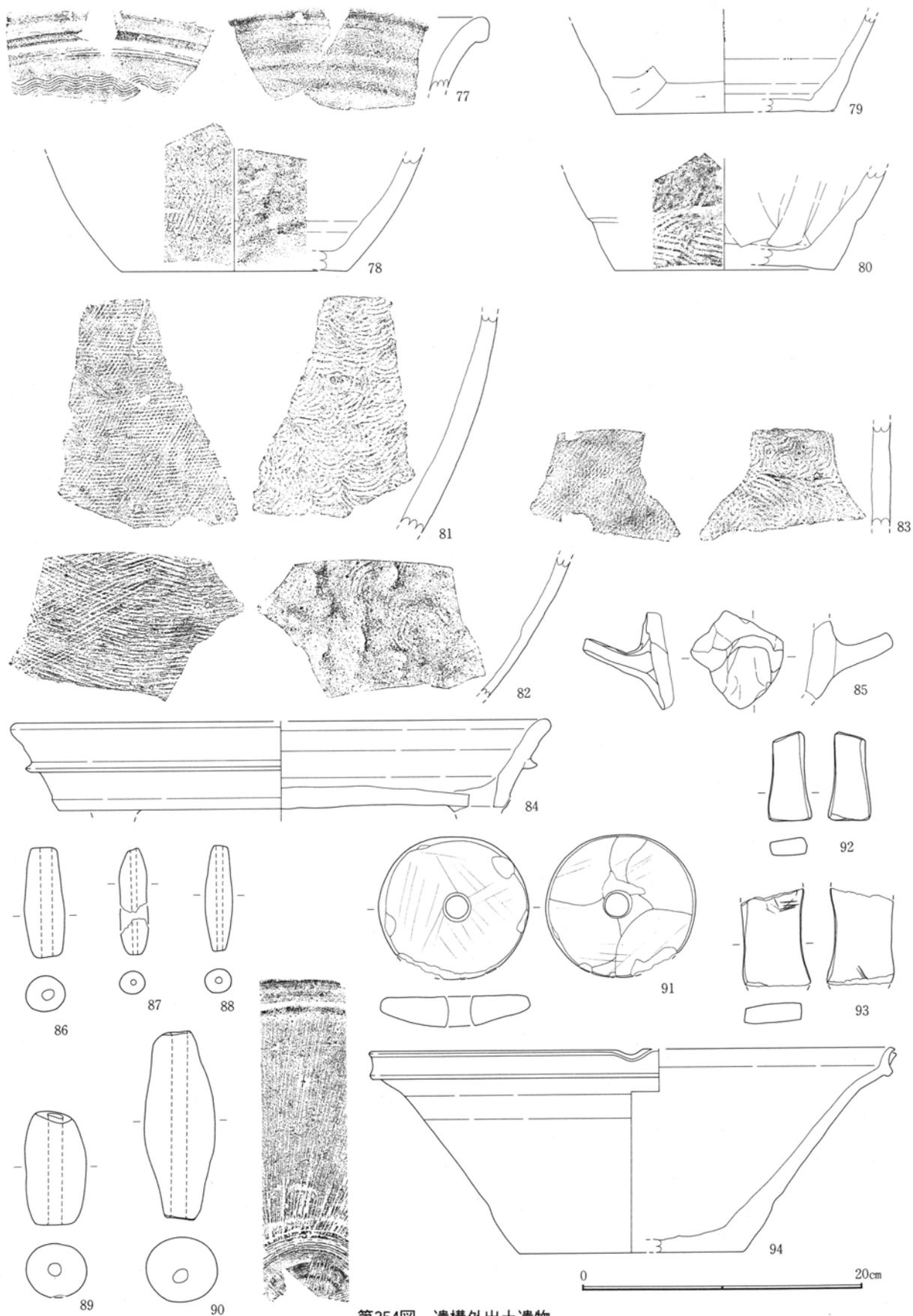
第15節 遺構外出土遺物



0 20cm

第353図 遺構外出土遺物 (4)

第三章 検出された遺構と遺物



第354図 遺構外出土遺物

第292表 遺構外遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第350図 1 坏 図版	口：12.0 高：3.6 底：8.6	完形 Ck-24	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部～体部外傾し体部偏平。底部は平底を呈す。体部には凹凸が見られる。口縁部横撫で、体部弱い撫で及び指頭痕。底部篋削り。
第350図 2 坏 図版	口：(14.0) 高：(4.3) 底：-	1/4 Cl-24	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	口縁部僅かに外反し体部～底部丸みを帯びて一体化する。口縁部横撫で、体部～底部篋削り後一部撫でを加える。内面放射状の暗紋を施す
第350図 3 坏 図版	口：10.4 高：3.0 底：-	4/5 表採	①細 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部内彎気味に直立し体部～底部は丸みを帯びて偏平。口縁部横撫で、体部横位篋削り、底部不定方向の篋削り。内底面剥落。
第350図 4 坏 図版	口：14.1 高：4.8 底：-	ほぼ完形 表採	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部強く外反し体部～底部丸みを帯びて一体化する。底部は丸底を呈す。口縁部強い横撫で、体部境稜状をなす。体部～底部篋削りを施す。内面は丁寧な撫で
第350図 5 土師器坏 図版	口：13.4 高：5.1 底：-	3/4 表採	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部強く外反し体部～底部丸みを帯びて一体化する。底部は丸底を呈す。口縁部強い横撫で、体部境稜状をなす。体部～底部篋削りを施す。内面は丁寧な撫で
第350図 6 蓋 図版	口：13.8 高：2.7 摘：4.1	3/4 Dd-27	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	環状摘を付す。天井部平坦で体部～裾部直線状で偏平。かえり部は歪みがみられ、短く直立する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付
第350図 7 蓋 図版	口：(15.8) 高：2.6 天：6.0	1/2 Dd-24	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③黄灰色 ④須恵器	無摘。天井部平坦でやや凹む。体部～裾部直線状に一体化し下位で彎曲を持つ。かえり部は外傾。右回転轆轤整形。体部上半回転篋削り、天井部回転糸切り
第350図 8 蓋 図版	口：(17.6) 高：4.7 摘：4.3	2/5 Cv-27	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦で環状摘を付す。体部上半は丸みを帯び下半～裾部は直線状に一体化する。かえり部は歪みがあり直立する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付
第350図 9 蓋 図版	口：(8.6) 高：- 摘：-	1/2 表採	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	小型品。摘欠損。天井部～裾部丸みを帯びて一体化する。かえり部端部は鈍く内稜を有す。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後撫で、体部回転篋削り。
第350図 10 蓋 図版	口：(15.2) 高：4.0 摘：3.0	1/3 Ch-34	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦で環状摘を付す。体部～裾部彎曲を帯びかえり部はやや外傾する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付
第350図 11 蓋 図版	口：- 高：(3.0) 摘：5.0	破片 De-27	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部平坦で環状摘を付す。体部～裾部緩やかなまるみを帯び一体化する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付
第350図 12 蓋 図版	口：- 高：(2.8) 摘：3.2	摘部破片 De-44	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部径狭く平坦で環状摘を付す。体部は直線状を呈す。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り後摘貼付。外面体部上半に墨書。判読不詳
第350図 13 蓋 図版	口：- 高：- 底：-	破片 Df-45	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部丸みを帯び、裾部彎曲する。かえり部は欠損する。右回転轆轤整形。天井部回転篋削り。体部外面墨書。「山口」あるいは山を部首とするか
第350図 14 耳皿 図版	口：(8.7) 高：- 底：-	1/3 Cs-38	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下位より内屈し、口縁部に彎曲を持たせる。底部は欠損するが突出気味。右回転轆轤整形後口縁～体部内屈

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第350図 15 図版	口： - 高： - 底： ( 4.2)	破片 Dc-47	①緻密 ②還元焰 ③黄灰色 奈良三彩	軟質で白色粘土を胎土とする。体部下半は球形の内彎を呈し、高台は短く開き気味に付される。施釉は外面に集中し、内面は底面のみに見られる。赤色釉は体部中位に僅かに見られる。体部内面に煤付着
第350図 16 円面硯 図版	口： - 高： ( 3.0) 底： -	硯部1/2 Ck-24	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	外縁部外反し体部は屈曲を経て外反する。内縁部は直立する。体部透かし孔は看取できない。右回転轆轤整形か
第350図 17 皿 図版	口： (13.0) 高： 2.7 底： 6.3	2/5 Dd-24	①粗 砂礫・片岩 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し玉縁状をなす。体部中位に緩やかな丸みを帯び高台は外反気味に直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。外面摩滅
第350図 18 皿 図版	口： 12.9 高： 3.1 底： ( 7.2)	3/4 Cl-24	①粗 砂礫・片岩 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部～体部僅かな丸みを帯び一体化しやや短い。底径広く高台は開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。底部器厚やや厚手
第350図 19 皿 図版	口： (12.0) 高： 2.7 底： 5.3	2/5 D区南端	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中位～下半に丸みを帯びる。体部はやや扁平。高台は外反気味に直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第350図 20 図版	口： (13.9) 高： 3.3 底： 6.4	2/5 表採	①粗 砂礫・片岩 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位僅かに丸みを帯びる。高台は比較的長く開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。底部器厚厚手
第350図 21 図版	口： (13.2) 高： 3.1 底： 5.6	2/5 Dm-37	①細 砂粒・片岩粒 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するもほぼ直線状に体部と一体化する。高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で
第350図 22 皿 図版	口： 13.2 高： 1.5 台： 7.4	1/2 表採	①緻密 ②還元焰 ③灰色 ④灰釉陶器	口縁部外反する。体部上半に丸みを帯び大きく開く。高台は短く付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。内面に施釉。刷毛掛け
第350図 23 坏 図版	口： 12.1 高： 3.9 底： 5.7	1/2 Ch-34	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍橙色 ④須恵器	口縁部～体部上半緩やかな彎曲を帯びて一体化し下半に丸みを帯びる。底部は上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整
第350図 24 坏 図版	口： (11.8) 高： ( 7.0) 底： 4.0	1/2 Ck-26	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部緩やかに外反し体部中位に丸みを帯びる。底部は僅かに突出し上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整
第350図 25 坏 図版	口： (12.8) 高： 3.8 底： 7.8	1/3 Ch-34	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中位に緩やかな丸みを帯びる。底部は上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整
第350図 26 図版	口： (13.2) 高： 3.6 底： 5.6	1/3 Df-44	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口径広く底径狭い。口縁部～体部上半直線状に一体化し、体部中位に極僅かな彎曲。底部は若干上げ底。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第351図 27 坏 図版	口： (12.3) 高： ( 3.5) 底： ( 5.9)	1/4 Dp-38	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③黒色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部直線状に開く。底部は上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整
第351図 28 坏 図版	口： (13.2) 高： 4.2 底： 5.7	2/5 Ck-24	①細 砂粒・片岩粒 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。底部極僅かに上げ底。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整

第15節 遺構外出土遺物

図 器 番 号 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第351図 29 坏 図版	口：12.7 高：3.8 底：6.7	4/5 Df-45	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③鈍橙色 ④須恵器	口唇部肥厚し口縁部外反する。体部中位に僅かな彎曲を持たせる。底部はやや突出し上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整
第351図 30 坏 図版	口：13.7 高：4.4 底：6.4	完形 Ck-24	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部は緩やかな丸みを帯びる。底部は僅かに突出し上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整
第351図 31 坏 図版	口：(12.0) 高：3.5 底：5.3	1/3 D区南端	①細 砂粒 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部比較的強く外反し、体部中位に丸みを帯びる。底部接地面は広く内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整。
第351図 32 坏 図版	口：(12.8) 高：3.9 底：(6.5)	1/3 Cp-26	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部～体部直線状に一体化し開く。底部は上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整
第351図 33 坏 図版	口：(14.5) 高：3.9 底：6.6	1/3 表採	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに内彎し体部緩やかな彎曲を呈す。底径は比較的広い。内面見込み部はやや明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整
第351図 34 坏 図版	口：(11.5) 高：3.4 底：5.4	1/2 Ck-24	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部～体部内彎気味に一体化し開く。底部は僅かに突出する。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整。体部器厚薄手
第351図 35 坏 図版	口：(12.3) 高：3.3 底：5.5	1/2 Cs-38	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するもほぼ直線状に体部と一体化する。体部は強く開く。内面見込み部はやや不明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整
第351図 36 坏 図版	口：(10.8) 高：3.5 底：6.3	1/2 Ck-24	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	全体にやや歪みあり。口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。底部は僅かに突出し底面は接地する。内面見込み部はやや不明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整
第351図 37 坏 図版	口：(10.7) 高：3.2 底：6.6	1/2 Cx-29	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口径はやや狭く、口縁部～体部緩やかな丸みを帯び一体化する。底面は接地する。内面見込み部は明瞭。右回轉轆轤整形。底部回轉笠削り
第351図 38 坏 図版	口：(11.0) 高：(3.6) 底：(6.2)	1/3 Ck-24	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し、体部下半に緩やかな丸みを持たせる。底面は接地する。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整
第351図 39 坏 図版	口：12.6 高：4.1 底：6.6	3/4 Ck-24	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③鈍橙色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部上半に緩やかな丸みを持たせる。底部は上げ底を呈す。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整
第351図 40 坏 図版	口：(12.8) 高：(4.0) 底：(7.5)	1/6 C区表採	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部～体部内彎気味に一体化する。底部は上げ底か。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整
第351図 41 坏 図版	口：(13.3) 高：4.0 底：8.0	1/6 C区表採	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部尖り、口縁部～体部内彎気味に一体化する。底部は上げ底を呈す。内面見込み部は緩やか。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整
第351図 42 坏 図版	口：(12.8) 高：3.8 底：7.6	2/5 D区表採	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部極僅かに外反するもほぼ直線状に体部と一体化する。底部は僅かに突出し若干上げ底を呈す。右回轉轆轤整形。底部回轉糸切り後無調整

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第351図 43 椀 図版	口：(13.6) 高： 5.4 底： 5.9	1/4 Dd-44	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③黒色 ④須恵器	口唇部若干肥厚する。体部はほぼ直線状に開き、高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で
第351図 44 椀 図版	口：(13.4) 高： 5.7 底： 6.2	2/5 D区南端	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部～体部緩やかな内彎気味に一体化する。高台は短く直立気味に開く。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で
第351図 45 椀 図版	口： 13.1 高： 4.9 底： 6.2	2/3 Cs-38	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③黄灰色 ④須恵器	体部下半に歪み有り。口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。高台は短く雑な貼付。内面見込み部は歪みのため明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で
第351図 46 椀 図版	口： 13.3 高： 5.0 底： 6.4	2/3 C区試掘時	①粗 砂礫・片岩粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に緩やかな丸みを持たせる。高台は短く直立する。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で
第351図 47 椀 図版	口：(12.8) 高： 5.6 底：( 6.9)	2/5 表採	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し、体部全体に丸みを持たせる。高台は短く開く。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で
第351図 48 椀 図版	口： 15.0 高： 5.6 底： 6.7	2/3 D区南端	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に緩やかな丸みを持たせる。高台は若干開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で
第351図 49 椀 図版	口： 13.2 高： 5.3 底： 6.4	2/3 Ds-26	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	体部中位に僅かな丸みを帯びるも、口縁部～体部ほぼ直線状に一体化する。高台は開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。内外面に油煙付着する
第351図 50 椀 図版	口：(12.3) 高： 3.4 底：( 6.1)	2/5 Cw-29	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。体部は扁平。高台は開く。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で
第351図 51 高坏 図版	口： - 高： - 底： 9.5	脚部 D区南端	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部は開く。脚部上位は内傾し裾部は緩やかに開く。右回転轆轤整形。脚部上半は撫でを加える。内面接合部に絞り目
第351図 52 坏 図版	口： 11.6 高： 3.6 底： 5.9	1/2 表採	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部～体部緩やかな丸みを帯びて一体化する。底部は極僅かに上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。外面体部に逆位墨書。判読不能
第352図 53 坏 図版	口： 12.9 高： 3.7 底： 6.7	2/5 De-26	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部緩やかに丸みを帯びる。底部は突出し若干上げ底を呈する。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。外底面に墨書。欠損するが「内」であろうか
第352図 54 坏 図版	口： 12.0 高： 3.4 底： 5.8	1/4 D区南端	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかに丸みを帯び下半に顕著。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部外面に墨書。判読は不能
第352図 55 坏 図版	口： - 高： - 底： -	底部1/3 Df-44	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③淡黄色 ④須恵器	体部下半は比較的直線状に開く形態を呈す。底部は若干上げ底。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部外面に墨書の痕跡。判読不能
第352図 56 坏 図版	口： - 高： - 底： -	底部破片 D区南端	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	緩やかな丸みを帯びて開く体部下半。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部外面に墨書の痕跡。判読不能

第15節 遺構外出土遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第352図 57 坏 図版	口： - 高： - 底： -	口縁部破片 D区表採	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	外反する口縁部。外面に墨書の痕跡。判読不能
第352図 58 坏 図版	口： - 高： - 底： -	口縁部破片 表採	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	外傾する口縁部。外面に墨書の痕跡。判読不能
第352図 59 椀 図版	口： - 高： ( 3.0) 底： 6.5	底部のみ D区南端	①細 砂粒・片岩粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	丸みを帯びて開く体部下半。高台は開く。内面見込み部は緩やか。右回 転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。外底面に墨 書。「仁」か
第352図 60 椀 図版	口： - 高： 2.8 底： 7.9	底部のみ De-36	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	緩やかな丸みを帯びて開く体部下半。高台は開く。内面見込み部はやや 明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。 外底面に墨書。「二面」か。判然としない
第352図 61 鉢 図版	口： (28.6) 高： - 底： -	1/6 C-85	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口縁部強く開き突出する。頸部は屈曲し、体部～底部は球形状を呈す。 底部形態は不明。口縁部横撫で、体部外面横位・斜位斲削り、体部内面 横位斲撫で
第352図 62 甕 図版	口： (22.5) 高： - 底： -	1/5 Dj-38	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部外傾し頸部緩やかな屈曲を見せる。肩部の張りはやや弱く、体部 中位に膨らみを持たせる球胴状の形態。口縁部横撫で、体部上半横位斲 削り、下半斜位斲削り。体部内面横位斲撫で
第352図 63 甕 図版	口： 20.6 高： - 底： -	口縁～体部 のみ Df-36	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部に沈線。口縁部上位外傾し下位は内傾する「コ」字状甕。肩部の 張りは弱い。口縁部横撫で強く上位屈曲部明瞭。体部は横位・斜位斲削 り。内面撫で。
第352図 64 羽口 図版	長： 8.0 径： 6.1 底： -	半欠 Df-43	①粗 礫 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土製品	鞘羽口。おそらく基部であろう。棒付による貫孔で撫でにより広く開口 する。外面は縦位撫で。中位に溶解物が少量附着する
第352図 65 図版	口： (21.2) 高： 8.6 底： 9.7	3/5 Dm-34	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大型品。口縁部外反し体部上半の丸みが顕著。下半は緩やかに彎曲する。 底部は上げ底を呈す。内面見込み部緩やか。右回転轆轤整形。体部下 半回転斲削り後轆轤撫でを加える。底部回転糸切り後無調整
第352図 66 甕 図版	口： (23.7) 高： 12.2 底： (11.5)	1/2 Ck-24	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口唇部直立し口縁部は大きく外反する。肩部の張りはやや強く体部上半 に膨らみを設ける。右回転轆轤整形。体部下半回転斲削り後轆轤撫でを 加える。
第352図 67 横瓶 図版	口： - 高： - 底： -	体部破片 Cl-23	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部破片のため器形は判然としないが、彎曲と内面轆轤目の様相から横 瓶と判断した。外面斲削りを施す
第353図 68 壺 図版	口： - 高： - 底： 6.0	2/5 D区試掘時	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部中位で屈曲し、下半は緩やかな丸みを帯びて開く。高台は開き気味 に付される。右回転轆轤整形。底部回転斲削り後高台貼付。貼付時撫で を加える。体部下半は回転斲削りを施す
第353図 69 壺 図版	口： 12.1 高： - 底： -	3/5 Cy-29	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部端部は角頭状をなす。口縁部は直線状に開く。頸部径は狭い。右 回転轆轤整形
第353図 70 壺 図版	口： ( 7.6) 高： - 底： -	1/3 Ck-24	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部内傾し、口頸部は緩やかに外反する。頸部の屈曲はやや弱い。右 回転轆轤整形

第三章 検出された遺構と遺物

図 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第353図 71 壺 図版	口： - 高： - 底： (13.6)	体部～底部 1/3 Ck-24	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	頸部径狭く、体部中位に膨らみを持たせ球胴状をなす。高台は短く開く。底径はやや広い。回転轆轤整形。回転方向不詳。腰部～底部回転斲削り後高台貼付。貼付時周縁撫で
第353図 72 甕 図版	口： (28.6) 高： - 底： -	口縁～体部 1/4 Dp-23	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外傾気味に直立する。口頸部は緩やかに外反し、頸部の屈曲は強い。肩部の張りも強く上半に膨らみを持たせる。口縁部轆轤整形。体部外面叩き調整後撫で。内面青海波状当て目
第353図 73 甕 図版	口： - 高： - 底： -	体部破片 Ds-26	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕体部破片3点の凝着。2個体か。窯片・自然釉少量付着。外面叩き調整。内面撫でか
第353図 74 甕 図版	口： - 高： - 底： -	口縁部破片 Cw-29	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	大甕口縁部破片。口縁部僅かに内傾し口頸部は比較的強く外反する。轆轤整形。回転方向不詳。内外面とも轆轤撫でを施す
第353図 75 甕 図版	口： - 高： - 底： -	口縁部破片 Cn-35	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕口縁部破片。口縁部直立し、外稜若干突出する。口頸部は直線状に外傾する。轆轤整形。回転方向不詳。外面数段の横位波状文を施す。内面轆轤撫で
第353図 76 甕 図版	口： - 高： - 底： -	口縁部破片 Cf-44	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕口縁部破片。口縁部直立する。口頸部は緩やかに外反し肩部の張りは弱い。体部上半に膨らみを持たせる。右回転轆轤整形。内外面とも轆轤撫で
第354図 77 甕 図版	口： - 高： - 底： -	口縁部破片 Cs-38	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③黒色 ④須恵器	大甕口縁部破片。口唇部丸みを帯び、口頸部は外反する。轆轤整形。回転方向不詳。外面横位波状文。内面轆轤撫で
第354図 78 甕 図版	口： - 高： ( 8.2) 底： 15.8	底部破片 D区南端	①粗 小礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	大甕底部。緩やかな内彎気味に開く体部下半。外面平行叩き調整。内面環状当て目
第354図 79 甕 図版	口： - 高： ( 6.8) 底： 15.4	底部破片 Dc-44	①粗 砂礫・片岩 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	直線状に開く体部下半。轆轤整形後腰部横位斲削りを加える。
第354図 80 甕 図版	口： - 高： ( 7.0) 底： 15.5	底部破片 Cl-24	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下半に弱い段を有すがほぼ直線状に開く形態。段以下は平行叩き調整。上位は撫でを加える。内面縦位斲撫で
第354図 81 甕 図版	口： - 高： - 底： -	体部破片 Cp-30	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩きを密に施し格子目状をなす。内面の青海波状当て目も密接する
第354図 82 甕 図版	口： - 高： - 底： -	体部破片 Ct-25	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③灰黄褐色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩きを密に施し格子目状をなす。内面の青海波状当て目も密接する
第354図 83 甕 図版	口： - 高： - 底： -	体部破片 表採	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩き調整を密に施す。内面環状当て目。器厚は薄手
第354図 84 盤 図版	口： 37.6 高： ( 6.5) 底： 31.8	1/5 Df-40	①粗 砂礫 ②酸化焰気味 ③鈍橙色 ④須恵器	口縁部～体部直線状に開き体部中位に低い鑄を付す。底部には脚貼付の痕跡が見られ、装着時?の孔も看取される。轆轤整形後鑄貼付。回転方向不詳。

第15節 遺構外出土遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第354図 85 甕? 図版	口: - 高: - 底: -	把手破片 C区表採	①粗 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	甕・壺形土の体部に付される把手。小型板状の形態で強く外傾する。外面形態に沿った撫でを施す。接合部の撫では丁寧
第354図 86 図版	長: 3.9 径: 1.3 重: 7.6	完形 Cw-29	①細 砂粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみは弱く、円筒状の形態を呈す。外面縦位撫で
第354図 87 図版	長: ( 3.8) 径: 0.8 重: 2.06	中位欠損 Cs-38	①細 白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が内彎気味で両端が小径の紡錘状ながら不整形の印象を得る。外面縦位撫で
第354図 88 図版	長: 3.8 径: 0.9 重: 2.83	完形 Cs-38	①細 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状ながらやや細身の形態。外面縦位撫で。
第354図 89 図版	長: 4.1 径: 2.2 重: 15.45	完形 Ch-34	①細 白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみは弱く、両端径の差も少ない。ずんぐりした印象。外面縦位撫で
第354図 90 土錘 図版	長: 6.7 径: 2.3 重: 34.20	完形 試掘時C区	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土製品	大型品。棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態を呈す。外面縦位撫で
第354図 91 紡錘車 図版	径: 5.4 高: 1.1 重: 32.24	ほぼ完形 表採	①- ②- ③- ④石製品	中央に小孔を設け、断面形は偏平な台形を呈す。表裏面及び縁辺は研磨する。表裏面に擦痕
第354図 92 砥石 図版	長: 6.3 幅: 3.0 厚: 1.6	ほぼ完形 試掘時	①- ②- ③- ④石製品	細身の精砥。四面とも平滑面を持ち、特に側面の彎曲が著しい。断面形は方形を呈す
第354図 93 砥石 図版	長: 6.9 幅: 4.9 厚: 1.7	上下端部欠損	①- ②- ③- ④石製品	細身の精砥。四面とも平滑面を持ち、特に側面の彎曲が著しい。断面形は方形を呈す。中位のみが残存
第354図 94 播り鉢 図版	口: 37.6 高: 14.4 底: 16.0	1/2 表採	①細 砂粒 ②還元焰 ③褐色 ④陶器	瀬戸美濃。18世紀か。口縁部内彎気味に直立し体部は緩やかに外反する。口唇部彎曲し片口状を呈す。体部摺り目は放射状に密に施される
第355図 1 椀 図版	口: 13.9 高: 5.0 底: 6.2	3/5 表採	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部緩やかに外反し、体部中位に丸みを持たせる。高台は短く直立する。内面見込み部は不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。器厚やや薄手。



群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第206集

# 黒熊八幡遺跡

《本文編》

関越自動車道(上越線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書 第37集

平成8年3月20日 印刷

平成8年3月25日 発行

編集／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局